

# 亀井

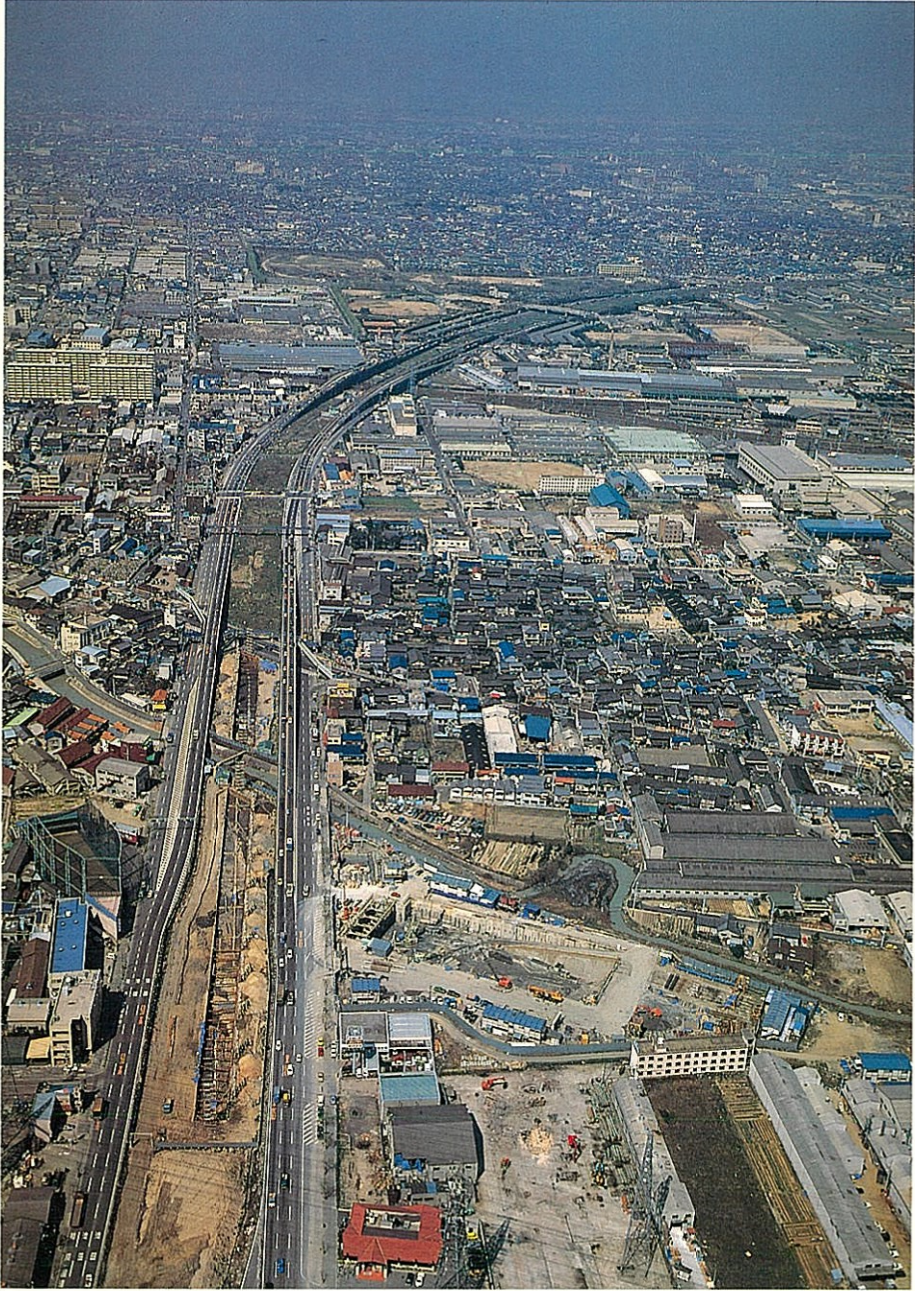
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

# 亀 井

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター



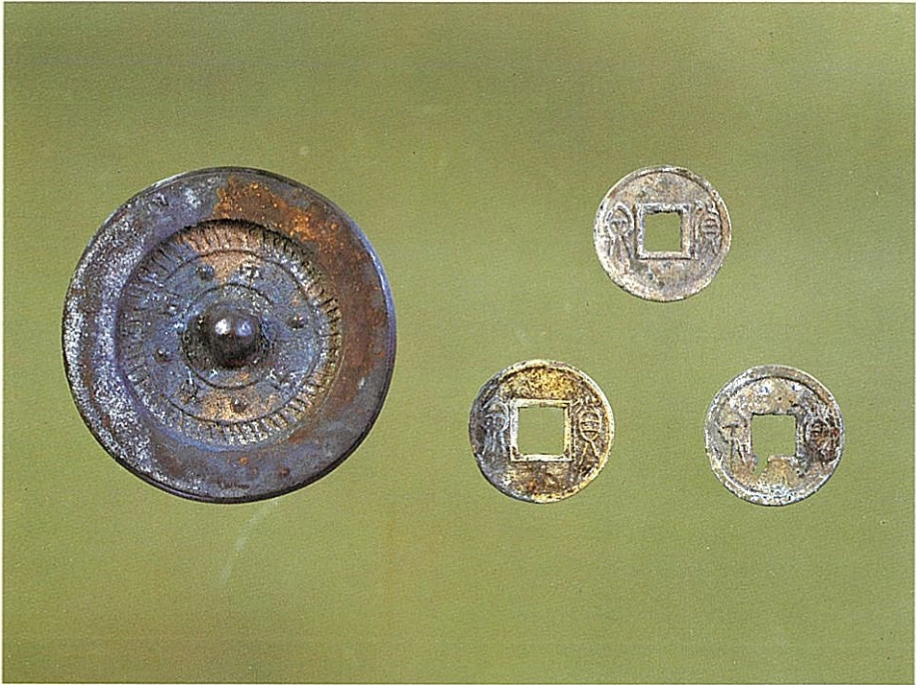
亀井遺跡全景（南から）



赤色顔料塗布土器



ガラス玉・管玉



小形倣製鏡・貨泉

## 序 文

「亀井遺跡」は、昭和43年、府道中央環状線の建設に伴う平野川改修工事現場において、地元の方による完形土器の発見によって、遺跡が存在することが知られたが、当時完形土器の出土がすべて河川の砂層内での出土であったので、近人周辺に遺構等がありその地より流されてきたもので土器散布地ではないかと思われていた。その後、本遺跡の性格をより確認するために数度の範囲確認調査、下水道管理設工事、ガス管理設工事等によって、この地に遺構が広がり、また古墳時代、弥生時代にまたがる広範囲遺跡であることが確認され、さらに中央環状線より東側の長吉ポンプ場建設に伴う発掘調査によっても、古墳、弥生時代の方形周溝墓等多くの遺構、遺物を検出し、河内地方の代表的な集落遺跡であることが明らかとなった。

この「亀井遺跡」においても、近畿自動車道天理・吹田線が府道中央環状線中央分離帯部分を縦断することとなり、日本道路公団との協議の結果発掘調査を実施することとなり昭和55年より実施し、第1期については、昭和57年に終了した。

本書は、これら調査を実施した成果を収録したものであり、調査の結果従前の調査戦果を越える成果を上げたものと確信する。

これら調査成果にもとづき、工事計画の一部検討を道路公団に依頼し、特に遺構の集中している所を出来るかぎり保存する様努力を願った。

なお、調査実施にあたって、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ関係各位ならびに一般府民多数の方々のご援助を受けたことに深く感謝すると共に今後ともご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和 57 年 3 月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 籾 内 盛 雄





## 序 文

河内平野の中に眠る過去の人々の生活の跡は、その質、量ともに良好にして、膨大である。

古大和川が運んだ砂や土砂は、古えの人々の生活の舞台となった地面を、一層一層包み込んで2000有余年間護り続けて来た。

しかし、この、保護者としての砂や土砂の流入も、当時の人々の生活には、大きな驚異であったであろう。今より、はるかに自然環境の変化が激しかった時代、人々は、その変化に戸惑い、怖れ、そして闘い、克服していった。河内平野の歴史、その河内平野に生活した人々の歴史は、まさに自然の激しい変化の歴史であり、それと闘い、克服し、調和を求めて努力した人々の歴史といっても過言ではあるまい。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩斎寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡及び亀井遺跡のトレンチ部分の調査を完了し、美園遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡等の調査を実施している。

本書は、昭和57年3月に調査を完了した八尾市南亀井町から大阪市平野区竹淵に所在する亀井遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

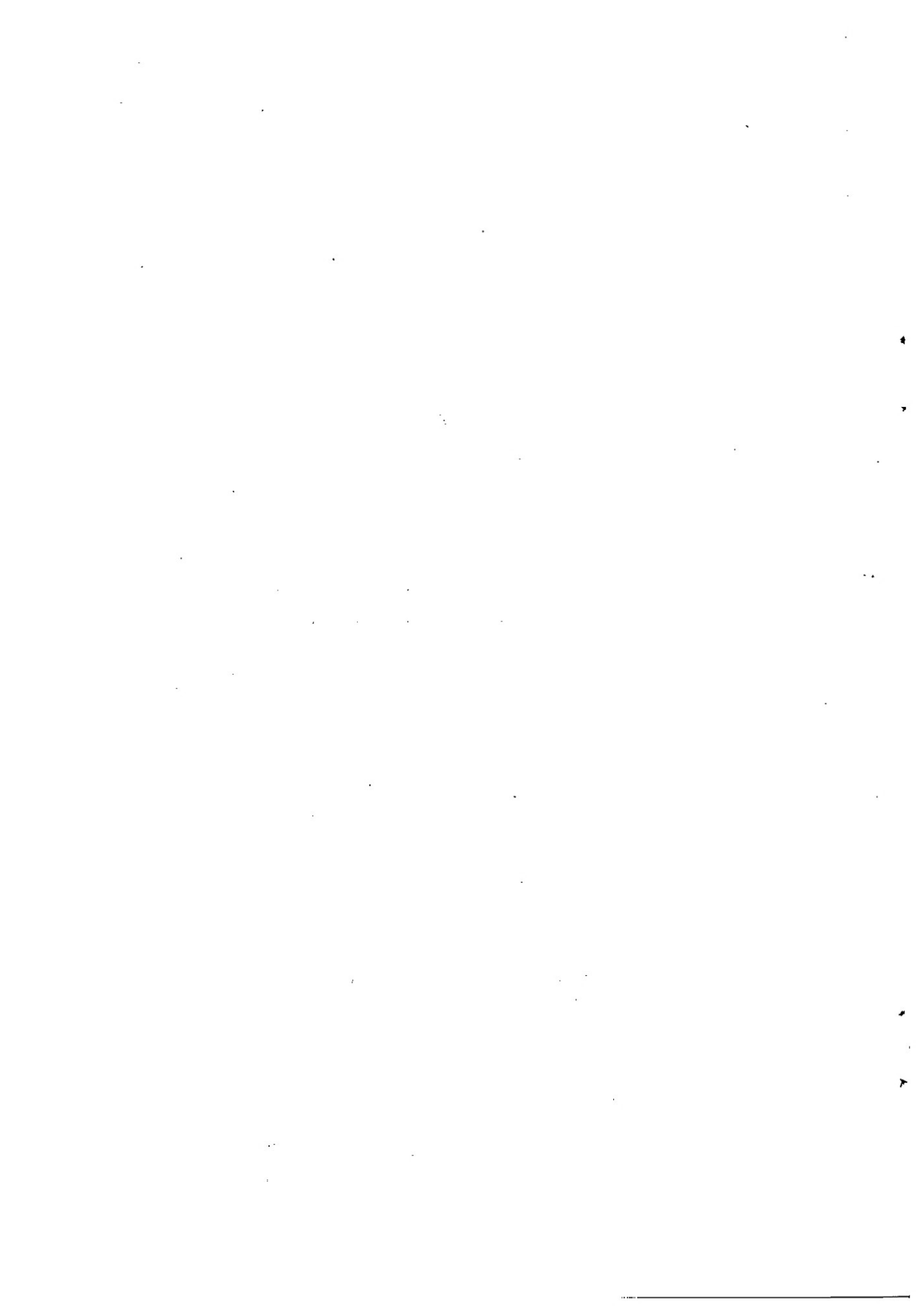
調査に要した期間、費用も膨大ならば、検出した遺構、遺物もまた膨大であり、そのすべてを本書に収録しきれなかったが、河内平野の歴史、河内平野に生活の場を求めた人々の歴史を直接肌で感じとり、理解していただけるものと確信するとともに、考古学的に、また科学的にメスの入った亀井遺跡という、河内平野で最古にして、瓜生堂遺跡、山賀遺跡と並び最大の複合集落跡の実態の解明に大きく貢献出来るものと確信する。

最後に、当文化財センターは、設立以来満9年、埋蔵文化財の保護、普及事業を積極的に実施する中で、その使命を果しながら、着実に発展してきた。今後も所期の目標を見失うことなく、一層研鑽、努力することを約するとともに、一般府民の皆様を始め、関係各位のより一層のあたたかい御理解、御支援を願ってやまない。

昭和57年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄



# 例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う八尾市亀井町、同南亀井町、大阪市平野区長吉出戸町所在亀井遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用339,178,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和54年6月1日から昭和57年3月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理作業も発掘調査と並行して実施した。また、本書の作成にかかる概括的な整理作業は、昭和57年2月1日から昭和57年3月31日までの2カ月間に実施した。
6. 本調査は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

## 調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄（昭和55年12月まで）
	同	大塚恭朗（昭和56年4月から）
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主事 秋山芳廣、立石紀代、灰本明子 千野和久、田口宗義、鎗山洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 妹尾直子、主事 小島容子
	業務課主幹	椋尾孝彦
調査総括責任者	業務課長	堀江門也（昭和56年3月まで）
	同	中井貞夫（昭和56年4月から）
瓜生堂分室	業務課主幹兼第1係長	中西靖人、技師 平井貞子、片山彰一、技能員 立花政治
長吉分室		第4係長 高島徹、第5係長 酒井龍一、技師 広瀬雅信、畑暢子、清原弘美、寺川史郎、尾谷雅 彦、金光正裕、国乗和雄、小島成元、宮崎泰史、 西村尋文、山口誠治、入江正則

7. 出土石器の石質鑑定等については、大阪市立自然史博物館 那須孝悌氏、樽野博幸氏の協力を得た。
8. 植物遺存体（種子）の同定については、大阪市立大学 粉川昭平氏の協力を得た。
9. 小形倣製鏡については奈良国立文化財研究所 町田章氏の御教示を得た。

10. 赤色顔料の蛍光X線分析については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、沢田正昭氏、秋山隆保氏、成瀬正和氏の協力を得た。
11. 出土遺物の保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
12. 本調査では、大阪教育大学、大阪キリスト教短期大学、大阪針灸専門学校、大阪モード学園大谷女子大学、大谷大学、神戸市外国語大学、大阪商科大学、関西外国語短期大学、堺女子短期大学、同志社女子大学、近畿大学、大阪外国語大学、府立大阪女子大学、関西外国語大学、甲南大学、武庫川女子大学等の学生諸氏の参加、協力を得た。
13. 本書の執筆は、中西靖人、高島徹、広瀬雅信、畑暢子、宮崎泰史、西村尋文、山口誠治が分担して行った。文責は各文末に記した。なお、用語等については、あえて統一していない部分がある。
14. 亀井遺跡の地理的環境、歴史的環境については、寺川史郎、尾谷雅彦編『亀井・城山』財団法人大阪文化財センター 1980、中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編『亀井遺跡』財団法人大阪文化財センター 1982、の両書を参照されたい。
15. 本書の編集は、高島・広瀬・畑が行った。
16. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成すると共に、カラースライドも多数作成した。広く利用されることを希望する。

## 凡 例

1. 遺構は、アルファベット記号と4桁の数列の組合せで表記した。

アルファベット記号は、SD…溝、SE…井戸、SF…道、SK…土坑、SX…その他の遺構、NR…自然流路、を表わしている。

4桁の数列の最初の数字は時代を表わし、3…弥生時代、4…古墳時代、5…飛鳥時代、6…奈良時代、7…平安時代、8…鎌倉・室町時代、9…江戸時代以降、を示している。

4桁の数列の下3桁は、同一時代の同種の遺構の一連番号を表わしている。

2. 遺構実測図、遺物出土状況実測図の縮尺率は、10分の1、20分の1、30分の1、40分の1、50分の1、60分の1、100分の1、200分の1のいずれかに該当させている。

3. 遺物実測図の縮尺率は以下のとおりである。

土器…4分の1、石器…2分の1・4分の1、木器…2分の1・4分の1・6分の1、金属器…実寸、骨角器、卜骨…2分の1、埴輪…3分の1・4分の1

4. 遺物実測図には一連番号を付した。遺物実測図の番号と写真図版の遺物番号とは一致させている。また、遺物出土状況実測図中の遺物番号も、遺物実測図の番号と共通である。

5. 磨製石器の石質は、大阪市立自然史博物館 那須孝悌・樽野博幸両氏の肉眼観察の結果によっている。

6. 「生駒西麓」の胎土とは、土器の表面観察により、いわゆる生駒西麓に由来するものに酷似するものを示す。

7. 本書で使用している弥生時代の時期区分は、前期を畿内第Ⅰ様式土器に、中期を畿内第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ様式土器に、後期を畿内第Ⅴ様式土器に、比定させている。

1. The first part of the document discusses the importance of maintaining accurate records of all transactions and activities. It emphasizes that proper record-keeping is essential for ensuring transparency and accountability in financial operations. This section also outlines the various methods and tools used to collect and analyze data, highlighting the need for consistency and precision in data entry and reporting.

2. The second part of the document focuses on the implementation of internal controls and risk management strategies. It details the process of identifying potential risks and developing effective mitigation plans to minimize their impact on the organization. This section also discusses the role of internal audits in monitoring and evaluating the effectiveness of these controls, ensuring that the organization remains compliant with relevant regulations and standards.

3. The third part of the document addresses the importance of communication and collaboration in achieving organizational goals. It emphasizes the need for clear communication channels and regular updates to all stakeholders, including employees, management, and external partners. This section also discusses the role of teamwork and collaboration in driving innovation and improving overall performance, highlighting the importance of fostering a positive and supportive work environment.

4. The fourth part of the document discusses the importance of continuous learning and development in the modern business landscape. It emphasizes the need for organizations to invest in training and development programs to keep their workforce up-to-date with the latest industry trends and technologies. This section also discusses the role of leadership in promoting a culture of learning and growth, encouraging employees to take ownership of their own development and contributing to the overall success of the organization.

# 亀井

近畿自動車道天理一吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

## 目次

巻頭カラー写真図版	
序文	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 調査にいたる経過	1
第Ⅱ章 調査の目的と方法	
第1節 調査の目的	5
第2節 調査の方法	6
第Ⅲ章 層序	
第1節 基本層序	8
第2節 弥生時代遺物包含層	11
第Ⅳ章 遺構	
第1節 概要	22
第2節 弥生時代前期	26
第3節 弥生時代中期	40
第4節 弥生時代後期	108
第5節 古墳時代	133
第6節 奈良、平安時代	138
第7節 鎌倉・室町時代	146
第8節 江戸～江戸時代以降	150
第Ⅴ章 遺物	
第1節 弥生時代の遺物	157
第2節 古墳時代以降の遺物	237
第3節 自然遺物	247
第Ⅵ章 まとめ	259

## 図版目次

- 図版1 Aトレンチ弥生時代中期、後期遺構 S D 3001A～3006A (北から)、S D 3001B～3006B (北から)
- 図版2 Aトレンチ弥生時代後期遺構 S D 3003B 木材出土状況 (西から)、S D 3003B 北側肩部土器出土状況
- 図版3 Bトレンチ弥生時代中期、後期遺構 12～15ラインⅨ層上面 (西から)、14～16ラインⅨ層上面 (北西から)
- 図版4 Bトレンチ弥生時代中期遺構 Ⅷf層上面全景 (南から)、同 (北から)
- 図版5 Bトレンチ弥生時代中期、後期遺構 05～08ラインⅧf層上面 (西から)、08～12ラインⅧf層上面 (西から)
- 図版6 Bトレンチ弥生時代中期、後期遺構 12～15ラインⅧf層上面 (西から)、15～18ラインⅧf層上面 (西から)
- 図版7 Bトレンチ弥生時代中期、後期遺構 16～19ラインⅧf層上面 (西から)、19～22ラインⅧf層上面 (西から)
- 図版8 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S K 3060 遺物出土状況 (西から)、同扁平片刃石斧柄出土状況
- 図版9 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S K 3060 卜骨出土状況、同編製品出土状況
- 図版10 Bトレンチ弥生時代中期遺構 e 19区Ⅷf層上面柱穴、ヤス状骨製品出土状況、S K 3082 牙玉出土状況
- 図版11 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S E 3002、3003、3004、S D 3011、3012 全景 (南西から)、S E 3004 編製品出土状況
- 図版12 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S E 3006 土層断面及び広鋳未製品出土状況、S E 3011、3012 全景 (西から)
- 図版13 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S E 3017 全景 (東から)、同犬骨格出土状況
- 図版14 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S E 3016 磨製石剣出土状況、S E 3023 イノシシ下顎骨出土状況
- 図版15 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S D 3011 土層断面 (東から)、S D 3012 土層断面 (東から)
- 図版16 Bトレンチ弥生時代中期遺構 S D 3012 弓出土状況、S X 3003 全景 (南から)
- 図版17 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S K 3109 遺物出土状況 (東から)、S K 3128 遺物出土状況 (南から)
- 図版18 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S K 3112 全景 (東から)、S K 3114 遺物出土状況 (西から)



- 図版19 A、Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3005B足跡検出状況（東から）、S D3008、3010全景（西から）
- 図版20 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3008木材出土状況（西から）、同鋤出土状況
- 図版21 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3008丸鍬出土状況、同杵出土状況
- 図版22 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3008砧出土状況、S D3021B遺物出土状況（東から）
- 図版23 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3021B遺物出土状況（東から）、同鹿角出土状況
- 図版24 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3056遺物出土状況（北から）、S X3004、3005全景（東から）
- 図版25 Bトレンチ弥生時代後期遺構 S D3067遺物出土状況（東から）、S X3002乳児骨出土状況
- 図版26 Bトレンチ弥生時代遺物包含層、Ⅷb層銅鏃出土状況、Ⅷb層貨泉出土状況
- 図版27 Cトレンチ弥生時代前期、中期遺構 北半部Ⅸ層上面全景（北から）、南半部Ⅸ層上面全景（南から）
- 図版28 Cトレンチ弥生時代前期、中期遺構 38～41ラインⅨ層上面（東から）、34～37ラインⅨ層上面（東から）
- 図版29 Cトレンチ弥生時代前期、中期遺構 33～35ラインⅨ層上面（東から）、24～26ラインⅨ層上面（東から）
- 図版30 Cトレンチ弥生時代前期、中期遺構 8～11ラインⅨ層上面（東から）、4～6ラインⅨ層上面（東から）
- 図版31 Cトレンチ弥生時代前期遺構 S K3156、3157遺物出土状況（西から）、S K3165遺物出土状況（北から）
- 図版32 Cトレンチ弥生時代前期遺構 S D3079（e39区）遺物出土状況（南から）、同（e38区）遺物出土状況（西から）
- 図版33 Cトレンチ弥生時代前期遺構 S D3087遺物出土状況（東から）、S X3008全景（東から）
- 図版34 Cトレンチ弥生時代前期遺構 S X3011、3012全景（西から）、S X3011全景（東から）
- 図版35 Cトレンチ弥生時代中期遺構 S K3144遺物出土状況（西から）、同細部（北から）
- 図版36 Cトレンチ弥生時代中期遺構 S K3150、S D3081遺物出土状況（北から）、S K3142遺物出土状況（南から）
- 図版37 Cトレンチ弥生時代中期遺構 S K3199遺物出土状況（南から）、S D3077遺物出土状況（東から）
- 図版38 Cトレンチ弥生時代中期遺構 S D3074（e38区）遺物出土状況（北から）、同（f39区）遺物出土状況（南から）
- 図版39 Cトレンチ弥生時代後期遺構 N R3001全景（北から）、S D3104全景（南から）

- 図版40 Cトレンチ弥生時代後期遺構 S D3104土層断面（北から）、同遺物出土状況（東から）
- 図版41 Cトレンチ弥生時代後期遺構 S E3027全景（南から）、同遺物出土状況
- 図版42 Cトレンチ弥生時代後期遺構 N R3003全景（北東から）、N R3001土層断面（北西から）
- 図版43 Cトレンチ弥生時代後期遺構 N R3001上層遺物出土状況（東から）、同河床付近銅鏡出土状況
- 図版44 Dトレンチ弥生時代前期、中期遺構 K層上面全景（北から）、同（南から）
- 図版45 Dトレンチ弥生時代前期、中期遺構 -7~-3ラインK層上面（東から）、-10~-6ラインK層上面（南から）
- 図版46 Bトレンチ古墳時代、奈良時代遺構 S X4001土師器出土状況、S D6001、6002全景（西から）
- 図版47 Cトレンチ古墳時代遺構 北半部Ⅷ層上面全景（北から）、24~27ライン青灰色シルト層上面（南東から）
- 図版48 Cトレンチ古墳時代、奈良時代遺構 N R4001全景（北東から）、S X6004全景（西から）
- 図版49 Bトレンチ奈良時代、平安時代遺構 N R6001河床全景（北から）、S X6002全景（北から）
- 図版50 Cトレンチ奈良時代遺構 S X6006全景（南西から）、同骨組全景（西から）
- 図版51 Cトレンチ平安時代遺構 S E7001全景（北から）、同横櫛出土状況
- 図版52 Bトレンチ鎌倉時代、室町時代、江戸時代以降遺構 V層上面全景（北から）、N R9001及び近世井戸、N R9001全景（南から）
- 図版53 Cトレンチ江戸時代以降遺構 北半部全景（北から）、N R9002河床全景（南から）
- 図版54 Cトレンチ江戸時代以降遺構 S E9008全景（東から）、同導水管接合状況（北から）
- 図版55 調査風景 BトレンチⅧf層上面遺構検出風景、Bトレンチ弥生時代遺物包含層断面剥ぎ取り作業風景
- 図版56 壺棺墓の取り上げ、木枠組み状況、発泡ウレタン注入状況
- 図版57 弥生時代前期遺物 土器 S D3079（1~6）
- 図版58 弥生時代前期遺物 土器 S D3079（8・9）、S K3156（16・17）、S K3157（23）、S X3012（25）
- 図版59 弥生時代前・中期遺物 土器 S X3012（26）、S D3087（27）、S D3077（29・31）
- 図版60 弥生時代中期遺物 土器 S D3077（30・32~36）
- 図版61 弥生時代中期遺物 土器 S K3144（39~42）
- 図版62 弥生時代中期遺物 土器 S K3144（37・38・43・50）

- 図版63 弥生時代中期遺物 土器 S K3144 (44・45・48・49・51・52)
- 図版64 弥生時代中期遺物 土器 S D3074 (55・57・58・78)
- 図版65 弥生時代中期遺物 土器 S D3074 (56・59・60・63・64・67)
- 図版66 弥生時代中期遺物 土器 S D3074 (68~70・72~76)
- 図版67 弥生時代中期遺物 土器 S K3060 (87・89・92・96・98)
- 図版68 弥生時代中期遺物 土器 S K3060 (94・95・97・100・101・104・105)
- 図版69 弥生時代中期遺物 土器 S K3040 (112~115・117)
- 図版70 弥生時代後期遺物 土器 S D3104 (119~122・125・126)
- 図版71 弥生時代後期遺物 土器 S D3104 (123・124)、S E3027 (130・131)
- 図版72 弥生時代後期遺物 土器 S E3027 (127~129・132)
- 図版73 弥生時代後期遺物 土器 S E3027 (133・134)、S D3010 (136・137)
- 図版74 弥生時代後期遺物 土器 S D3010 (139・141~143)
- 図版75 弥生時代後期遺物 土器 S D3008 (144・146・148~152)
- 図版76 弥生時代後期遺物 土器 N R3001 (154・156・162・163・167・168)
- 図版77 弥生時代後期遺物 土器 N R3001 (159~161・171・173・174)
- 図版78 弥生時代後期遺物 土器 S D3067 (176~179)
- 図版79 弥生時代後期遺物 土器 S D3067 (183・185・186・187・195・197)
- 図版80 弥生時代中・後期遺物 土器 S D3067 (188・189・198・201)、S D3081 (202)、S  
K3199 (203)
- 図版81 弥生時代遺物 石器 石庖丁
- 図版82 弥生時代遺物 石器 磨製石斧、磨製石剣、磨石
- 図版83 弥生時代遺物 石器 用途不明石器、砥石、叩石、調整石器
- 図版84 弥生時代遺物 石器 石鏃、石錐、石槍、石核
- 図版85 弥生時代遺物 木器 S D3012—着柄鋤・鋤・鋤未製品
- 図版86 弥生時代遺物 木器 S D3012—広鋤・狭鋤・二又鋤または二又着柄鋤・弓・杵・棒状  
木製品
- 図版87 弥生時代遺物 木器 S K3060—着柄鋤・広鋤
- 図版88 弥生時代遺物 木器 S K3060—着柄鋤または鋤・広鋤・広鋤未製品・太型鉋刃石斧の  
柄の未製品・棒状木製品
- 図版89 弥生時代遺物 木器 S K3060—偏平片刃石斧の柄・横斧の柄、S D3008—縦斧の柄
- 図版90 弥生時代遺物 木器 S D3008—広鋤・鋤・砧・棒状木製品の未製品・取手付容器の未  
製品
- 図版91 弥生時代遺物 木器 S D3008—装飾のある木製品・石庖丁形木製品・二又有頭棒状木  
製品

- 図版 92 弥生時代遺物 木器 S D 3011—横柄杓未製品・丸鋏、N R 3003—木鋏
- 図版 93 弥生時代遺物 金属器 貨泉、銅鐸片、銅鏡、銅鋏、鉄製鏝
- 図版 94 弥生時代遺物 骨角器 勾玉、紡錘車、ヤス、儀杖状骨角器
- 図版 95 弥生時代遺物 骨角器・卜骨・鈎状骨角器、鹿角
- 図版 96 弥生時代遺物 卜骨 S K 3060
- 図版 97 弥生時代遺物 祭祀遺物 イノシシの下顎骨と出土状況 S D 3021 B
- 図版 98 弥生時代遺物 祭祀遺物 イノシシの下顎骨 S K 3060 (上)、S D 3021 B
- 図版 99 古墳時代以降遺物 土師器、須恵器、埴輪
- 図版100 古墳時代以降遺物 土師器
- 図版101 動物遺存体 イノシシ頭部 (真上から) S D 3079
- 図版102 動物遺存体 イノシシ頭部 (横から)
- 図版103 植物遺存体 I
- 図版104 植物遺存体 II

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	2
第 2 図	トレンチ配置図 $\frac{1}{5000}$	7
第 3 図	基本層序柱状模式図	9、10
第 4 図	B トレンチ弥生時代遺物包含層断面図 $\frac{1}{40}$	15、16
第 5 図	C トレンチ弥生時代遺物包含層断面図 $\frac{1}{40}$	17、18
第 6 図	C・D トレンチ弥生時代遺物包含層断面図 $\frac{1}{40}$	19、20
第 7 図	C トレンチ34ライン弥生時代遺物包含層断面図 $\frac{1}{40}$	21
第 8 図	S K 3134・3139・3147・3148 平面図・断面図 $\frac{1}{50}$	27
第 9 図	S K 3145、S D 3075 平面図・断面図 $\frac{1}{50}$	27
第 10 図	S K 3145、S X 3008 遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$	27
第 11 図	S K 3149・3152・3156 平面図・断面図 $\frac{1}{50}$	30
第 12 図	S K 3156 遺物出土状況図 $\frac{1}{20}$	30
第 13 図	S K 3151・3162・3163 平面図・断面図 $\frac{1}{40}$	31
第 14 図	S K 3153・3154・3155・3157 平面図・断面図 $\frac{1}{40}$	31
第 15 図	S K 3160・3161、S X 3007 平面図・断面図 $\frac{1}{40}$	32
第 16 図	S X 3007 人骨出土状況図 $\frac{1}{20}$	32
第 17 図	S K 3166・3167・3168・3169・3171 平面図・断面図 $\frac{1}{40}$	34
第 18 図	S K 3164・3170・3172 平面図・断面図 $\frac{1}{40}$	34
第 19 図	S K 3165 遺物出土状況図 $\frac{1}{10}$	34

第 20 图	前期溝断面图 $\frac{1}{40}$ .....	37
第 21 图	S X 3011 · 3012 遺物出土状况图 $\frac{1}{20}$ .....	39
第 22 图	S K 3001 · 3002、S X 3006 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	40
第 23 图	S K 3003 · 3004 · 3005 · 3006 · 3007 · 3008 · 3127 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	41
第 24 图	S K 3009 · 3010 · 3011 · 3012 · 3013 · 3014 · 3017 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	42
第 25 图	S K 3015 · 3016 · 3024 · 3025 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	42
第 26 图	S K 3018 · 3019 · 3020 · 3022、S D 3024 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	43
第 27 图	S K 3023 · 3037 · 3043 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	44
第 28 图	S K 3026 · 3027 · 3028 · 3029 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	44
第 29 图	S K 3030 · 3031 · 3032 · 3033 · 3034 · 3035 · 3036 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	45
第 30 图	S K 3038 · 3039 · 3040 · 3041 · 3042 · 3053 · 3054 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	46
第 31 图	S K 3040 遺物出土状况图 $\frac{1}{20}$ .....	46
第 32 图	S K 3044 · 3045、S E 3011 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	47
第 33 图	S K 3046 · 3047 · 3048 · 3049 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	48
第 34 图	S K 3050 · 3051 · 3052、S E 3013 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	49
第 35 图	S K 3055 · 3056、S E 3014 · 3015 · 3017 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	50
第 36 图	S K 3060 · 3063 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	51
第 37 图	S K 3060 遺物出土状况图 $\frac{1}{35}$ .....	52
第 38 图	S K 3057 · 3058 · 3061 · 3116、S D 3035 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	53
第 39 图	S K 3059 · 3063 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	53
第 40 图	S K 3062 · 3064 · 3065 · 3066 · 3069 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	54
第 41 图	S K 3067 · 3068 · 3073、S E 3016 · 3018 · 3019、S D 3038 · 3039 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	55
第 42 图	S K 3070 · 3074 · 3075 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	56
第 43 图	S K 3072 · 3073 · 3079 · 3080 · 3081 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	56
第 44 图	S K 3076 · 3077 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	57
第 45 图	S K 3078 · 3082 · 3083 · 3084 · 3085 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	58
第 46 图	S K 3086 · 3093 · 3095 · 3096 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	59
第 47 图	S K 3087 · 3088 · 3089 · 3094 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	60
第 48 图	S K 3090 · 3091 · 3092 平面图 · 面断面图 $\frac{1}{40}$ .....	61
第 49 图	S K 3097 · 3098 · 3099 · 3100、S E 3020 · 3021 · 3022 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	62
第 50 图	S K 3101 · 3102 · 3103、S E 3019 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	63
第 51 图	S K 3111 · 3122 · 3123 · 3124 · 3125 · 3126 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	64
第 52 图	S E 3001 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	65
第 53 图	S E 3002 平面图 · 断面图 $\frac{1}{40}$ .....	65

第 54 図	S E 3003・3004平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	66
第 55 図	S E 3005・3006・3007平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	67
第 56 図	S E 3008・3009・3010・3012平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	68
第 57 図	S E 3023・3024・3025平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	71
第 58 図	S D 3001断面図 $\frac{1}{40}$ .....	72
第 59 図	S D 3002断面図 $\frac{1}{40}$ .....	73、74
第 60 図	S D 3003・3004断面図 $\frac{1}{40}$ .....	73、74
第 61 図	S D 3005断面図 $\frac{1}{40}$ .....	73、74
第 62 図	S D 3006断面図 $\frac{1}{40}$ .....	75
第 63 図	S D 3009断面図 $\frac{1}{40}$ .....	76
第 64 図	S D 3011断面図 $\frac{1}{40}$ .....	76
第 65 図	S D 3012断面図 $\frac{1}{40}$ .....	77
第 66 図	S X 3001平面図・断面見通し図 $\frac{1}{20}$ .....	80
第 67 図	S X 3003平面図・断面見通し図 $\frac{1}{20}$ .....	80
第 68 図	S K 3129・3131平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	83
第 69 図	S K 3130・3132・3133、S E 3026、S D 3071・3072平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	83
第 70 図	S K 3135・3136・3138・3142・3143平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	84
第 71 図	S K 3137・3140・3141平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	84
第 72 図	S K 3144 (f 39区) 遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	86
第 73 図	S K 3144 (e 39区) 遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	87
第 74 図	S K 3146・3150、S D 3081断面図 $\frac{1}{40}$ .....	88
第 75 図	S K 3159・3173・3174・3175・3176・3177平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	89
第 76 図	S K 3178・3179・3180・3181・3182・3183平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	91
第 77 図	S K 3184・3185・3186・3187・3189・3190・3191・3192平面図・断面図 $\frac{1}{50}$ .....	93
第 78 図	S K 3194・3195平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	95
第 79 図	S K 3196・3197・3198・3199・3200、S D 3102・3103平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	95
第 80 図	S K 3199、S X 3013遺物出土状況図 $\frac{1}{20}$ .....	96
第 81 図	S D 3074 (e 38区) 遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	98
第 82 図	S D 3074 (f 39区) 遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	99
第 83 図	S D 3077・3078合流部断面図 $\frac{1}{40}$ .....	100
第 84 図	S D 3077遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	101
第 85 図	S D 3081、S K 3150遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	101
第 86 図	S D 3084・3085・3090断面図 $\frac{1}{40}$ .....	103
第 87 図	S D 3093・3095・3096・3097・3098・3099・3100・3101断面図 $\frac{1}{40}$ .....	105

第 88 図	S X3010断面図 $\frac{1}{40}$ .....	107
第 89 図	S K3104・3105・3106・3107・3108平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	115
第 90 図	S K3109遺物出土状況図 $\frac{1}{20}$ .....	116
第 91 図	S K3112・3113平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	116
第 92 図	S K3136遺物出土状況図 $\frac{1}{20}$ .....	116
第 93 図	S K3114・3115・3116平面図 $\frac{1}{40}$ .....	117
第 94 図	S D3008断面図 $\frac{1}{40}$ .....	119
第 95 図	S D3010断面図 $\frac{1}{40}$ .....	119
第 96 図	S D3067遺物出土状況図 $\frac{1}{30}$ .....	123、124
第 97 図	S X3002平面図・断面見通し図 $\frac{1}{20}$ .....	126
第 98 図	S X3004・3005平面図 $\frac{1}{40}$ .....	127、128
第 99 図	S E3027・3028平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	129
第 100 図	S E3027遺物出土状況図 $\frac{1}{20}$ .....	129
第 101 図	S D3104断面図 $\frac{1}{60}$ .....	131
第 102 図	S D3104遺物出土状況図 $\frac{1}{20}$ .....	131
第 103 図	S X4001、S D6001・6002平面図 $\frac{1}{100}$ .....	135、136
第 104 図	S D4001断面図 $\frac{1}{60}$ .....	134
第 105 図	S X6001・6002平面図・見通し図 $\frac{1}{40}$ .....	141、142
第 106 図	S X6006平面図・側面図・土層断面図 $\frac{1}{40}$ .....	143、144
第 107 図	S E7001平面図・断面図 $\frac{1}{20}$ .....	145
第 108 図	S K8001平面図・断面図 $\frac{1}{40}$ .....	147
第 109 図	S D8007断面図 $\frac{1}{40}$ .....	149
第 110 図	S E9004・9005・9006平面図・断面図 $\frac{1}{60}$ .....	151
第 111 図	S E9008平面図・側面図 $\frac{1}{40}$ .....	152
第 112 図	NR9002断面図 $\frac{1}{40}$ .....	155、156
第 113 図	S D3079出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	158
第 114 図	S D3079出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	159
第 115 図	S K3156、S X3008、S K3157出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	160
第 116 図	S X3011・3012出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	161
第 117 図	S X3012出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	162
第 118 図	S D3087出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	163
第 119 図	S D3077出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	165
第 120 図	S K3144出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	167
第 121 図	S K3144出土土器実測図 ( $\frac{1}{4}$ ).....	168

第 122 図	S K 3144出土土器実測図 (1/4)	169
第 123 図	S K 3144出土土器実測図 (1/4)	170
第 124 図	S D 3012出土土器実測図 (1/4)	172
第 125 図	S D 3012出土土器実測図 (1/4)	173
第 126 図	S D 3074出土土器実測図 (1/4)	175
第 127 図	S D 3074出土土器実測図 (1/4)	176
第 128 図	S K 3060出土土器実測図 (1/4)	178
第 129 図	S K 3060出土土器実測図 (1/4)	179
第 130 図	S K 3060出土土器実測図 (1/4)	180
第 131 図	S K 3040出土土器実測図 (1/4)	182
第 132 図	S K 3040出土土器実測図 (1/4)	183
第 133 図	S D 3104出土土器実測図 (1/4)	185
第 134 図	S E 3027出土土器実測図 (1/4)	186
第 135 図	S E 3027出土土器実測図 (1/4)	187
第 136 図	S D 3010出土土器実測図 (1/4)	188
第 137 図	S D 3008出土土器実測図 (1/4)	190
第 138 図	N R 3001出土土器実測図 (1/4)	192
第 139 図	N R 3001出土土器実測図 (1/4)	194
第 140 図	S D 3067出土土器実測図 (1/4)	196
第 141 図	S D 3067出土土器実測図 (1/4)	198
第 142 図	その他遺構出土土器実測図 (1/4)	199
第 143 図	石器実測図 石庖丁 (1/2)	201
第 144 図	石器実測図 石庖丁 (1/2)	202
第 145 図	石器実測図 石庖丁 (1/2)	203
第 146 図	石器実測図 磨製石斧 (1/2)	204
第 147 図	石器実測図 磨製石斧・磨製石剣 (1/2)	205
第 148 図	石器実測図 磨石 (1/2)	206
第 149 図	石器実測図 磨石・用途不明石器 (1/2・1/4)	207
第 150 図	石器実測図 砥石 (1/2)	209
第 151 図	石器実測図 砥石 (1/2)	210
第 152 図	石器実測図 叩石 (1/2)	211
第 153 図	石器実測図 調整石器 (1/2)	212
第 154 図	石器実測図 石鎌・石錐 (1/2)	213
第 155 図	石器実測図 石槍 (1/2)	214



第 156 図	石器実測図 石核 (1/2)	215
第 157 図	S D 3012 出土木製品実測図 (1/4)	217
第 158 図	S D 3011・3012 出土木製品実測図 (1/4)	218
第 159 図	S D 3012 出土木製品実測図 (1/6)	219
第 160 図	S K 3060 出土木製品実測図 (1/4)	222
第 161 図	S K 3060 出土木製品実測図 (1/4)	223
第 162 図	S K 3060 出土木製品実測図 (1/4)	224
第 163 図	S D 3008 出土木製品実測図 (1/4)	226
第 164 図	S D 3008 出土木製品実測図 (1/4)	227
第 165 図	S D 3008、N R 3001 出土木製品実測図 (1/2・1/4)	229
第 166 図	金属器実測図 (実寸)	231
第 167 図	金属器実測図 (実寸)	232
第 168 図	骨角器実測図 (1/2)	233
第 169 図	卜骨実測図 (1/2)	235
第 170 図	土師器実測図 (1/4)	239
第 171 図	須恵器実測図 (1/4)	242
第 172 図	埴輪実測図 (1/4)	244
第 173 図	埴輪実測図 (1/3)	244
第 174 図	埴輪実測図 (1/3)	245

## 表 目 次

第 1 表	弥生時代遺物包含層対照表	21
第 2 表	動物遺存体の同定結果一覧	248・249
第 3 表	植物遺存体同定結果一覧	254・255
第 4 表	亀井遺跡出土赤色顔料蛍光 X 線分析結果	257

## 付 図 目 次

付 図 1	調査区割付け図 1/400
	A トレンチ 弥生時代中期遺構全体図 1/200
	A トレンチ 弥生時代後期遺構全体図 1/200
	A トレンチ N R 6001 河床面全体図 (等高線 5 cm) 1/200
付 図 2	B トレンチ 弥生時代中期・後期遺構全体図 1/100

- 付 図 3 B トレンチ 弥生時代後期遺構全体図  $\frac{1}{200}$   
B トレンチ NR6001河床面全体図 (等高線 5 cm)  $\frac{1}{200}$   
B トレンチ 鎌倉時代・室町時代遺構全体図  $\frac{1}{200}$
- 付 図 4 C・D トレンチ 弥生時代前・中期遺構全体図  $\frac{1}{200}$
- 付 図 5 C トレンチ 30ライン以北 弥生時代前期・中期遺構全体図 (S E3027・3028は後期)  $\frac{1}{100}$
- 付 図 6 C トレンチ 弥生時代後期遺構全体図  $\frac{1}{200}$   
C トレンチ 古墳時代遺構全体図  $\frac{1}{200}$
- 付 図 7 C トレンチ 奈良時代・平安時代・鎌倉時代遺構全体図  $\frac{1}{200}$
- 付 図 8 C トレンチ 江戸時代以降遺構全体図  $\frac{1}{200}$
- 付 図 9 NR3001土層断面図  $\frac{1}{40}$
- 付 図 10 NR3001上層遺物出土状況図  $\frac{1}{40}$
- 付 図 11 NR3003土層断面図  $\frac{1}{40}$
- 付 図 12 NR4001土層断面図  $\frac{1}{40}$

# 第1章 はじめに

亀井遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内松原JC～東大阪IC13.5Km区間に存在する長原、城山、亀井、久宝寺、佐堂、美園、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の13遺跡の内、最も古くから人々の生活の場となった、いわば、平野開拓の最古の集落跡で、大阪市平野区竹淵、及び八尾市南亀井町一帯に所在する。

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内13遺跡の取扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局が中心となって協議を重ねてきたが、昭和48年になって、当該路線の存在する河内平野の特殊性を考慮し、周知されていた9遺跡（亀井、久宝寺、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺跡、瓜生堂、西岩田、新家）について路線内の範囲確認と、埋没深度の把握、調査経費及び調査期間の算出根拠を得る為の第1次発掘調査を実施することで協議が整い、この調査を(財)大阪文化財センターで実施することになった。調査は、5m×5mのグリッドを45ヶ所（1遺跡平均5ヶ所）発掘調査を実施するものであり、48年度内に全て完了するのは無理であったため、48年度は亀井、久宝寺、友井東の3遺跡について実施し、49年度に山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の6遺跡について実施することになった。これら2ヶ年度にわたる第1次発掘調査の結果は、それぞれ『亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書』『瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書』として、(財)大阪文化財センターより刊行された。

さらに、同年、大阪市交通局が建設工事を進めていた高速電気軌道第2号線建設予定地内の中、大阪中央環状線にかかる平野区長吉出戸町、同長吉長原町及び長吉川辺町地内については、遺跡の存在する可能性の極めて高い地点ということから、工事に先立って試掘調査を実施する必要があるとの行政指導が大阪府教育委員会から打出され、大阪市交通局は、(財)大阪文化財センターに調査の委託をすることになった。この結果、長原遺跡、城山遺跡の2遺跡が新たに発見され、昭和49年5月、(財)大阪文化財センターより『中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告書』として刊行された。

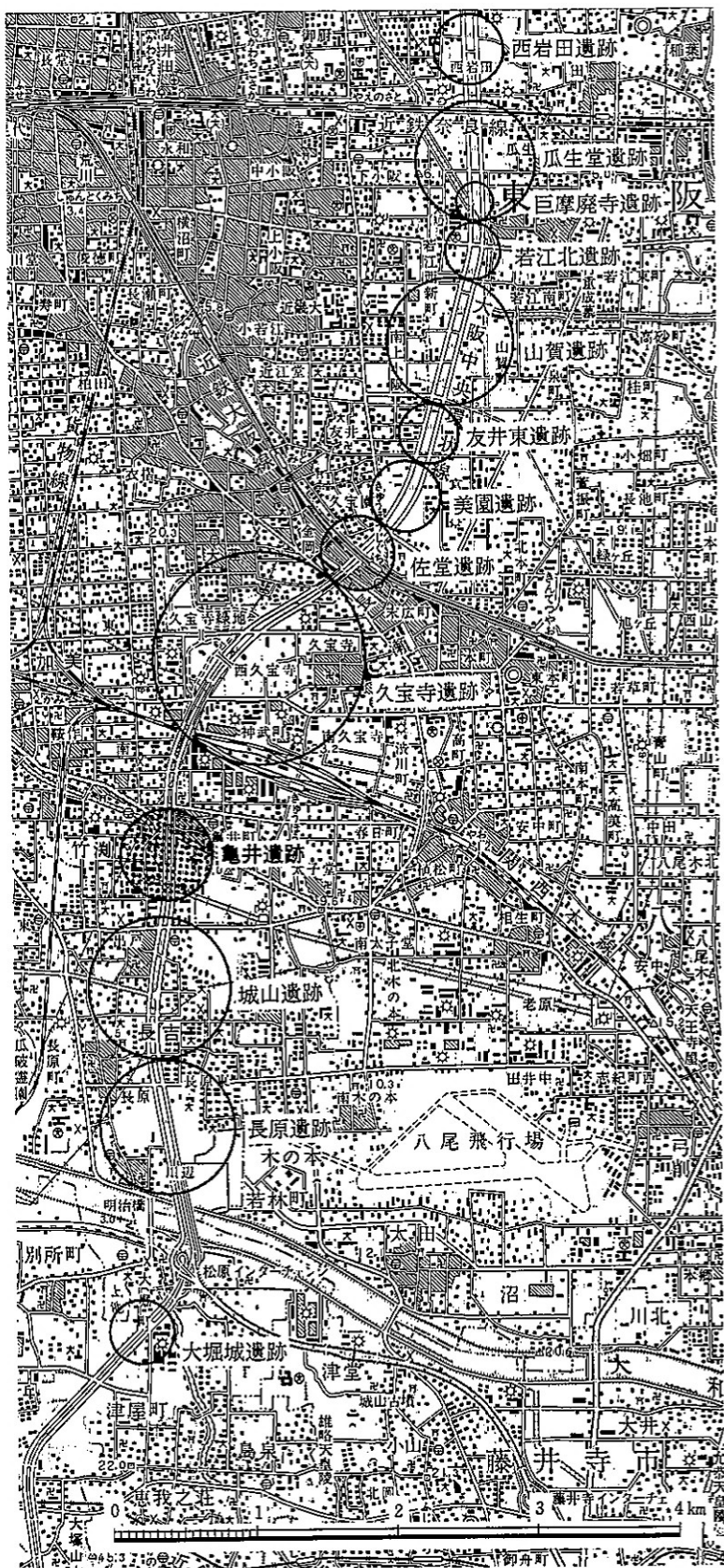
また、昭和50年には、大阪瓦斯株式会社が切換を進めていた天然ガスパイプラインとしての河内ラインガス導管が、前述の城山遺跡及び久宝寺遺跡の範囲内に布設されることとなり、これに伴う試掘調査も、(財)大阪文化財センターによって実施されることとなった。この結果、城山遺跡の北限を一応確認すると共に、久宝寺遺跡の範囲も確認することとなった。

一方、当該河内ラインガス導管の布設にかかる八尾市美園町部分については、大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、美園遺跡が確認されることとなった。

以上の様に、主要地方道大阪中央環状線臨接地での各種の工事に先立つ調査及び、近畿自動車道関連の一連の第1次発掘調査の結果により、当該自動車道建設予定地内に於ける遺跡の概略が把握されたのである。

これらの事実を踏まえて、大阪府教育委員会と日本道路公団は、さらに協議を重ねた結果、基本的には発掘調査の結果を尊重し、設計や工法を検討しながら橋脚位置を決定し、オール高架の道路を建設していくということで合意した。

上記合意に基づき、日本道路公団は、文化庁へ、文化財保護法に基づく協議文書を提出し、文化庁から、事前の発掘調査の徹底と、遺構の保存に十分配慮すべき旨の回答を受けた。ここに於いて大阪府教育委員会は、現地に於ける発掘調査について(財)大阪文化財センターに協力を求めることにし、日本道路公団大阪建設局を含めた三者によって昭和51年4月、調査に関する協定を締結した。そして、昭和51年7月、最南端に所在する長原遺跡の調査について上記の協定に基づいて三者で契約を締結し、現地調査に着手した。その後、長原遺跡の調査は、古墳群の発見や、掘立柱建物群の発見により、文化庁の回答の精神を踏えて保存策が講じられ、数回にわたっ



第1図 遺跡位置図

て設計変更に伴う契約変更を重ねながら、昭和53年3月に現地に於ける発掘調査を終了し、同年5月概要報告書作成作業を完了して、概要報告書『長原』を刊行した。

この長原遺跡の調査の終了を待って、残る12遺跡の調査について、一応の調査目標を昭和58年度末とする、5ヶ年計画を作成すると共に、長原遺跡での設計変更の繰り返し及び調査面積の拡大、期間の延長、経費の増加等々反省する点が多かったことから、調査方法の再検討も行なった。その結果建設される道路は高架道路であること、沖積平野上の遺跡の特殊性としての埋没深度の深いこと、発掘作業の安全性の確保及び、調査期間や調査費用を考慮して、いわゆる“トレンチ調査方式”を採用することとなった。“トレンチ調査方式”とは、路線の全面発掘調査より、現況保存を優先した必要最小限度の調査を目的として、発掘面積を極力限定すると共に、主要な遺構の存在する部分の保護、保存をも併せて可能とする沖積平野発掘調査の新しい試みであった。

この調査方式をもって、昭和53年2月には瓜生堂遺跡、昭和53年11月には巨摩廃寺遺跡、昭和54年4月には西岩田遺跡、昭和54年7月には新家遺跡、若江北遺跡、友井東遺跡、そして亀井遺跡と順次道路の供用工程及び他の関連公共施設整備計画に基づいて調査に着手してきた。

すでに上記7遺跡の発掘調査は無事その目的を果たして終了し『瓜生堂』『巨摩・瓜生堂』等々として概要報告書の刊行をみているところである。

亀井遺跡は、昭和43年、主要地方道大阪中央環状線の建設工事に伴って実施された平野川改修工事に際して、多量の弥生式土器が発見されたことによって遺跡の存在が知られたものである。この発見により、当該改修工事と併行して発掘調査が実施され、遺物包含層の確認と、その拡がり把握されたが、工事区間のみに限られていたこともあって、全体の範囲については不明な点が多く、また、層位的に逆転現象が認められたことから、遺構の存在についても否定的な認識のもとにおかれていた。その後、本遺跡の原位置の確認や、遺物包含層の分布範囲の確認を目的とした範囲確認調査が4次にわたって大阪府教育委員会の手で実施された。これら4次にわたる調査でも、遺構が認められたのは1回のみであり、昭和48年の時点では包含層の分布する範囲が東西500mであることを確認したにとどまり、唯一確認された遺構の性格については将来の調査にその解明を持ち越していた。さらに、昭和48年には、財団法人大阪文化財センターの手によって、近畿自動車道に関連する当該遺跡の範囲確認調査も実施され、中央環状線中央分離帯部分に於いて、南北に500mの拡がりを持っていることが確認された。

さらに、こうして、遺跡の範囲が概ね把握せられた時点で、大阪府土木部下水道課が建設を進めている寝屋川南部流域下水道事業にかかる長吉ポンプ場の建設について、大阪府土木部から、大阪府教育委員会に対して、当該遺跡の取り扱いについて協議がもたれた。

協議を受けた大阪府教育委員会は、当該遺跡地内であることを確認すると共に、計画の変更を強く求めたが、用地取得が完了していること、中央南幹線下水管渠がすでに長吉ポンプ場を除いてほぼ完成していること等、計画の変更は困難であることから、長吉ポンプ場用地内に於ける正確な試掘調査を実施し、遺物包含層の有無、遺構の有無やその範囲を確認することとなった。

この試掘調査は、財団法人大阪文化財センターによって昭和52年に実施され、それまで不明とされていた弥生時代中期及び前期の遺構を検出するとともに、遺物包含層もプライマリーなものであり、当該地が亀井遺跡の中心部分である可能性が強いと結論されるに至った。この結果をもって、再度当該遺跡の取り扱いについて協議をもった大阪府土木部と大阪府教育委員会は、数回にわたり遺跡の保護・保存対策等を慎重に検討したが、結局、工事予定地内すべてに発掘調査を実施することと、その結果を基に最終的な協議と検討を加えることで合意した。こうして実施された長吉ポンプ場の発掘調査は、昭和53年から同55年まで、財団法人大阪文化財センターが、東部流域下水道事務所の委託を受けて実施し、弥生時代全般にわたる集落関係の膨大な遺構、大量の遺物、古墳、平野川の旧流路等々、亀井遺跡の中心部であり、大集落遺跡であることを明らかにした。

この様に、徐々にその内容が明らかになってきた当該遺跡に関する近畿自動車道関連部分（府道中央環状線中央分離帯）の発掘調査は、昭和54年6月1日付をもって大阪府教育委員会、日本道路公団、(財)大阪文化財センターの三者で受委託契約を締結し、着手した。

当該調査は、本来、近畿自動車道の供用を北から進めている日本道路公団としては、全体建設計画の中で、この時期に埋蔵文化財の発掘調査に着手する必要性はなかったのであったが、昭和56年度末を目標に進められていた上記長吉ポンプ場に関連する中央南幹線下水管渠の築造に伴う特殊マンホールの位置の関係で、橋脚位置を早急に決定する必要が生じたために着手したものであった。従って、長原遺跡を除く従来の調査（トレンチ調査方式）は、トレンチ部分の調査と橋脚位置の調査を一連のものとして一契約で実施していた訳であるが、当該遺跡については、例外として、まず、トレンチ部分のみの調査を実施し、必要にせまられた橋脚位置をとりあえず決定した後、中央南幹線下水管渠の築造工事の終了をまって、再度橋脚部分について別途契約する方向で調査を実施することとした。

また、当初、遺跡延長450mと予想されていた当該遺跡の範囲は、調査が進行するにつれ、さらに南へ60m延伸することが明らかになった。この南への範囲の延伸部分についても、トレンチ部分の調査のみ、追加して実施することとし、設計変更、契約変更を行なった。この他にも、調査の進捗につれて、数回にわたって、調査進行上必要な設計変更に伴う契約変更を繰返しながら、昭和57年3月、現地に於ける発掘調査を完了したものである。（中西）

## 第2章 調査の目的と方法

### 第1節 調査の目的

亀井遺跡の最初の大規模調査は、寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事に先立って昭和53年5月から昭和55年12月まで行なわれた。この調査は、それまで多数の弥生式土器を出土したことが知られているものの、その遺物包含層は全て2次的に推積したものであろうと推定されていた亀井遺跡において、初めて弥生時代集落の存在を確認し、亀井遺跡の研究史のなかの大きな画期となるものであった。

今回の近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内の調査は、その長吉ポンプ場関連の調査が多くの新たな事実を明らかにしつつあった昭和55年7月から開始された。このように、先行して行なわれていた調査が総括される前に今回の調査が開始されたという点では、調査開始の時点では、前述の長吉ポンプ場関連の調査の成果と、そこから提起される新たな問題点の全てを踏えることが出来なかったことも事実である。

しかし、今回の調査に着手する時点でも、長吉ポンプ場関連の調査によって、亀井遺跡が弥生時代から江戸時代までの複合遺跡であること、長吉ポンプ場関連の調査区域が弥生時代中期から後期にかけての集落の一角にあたること、弥生時代遺物包含層中には複数の遺構面が存在すること、古墳時代中期には古墳や堤が築かれていること等々の重要な事実が明らかにされており、また、弥生時代後期の集落はその中心が長吉ポンプ場関連の調査区外に移っている可能性の強いことや、「古平野川」「古東除川」の動向が亀井遺跡の変遷に深く関わっていること等の推察もされるにいたっていた。

さらに、その後に行なわれた長吉ポンプ場関連の調査の総括の結果、弥生時代集落の変遷と全容の解明、古墳時代以降の集落の確認、亀井遺跡の立地する埋没自然堤防の形成過程と変遷の解明等々が、新たな課題として呈示された。

一方、今回の調査の対象となった府道中央環状線中央分離帯内は、過去に数度の範囲確認調査・試掘調査の実施されたところであった。その結果、平野川から国道25号線までの間では顕著な弥生時代遺物包含層の存在が確認されていた。しかし、25号線以北及び平野川以南では集落の存在を推定できるような遺物包含層は検出されていなかった。

以上のような長吉ポンプ場関連の調査の成果及びそれ以前の範囲確認調査及び試掘調査の結果から、今回の調査では、まず長吉ポンプ場関連の調査によって確認された弥生時代集落の拡がりを確認し、その時期を検証することが主要な目的の1つとなった。また、顕著な遺物包含層が検出されていない25号線以北及び平野川以南の地域については、集落周辺の状況及び「古平野川」「古東除川」の動向を探ることが主要な目的となった。さらに、古墳時代以降の各時期について

も、長吉ポンプ場関連の調査によって検出された遺跡の拡がりの有無を確認することが課題となった。

## 第2節 調査の方法

前述のように、今回の調査では、長吉ポンプ場関連の調査によって初めて具体的な姿を見せたとも言える亀井遺跡について、その構造をより一層明らかにすることが課題であった。このため調査を進めるにあたっては、常に長吉ポンプ場関連の調査の成果と、そこから導き出された新たな問題に留意することは当然のことであった。

第一に、基本層序は出来得る限り長吉ポンプ場関連の調査区の層序に対応させて把握することに努めた。また、南北に細長い調査区となるため、各トレンチ間の層序についても、常に相互チェックし、層序を連続して理解することに努めた。

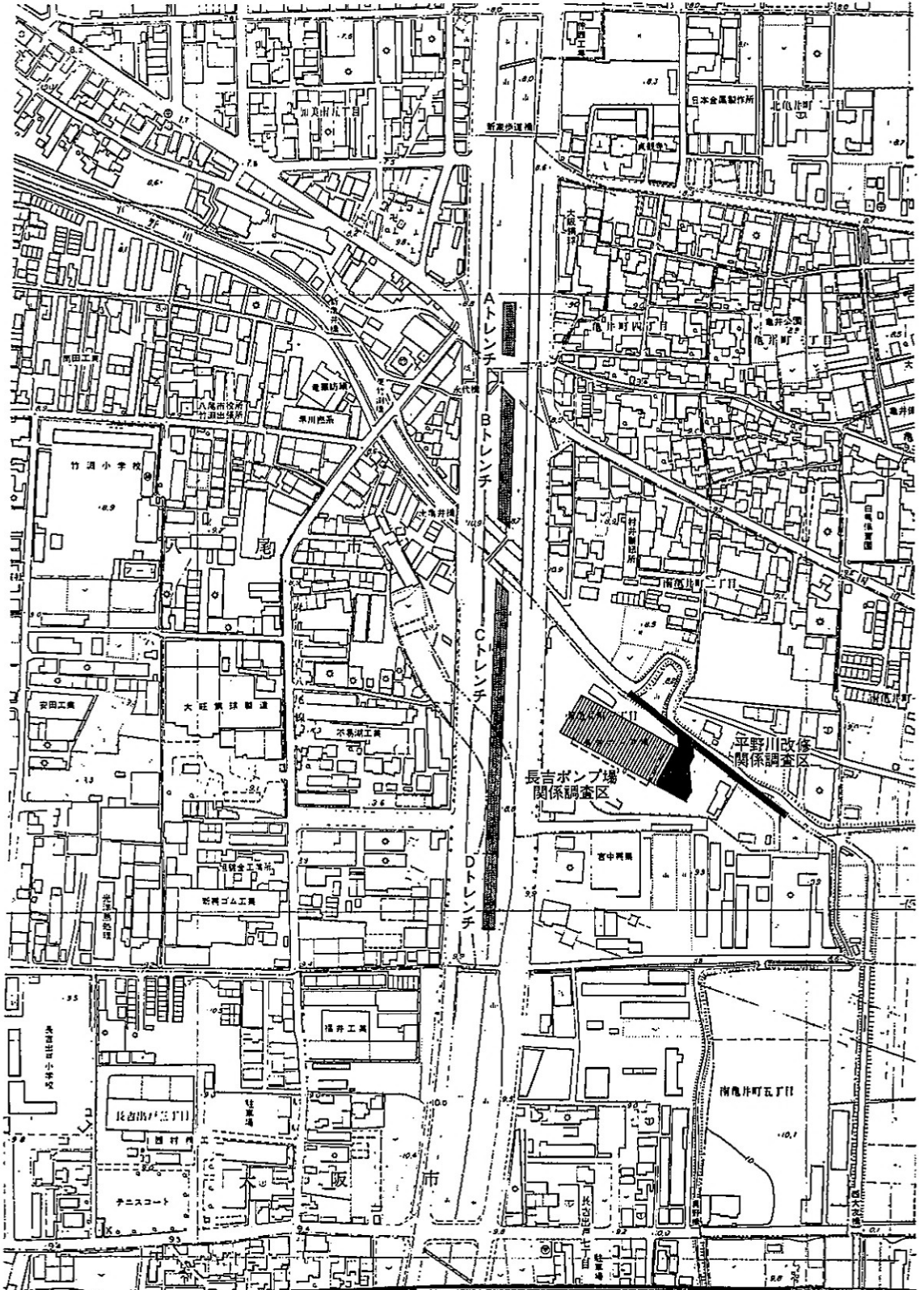
弥生時代遺物包含層の掘削にあたっては、長吉ポンプ場関連の調査で、遺物包含層が複数の遺構面の重なりによって形成されたものであることが確認されていたため、包含層中での遺構面の確認を優先させることとした。このため、全体の掘り下げに先立って包含層の立ち割りをを行い、分層を試みた。掘り下げは、立ち割りの所見にもとづく各層毎に行ったが、完形土器等の集中が認められる場合には、ただちに同一レベル面での精査を行うとともに、立ち割りによる分層結果の再検討を行って、包含層中での遺構面の検出に努めた。さらに土層視察用のアゼは、地山面での遺構検出作業の終了まで残置し、各遺構の掘り込み面を再確認することによって、遺物包含層の分層を再検討し修正した。

各遺物包含層中の遺物は、各層別に、5 m×5 mの区画毎に取りあげた。

各トレンチは、北からA・B・C・Dトレンチと呼称した。調査区の地区割りは、長吉ポンプ場関連の調査区との位置関係を正確に押えるため、国土座標軸を用いてAトレンチ、BトレンチC・Dトレンチの各トレンチ毎に、5 m×5 mの区画を設定した。国土座標軸のX軸には南から北へアラビア数字を、Y軸には東から西にアルファベット(a、b、c……)を付して各軸線の番号とした。各区画の名称は、区割の東南の交点の番号を東南優位の原則に従って用いた。調査区全体の地区割りは付図1に示すとおりである。なお、Dトレンチについては、Cトレンチの調査終了後に追加調査となったため、やむをえずX軸にはマイナス番号を付した。なお、使用した国土座標軸は、道路公団のセンター杭に標示されている国土座標から復元したものである。

(高島)





第2図 トレンチ位置図 1/5000

## 第3章 層 位

### 第1節 基本層序

当遺跡の基本層序はⅠ～Ⅵ層に分けて説明する。既に、『亀井・城山』でⅠ～Ⅴ層の基本層序が報告されており、統一性を欠くくらいがあるが、極力、既応の調査区の層位と対応させるようにした。

Ⅰ層（山砂層） 調査区全域を覆う盛土層で、府道大阪中央環状線建設に伴って施されたものである。上面のレベルはT.P.+8.5～9.2m、層厚は0.5～1.5mである。

Ⅱ層（旧平野川） 1967年に改修される以前の平野川の埋土で、上層は改修時の掘削土、下層は自然堆積土である。流心の層厚は約1.5mである。

Ⅲ層（旧耕土・床土） A・Bトレンチ部ではⅠ層を盛土する際に削平を受けたらしく、ごく一部しか残っていない。C・Dトレンチ部ではほぼ全面に見られる。上面のレベルはT.P.+8.5～8.7m、層厚は0.1～0.6mである。

Ⅳ層（黄褐色・灰白色シルト～粘土） 中世の遺物包含層であるが、瓦器等の遺物は細片で出土量も多くない。Bトレンチ南半からCトレンチ部に認められる層で、上面は旧東除川NR9002の検出面である。上面のレベルはT.P.+7.5～8.6m、層厚は0.4～1.2mである。

Ⅴ層（茶褐色細砂～粗砂層） 自然流路NR6001の覆土及びその同時異層で、Aトレンチ北端からCトレンチ20ライン付近にわたって広く認められる。NR6001の流心はBトレンチ23ライン付近からAトレンチ全面で、最大層厚は約2.3m。Bトレンチ08ライン付近からCトレンチ20ライン付近にかけてはNR6001のオーバーフローと考えられ、層厚は0.2～0.4mになる。上面のレベルはT.P.+7.4～8.0mで、Aトレンチでは近世の奈良街道SF9001、Bトレンチでは鎌倉、室町時代の土坑や溝、Cトレンチでは平安時代の井戸SE7001が検出された。層中からは弥生時代から平安時代に至る多量の遺物が出土した。

Ⅵ層（灰緑色粘土層） Bトレンチ13ライン以南、Cトレンチ20ライン付近にかけて認められた6・7世紀の土師・須恵器を包含する層である。上面のレベルはT.P.+7.0～7.2mで、BトレンチではSD6001・6002が、Cトレンチでは水田畦畔SX6005等が検出された。層厚は0.1～0.9mである。

Ⅶ層（黒褐色有機土層、黒灰色、青灰色粘土～シルト層） A・BトレンチではNR6001、SD6001の下面に堆積する禾本科の植物遺体を多量に含む有機土で、層厚は約0.1m。何枚もの植物遺体と暗青灰色粘土の薄層が互層となっており、沼状の滞水堆積と考えられる。Cトレンチでは、20～26ライン付近に堆積する黒灰色あるいは青灰色粘土～シルトの互層となる。上面のレベルはT.P.+6.0～6.7m。古墳時代の遺構面となっている。Cトレンチでの層厚0.2～0.4m。

Ⅷ層（弥生時代遺物包含層） 『亀井・城山』ではⅨ層としている層であるが、今回の調査でいくつかの新知見があったので、第2節で詳述する。

Ⅸ層（青灰色粘土～シルト層他） 弥生時代の最下の遺構面となっている地山層である。BトレンチからCトレンチ北半にかけての遺構密集地域では、0.5～1.0mほどの厚さに青灰色シルト層が堆積しており安定した層相がみられる。青灰色シルト層の下層は灰緑色ないし暗灰色粘土層である。これに対して、Aトレンチでは、植物遺体を多く含む黒色有機土の薄層を数層挟在する粘土層となっており、青灰色シルト層の形成がみられない。また、Cトレンチ南半からDトレンチでは、0.4m前後の厚さの青灰色粘質シルト層の下層に、シルト～粗砂の互層が1.0m近く堆積している。このように層相が異なる原因は、埋没自然堤防上と後背湿地という地形のちがいに求めることができる。BトレンチからCトレンチ北半の区域を埋没自然堤防上、他の区域を後背湿地と考えることが可能である。この層は沖積層であるが、従来無遺物層と考えられてきた。しかし、最近実施された平野川改修に伴う調査では、Ⅸ層中に挟在する黒色有機土中から縄紋晩期の土器片が出土しており、今後の調査では注意を要する。Ⅸ層上面のレベルは、Aトレンチ部が最も低くT.P.+4.8m前後、Bトレンチ10ライン付近でT.P.+5.6m前後、Cトレンチ30ライン付近でT.P.+5.8m前後である。

なお、Ⅸ層以下の層序については『亀井・城山』に詳しい。

## 第2節 弥生時代遺物包含層（Ⅷ層）

本層が『亀井・城山』のⅨ層に相当する層であることはすでに述べた。さらに「亀井・城山」での本層に関する所見を整理してみると、1. 本層は調査区北東部では黒色粘土層、南西部では暗灰色粘土層となっており、その境界は2条の大溝によって画されている。2. 黒色粘土層は鍵層の挟在によって基本的に4層に分層できる。3. 暗灰色粘土層は黒色粘土層とは層相も異り、鍵層も持たないため各層の境界が不明瞭な部分もあった。4. Ⅸa～dの4層に分層した各層の上面から遺構が検出されている。Ⅸa・b各層の上面からは後期の遺構が、また、Ⅸc・d各層の上面及びⅧ層（地山層）面からは前・中期の遺構がそれぞれ検出された。

また、『亀井・城山』第Ⅴ章では、遺構・遺物の検討をふまえて各層の時期をつぎのように特定している。Ⅸa層は後期の溝S D3032・3033・3041の掘削に伴う排土を、溝肩部及びその周辺に積み上げたもので、Ⅴ様式の前半に形式された。Ⅸb・c層はⅢ様式新段階～Ⅳ様式からⅤ様式前半の時期までに堆積したものと考えられるが、遺構の在り方から見て、さらに分層可能と考えられる。Ⅸd層はⅠ様式からⅢ様式新段階～Ⅳ様式の時期に堆積したものと考えられる。

今回の調査では、以上のような成果をふまえ、当初から両調査区の土層を対応させるよう努力をしながら調査を進めた。さらに、『亀井・城山』では、Ⅸb・c・dの各層に比較的大きな年代幅を持たせているが、これは、黒色粘土層中に黒色粘土を覆土とする遺構が存在するため、精

査時にも検出できない遺構が多く、それらの遺構の遺物が各層本来の遺物と混ざって取り上げられることが多いからである。このような問題点を解決する手段として本調査では、調査の最終段階まで土層観察用のアゼを残し、Ⅷ層をできる限り細分して各面での遺構検出に努め、掘り込み面と時期の確かな遺構を手がかりにⅧ層の大別と時期決定を試みた。

今回の調査では、AトレンチとBトレンチの北部、Cトレンチの北部において、集落域を画する環濠の一部と考えられる大溝群が検出されているが、『亀井・城山』の所見と同様、大溝にはさまれたBトレンチ部には黒色粘土層が、大溝の外側にあたるCトレンチ中央～南半部にかけては暗灰色粘土層が堆積している状況が基本的に確認された。黒色粘土層は、挟在する鍵層と遺構の存在によってほとんど無数といってよいほど細分が可能である。黒色粘土層が人間の生活行為によって徐々に形成されたものであることを認識すれば、これは当然のことであろう。さらに、旧地形が南から北へ向って傾斜しているために、細分された各層の連続や併行関係が不明確な部分も多く、作業はかなりの困難を伴った。本概報作成の時点で時期が確定したいいくつかの遺構を手がかりに、調査中の所見と合わせてⅧ層をa～gの7層に大別し、以下に各層の層相と時期について述べる。

Ⅷa層（黒褐色粘土） Bトレンチ06ライン付近から12ライン付近にかけてほぼ水平に堆積している。12ライン以北では自然流路NR6001によって押し流されている。上面のレベルはT.P.+6.8m前後である。この層の上面では、古墳時代の水田畦畔SX4001が検出されたが、弥生時代の遺構は検出されていない。層中出土の土器は細片になっているものが多いが、後期の最も新しい段階に位置づけられる。層厚0.2～0.4m。

Ⅷb層（黒色粘土層） Bトレンチ05ライン付近から19ライン付近にかけて堆積している。12ライン以北ではNR6001によって上面を削平されて層厚が薄くなるが、北西方向へ徐々に下がる堆積を示す。08ライン付近での上面のレベルはT.P.+6.4m前後である。微小な炭化材を多量に含み、藍鉄鉱、砂粒を少量含む。この層は灰・炭等の鍵層の挟在によってさらに2層に細分することが可能である。この層の上面では、後期末の土坑SK3117、極小の管玉を出土した土器片敷SX3004・3005が検出された。層中からは多量の土器片とともに貨泉、銅鏃、ガラス小玉等が出土した。土器片は後期後半のものが多く見られる。

Aトレンチ及びC・Dトレンチの包含層では、上記2層に対応する層は見られない。

Ⅷc層 Bトレンチ部とAトレンチ及びC・Dトレンチ部では層相が大きく異っている。Bトレンチ05ライン付近から19ライン付近にかけては黒色～黒灰色粘質土層が堆積する。凹凸のある堆積状況を示しているため途中とぎれる部分もあるが、10ライン付近で、微小な炭化材を多量に含む黒色粘質土層と、青灰色シルトの小ブロックを含む黒灰色粘土層が不整合に連続するほか、灰・炭等の鍵層の挟在や、色調・マトリックスの違い等でさらに2～3層に細分することが可能である。本層はBトレンチ19ライン以北では、奈良～平安時代の自然流路NR6001の下刻作用によって流失しているが、Aトレンチ部では、後期前半の環濠SD3001B～3006Bの埋没後のくぼ

み（S D3001C～3006C）に堆積した暗灰色粘土層がⅧc層に対応すると考えられる。暗灰色粘土層は砂粒をほとんど混入せず、禾本科の植物遺存体が薄層となって挟在しており、遺物の包含量はきわめて少い。

C・Dトレンチ部では、自然流路NR3001・3003・9001等の下刻作用によって層の連続が不明確な部分が多いが、30ライン以北と10ライン以南で層相が異っている。30ライン以北では砂礫混り灰褐色シルト層でこの層は、後期前半の溝S D3104の上層に堆積する。後期の遺物の包含量は少い。10ライン以南では黒灰色粘土と青灰色粘土の混合層及び、黒灰色粘土層の2層に細分できる層がⅧc層に対応する。遺物の包含量はきわめて少いが、D h 03区で黒灰色粘土層中よりⅤ様式の土器が一括出土した。

上面のレベルは、Cトレンチ34ライン付近が最も高く、T.P.+6.8m前後がある。そこから南と北に徐々に下がる堆積をしている。Cトレンチ10ライン付近でT.P.+6.2m前後、Bトレンチ10ライン付近でT.P.+6.2m前後である。層厚は0.2～0.3mである。この層の上面では後期の土坑S K3109、溝S D3021B・3055・3068・3069などが検出され、それぞれ後期後半の多量の土器が出土した。層中出土の土器はI様式からⅤ様式までさまざまであるが、Ⅴ様式の土器は前半に比定できるものが多い。

Ⅷc層は『亀井・城山』で報告したⅤa層と時期的に対応するものと考えられる。

Ⅷd層 Bトレンチ部ではⅧc層と層相はほとんど同様であるが、灰・炭等の鍵層の挟在によって分層できる。10ライン付近では黄灰色細砂を混入する。多量の土器を包含する。この層の上面では後期の土坑S K3112・3113・3128などが検出された。さらに、つぎに述べるⅧe層上面で検出された後期の遺構も、遺物の出土状態、切り合い関係等から判断して、その全てが本来の掘り込み面はⅧcないしⅧd層上面と考えられる。

Aトレンチ部での対応関係はつぎのⅧe層の項で述べる。

C・Dトレンチ部ではBトレンチと層相が大きく異っている。遺構の年代観から、34ライン以北に堆積する黒灰褐色粘質シルト層が対応するものと判断した。34ライン付近では灰黄褐色を呈する。この層の上面から後期前半の溝S D3104が掘り込まれている。層中の遺物の包含量は多くない。10ライン以南では明確にⅧd層に相当すると考えられる層は認められない。

南から北へ下がる堆積状況を示しており、また、Bトレンチ部ではかなり凹凸のある堆積であるため上面のレベルは一定していないが、Bトレンチ部でT.P.+6.1～5.9m、Cトレンチ部でT.P.+6.6～6.4mである。層厚も一定していないが、0.2～0.3mほどである。

Ⅷd層は『亀井・城山』で報告したⅤb層に対応するものと考えられる。

Ⅷe層 Bトレンチ50ライン付近から19ライン付近にかけては、青灰色シルト小ブロックを混入する黒灰色粘土層が堆積する。この層は、青灰色シルトブロックや微小炭化材の多少によってさらに3～4層に細分することが可能である。19ライン以北の環濠の間や上層の部分では暗灰褐色粘土層となる。この層の上面では溝、土坑等比較的多くの遺構が検出されたが、さきに述べた

とおり、ほとんどが後期の遺構であり、掘り込み面もさらに上層と考えられる。したがって、明らかにこの面から掘り込まれた遺構は確認されていない。しかし、つぎに述べるⅧf層上面で検出された遺構は、切り合い関係や遺物の年代観から中期の中でもかなりの年代幅が認められ、遺物の出土状況からも本来の掘り込み面はⅧe層上面と考えられるものがある。層中からは多量の土器が出土しているが中期のものが主体であり、Ⅲ様式新段階からⅣ様式のものが多い。

Aトレンチでは、中期後半の環濠群の覆土の同時異層である青灰色粘土層がⅧdないしe層に相当すると考えられるが、遺物はほとんど含んでいない。

C・Dトレンチ部ではやはり層相が異っており、Bトレンチとの対応関係は不明確である。つぎのⅧf層の項で考察を述べたい。

上面のレベルは一定していないが、Bトレンチ部でT.P.+6.0~5.9mで、層厚は0.1~0.3mである。

Ⅷe層は『亀井・城山』で報告したⅡc層に対応するものと考えられる。

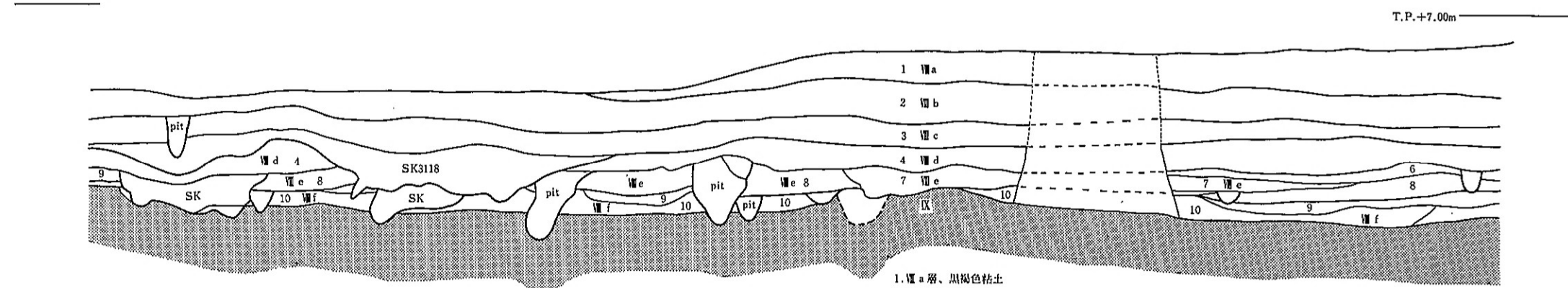
Ⅷf層 Bトレンチ05ライン付近から19ライン付近にかけては暗灰色粘土~砂質粘土が堆積する。土層断面の検討で明らかになった遺構掘り込み面の違いや、マトリックスの違いで3~4層に細分できる。19ライン以北ではⅡ層ブロックが多く混入する暗青灰色粘土層となっており、上面から中期の環濠群が掘り込まれている。Bトレンチ部ではⅧf層の上面でおびただしい数の遺構が検出された。それらの中には後期の遺構も数多く含まれているが、これらは明らかに上層で検出できなかった遺構の残りである。中期の遺構はⅢ様式古段階からⅣ様式のものまでかなり複雑に切り合った検出状況を示す。この層の上面ではさらに、柱穴状の小穴が無数といってよいほど検出された。このように多くの遺構が検出されるわけは、Ⅷe層以上の包含層がほとんど黒色ないし黒灰色を呈し、遺構の覆土も同色、同質であることから上層では、よほど覆土に特徴のある遺構しか検出されず、暗灰色から暗青灰色を呈するⅧf層の上面に至って一斉に見えてくるためである。これは、『亀井・城山』における調査区北東部の所見とも一致している。

Bトレンチ部ではこの層の下層はⅡ層となっており、Ⅷg層は見られない。層中からはⅡ様式からⅢ様式古段階の土器が多く出土した。

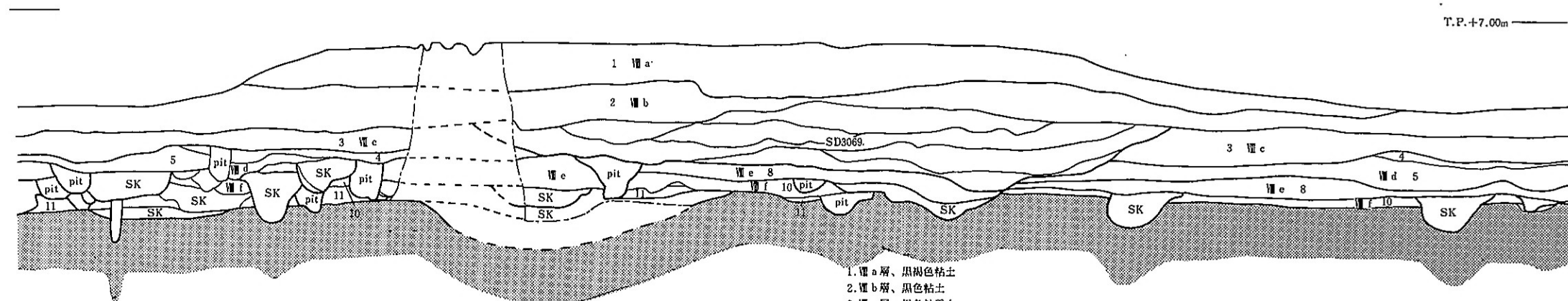
Aトレンチ部ではⅧf層に相当する層は見られない。

C・Dトレンチ部では層相も異り、明確な鍵層もないため、Ⅷe層とⅧf層は明確に分層できない。30ライン以北では黒褐色~黄褐色粘質シルト層がⅧeないしf層に相当すると考えられる。この層の上面からは中期後半の溝SD3076が掘り込まれている。10ライン以南では青灰色粘土層、灰色粘土層、暗灰色粘土層が堆積する。各層とも遺物の包含量はきわめて少ないが、Ⅰ様式新段階からⅢ様式までの土器片を含んでいる。暗灰色粘土層が時期的にⅧfないしⅧg層に対応する層であろう。

上面のレベルはBトレンチ部では北へ向って下がっており、T.P.+5.6~5.4m、層厚0.1~0.2mを測る。Cトレンチ30ライン以北ではT.P.+6.2m前後、層厚0.2~0.25mである。10ラ



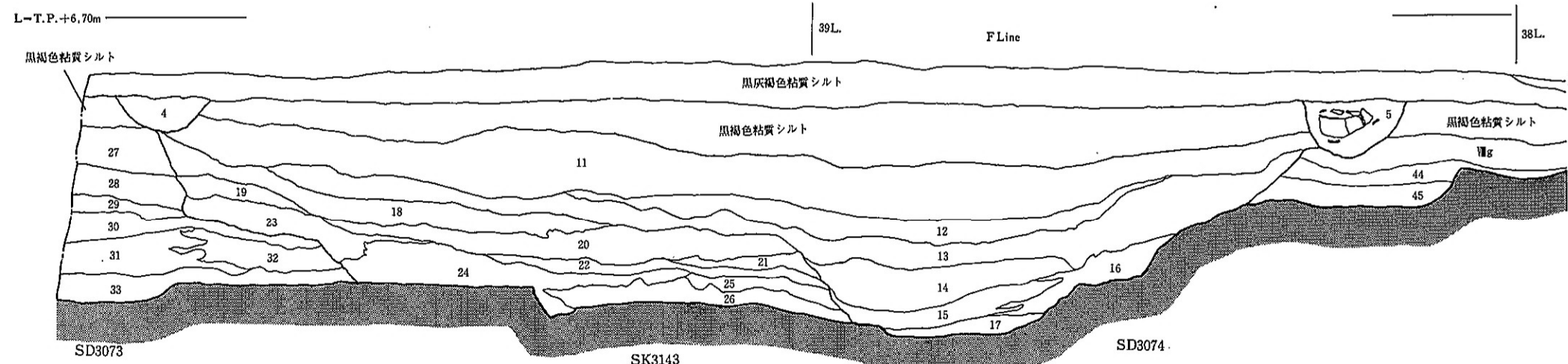
1. Ⅴ a 層、黒褐色粘土
2. Ⅴ b 層、黒色粘土
3. Ⅴ c 層、黒色粘質土
4. Ⅴ d 層、炭混り黒灰色粘土
6. Ⅴ e 層、炭・焼土混り黒灰色粘土
7. Ⅴ e 層、炭・灰混り黒灰色粘土
8. Ⅴ e 層、青灰色シルトブロック混り黒灰色粘土
9. Ⅴ f 層、黒灰色粘土ブロック混り暗青灰色粘質土
10. Ⅴ f 層、暗灰白色砂質土



1. Ⅴ a 層、黒褐色粘土
2. Ⅴ b 層、黒色粘土
3. Ⅴ c 層、黒色粘質土
4. Ⅴ d 層、炭混り黒灰色粘土
5. Ⅴ d 層、炭・焼土混り黒色粘質土
8. Ⅴ e 層、青灰色シルトブロック混り黒灰色粘土
10. Ⅴ f 層、暗灰白色砂質土
11. Ⅴ f 層、暗青灰色砂質粘土



第4図 Bトレンチ弥生時代遺物包含層断面図 1/40

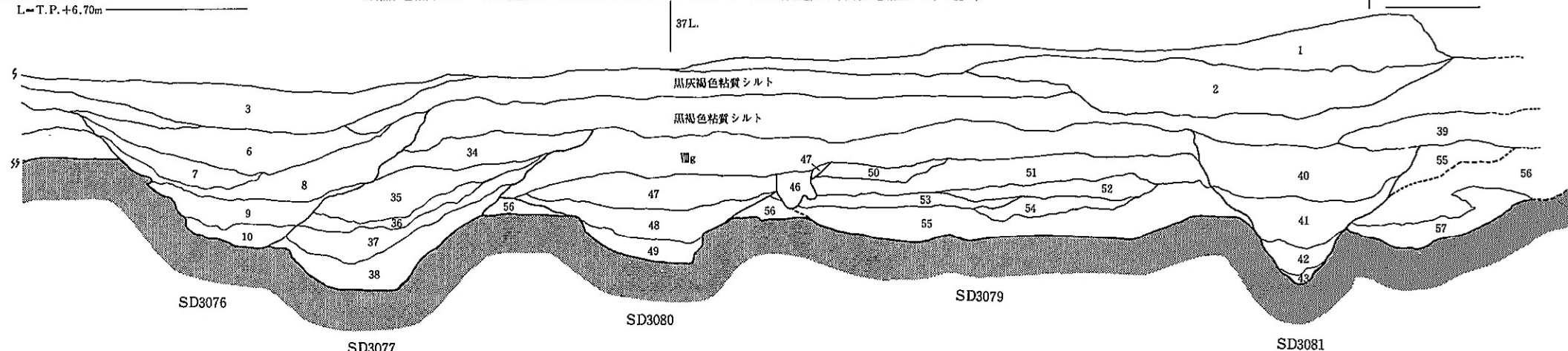


- 1.粗砂・細礫を多量に含む灰褐色シルト
- 2.灰褐色シルト(細かな暗褐色シルト粒を多量に混る、細礫混り)
- 3.黒青灰色粘質シルト(細礫・炭化物混り)
- 4.暗青灰色粘質シルト(細礫・炭化物混り)
- 5.黒灰褐色シルト
- 6.青灰色粘質シルト
- 7.暗褐色シルト(多量の細礫・炭化物混り)
- 8.暗褐色シルト(細礫・炭化物混り)
- 9.暗褐色シルトと暗青灰色粘土の混合層
- 10.細・小礫を含む暗褐色シルト・淡黄色極細砂の混合層
- 11.灰褐色粘質シルト(多量の淡黄色シルトブロック混り、炭化物・細礫混り)
- 12.暗褐色粘質シルト(淡黄色極細砂ブロック混り、炭化物多量に混る)
- 13.灰褐色粘土(細礫多量に混る、炭化物混り)
- 14.暗灰緑色粘土(わずかの植物遺体層挟在)
- 15.暗灰色粘土(わずかの植物遺体層挟在)
- 16.暗灰色粘土・灰緑色粘土・淡黄色極細砂・細礫の混合層
- 17.灰緑色粘土と暗灰色粘土のブロック層
- 18.暗灰黄色シルト(細礫・淡黄色極細砂混り)
- 19.青褐色粘土(細礫混り)

- 20.青褐色粘土(細礫混り)
- 21.青褐色粘土・淡黄色極細砂の混合層(細礫混り)
- 22.青褐色粘土(細礫混り)
- 23.青褐色粘土と淡黄色極細砂の混合層(細礫混り)
- 24.青褐色粘土と灰緑色粘土の混合層
- 25.青褐色粘土・灰緑色粘土・淡黄色極細砂の混合層
- 26.緑灰色粘土(わずかの灰緑色粘土及淡黄色極細砂のブロック混り)
- 27.灰黒色シルト層
- 28.灰黒色シルト(わずかの褐黄色極細砂を含む)
- 29.灰黒色シルト・暗灰色粘土・黄色極細砂・灰色極細砂の混合層
- 30.灰色粘土・黄色極細砂・黒灰色粘土の混合層
- 31.黒灰色シルト・淡黄色極細砂の混合層
- 32.淡黄色極細砂と暗灰色粘土の互層
- 33.灰緑色粘土・淡黄色極細砂・黒灰色粘土の混合層
- 34.暗褐色シルト(細礫混り)
- 35.黒灰色粘質シルト(炭化物・細礫混り)
- 36.灰褐色シルト(細礫・炭化物混り)
- 37.黒灰色粘質シルトと黄褐色極細砂の混合(細礫・炭化物混り)
- 38.黒灰色粘質シルト・黄褐色極細砂・緑灰色粘土の混合層(細・小礫混り)

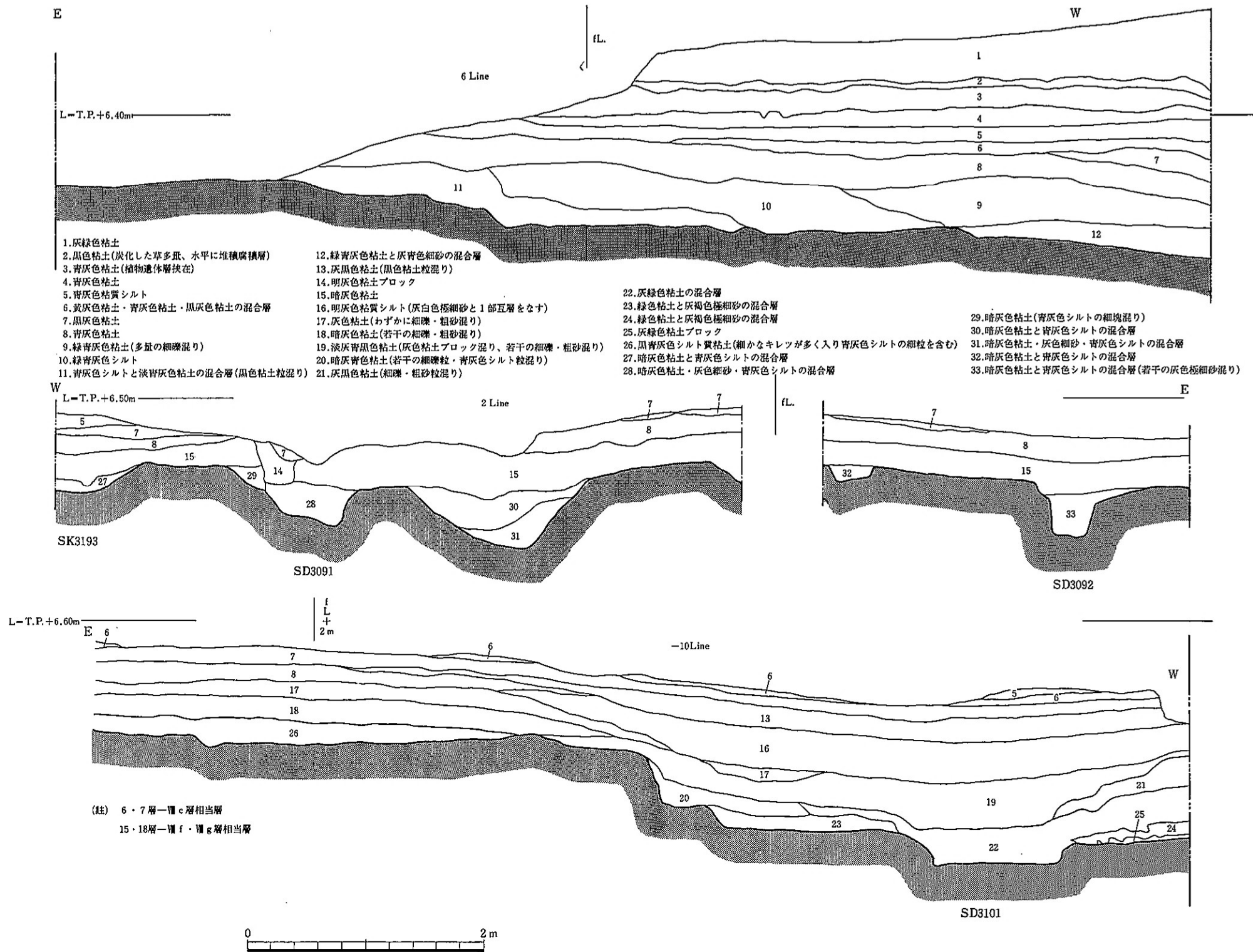
- 39.灰黒色シルト(細礫混り)
- 40.灰褐色シルト(細礫混り)
- 41.青褐色シルトと黄褐色極細砂の混合層(細礫混り)
- 42.暗青褐色粘土と黄褐色極細砂の混合層
- 43.灰緑色粘土と黄褐色極細砂の混合層
- 44.青灰褐色シルト
- 45.青灰色シルトと青灰褐色シルト・褐青色粘土の混合層
- 46.青褐色シルトと黄褐色極細砂の混合層(多量の炭化物混り)
- 47.細礫・炭化物を含む青褐色シルト(黄褐色極細砂の小ブロック混り)
- 48.青灰色粘質シルト(細礫・炭化物・黄褐色極細砂混り)
- 49.青褐色粘土・青灰色粘土シルト・黄褐色極細砂の混合層(若干の炭化物・細礫混り)
- 50.暗青褐色シルト
- 51.青褐色シルト(多量の黄褐色粘土ブロック混り)
- 52.青褐色シルト(多量の黄褐色極細砂の小ブロック混り)
- 53.暗青褐色粘土と黄褐色極細砂の混合層
- 54.暗青褐色粘土
- 55.青灰色粘土と黄色極細砂の混合層
- 56.暗青灰色粘土・黄褐色極細砂・灰色粘土の混合層
- 57.灰青色極細砂(暗青灰色粘土ブロック混り)

(註) 黒灰褐色粘質シルト層—Ⅴd層相当層  
 黒褐色粘質シルト層—Ⅴe・Ⅴf層相当層



第5図 Cトレンチ弥生時代遺物包含層断面図 1/40





第6図 C・Dトレンチ弥生時代遺物包含層断面図 1/40

イン以南ではT.P.+6.1m前後、層厚0.15~0.2mを測る。

Ⅷf層は『亀井・城山』で報告したⅨd層に対応する。

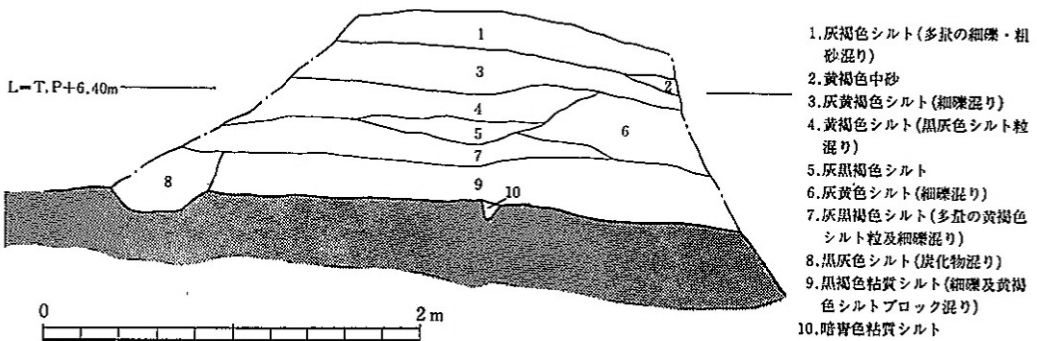
Ⅷg層 Aトレンチ及びBトレンチには見られない。Cトレンチ30ライン付近から38ライン付近にかけて黒褐色粘質シルト層と褐青色粘土層が漸移的に連続しながら堆積する。この層の上面からはⅡ様式の溝S D3077、Ⅲ様式の溝S D3074・3081などが掘り込まれている。層中からはⅠ様式中段階、新段階の土器が出土している。10ライン以南、Dトレンチにかけては、さきに述べた灰色粘土層~暗灰色粘土層が、部分的にⅧg層相当層である可能性がある。

Ⅷg層に相当する土層は『亀井・城山』の調査区では確認されていない。

以上7層が今回の調査で認識された弥生時代遺物包含層の状況である。以下に再度、時期と対応関係を整理しておく。(広瀬)

第1表 弥生時代遺物包含層対照表

層位	「亀井・城山」		
Ⅷa層		後期末	
Ⅷb層		後期後半	
Ⅷc層	Ⅸa層	中期後半~後期前半	
Ⅷd層	Ⅸb層	中期後半	Ⅲ新~Ⅳ
Ⅷe層	Ⅸc層	中期中頃~後半	Ⅲ
Ⅷf層	Ⅸd層	中期前半	
Ⅷg層		前期	



第7図 Cトレンチ34ライン弥生時代遺物包含層断面図 1/40

参考文献

寺川史郎・尾谷雅彦編『亀井・城山』大阪文化財センター 1980年

## 第4章 遺構

### 第1節 概要

今回の調査で検出された遺構には、弥生時代前期のものから江戸時代以後のものまでである。その分布状態・形態・検出層位等は、時代により、区域によって極めて多様である。それら各種遺構の、各時代・時期による遺物包含層と遺構検出面の関係については、前章で述べたところである。ここでは、個々の遺構の説明に入る前に、各時代・時期による各種遺構の分布状態を中心に遺構の様相を概観する。

#### 第1項 弥生時代前期

弥生時代前期の遺構は、C・Dトレンチにおいてのみ検出された。A・Bトレンチでは当該時期の遺構は認められず、少量の遺物が出土したにすぎない。検出された遺構には、土坑・ピット・墓・溜り状遺構等があり、分布の中心は、Cトレンチ30ライン付近から38ライン付近までの区域である。

とくに、30ライン付近から36ライン付近にかけての区域では、土坑やピットが互いに切合った状態で検出され、土坑内からは多くの土器が出土している。32区では、焼土ブロックや炭とともに土器群S X 3010・3011が検出されており、31区では、特異な形態の磨石や砥石を一括出土した土坑S K 3165なども検出されている。また、30ライン付近から34ライン付近にかけては、複数の遺構面が存在した可能性もある。一方、36ライン付近から39ライン付近にかけて、幅1.0～1.5mのやや大形の溝S D 3079・3080が検出されている。S D 3079からは多量の土器が出土している。S D 3079・3080から北側では、前期の遺構は、土坑2個と溝1条にすぎない。S D 3079・3080の境に、この時期の遺構の分布密度は、急激に低くなるわけである。

以上のようなCトレンチ北側区域での様相に対し、自然堤防周辺に拡がる後背湿地であったと推定されるCトレンチ11ライン付近から南側の区域でも、溝6条と溜り状遺構1箇所が検出されている。溝S D 3087は、沼状遺構S X 3009と一連のもので、S X 3009にいたって消失しているが、水の流れた痕跡を明瞭に残しており、多数の土器片を出土している。

#### 第2項 弥生時代中期

弥生時代中期の遺構は、調査区全域で検出されているが、その分布状態によって、大きく3つの区域に分かれている。

第1の区域は、Bトレンチ19ライン付近以南から、Cトレンチ38ライン付近以北までの範囲である。ここでは、多数の土坑・ピット・井戸等が稠密に分布しており、壺棺墓も検出されている。この区域での当該時期の遺構面は、Bトレンチで4面、Cトレンチで2面が確認されているが、前章でも述べたように、本来はさらに多数の遺構面が存在したものと考えられる。検出され

た土坑のなかには、S K3060やS K3144のように、多数の土器とともに木製品・木片・獣骨等を出土したものもある。これらの土坑から出土した土器には、体部に穿孔した完形土器などもあり、何等かの祭祀にともなう遺構であった可能性も考えられる。また、S K3040からも多数の土器が一括出土している。さらに、この区域では、26個もの井戸も検出されている。全ての井戸が同時期に存在していたとは考えられないが、多数の井戸の存在は、活発な集落活動の痕跡として注意される。

第2の区域は、前述の遺構密集区域の縁辺にあたるBトレンチ19ライン付近からAトレンチ全域にかけての範囲と、Cトレンチ36ライン付近から39ライン付近にかけての範囲の、2つの区域に分かれている。ここでは、幾条もの大溝が検出されている。これらの大溝群の外側では、前述の遺構密集地域でみられた土坑・ピット・井戸等の遺構が激減するという、特徴的な遺構分布のあり方がみられる。

Cトレンチ側、すなわち南側の大溝群は、中期前半の時期のS D3077から、中期中頃のS D3074・3081、中期後半のS D3076へと、順次、わずかつつ位置を変えながら掘削されている。なおS D3073は、遺構の切合い関係から、S D3077と近い時期のものであった可能性が高い。

これに対して、A・Bトレンチ側、すなわち北側では、幅3.0m前後、深さ1.0～1.5mと、南側の大溝よりやや大規模な大溝が、S D3001a～3006a・3007・3009・3011・3012の、都合10条検出されている。10条の大溝は、全て同一方向に走っており、平行する位置にあった。これら10条の大溝が、同一時期に併存していたか否かは確定できていないが、いずれにしても、中期中頃から後半までの時間幅に収まるものようである。この北側部分の大溝群は、未調査である国道25号線部分にも、その存在が推定できることから、本来はさらに多数であったと考えられる。大溝群からは多量の土器が出土している。

第3の区域は、Cトレンチ36ライン付近から南側、Dトレンチ南端までの範囲である。この区域は、36ライン付近から11ライン付近までと、それより、さらに南側の部分との、2つの区域に細分される。

前者の区域では、数カ所で土坑と溝が検出されているが、遺構の分布密度は極めて低い。ただし、Cトレンチ26ライン付近から30ライン付近にかけて、流路かと考えられるNR3002が検出されており、これが、自然流路であったとすれば、この時期の流路が未発見であった点で、注意される。

後者の区域は、前述したように、後背湿地と考えられるところであるが、ここでは、多数の溝と、若干の土坑及び溜り状遺構が検出されている。溝のなかでは、S D3090・3094・3095・3100・3101等の、比較的大規模なものに、水の流れた痕跡や、滞水の痕跡が認められている。S D3100からは畿内第Ⅲ様式の水差形土器が、S K3187からは第Ⅱ様式の壺形土器が出土しているが、遺物量は全般に少ない。この区域の遺構は、地山層上面にて検出されたものだけであり、時間的には、ほぼ中期中頃以前のものに限られている。

### 第3項 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、A・Bトレンチと、Cトレンチ11ライン付近から北側の範囲で検出された。Cトレンチ11ライン付近から南側では、Dトレンチで小規模な土器群が1箇所検出されたにすぎず、遺物の出土量も極めて少なかった。また、Bトレンチ19ライン付近からCトレンチ30ライン付近にかけての範囲は、遺物を多量に含む遺物包含層の存在する部分であるが、包含層中での遺構検出作業は困難をきわめ、検出できた遺構は必ずしも多くない。

後期前半の遺構で、分厚い遺物包含層の存在した上述の区域で検出された遺構には、井戸・土坑・溝などがある。井戸は3個検出されており、SE3027からは長頸壺等の土器8個体が一括出土している。

一方、Bトレンチの19ライン付近から北側、Aトレンチ全域にかけての区域では、中期の大溝群と同様の大溝が、8条検出されている。とくに、Aトレンチで検出された大溝群は、この時期に中期の大溝群を掘り直したと考えられるものである。また、この区域の大溝群も、中期の大溝群と同様、国道25号線部分にも、その存在が推定される。

Cトレンチでは、29ライン付近から36ライン付近にかけて、幅5.0m前後、深さ2.0m以上の大規模な溝SD3104が検出されている。この大溝は、『亀井・城山』のSD3036と同じ溝である可能性も考えられる。

後期後半の遺構には、土坑・溝・自然流路などがある。自然流路以外は、Bトレンチで検出されている。遺物包含層も、Bトレンチでのみ認められている。Bトレンチでの、この時期の遺構面は、2面確認されており、溝SD3055・3068・3069等からは、多量の土器が出土している。また、朱塗の壺形土器の完形品を出土したSK3177や、土器片を敷き詰めた遺構SX3004・3005なども検出されている。

Cトレンチでは、後期後半の流路が、トレンチ北端部と中央部の2カ所で検出されている。トレンチ北端の自然流路NR3001は、『亀井・城山』で報告したNR3001の下流部分と推定されるものである。左岸部河床近くから小形倣製鏡が出土したほか、埋土の上層から多量の土器が出土している。トレンチ中央部、14ライン付近から26ライン付近にかけて検出された自然流路NR3003は、東除川の前身河川と推定されるもので、銅鐸片などが出土している。

### 第4項 古墳時代

古墳時代の遺構はBトレンチとCトレンチの12ライン付近から北側で検出された。いずれも古墳時代中期後半から後期にかけてのもので、前期あるいは中期前半の遺構は検出されていない。

Bトレンチでは、弥生時代遺物包含層第Ⅷ層の上面に、有機質土の薄層が堆積しており、畦畔状の遺構が検出されている。

Cトレンチでは、14ライン付近から20ライン付近にかけて自然流路NR4001が、30ライン付近から36ライン付近にかけて溝SD4001が検出されている。SD4001は、前述のSD3104と、ほぼ同じ位置にあり、SD3104の痕跡が、再機能したものである可能性もある。第Ⅱ型式前半の須恵

器杯身が出土している。また、NR4001からは、第I型式の須恵器片・埴輪片が出土している。

Cトレンチでは、NR4001以外からも少量ながら埴輪片が出土しており、亀井古墳の存在も考えあわせると、近くに古墳の存在していた可能性が強いが、今回の調査では検出されなかった。

#### 第5項 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、A・Bトレンチと、Cトレンチ14ライン以北で検出された。遺構検出面はⅥ層上面及びⅤ層上面である。

Ⅵ層上面で検出された遺構には、土坑・溝・畦畔状遺構・足跡・自然流路などがある。A・Bトレンチでは、江戸時代の平野川NR9001による削平を受けているBトレンチの南端部を除く全域で、自然流路NR6001が検出されている。このNR6001は、前述したNR3001の後身と推定されるが、この時期には、川幅を拡げ遺跡の北半部を広く覆うにいたったものと考えられる。Cトレンチの36ライン以北では、土坑・溝・畦畔状遺構・足跡などが検出されている。畦畔状遺構は1条しか検出されていないため、水田畦畔とは断定し難いが、その周辺で足跡が認められている。Cトレンチ14ラインから18ラインにかけての、古墳時代の自然流路NR4001の埋土上面で検出されたしがらみSX6006は、築かれた当時の流路が江戸時代の東除川NR9002による削平を受けて残っていないために、前述の遺構との層位関係が明らかに出来ないが、内部から出土した土器片によって当該時期に比定できるものである。

Ⅴ層上面で検出された遺構には、Cトレンチで検出された井戸SE7001と溝SD7001がある。SE7001は曲物を井戸枠に使ったもので、横櫛・土師器片等を出土している。

#### 第6項 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺構は、BトレンチとCトレンチ22ライン以北で検出されているが、分布密度は希薄である。Bトレンチで溝4条、土坑1を、Cトレンチで溝1条が検出されているにすぎない。このうち、Cトレンチで検出された溝SD8007は大規模なもので、用水路の如きものと推定される。

#### 第7項 江戸時代及び江戸時代以降

当該時期の遺構で注意されるものには、井戸と河川がある。井戸は、調査区の全域で散見されるが、多くは川や水路から水を引き込むための導水管を付設しており、農業用と推定されるものである。河川は、Bトレンチの南端部と、Cトレンチ22ライン以南からDトレンチ全域にかけての2カ所で検出された。前者は、現在の平野川の前身河川、後者は、1704年（宝永元年）に大和川が付け替えによって廃絶した東除川の旧流路と推定される。（高島）

## 第2節 弥生時代前期

### 第1項 C・Dトレンチ

#### 土坑

**SK3134** (第8図) f39区の地山面で検出された。南側はSD3073に切られ損壊している。また、西側は調査区外に続いている。このため、全体の規模・形態は明らかでない。現状では、南北3.5m以上、東西1.6m以上、深さ0.4~0.5mをはかる。坑底は中央部に向かって緩く傾斜しており、かつ、かなりの凹凸がある。坑底中央部で、長軸1.9m、短軸0.65~1.0m、深さ0.15m前後をはかり、平面形が不整形な土坑1個が検出された。埋土は、5層に分かれるが、最上層に細礫混りの灰褐色シルト層がみられる以外は、すべてシルト・粘土・極細砂等による混合層である。第I様式の土器片が少量出土した。

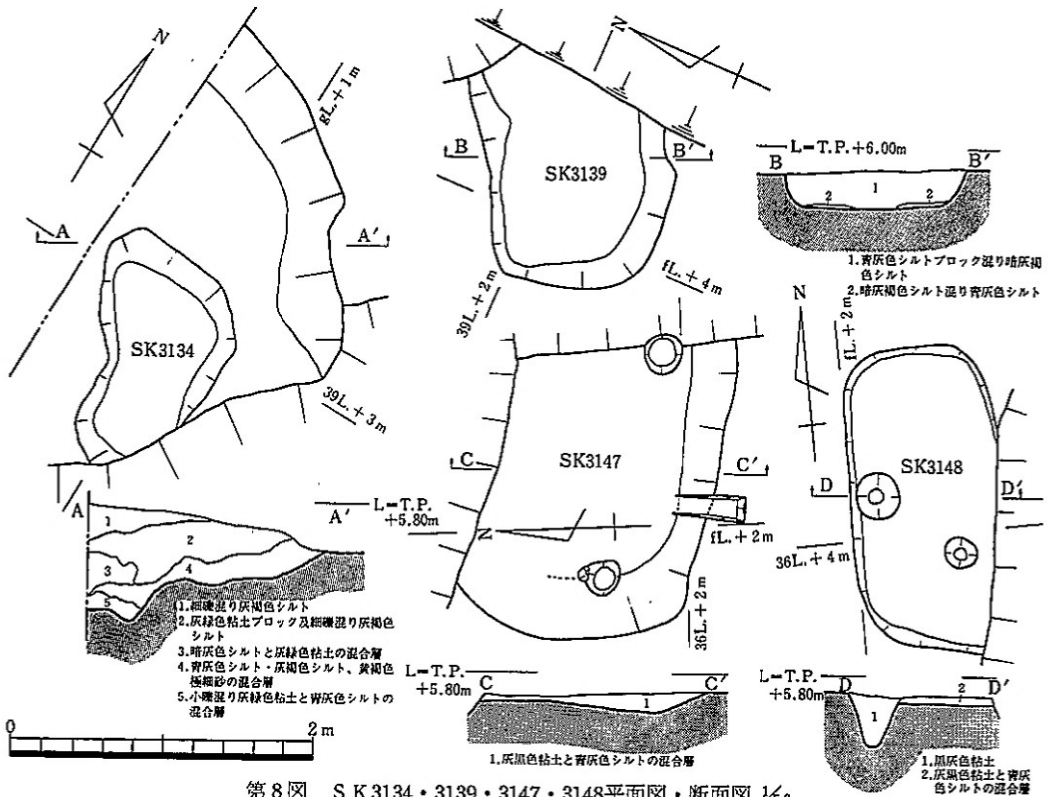
**SK3139** (第8図) e39区の地山面で検出された。SK3138・3140によって上部を削平されている。また、東側は調査区外に続いている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-63°-Eを示す。現状では、長軸1.95m以上、短軸1.25m、深さ0.25mをはかる。坑底は平坦である。埋土は、青灰色シルトブロック混りの暗灰褐色粘質シルト層であるが、坑底直上付近では、青灰色粘質シルトに暗灰褐色シルトブロックが混るような様相を呈している。第I様式の土器片が少量出土した。

**SK3145** (第9・10図) f38区の地山面で検出された。北側はSD3074の削平を受けておりこのため北壁の一部が消失している。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はN-43°-Eを示す。長径2.35m、短径1.3m、深さ0.1m前後をはかる。坑底には若干の凸凹がある。埋土は黄褐色砂質シルトブロック混りの暗青褐色シルト層と、青灰色シルトと暗灰色シルトの混合層の2層である。2層ともに細礫が混る。東北部寄りの部分から、坑底から浮いた状態で、壺形土器・甕形土器等の第I様式新段階の土器片が一括出土した。

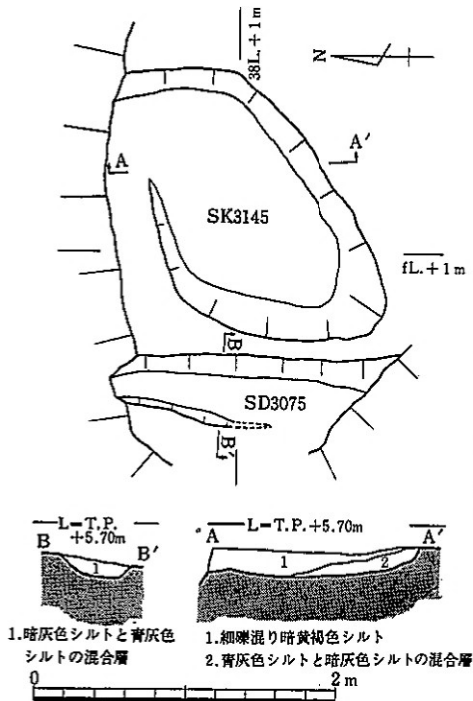
**SK3147** (第8図) e36区の地山面で検出された。南側をSD3081に切られ、西側はサブトレンチによって、それぞれ損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。全体の規模は明らかでないが、現状では、長軸1.85m以上、短軸1.45m以上、深さ0.05~0.10mをはかる。坑底には若干の凹凸がある。坑底の西側と東側で各1個のピットが検出された。いずれも径0.25m前後、深さ0.5m程をはかる。埋土は灰黒色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。第I様式の土器片少量が出土した。

**SK3148** (第8図) e36区の地山面で検出された。SK3147のすぐ北側に位置する。西側はSD3079に切られ損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ南北を示す。全体の規模は明らかでないが、現状では、長軸2.0m、短軸0.95m以上、深さ0.05mをはかる。坑底は平坦である。坑底中央東壁側と西寄りの部分で、各1個のピットが検出された。前者は径0.3m、深さ0.35m、後者は径0.2m、深さ0.2mをそれぞれはかる。埋土はSK3147とほぼ同様で

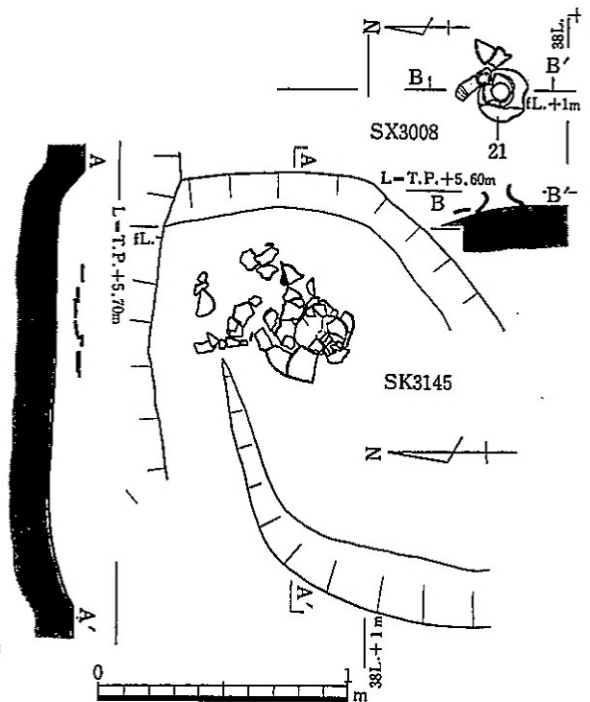
ある。第I様式の土器片が少量出土した。



第8図 SK3134・3139・3147・3148平面図・断面図 1/50



第9図 SK3145、SD3075平面図・断面図 1/50



第10図 SK3145、SX3008遺物出土状況図 1/50



**SK3149** (第11図) f 35区のSD3079溝底で検出された。SD3079との前後関係は明らかでない。平面形は半円形を呈し、径0.9m、深さ0.2mをはかる。埋土は暗青灰色粘土ブロック混りの灰青色極細砂層である。第I様式の土器片少量が出土した。

**SK3151** (第13図) e 35区の地山面で検出された。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-35°-Eを示す。長辺2.15~2.2m、短辺1.35~1.45m、深さ0.7mをはかる。坑底は平坦であるが、北から南へわずかに傾斜している。坑底北隅寄りでは土坑1個が、東隅寄りではピット1個が検出された。土坑は、平面形が楕円形を呈し、長径0.55m、短径0.45m、深さ0.1mを、ピットは、径0.15m、深さ0.05mをそれぞれはかる。埋土は黒灰色粘土・灰褐色粘土・青灰色シルト・黄褐色極細砂の混合層1層で、層をなしていない。第I様式の土器片及び石庖丁1点(206)が出土した。

**SK3152** (第11図) e・f 35区の地山面で検出された。SK3156、SD3079・3081・3104に南・北・西側を切られ損壊している。このため、本来の規模・形態は明らかでないが、南北3.5m以上、東西1.55m以上、深さ0.15~0.2mをはかる。坑底は平坦である。埋土は灰黒色シルトと青灰色シルトの混合層1層である。第I様式の土器片が出土した。

**SK3153** (第14図) e 34区の地山面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.15mをはかる。坑底は東西両壁側から中央に向かって緩く傾斜している。埋土は灰黒色粘土層、灰黒色粘土と青灰色シルトの混合層の2層である。第I様式の土器片が出土した。

**SK3154** (第14図) e 34区の地山面で検出された。SK3153の南方約1mに位置する。平面形は不整形である。東壁南半の突出部分は、別個の遺構であった可能性が高いが、明らかにはできなかった。主軸方向はN-44°-Wを示す。長軸1.65m、短軸0.8m、深さ0.15m前後をはかる。坑底には若干の凹凸があり、中央部東寄りでは、径0.4m、深さ0.45mをはかるピットが1個検出された。埋土は、黄褐色シルト混り灰黒色粘土層、暗青灰色粘土層、青灰色シルトブロック混り暗青灰色粘土層の3層である。第I様式の土器片とともに大型蛤刃石斧、石錐などが出土した。

**SK3155** (第14図) e 34区の地山面で検出された。東側をSK3154に、西側をSK3157にそれぞれ切られ損壊している。平面形は不整形で、主軸方向はN-6°-Eを示す。長軸1.95m、短軸1.45m、深さ0.15m前後をはかる。坑底には若干の凹凸がある。西北隅で平面形が楕円形を呈するピット1個が検出された。長径0.3m、短径0.15m、深さ0.1mをはかる。埋土は暗青灰褐色シルト層、暗灰色シルトと暗青灰褐色シルトの混合層の2層で、上層の暗青灰褐色シルト層には炭化物の薄層が挟在する。第I様式の土器片が出土した。

**SK3156** (第11・12図) e・f 35区の地山面で検出された。西側はSD3104に切られ損壊している。平面形は長楕円形を呈し、主軸方向はN-53°-Wを示す。本来の規模は明らかでないが、長径2.6m以上、短径1.55m、深さ0.2m前後をはかる。坑底には若干の凹凸があり、また、東から西へ緩く傾斜している。SD3104と接する部分の坑底で2個の土坑が検出された。平

面形は2個とも楕円形を呈し、北側のそれは、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.25mを、南側のそれは、長径0.65m、短径0.4m、深さ0.2mをそれぞれはかる。埋土は褐灰色シルト層、青灰色シルトブロック混り黒青灰色粘土層、青灰色シルトと黒青灰色粘土の混合層の3層で、上層の褐灰色シルト層には多量の焼土・炭化物が混入していた。上層及び中層から、壺形土器(16)・甕形土器(17・18・19・20)等を含む第I様式の土器片や大型蛤刃石斧・石錐などが出土した。遺物の出土状態については、それらが多量の焼土や炭化物とともに出土したこと、(16)・(17)・(20)などの土器に、同一個体の土器片の拡散がみられること、各土器片の出土レベルが東から西へ緩くではあるが傾斜していること等が注意された。

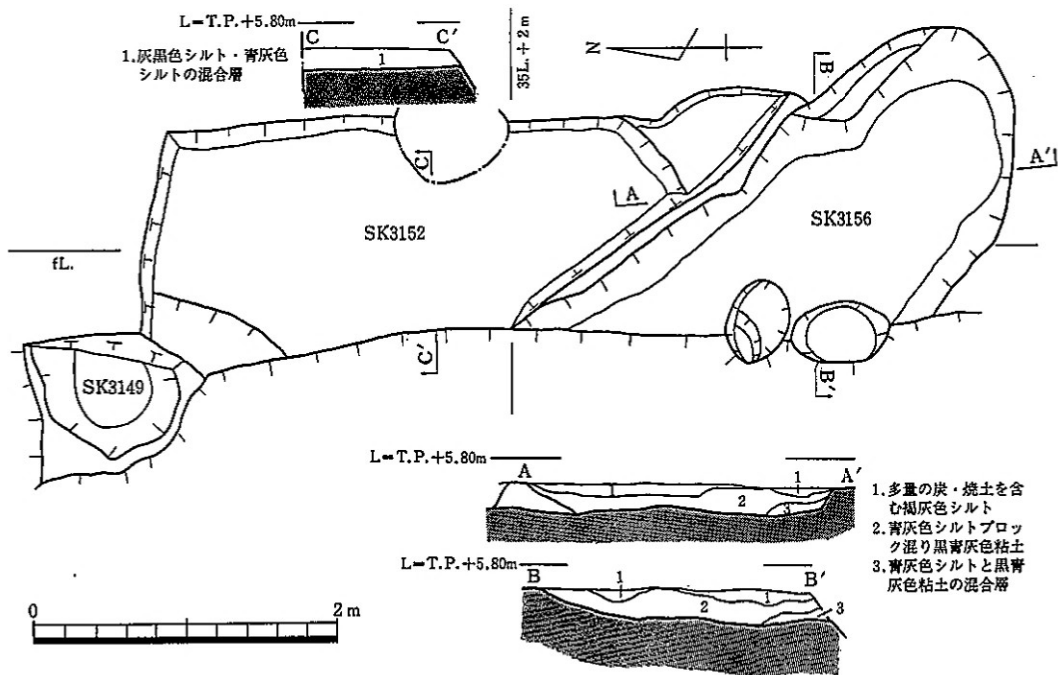
**S K3157** (第14図) e34区の地山面で検出された。S K3155の一部を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-75°-Eを示す。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.25mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は、褐灰色シルト層、褐灰色シルト・青灰色シルト・黄褐色極細砂の混合層の2層であるが、ともに焼土及び炭化物の混入が顕著であった。中央付近から、坑底から浮いた状態で、第I様式の甕形土器2個体(22・23)が、同時期の壺形土器・鉢形土器片とともに出土した。

**S K3158** (第14図) e34区の地山面で検出された。S K3157の南に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.05mをはかる。坑底は平坦である。中央付近から、坑底に密着した状態で、第I様式の壺形土器底部が出土した。また、同時期の土器細片やサヌカイト片も出土している。

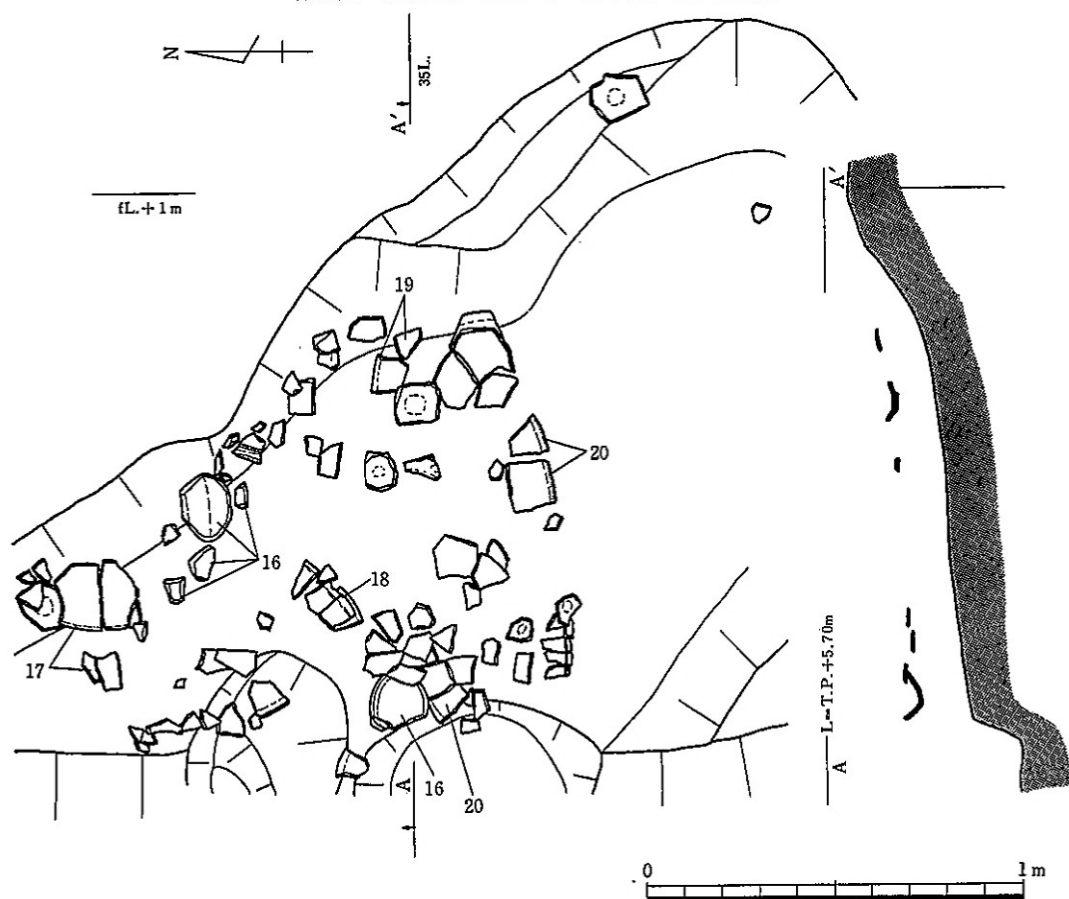
**S K3160** (第15図) e33区の地山面で検出された。南側はS K3161に切られ損壊している。また、東側は調査区外に続く。平面形は方形あるいは長方形を呈すると推定される。本来の規模は明らかにできないが、南北辺0.7m以上、東西辺0.85m以上、深さ0.15m前後をはかる。坑底には若干の凹凸がある。東北コーナー部分で、径0.25m、深さ0.2mのピット1個が検出された。埋土は黒褐色粘土層1層である。第I様式の土器片少量とサヌカイト片が出土した。

**S K3162** (第13図) e33区の地山面で検出された。北側はS K3161及びサブトレンチのために損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-20°-Eを示す。本来の規模は明らかでないが、長軸1.5m以上、短軸1.25m、深さ0.2mをはかる。坑底は平坦である。埋土は灰黒色シルトと青灰色シルトの混合層であるが、上層には焼土及び炭化物が混入している。第I様式の土器片が出土した。

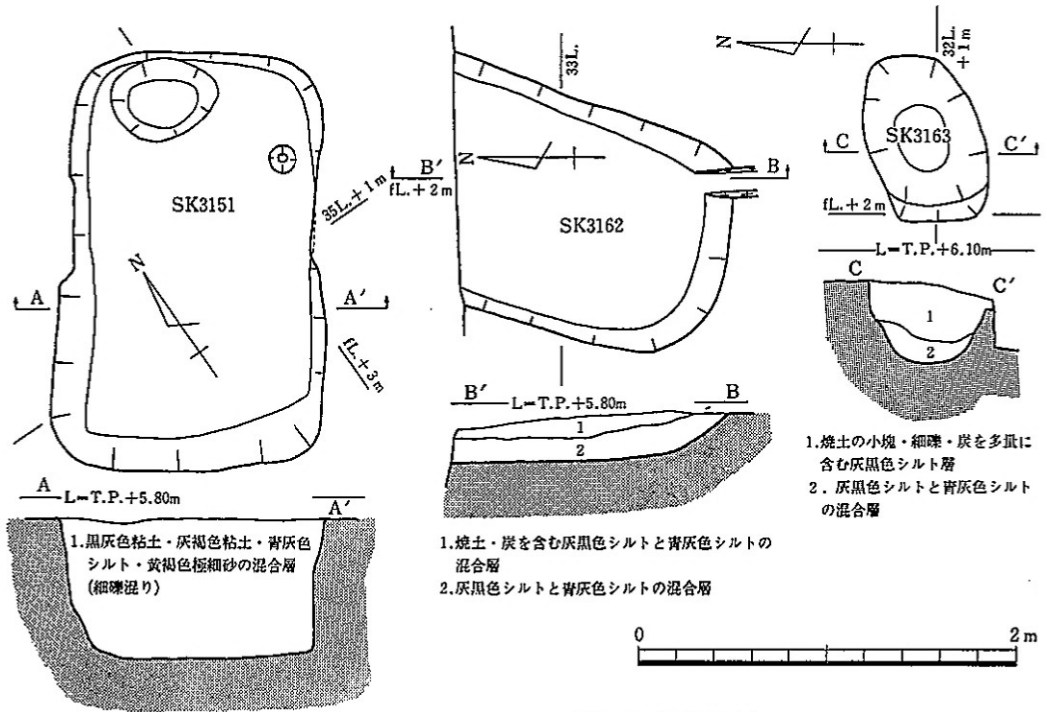
**S K3163** (第13図) e32区の地山面で検出された。掘込み面は暗灰色シルト層上面である。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-74°-Eを示す。長径0.9m、短径0.6m、深さ0.45mをはかる。坑底面は丸味をもっており、断面形はU字形に近い。西壁は2段掘り状をなす。埋土は灰黒色シルト層、灰黒色シルトと青灰色シルトの混合層の2層で、上層の灰黒色シルト層には多量の焼土ブロック・炭化物・細礫などの混入が認められた。第I様式の土器片が出土した。本土坑は、後述のS X3012の下から検出されたもので、S X3012と一連の遺構である可能性が強い。



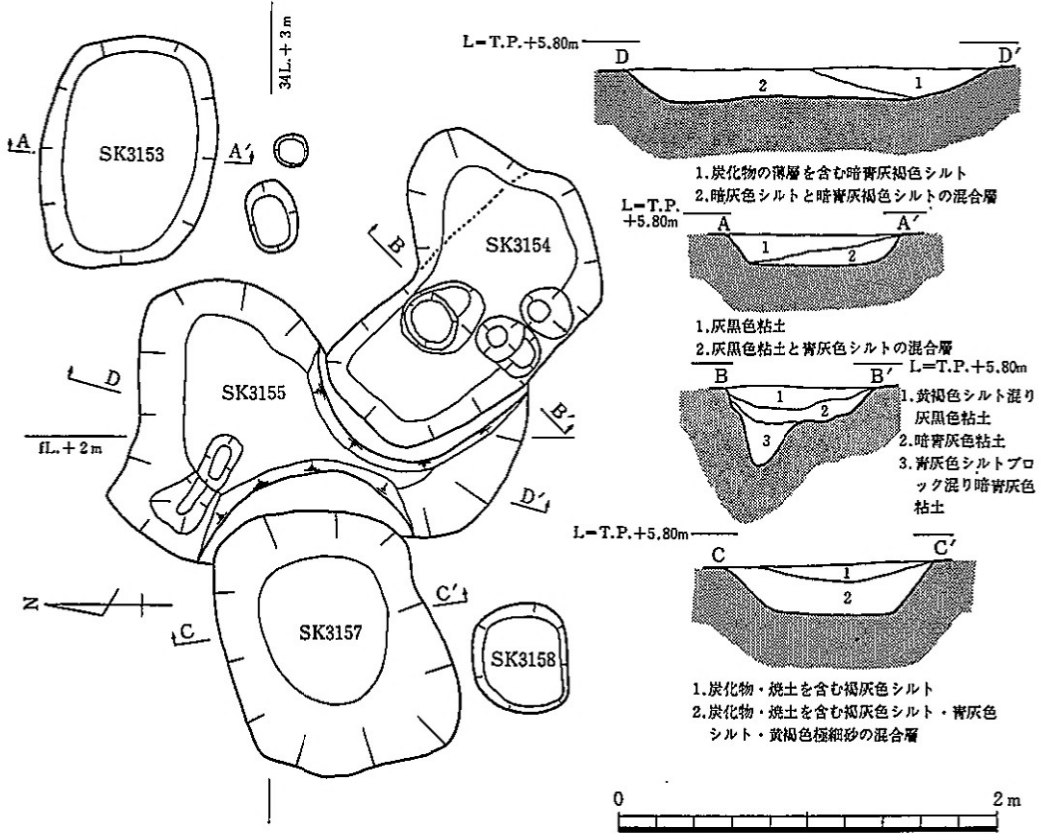
第11図 SK3149・3152・3156平面図・断面図 1/60



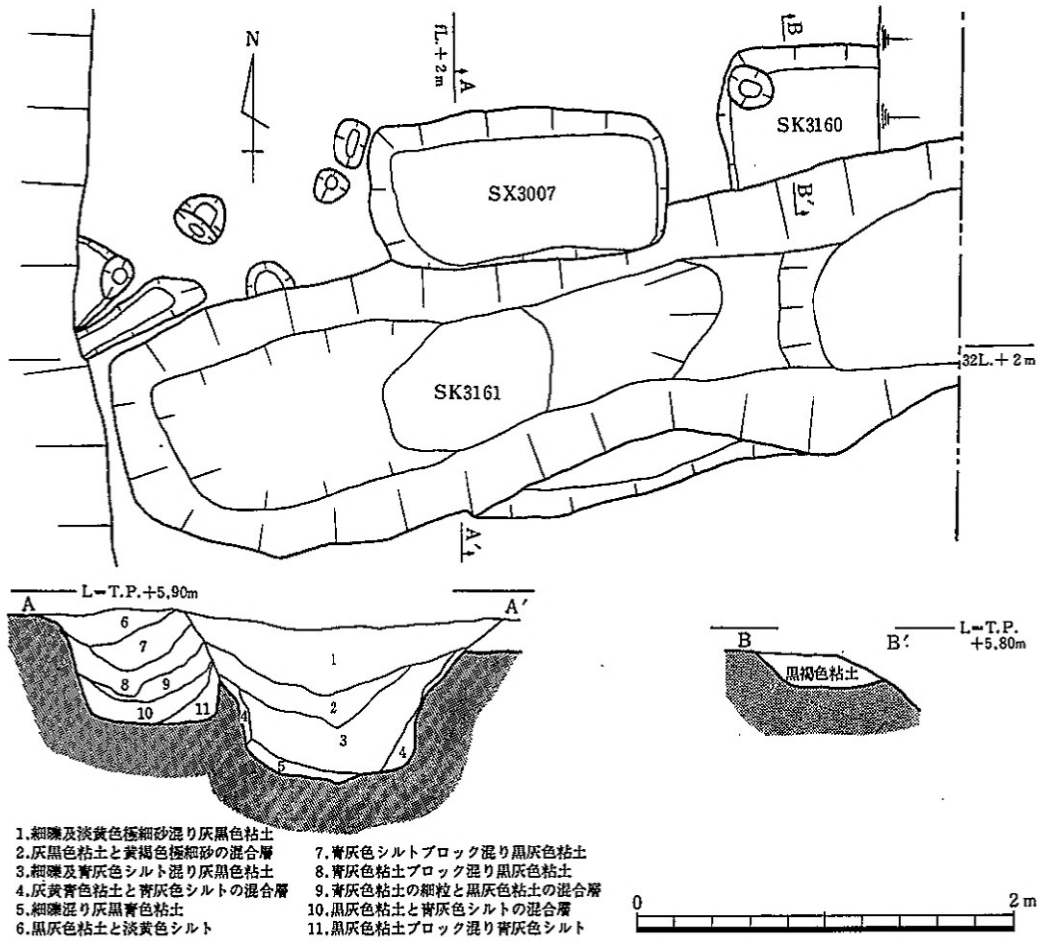
第12図 SK3156遺物出土状況図 1/60



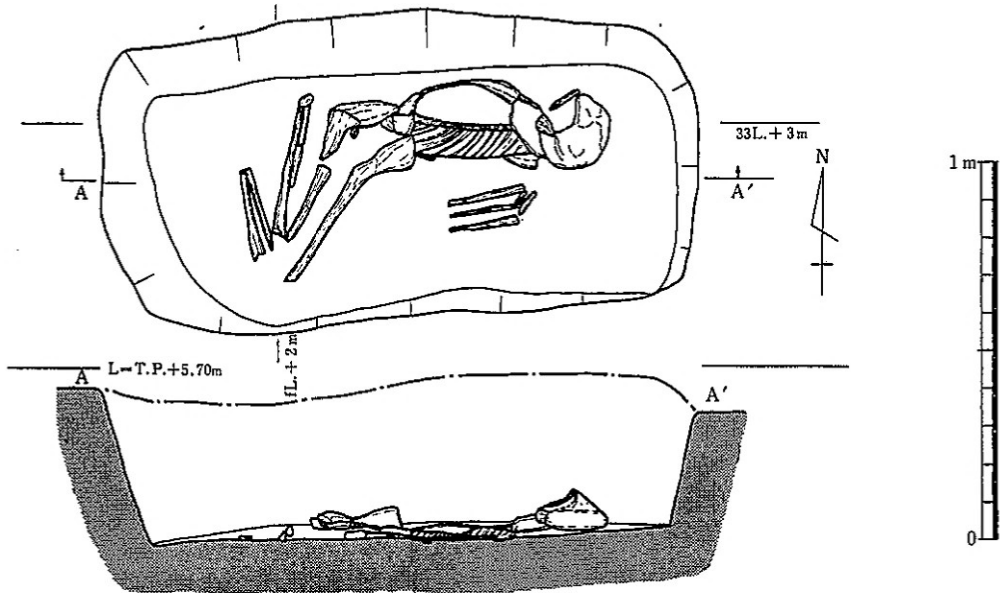
第13図 SK 3151・3162・3163平面図・断面図 1/40



第14図 SK 3153・3154・3155・3157平面図・断面図 1/40



第15図 SK3160・3161、SX3007平面図・断面図 1/40



第16図 SX3007人骨出土状況図 1/20

**S K3164** (第18図) e31区の地山面で検出された。北側はS D3081に切られ損壊している。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸1.3 m、短軸1.2 m以上、深さ0.15mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒灰色シルト層1層である。第I様式の土器片が出土した。

**S K3165** (第19図) e31区の暗灰色シルト層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ南北を示す。長軸0.95 m、短軸0.8 m、深さ0.1 mをはかる。坑底は平坦であるが、南から北に緩く傾斜している。中央はやや西寄りから、坑底に密着した状態で、用途不明磨製石器(235)、砥石(236・237)、磨石(225~234)が、第I様式新段階の土器細片とともに一括出土した。出土状態は以下のようであった。まず、最も大形の(235)が幅広のほうの端部を北にして南北に位置し、その西側に(236)が並列して位置する。さらに、(235)の幅の広いほうの端部に(237)と(229)・(225)・(230)が、(235)に直交する方向で乗っている。

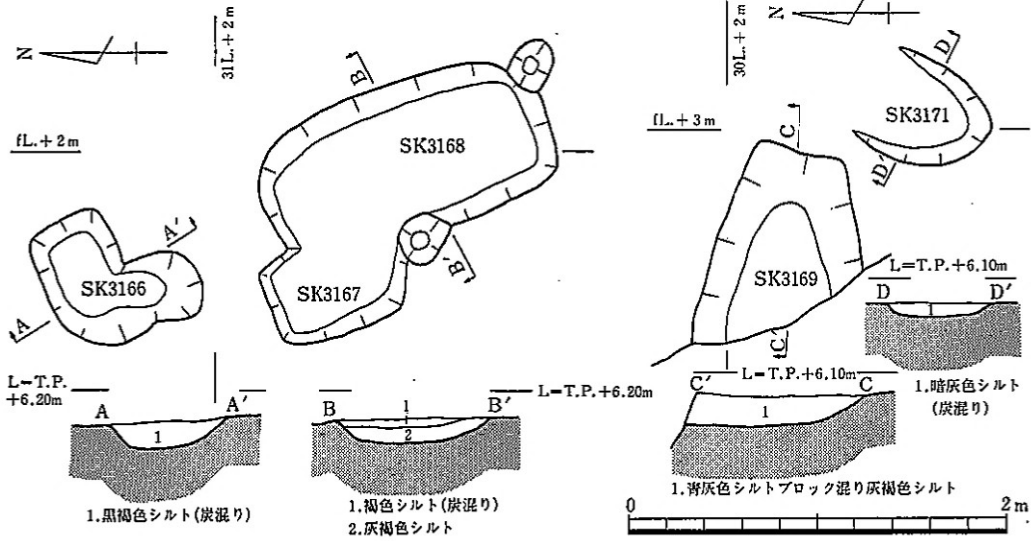
(236)の上には、北から順に(233)・(226)・(227)・(228)・(231)・(232)・(234)が並列するように乗っていた。出土状態からすれば、本来は(225)・(229)・(230)も、他の磨石と同様に、(235)の西側・(236)の上に並んでいた可能性が強く、砥石等とともに土坑内に安置されていたものと考えられる。

**S K3166** (第17図) e31区の暗灰色シルト層上面で検出された。平面形は、くの字形に屈曲する不整形形態を呈する。南北0.8m、東西0.75m、深さ0.15mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は炭化物混りの黒褐色シルト層1層である。第I様式の土器片が出土した。

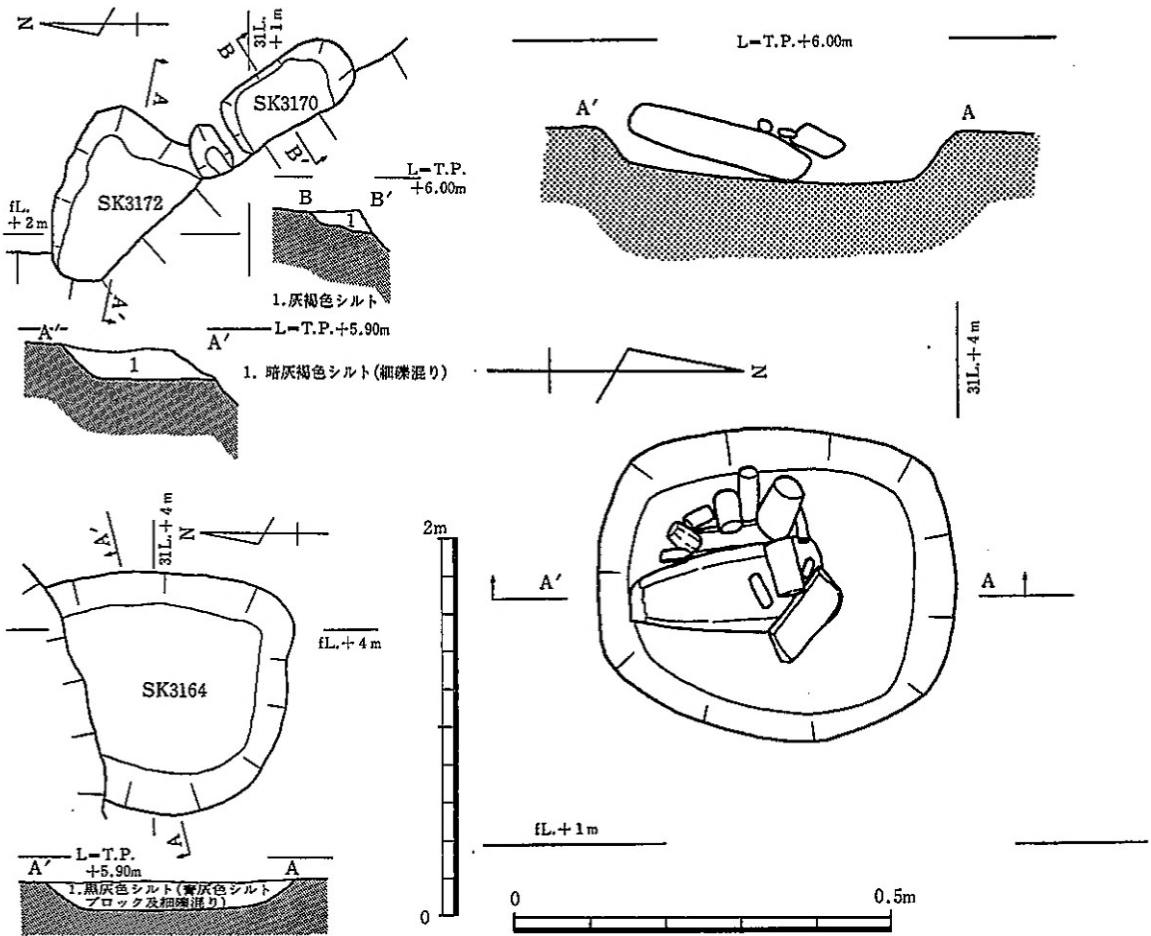
**S K3167・3168** (第17図) e31区の暗灰色シルト層上面で検出された。S K3166のすぐ南に位置する。ここでは2つの土坑として説明するが、埋土に顕著な違いが認められず本来1つの土坑であった可能性もある。S K3167・3168ともに平面形は隅丸長方形を呈する。主軸方向もN-25°-Wとほぼ一致している。3167は長軸0.75m、短軸0.5m、3168は長軸1.55m、短軸0.8mをそれぞれはかり、深さはともに0.1 m前後である。坑底はほぼ平坦である。埋土はともに褐色シルト層、灰褐色シルト層の2層であるが、上層の褐色シルト層には炭化物が混じる。3168からは第I様式新段階の壺形土器等が出土した。また3167からも同時期の土器の細片が出土している。

**S K3169** (第17図) e30区の暗灰色シルト層上面で検出された。西側はS D3104に切られ損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Wを示す。全体の規模は明らかでないが、長軸0.95m以上、短軸0.8m、深さ0.15m前後をはかる。坑底は平坦であるが、東から西へ緩く傾斜している。埋土は青灰色シルトブロック混り灰褐色シルト層1層である。遺物は出土しなかった。

**S K3170** (第18図) e30区の暗灰色シルト層上面で検出された。S K3169のすぐ南側に位置する。北側が消失しているが、平面形は楕円形を呈していたと推定される。主軸方向はN-28°-Eを示す。本来の規模は明らかでないが、長径0.7 m以上、短径0.55 m、深さ0.05~0.1 mをはかる。埋土は炭化物を含む黒灰色シルト層1層である。遺物は出土しなかった。



第17図 S K 3166・3167・3168・3169・3171平面図・断面図 1/40



第18図 S K 3164・3170・3172平面図・断面図 1/40

第19図 S K 3165遺物出土状況図 1/40

**S K3171** (第17図) e30区の地山面で検出された。西側はS D3104に切られ損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-34°-Wを示す。全体の規模は明らかでないが、長軸0.75m、短軸0.35m以上、深さ0.1m前後をはかる。坑底には若干の凹凸がある。埋土は暗灰色シルト層1層である。第I様式の土器片が出土した。

**S K3172** (第18図) e30区の地山面で検出された。S K3171のすぐ北側に位置する。西側はS D3104に切られ損壊している。本来の規模・形態は明らかでないが、東西0.8m以上、南北0.75m以上、深さ0.15~0.2mをはかる。坑底は平坦である。埋土は細礫混りの暗灰褐色シルト層1層である。第I様式の土器片が出土した。

**S K3193** (第6図、付図4) h2区の地山面で検出された。東辺の一部を検出したにすぎないため、全体の規模・形態は明らかでない。南北1.3m以上、東西0.6m以上、深さ0.3mをはかる。坑底には若干の凹凸がある。埋土は暗灰色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。第I様式の土器片が出土した。

#### 溝

**S D3075** (第9図) f38区の地山面で検出された南北溝である。北側はS D3074に、南側はS D3076に、それぞれ切られている。また、西壁の南半部もS D3076による削平を受けて消失している。検出全長は1.7mにすぎない。上部幅0.3~0.5m、底部幅0.15~0.25m、深さ0.25~0.3mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰色シルトと青灰色シルトの混合層1層である。第I様式の土器片が出土した。

**S D3079** (第5・20図) f36区からe39区にかけての地山面で検出された。北東から南西に緩く屈曲して走る。北東側はe39区で調査区外に去り、南西側はS D3104に切られ消滅している。S D3074・3076・3077・3081の各溝に寸断され、さらに、f36・37区では西壁がS D3080による削平を受けている。検出全長は17.0mをはかる。後出の溝によって寸断され、あるいは削平されているところが多く、本来の規模を明らかにできる部分はない。現状では、上部幅1.1~1.5m、底部幅0.4~0.7m、深さは平均0.5m程をはかる。断面形は逆台形を呈し、溝底はわずかに南西側に傾斜している。埋土は、5ないし6層に分かれるが、基本的には上層に黄褐色粘土ブロック混りの青褐色シルト層、下層に青灰色粘土と極細砂の混合層という2層に大別して理解することも可能である。(1)~(15)までの壺形土器・甕形土器をはじめとする多数の第I様式中段階及び新段階の土器と、(図版101・102)等の獣骨が出土した。出土土器の様相からすれば、本溝の埋設時期にはある程度の時間幅を考慮する必要も考えられるが、今回の調査では、各層位と出土土器の対応関係については明らかにできなかった。

**S D3080** (第5・20図) f36・37区の地山面で検出された。S D3079の一部を切り、それとはほぼ平行して走るが、37ラインプラス1m付近で終わっている。南側はS D3081・3104に切られ消滅している。また、北壁・西壁はS D3077・3104による削平を受けている。検出全長は4.7mをはかる。多くの削平を受けているため、本来の規模は明らかでないが、現状では、上部幅1.0~



1.6m、底部幅0.2～0.6mをはかる。深さは東側では最深部で0.4m、西側では0.2m程度である。断面形は逆台形を呈し、溝底は北端に向って緩く傾斜している。埋土は黄褐色極細砂の小ブロック混り暗褐色シルト層、黄褐色極細砂混り青灰色粘質シルト層、青褐色粘土・青灰色シルト・黄褐色極細砂の混合層の3層で、各層には細礫及び炭化物が混入していた。第Ⅰ様式の土器片が出土した。

**SD3082** (第20図) e31区の地山面で検出された東西溝である。掘込み面は暗灰色シルト層上面である。東側は調査区外に続き、西側はSD3104に切られ消滅している。検出全長4.5m。上部幅0.9～1.1m、底部幅0.15～0.35m、深さ0.7m前後をはかる。断面形はV字形を呈する。埋土は7層に分かれ、上層には細礫混りの灰黒褐色シルト層、灰褐色極細砂ブロック及び細礫混りの黒灰色粘土層が、それ以下には黒灰色粘土・暗灰色シルト・青灰色シルト・灰色または黄褐色極細砂・灰色粗砂等の各混合層が堆積していた。第Ⅰ様式の土器片が出土した。また、東端近くの溝底から小児の頭大の河原石2個が並んで検出された。

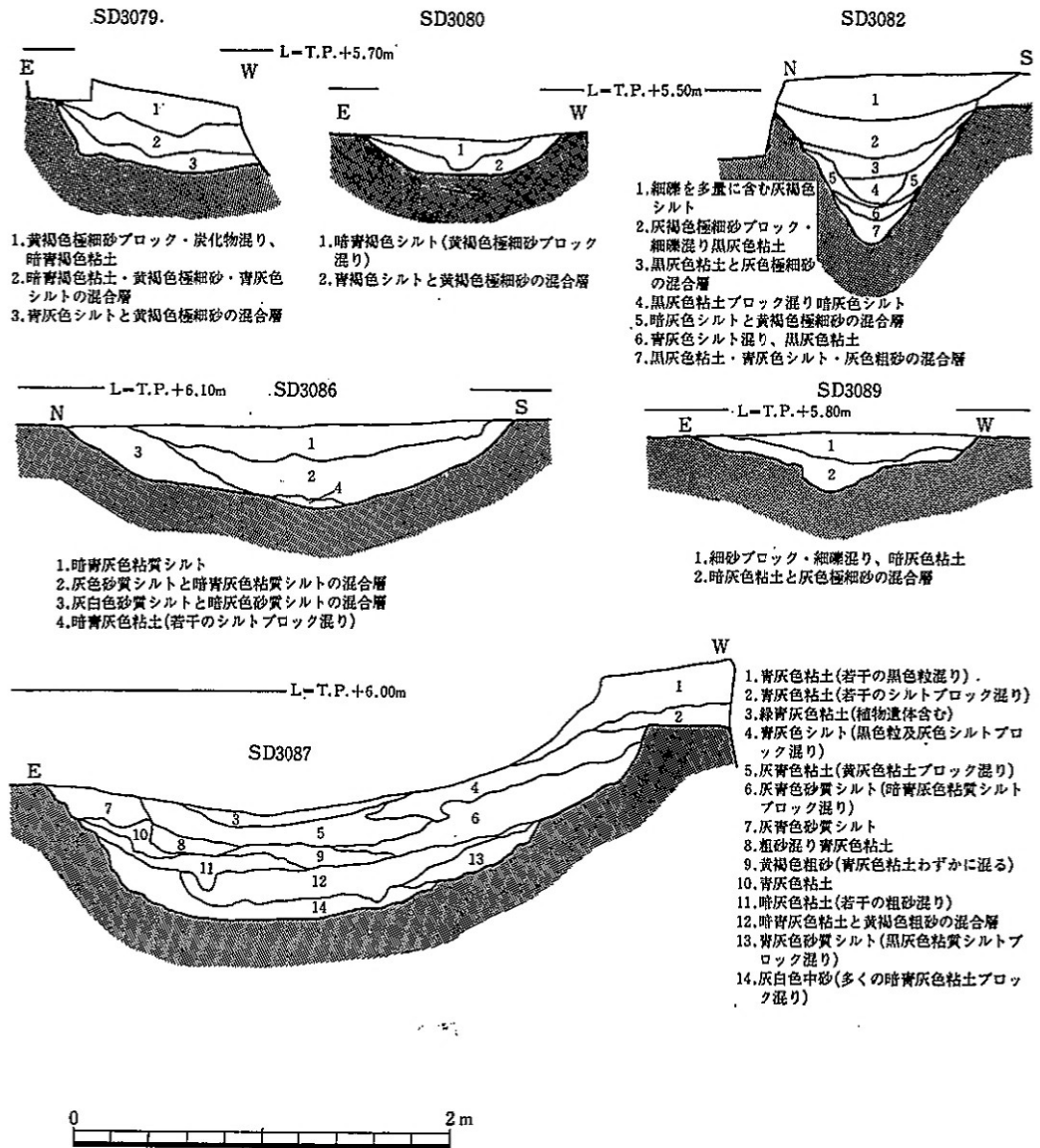
**SD3086** (第20図) g10・11区の地山面で検出された。西北から南東に走り、西側は調査区外に続いている。東側はSD3087と切合っていた可能性が強いが、SD3087付近の地山面が、NR9002によって削平されているため明らかにできなかった。ただし溝底の状況からすると、SD3087と切合うあたりで、本来終っていた可能性も考えられる。検出全長5.5m。上部幅2.0～2.5m、底部幅0.3～0.5m、深さ0.4m前後をはかる。断面形は幅の広いU字形を呈するが、南・北両壁とも一部2段掘り状となる。溝底東側はgライン付近で丸く納まっている。埋土は4層に分かれ、上層には暗灰色粘質シルト層が、それ以下には暗青灰色粘質シルト及び暗灰色砂質シルトと灰白色ないし灰色砂質シルトの混合層が堆積しており、最下層に薄くわずかにシルトブロックを含む暗青灰色粘土層が認められた。第Ⅰ様式の土器片少量が出土した。

**SD3087** (第20図) g8区からf10区にかけての地山面で検出された。北北東から南南西に緩く屈曲して走る。上部はNR9002による削平を受けており、北端はNR9002の深みによって削平され消失している。また南端はSX3009に致って終っている。検出全長は14.5mに及ぶ。本来の規模は明らかでないが、上部幅2.5～3.0m、底部幅0.5m前後をはかる。ただし、9ラインプラス3m付近では、西側が大きくえぐられているために、底部幅は最大1.5mに達する。深さは地山面の残りの良い西壁側で平均1.1mをはかる。断面形はU字形を呈すると考えられるが、溝底が地山層下の砂層に達しているため、溝底の形態が判然としない部分も多い。東西両壁ともに部分的に2段掘り状をなす。埋土は8層に分かれるが、灰青色シルト層を主とする上層、暗青灰色粘土層を主とする中層、暗青灰色粘土ブロックを含む灰白色中砂層からなる下層の3つに大別できる。中層にも粗砂層の挟在が認められ、全体に水流による堆積の痕跡を残している。(27)をはじめとする多数の第Ⅰ様式新段階の土器片とともに、若干の櫛描文土器の細片が出土した。

**SD3089** (第20図) f7区からf9区にかけての地山面で検出された。7区ではほぼ南北方向に、8・9区では東北から西南方向に走る。北側は9区で調査区外に続き、南側は7ラインプ

ラス1m付近で終わっている。また、8ラインでは近世の井戸による破壊を受けており、一部形態の不明確なところもある。検出全長は10.5mをはかる。上部幅1.4~1.6m、底部幅0.2~0.3m、深さ0.25m前後をはかる。東西両壁とも明瞭な2段掘りとなっており、中段に幅0.2~0.4mのテラス状の平坦面がある。埋土は細砂ブロック及び細礫混りの暗灰色粘土層、暗灰色粘土と灰色極細砂の混合層の2層である。第I様式の土器片が出土した。

**SD3091** (第5図) g・h1区の地山面で検出された。東北から南西に走り、南側は調査区外に続き、北側は試掘孔によって損壊されている。検出全長5m。上部幅1.2~1.5m、底部幅0.3~0.4m、深さ0.4m程をはかる。2ラインのサブトレンチから北側では西壁が、南側では



第20図 前期溝断面図 1/40

東壁がそれぞれ明瞭な2段掘りとなっている。このため、北側では幅0.4m前後、南側では幅0.2m前後のテラス状の平坦面がつくられている。埋土は、暗灰色粘土・灰色粗砂・青灰色シルトの混合層、暗灰色粘土層の2層である。第Ⅰ様式の土器片が出土した。

**SD3097** (第87図) f-6区からg-7区にかけての地山面で検出された。北東から南西に走り、北東側は調査区外に続き、南西側はSD3098・3100に切られている。SD3100以西では検出されなかった。検出全長8.9m。上部幅1.9~2.2m、底部幅0.6~0.7m、深さ0.7m前後をはかる。断面形は逆台形を呈するが、一部2段掘り状をなすところもある。埋土は暗灰色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。第Ⅰ様式の土器片が出土した。

#### その他の遺構

その他の遺構としたものは、土坑墓(SX3007)、土器群(SX3008・3011・3012)、沼状遺構(SX3009)の5つである。

**SX3007** (第15・16図) e32区の地山面で検出された。南壁の上部はSK3161によって削平されている。墓坑の平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸1.58m、短軸0.82m、深さ0.3~0.35mをはかるが、南壁はSK3161による削平のために0.15~0.2mを残すにすぎない。坑壁は垂直に近い。坑底は平坦であるが、東から西にわずかに傾斜している。坑底中央のやや北寄りから、頭を東に向けた仰臥屈葬の人骨1体が検出された。埋土は黒灰色粘土であるが、混入している土質の違いによって6層に分かれる。埋土中から第Ⅰ様式の土器片が出土した。

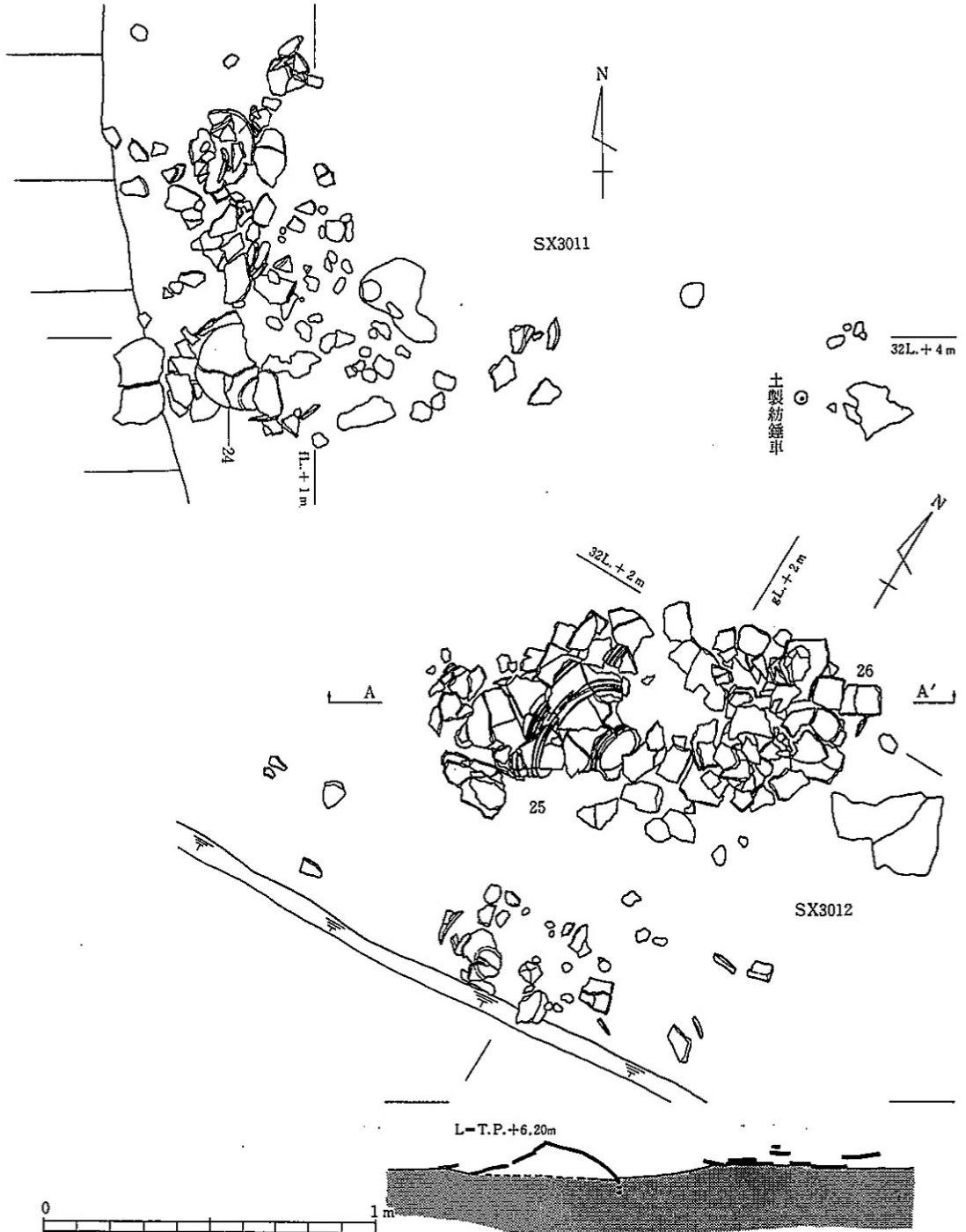
**SX3008** (第10図) e38区の地山層上面で検出された。SK3145の東南方約1mに位置する。第Ⅰ様式新段階の壺形土器口頸部(21)が口縁を下にして出土し、その横から同時期と考えられる片口鉢形土器が出土した。

**SX3011** (第21図) e32区の暗灰色シルト層上面で検出された。東西・南北とも径2.5m程の拡がりをもつ。壺形土器・鉢形土器・甕形土器等の第Ⅰ様式新段階の土器が、焼土ブロック・炭・灰等とともに、一括出土した。

**SX3012** (第21図) SX3011の南方約2mに位置する。検出面はSX3011と同一面である。第Ⅰ様式新段階の壺形土器(25)と甕形土器(26)が、東西に並んで横に潰れた状態で検出された。東側に(26)が、西側に(25)が位置し、(25)は口頸部を東に向け、一部(26)の上に重なっていた。土器の周辺からは、多数の焼土ブロック・炭・灰等が検出された。SX3011・3012については、本来、住居跡等の遺構であった可能性が強いが、確認できなかった。

**SX3009** (付図4) g6・7区の地山面で検出された。SD3087の南端にあたり、これと重複する部分があるが、相互の切合いは認められない。4ラインから10ラインにかけての地山面は全体に西に向って下っており、SD3087を通過して東北から流入した流れが、沼状の溜りを形成していたものと考えられる。西側の一部が調査区外に続いたため、全体の規模は明らかでないが、東西5.5m以上、南北6.3mをはかり、平面形は不整形である。深さは0.6m前後をはかる。底面

は浅い摺鉢状を呈するが、凹凸が著しい。また、縁辺部でも径0.6~1.0m程で、平面形が楕円形あるいは不整形の落込みがいくつか検出されたが、すべて本遺構と一連のものと考えられた。埋土は暗青灰色粘土層、粘土ブロック混り黄褐色極細砂層の2層である。第I様式新段階の土器片が出土した。(高島)



第21図 S X 3011・3012遺物出土状況図 1/20

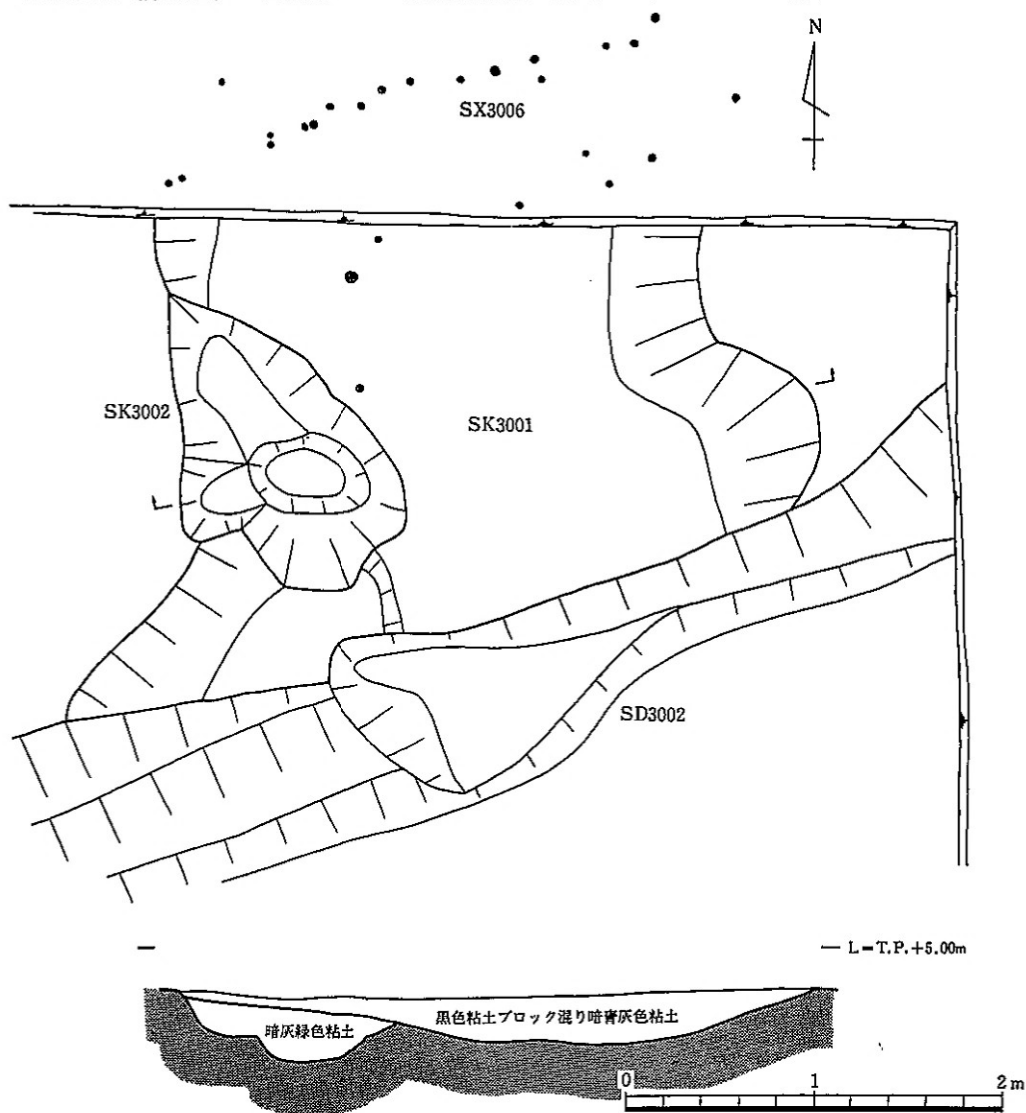
### 第3節 弥生時代中期

#### 第1項 A・Bトレンチ

#### 土坑

**SK3001** (第22図) Ad09区のⅡ層(青灰色粘土層)上面で検出した。東西幅3.5mを測るが、北側と南側はそれぞれSD3001・3002によって削られており、全体の形状は不明である。検出面からの深さは約0.25mで断面形は浅いU字形を呈し、底面には凹凸が認められた。覆土は地山の黒色粘土ブロックを含む暗青灰色粘土で、Ⅲ様式からⅣ様式にかけての土器片が出土したが量は多くない。

**SK3002** (第22図) 上記SK3001西側肩付近で検出した。SK3001に先行する土坑である。



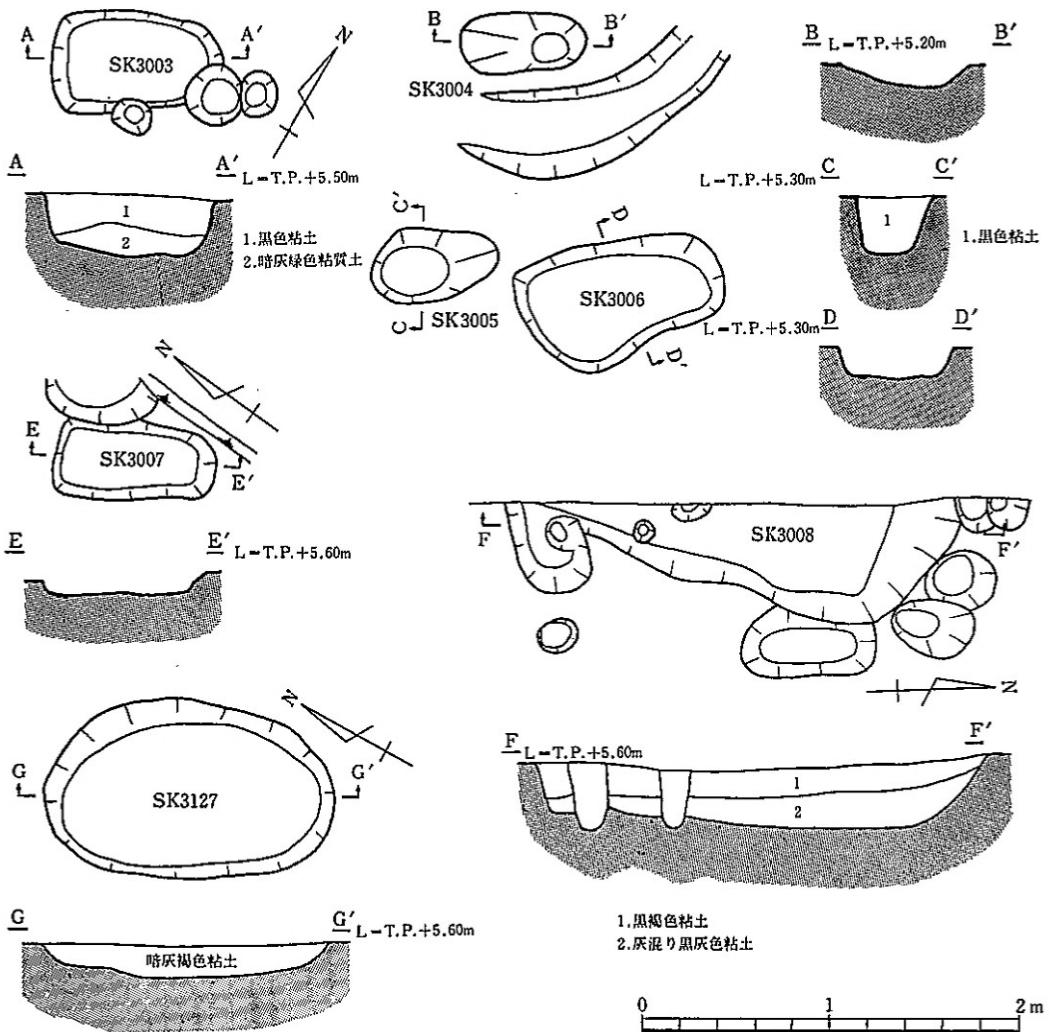
第22図 SK3001・3002、SX3006平面図・断面図 1/40

東西1.2m 南北1.5m の不整形な平面形をもつ。検出面からの深さは約0.3mで、中央がややくぼんだ断面形を有する。覆土は暗灰緑色粘土で、Ⅲ様式からⅣ様式にかけての土器片が少量出土した。

**SK3003** (第23図) B d 21区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.9×0.5mの長円形で断面はU字形を呈する。覆土は黒色粘土と暗灰緑色粘質土の2層に分けられるが、時期を決定できるような遺物は出土しなかった。掘り込み面から判断して中期後半と推定される。

**SK3008** (第23図) B e・f 18区のⅧ f 層上面で検出した。南北約2m、東西約0.6mを検出したが、西側は調査区外に出ているため全体の形状は不明である。検出面からの深さは約0.25mで浅い舟底形の断面形を有し、底面にはやや凹凸がある。炭・灰等を含む黒色粘土を覆土とし、Ⅲ～Ⅳ様式の土器片が出土した。

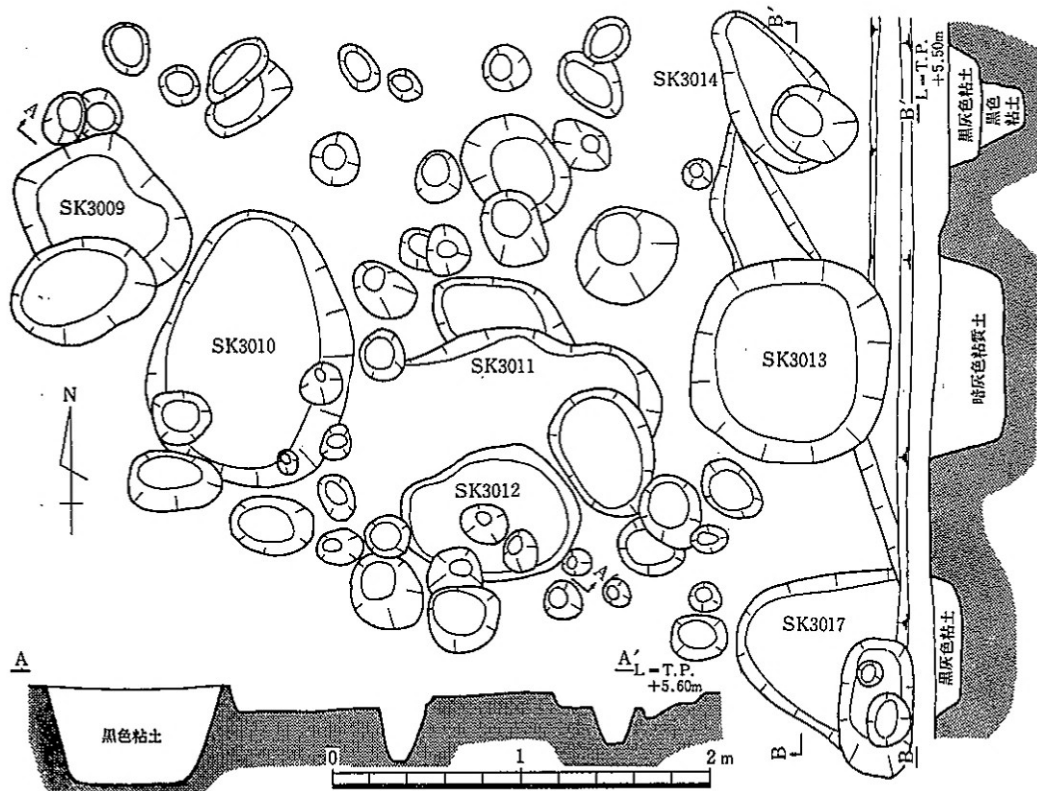
**SK3009** (第24図) B e 7～18区Ⅷ f 層上面で検出した。一部を他の遺構に切られている



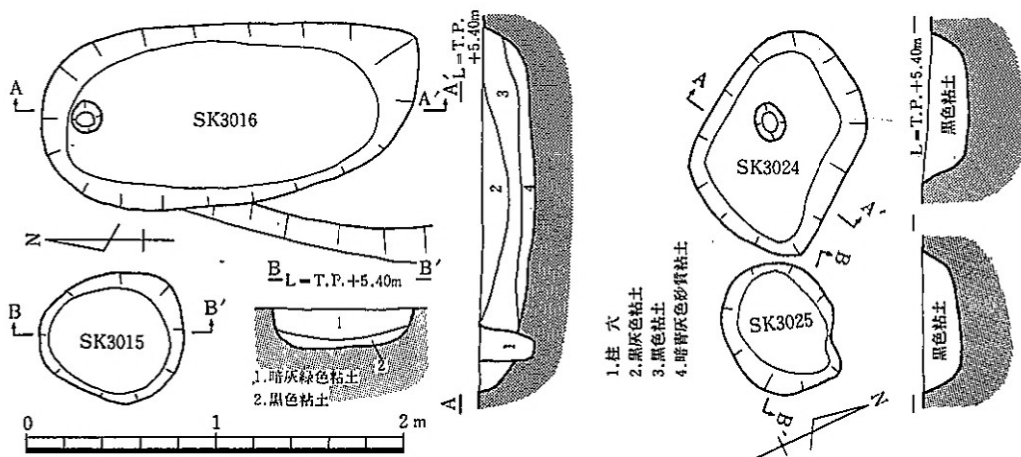
第23図 SK3003・3004・3005・3006・3007・3008・3127平面図・断面図 1/40

が、0.7×0.9mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.5mで底面のほぼ平らなU字形の断面形を有する。覆土はⅧ層の小ブロックを含む黒色粘土で時期を決定できるような遺物は出土しなかったが、掘り込み面から見て中期後半であろう。

**SK3015** (第25図) B d 17区Ⅷf層上面で検出した。平面形は直径約0.7mのほぼ円形で、検出面からの深さは約0.25mを測り、断面形は浅いU字形である。覆土は暗灰緑色粘土を主と



第24図 SK3009・3010・3011・3012・3013・3014・3017平面図・断面図 1/40



第25図 SK3015・3016・3024・3025平面図・断面図 1/40

し、底面に薄く黒色粘土が堆積する。中期後半の土器片が出土した。

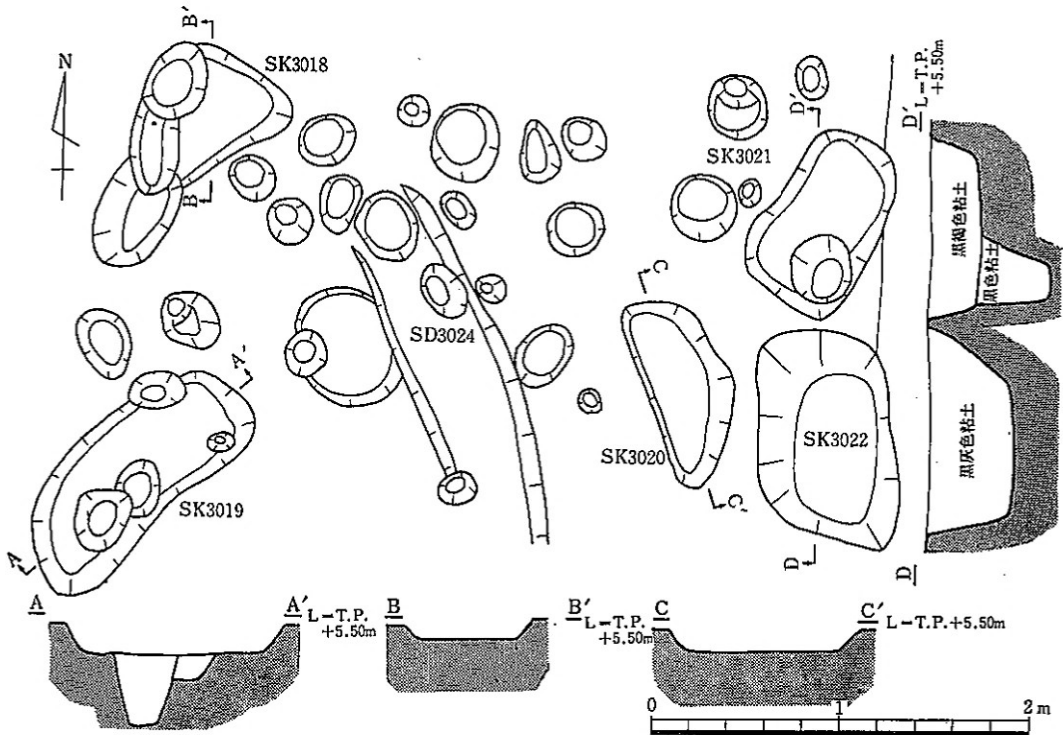
**SK3018** (第26図) B e 17区Ⅷf層上面で検出した。西側を他の遺構に切られているが、一辺約0.7mの隅丸三角形を呈する。検出面からの深さは約0.1mで底面の平らな舟底状の断面を有する。Ⅷ層の小ブロックを含む黒色粘土を埋土とし、中期後半の土器・石鏃が出土した。

**SK3020** (第26図) B e 16~17区Ⅷf層上面で検出した。0.5×1.0mの不整合長円形を呈する。検出面からの深さは約0.2mで底の平らな舟底状の断面形を有する。覆土はⅧ層のブロックを含む黒色粘土でⅢ~Ⅳ様式の土器片が出土した。

**SK3021** (付図2) B e 17区Ⅷf層上面で検出した。0.6×0.9mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.3mで底の平らな舟底状の断面形を有する。覆土はⅧ層のブロックを含む黒灰色粘土で、中期後半の土器片が少量出土した。

**SK3022** (第26図) B e 16~17区Ⅷf層上面で検出した。平面形は0.7×1.1mの隅丸長方形で検出面からの深さは約0.5mを測り、底の平らなU字形の断面形を有する。覆土はⅧ層のブロックを含む黒灰色粘土でⅢ~Ⅳ様式の土器が少量出土した。

**SK3023** (第27図) B e 16区Ⅷf層上面で検出した。中期の壺棺墓SX3001を切っている。平面形は1.1×1.0mの不整形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は舟底形である。黒色粘土を覆土とし、Ⅲ~Ⅳ様式土器の良好な一括資料が多量に出土した。土器の総量は整理箱6箱に及ぶ。完形に復元可能な土器が少いことからこの土坑は、ごみ捨て穴的な性格をもつものと考えられる。



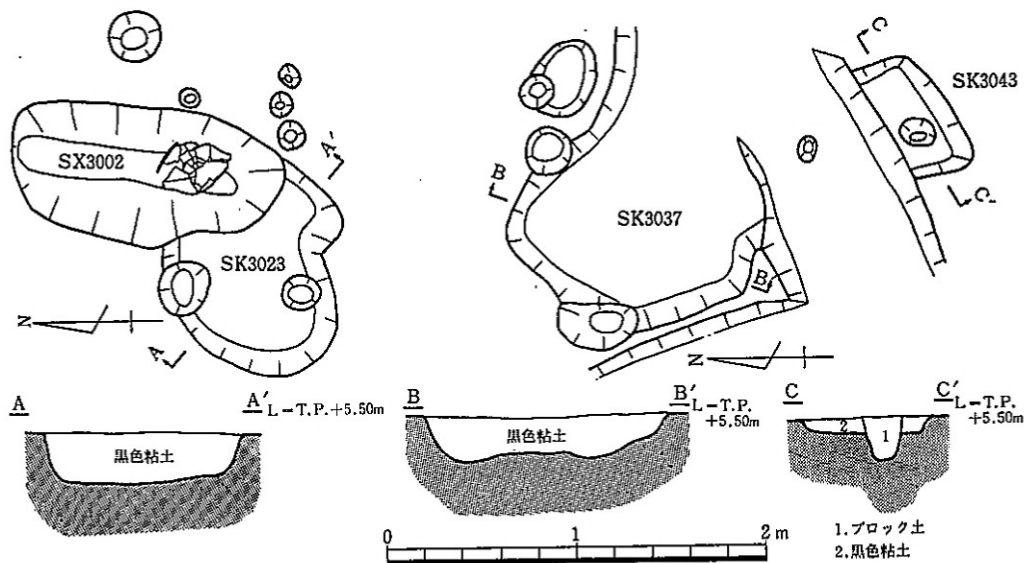
第26図 SK3018・3019・3020・3022、SD3024平面図・断面図 1/40



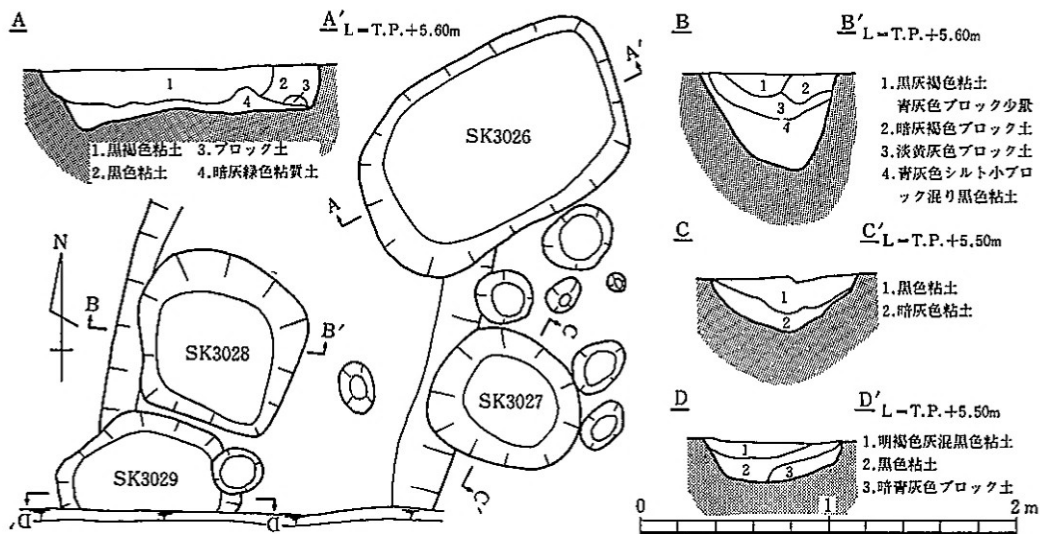
**SK3024** (第25図) B d 16区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.8×1.1mの隅丸長方形で、浅いU字形の断面形を呈する。検出面からの深さは約0.2mである。黒色粘土を覆土とし、Ⅱ様式からⅢ様式の土器片が出土した。

**SK3026** (第28図) B d 16区Ⅷ f 層上面で検出した。西半部の肩は後期の溝S D 3021Bによって削られている。平面形は1.0×1.5mの長円形に近い隅丸長方形で、底面にやや凹凸のある舟底形の断面形を有する。検出面からの深さは約0.3mを測る。覆土はほぼ4層に分層でき、中層及び下層からはⅢ～Ⅳ様式の土器片が比較的集中して出土した。Ⅴ様式の土器片もわずかに混在するがこれは、S D 3021Bからの混入と考えられる。

**SK3027** (第28図) B d 16区Ⅷ f 層上面で検出した。西側の肩をS D 3021Bによって削られ



第27図 SK 3023・3037・3043平面図・断面図 1/40

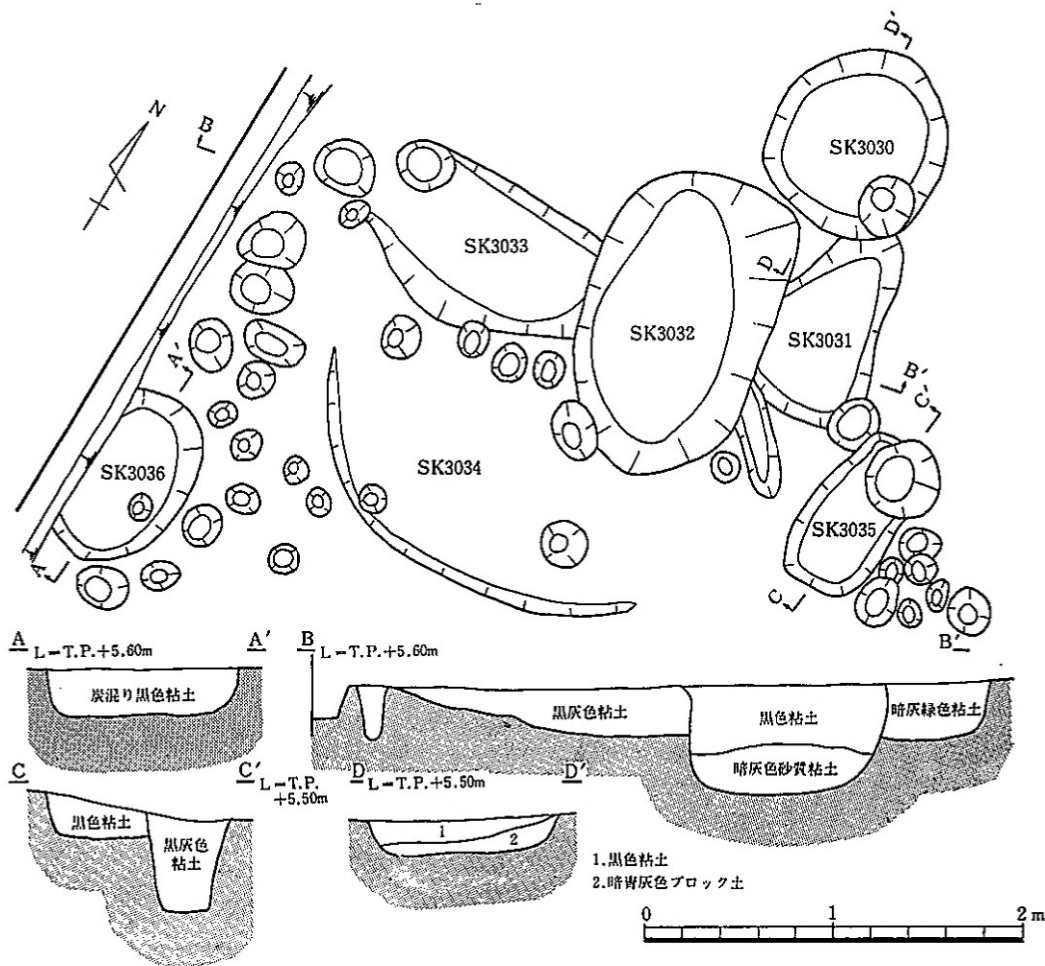


第28図 SK 3026・3027・3028・3029平面図・断面図 1/40

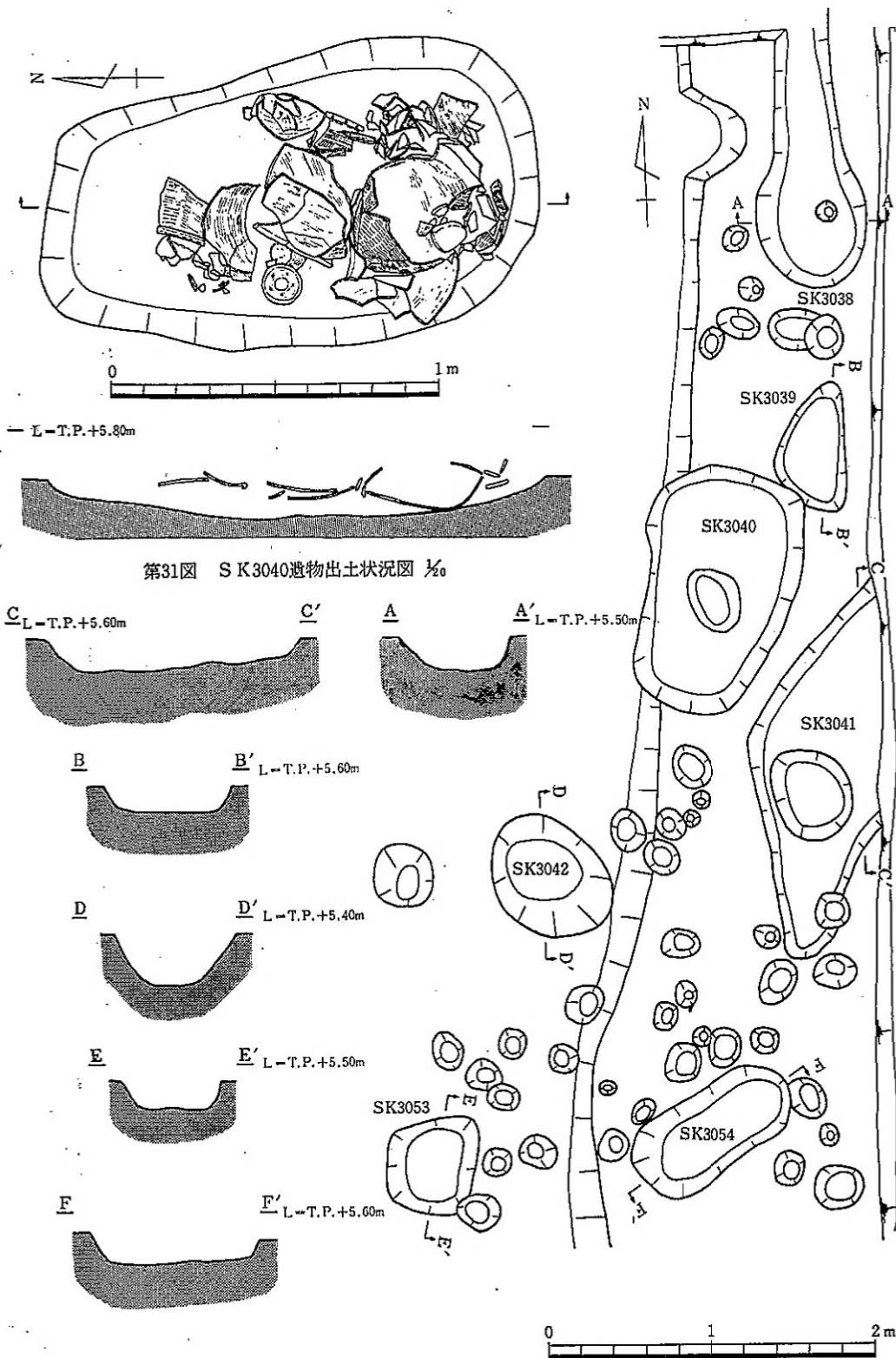
ている。平面図は0.8×0.7mのほぼ円形で検出面からの深さは0.5mを測り、U字形の断面形を有する。覆土はほぼ2層に分層でき、各層から中期の土器片が出土したが、下層にはⅡ様式の土器片が多くみられた。

**SK3029** (第28図) B d 16区のS D 3021 B西肩部で検出した。本来の掘り込み面はⅧ f 層上面である。南半部をサブトレンチで削ってしまっているが、平面形な直径約1.0mの円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは約0.2mで底面の平らな舟底状の断面形を有する。覆土はほぼ3層に分層でき、各層からⅢ様式の土器片が出土した。わずかにⅤ様式の土器片が混在するがこれは、S D 3021 Bからの混入と考えられる。

**SK3031** (第29図) B e 16区Ⅷ f 層上面で検出した。中期の土坑SK3032と後期の土坑SK3030によって切られているため全体の形状は不明であるが約1.1×0.7mの三角形に近い長円形の平面形を呈するものと思われる。検出面からの深さは0.3mを測り、浅いU字形の断面形を有する。覆土は暗灰緑色粘土で時期を示すような遺物は出土しなかったが、切り合い関係から中期と判断される。

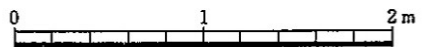
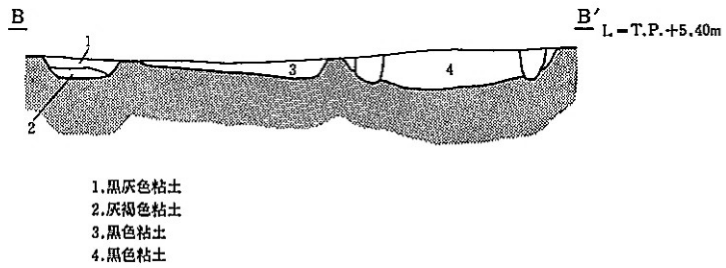
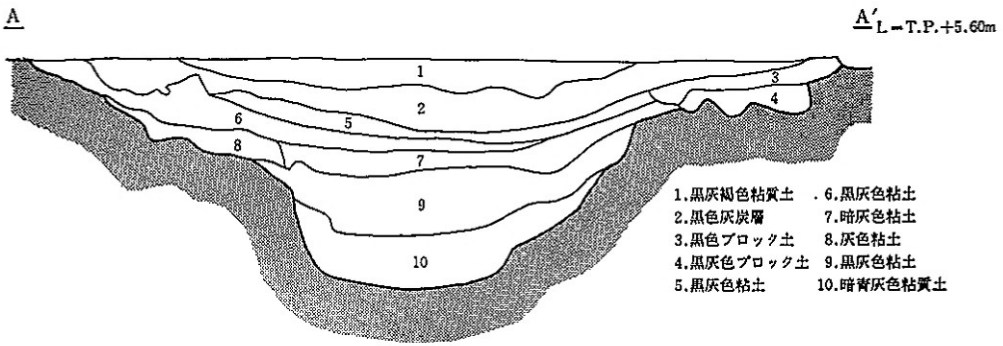
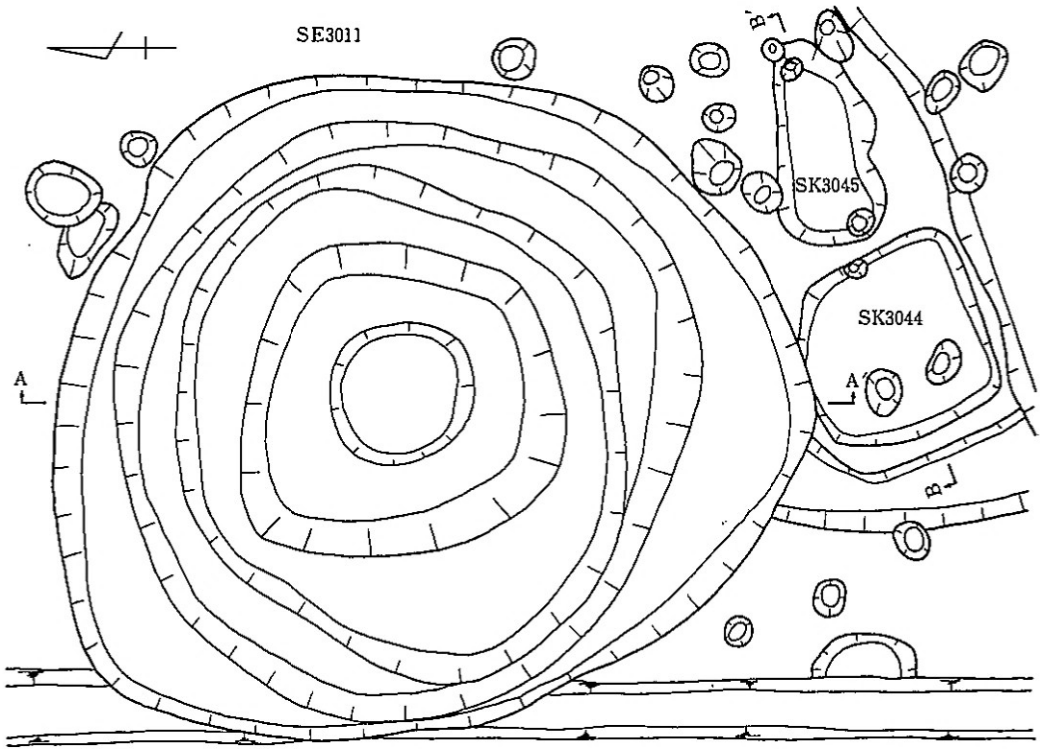


第29図 SK 3030・3031・3032・3033・3034・3035・3036平面図・断面図 1/40



第31图 SK3040 遺物出土状況図 1/20

第30图 SK3038・3039・3040・3041・3042・3053・3054 平面図・断面図 1/40



第32図 S K 3044・3045、S E 3011平面図・断面図 1/40

SK3032 (第29図) B e 16区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.0×1.7mの長円形で、検出面からの深さは0.6mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土はほぼ2層に大別でき、各層からはⅢ様式の土器片が出土した。

SK3033 (第29図) B e 16区Ⅷ f 層上面で検出した。東側の肩をSK3032に切られており、また、浅い皿状の土坑であることから西側の肩は検出していない。検出面からの深さは約0.2mで黒灰色粘土を覆土とする。時期を示すような遺物は出土していないが、切り合い関係から中期と判断される。遺物包含層の溜りのような性格のものであるかもしれない。

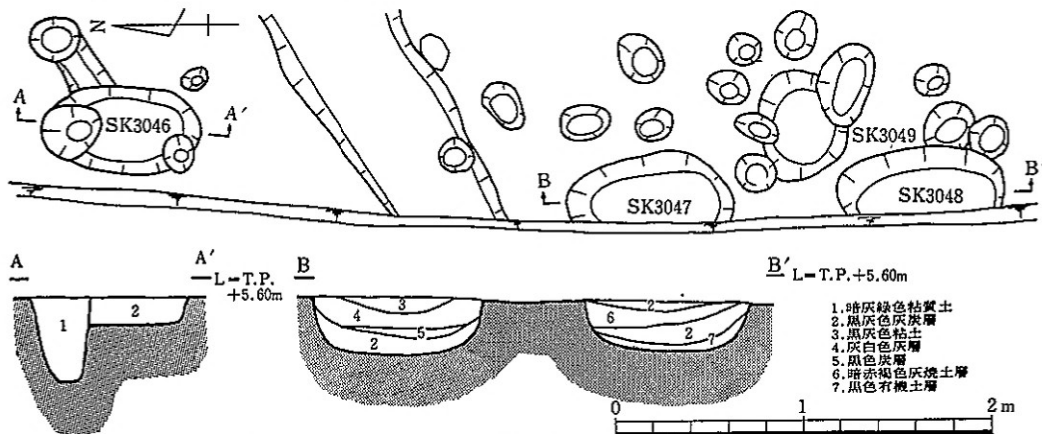
SK3035 (第29図) B e 15~16区Ⅷ f 層上面で検出した。北側は柱穴状の小穴に切られている。平面形は0.5×0.9mの隅丸長方形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅い舟底形を呈する。黒色粘土を覆土とし、Ⅲ様式の土器片が出土した。

SK3038 (第30図) B d 15区Ⅷ f 層上面で検出した。東西0.7m、南北1.6m以上で北半部は溝状になっている。検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は底の平らな舟底状を呈する。黒灰色粘土を覆土とし、Ⅱ様式の土器片が出土した。

SK3039 (第30図) B d 15区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.5×0.7mの隅丸三角形で検出面からの深さは0.2mを測り、浅い舟底形の断面形を有する。黒色粘土の覆土からは時期を示すような遺物は出土しなかったが、SK3040に切られていることから中期と判断される。

SK3040 (第30・31図) B d 15区Ⅷ e 層上面で検出した。西側の肩はSD3021Bによって削られている。平面形は0.8~1.5mの長方形で、検出面からの深さは0.1mほどであるが、本来は0.3m以上あったと思われる。断面形は浅い皿状を呈する。黒色粘土を覆土とし、完形に復元可能な土器を含む多量の土器・石器・獣骨等が出土した。土器は第5章で報告するⅣ様式の良い一括遺物である。

SK3042 (第30図) B d 15区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は直径約0.7mのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは0.3mを測り断面形はやや開いたU字形である。黒灰色粘土を覆土とし、Ⅲ様式の土器片が出土した。



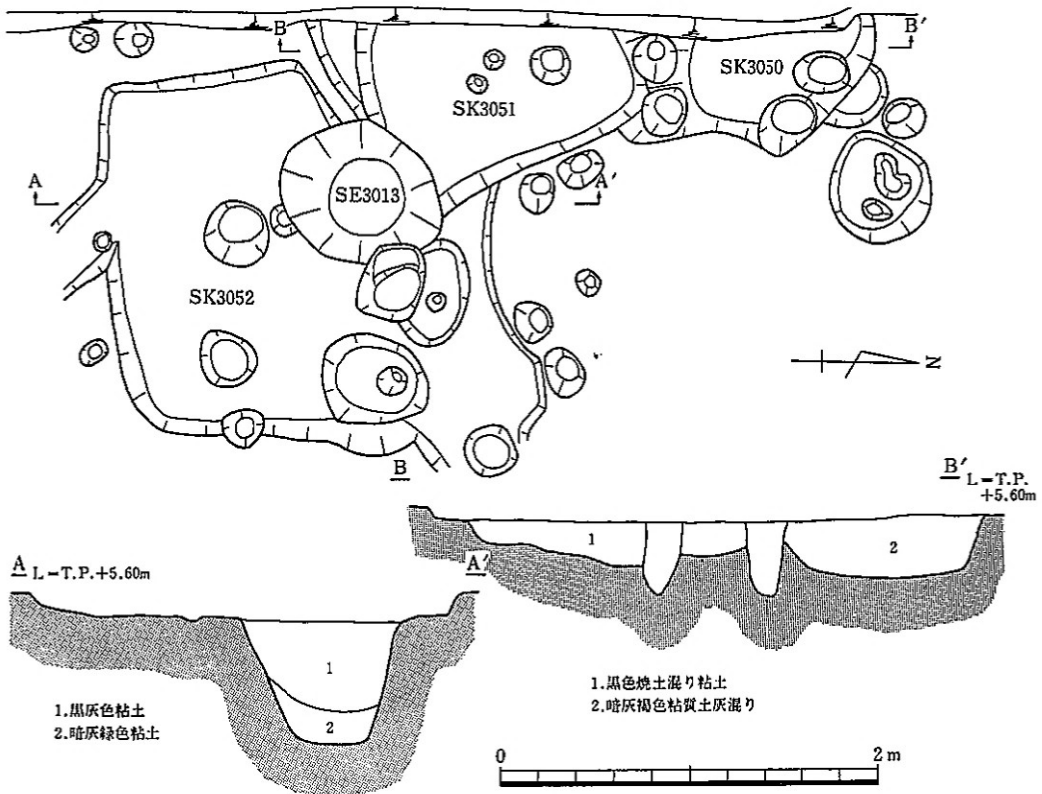
第33図 SK3046・3047・3048・3049平面図・断面図 1/40

**SK3045** (第32図) B e 15区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.1×0.5mの長円形で、検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。覆土は黒色粘土で遺物は少いが中期におさまる。

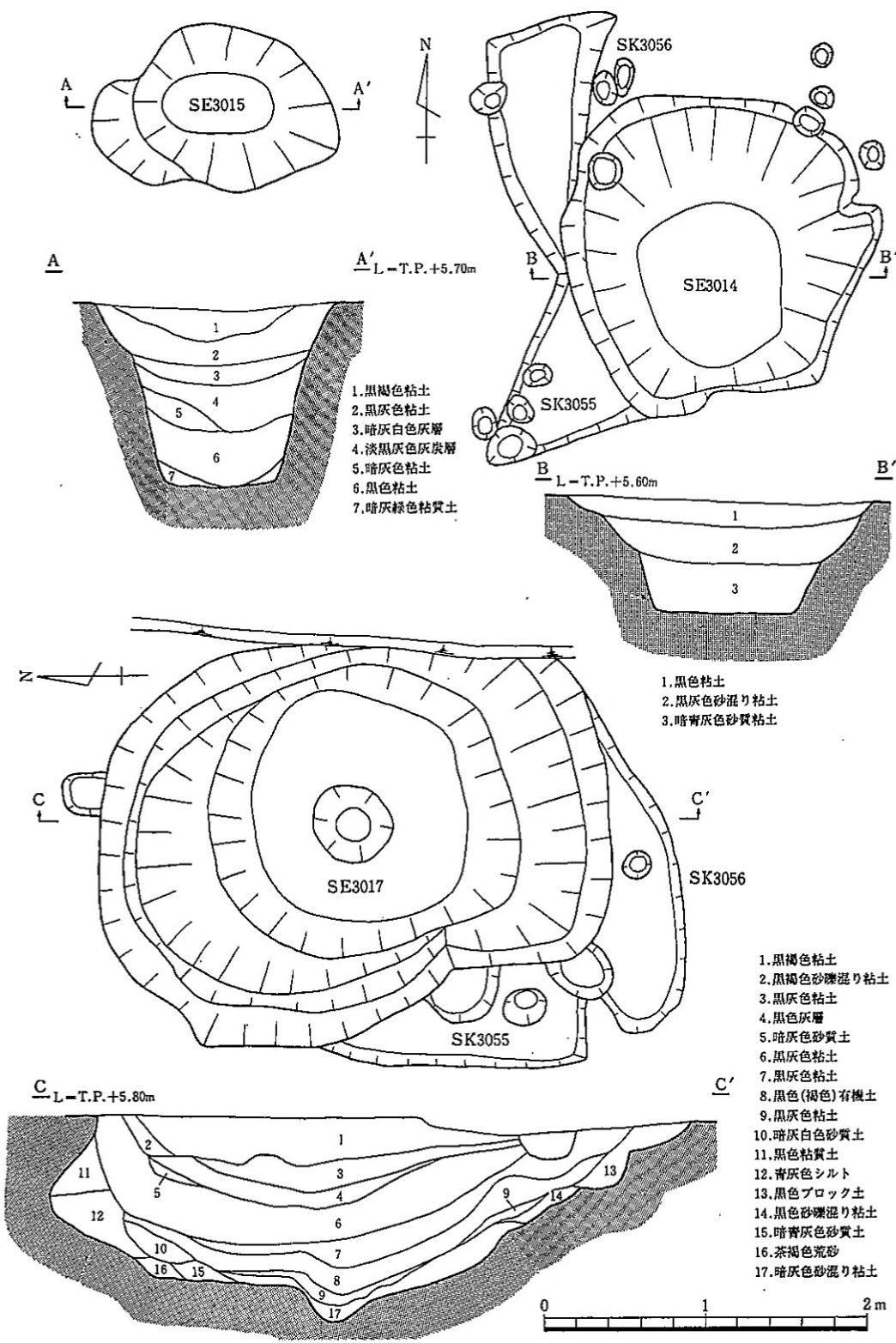
**SK3046** (第33図) B f 15区Ⅷ f 層上面で検出した。一部柱穴状の小穴に切られているが平面形は0.5×0.8mの長円形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は浅い舟底状である。覆土は黒色の灰と炭の混合土で中期の土器片が出土した。

**SK3060** (第36・37図) B e 12区Ⅷ f 層上面で検出した。不整な平面形を有し、直径は約4.6mである。検出面からの深さは1.6mを測り、断面形はやや開いたV字形を呈する大きな土坑である。覆土はほぼ6層に分層でき、2～5層に集中して多量の土器・木製品・卜骨・動物遺存体などが出土した。遺物については第5章各節で報告するが、それぞれに良好な資料を含む重要な遺構であり完全な整理が待たれる。この土坑はごみ捨て穴的な性格を有するものと思われるが、規模が大きいことと湧水層まで掘り込まれていることなどからSE3011のような井戸が廃絶後にごみ穴に転用されたとも考えられる。

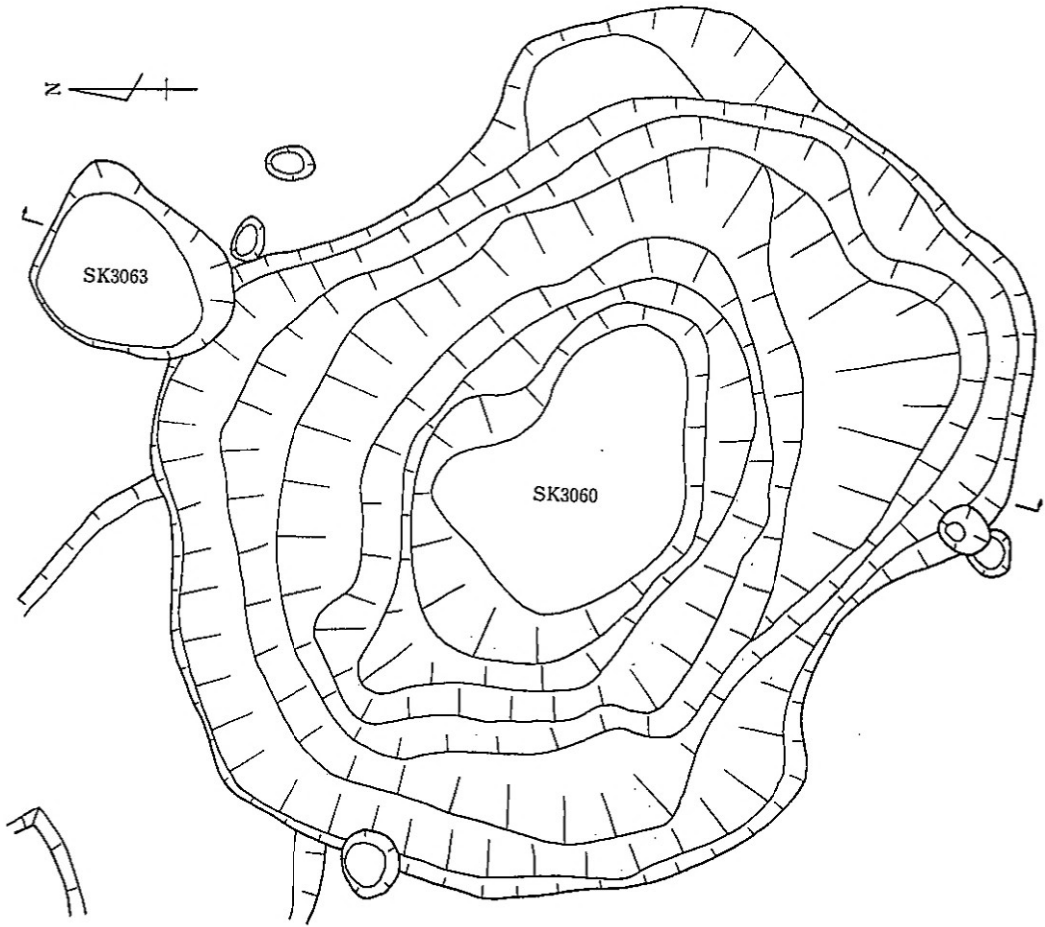
**SK3063** (第39図) B e 12～13区Ⅷ f 層上面で検出した。SK3060、SD3034を切っており上面はSD3037によって削平されているが、本来の掘り込み面はⅧ e 層上面と考えられる。平面形は0.9×1.1mの不整長円形で、検出面からの深さは0.25mを測り、断面形は浅いU字形を呈す



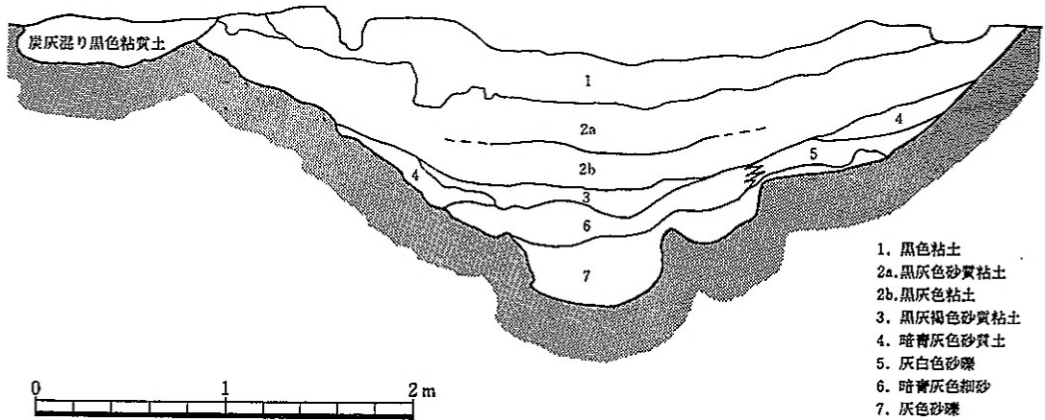
第34図 SK3050・3051・3052、SE3013平面図・断面図 1/40



第35図 SK3055・3056、SE3014・3015・3017平面図・断面図 1/40

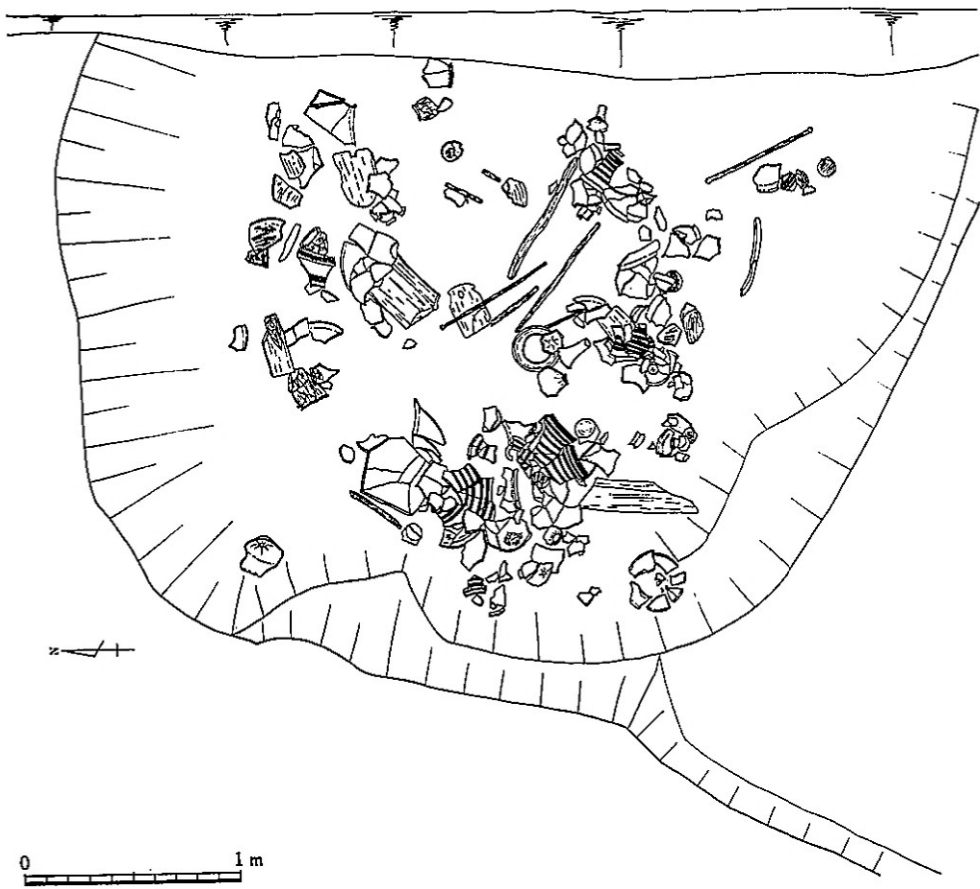


— L—T.P.+5.80m



第36図 S K 3060・3063平面図・断面図 1/40

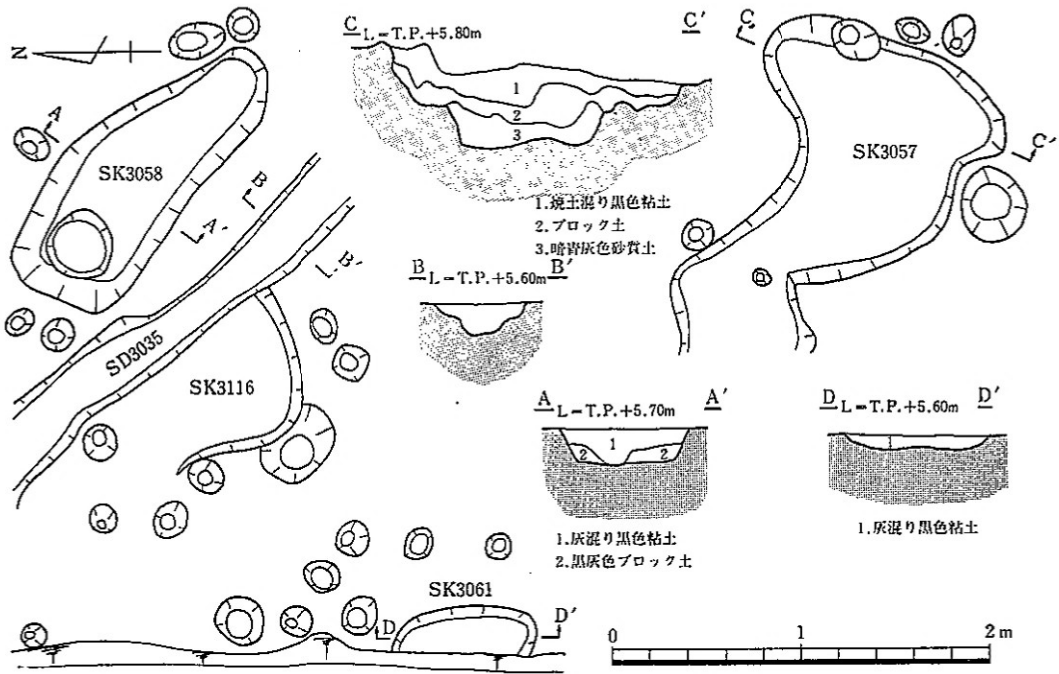




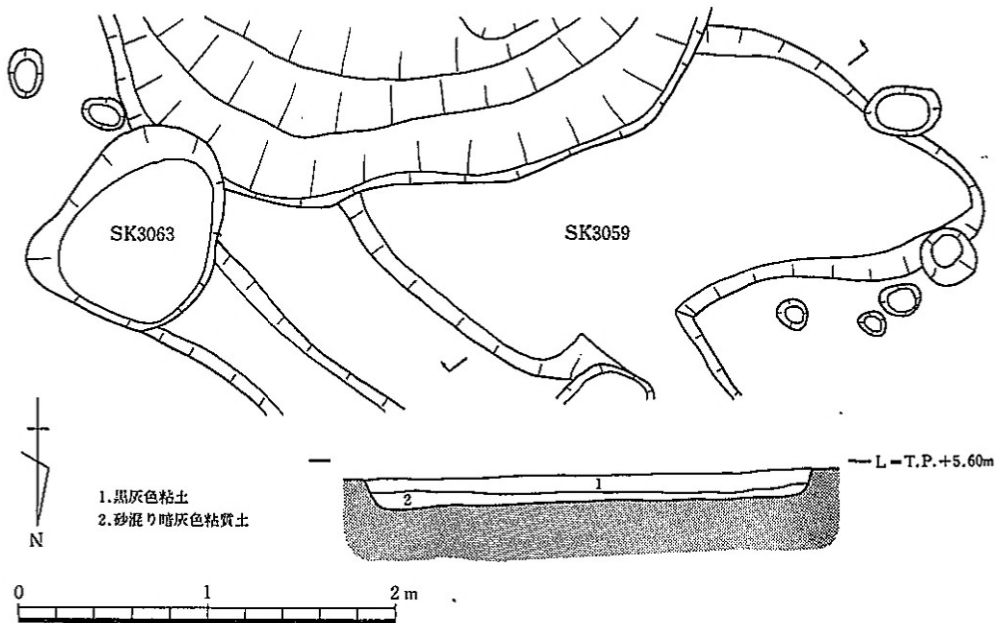
第37図 S K 3060遺物出土状況図 1/35

る。覆土は炭混り黒色粘質土で、Ⅱ様式新段階からⅣ様式の土器片が出土した。

**SK3065** (第40図) B f 12区Ⅲf層上面で検出した。北側の肩は削平されているが平面形は0.4×1.0mほどの長円形をしていたと思われる。検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は浅い舟底形を呈する。覆土は2層に大別でき、各層から中期の土器片が出土した。



第38図 SK3057・3058・3061・3116、SD3035平面図・断面図 1/40



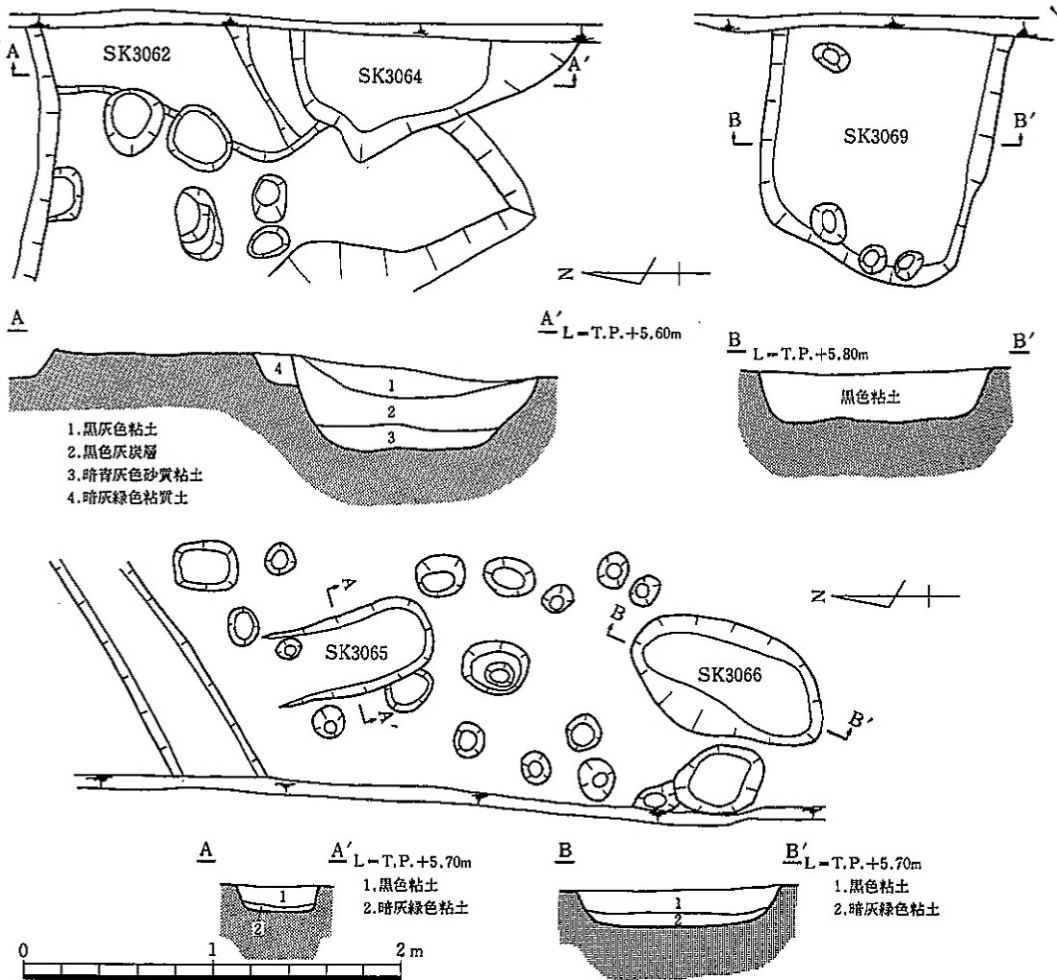
第39図 SK3059・3063平面図・断面図 1/40

SK3066 (第40図) B f 12区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.6×1.1mの楕円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。覆土はほぼ2層に大別でき、各層から中期の土器片が出土した。

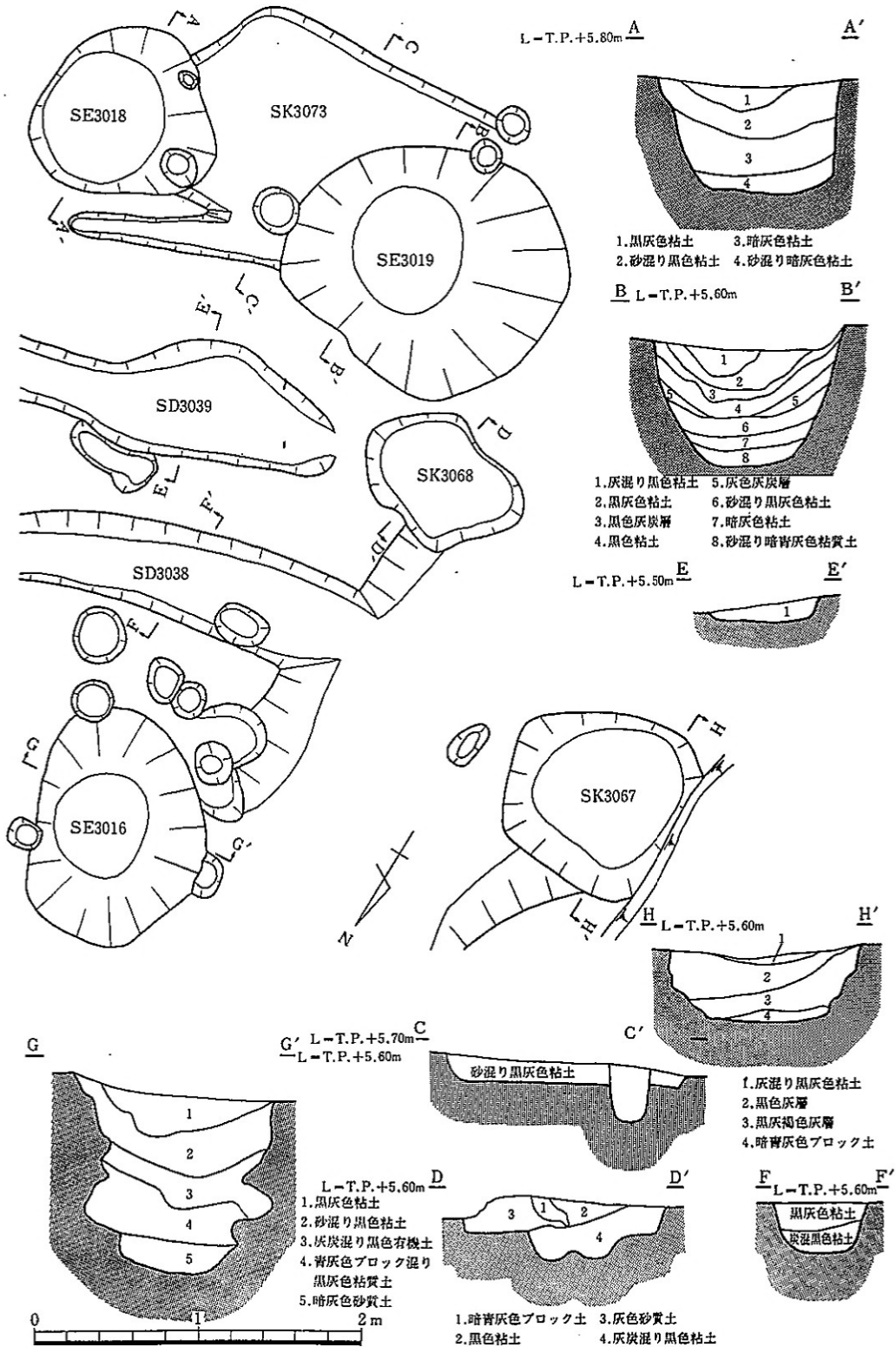
SK3072 (第43図) B e 10区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は2.1×1.5mの不整長円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。黒褐色粘土を覆土とし、中期の土器片が出土した。Ⅱ様式が多いがこれは、Ⅷ f 層に由来するものと思われる。

SK3073 (第43図) B e・f 10区Ⅷ f 層上面で検出した。SK3072に切られ、SK3080を切っている。平面形は1.2×1.6mの長円形で検出面からの深さは0.7mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は炭・灰を混入する黒灰色土で、Ⅲ様式からⅣ様式の土器片が比較的まとまって出土した。

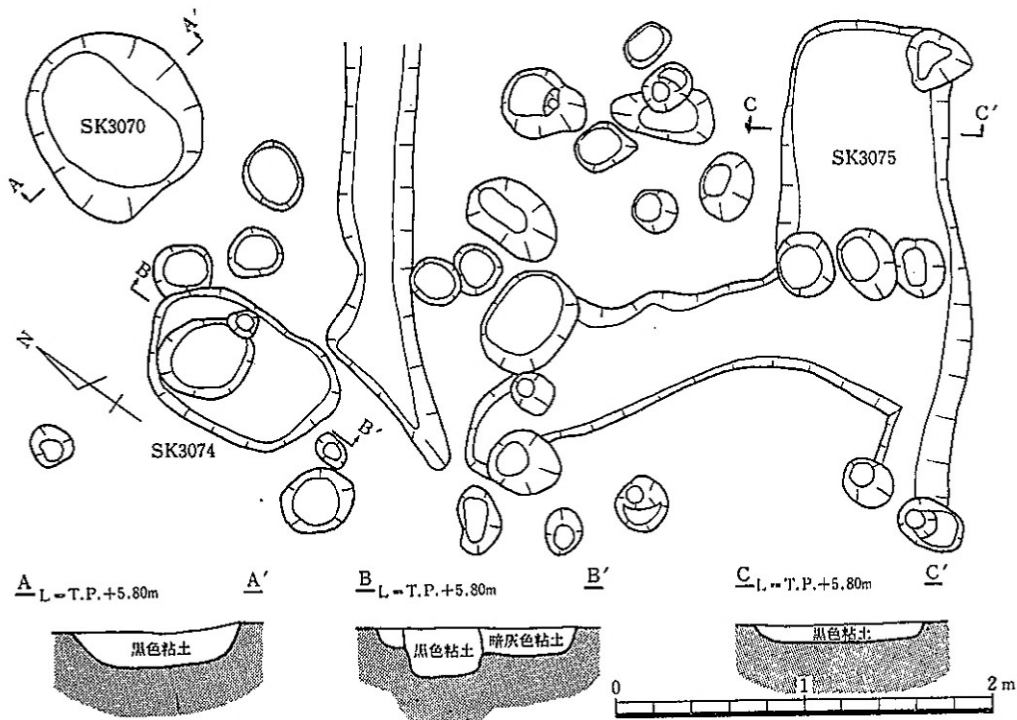
SK3075 (第42図) B d 10区Ⅷ f 層上面で検出した。西側の肩をSD3041に切られている。平面形は0.9×1.5m以上の隅丸長方形になると考えられる。検出面からの深さは0.1mを測り断



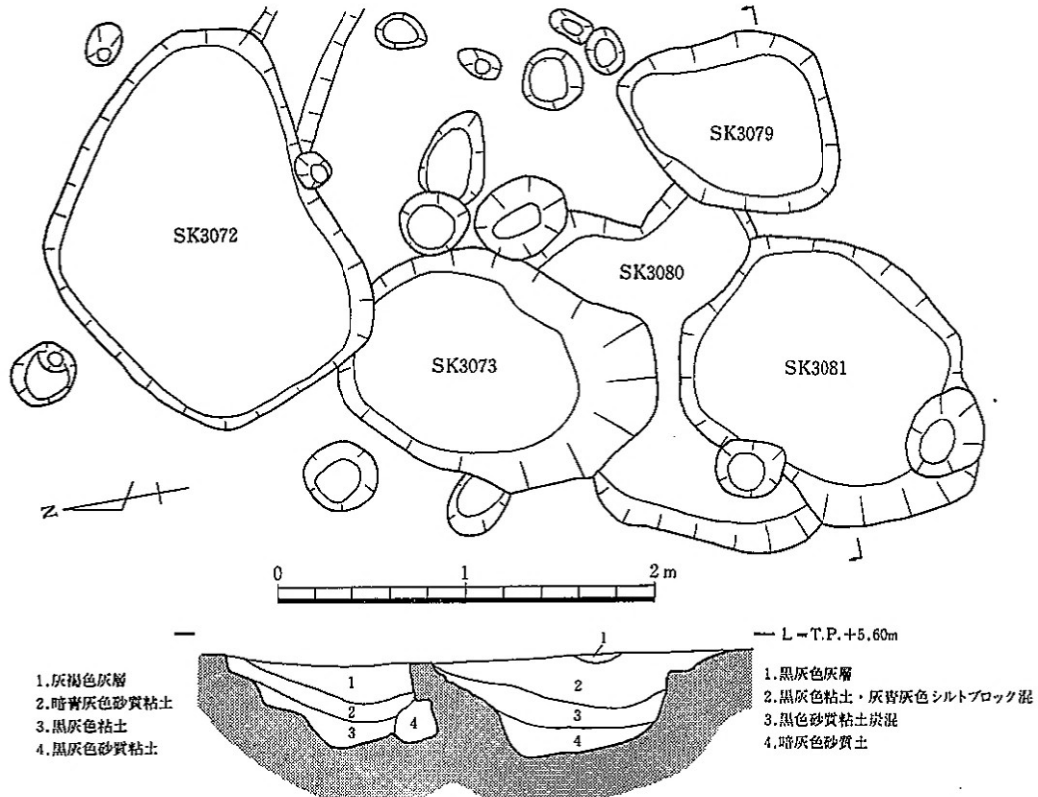
第40図 SK3062・3064・3065・3066・3069平面図・断面図 1/40



第41図 SK3067・3068・3073、SE3016・3018・3019、SD3038・3039平面図・断面図 1/40



第42図 SK3070・3074・3075平面図・断面図 1/40



第43図 SK3072・3073・3079・3080・3081平面図・断面図 1/40

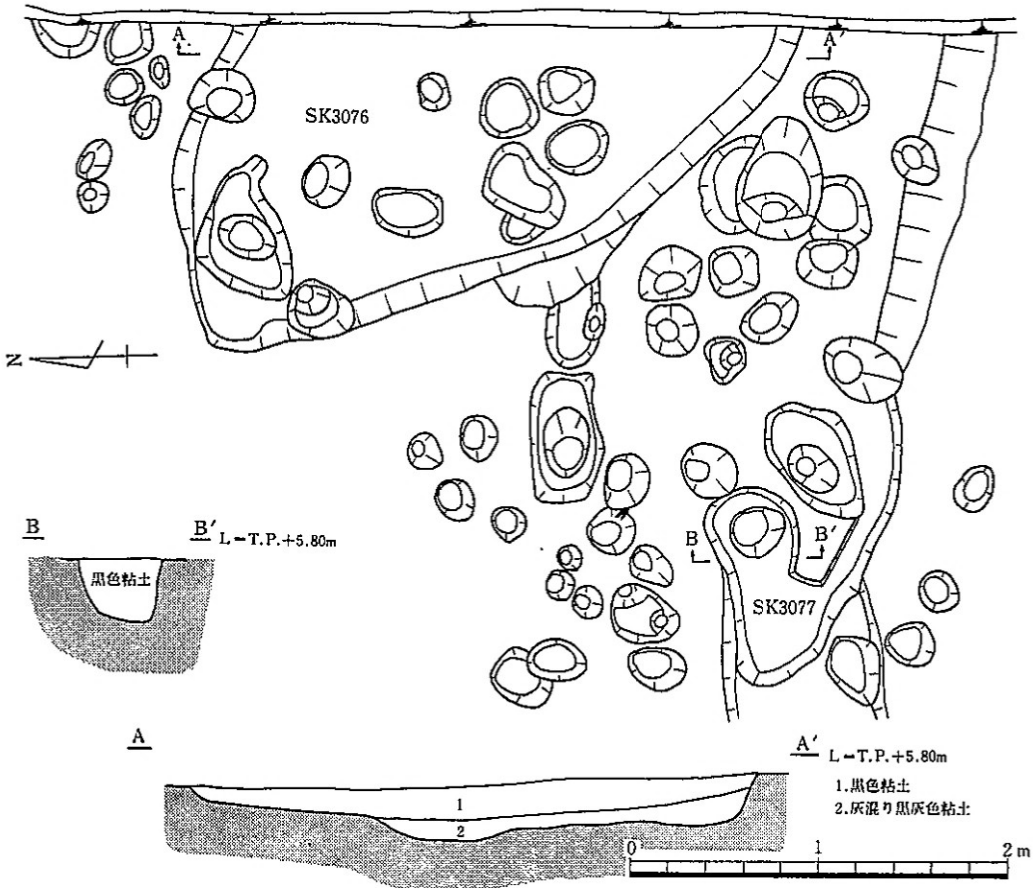
面形は浅い皿状を呈する。黑色粘土を覆土とし、中期の土器片が数片出土した。

**SK3078** (第45図) B e 09区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.5×1.0mの長方形に近い長円形で、中央に中期の柱穴状の小穴が2個重複して切り合っている。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は浅い舟底状を呈する。黑色粘土を埋土とし中期の土器片が出土した。

**SK3079** (第43図) B e 09~10区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.0×1.0mの不整隅丸方形で検出面からの深さは0.4mを測り、断面形は下方のえぐれた袋状を呈する。覆土はほぼ4層に分層でき、Ⅱ様式を含むⅢ様式の土器片が出土した。

**SK3080** (第43図) B e・f 10区Ⅷ f 層上面で検出した。SK3073・3079・3081にそれぞれ切られている。東西約2mで不整形な平面形を有するものと考えられる。検出面からの深さは約1.0mを測り、断面形は皿状である。灰混り黒灰色粘土を覆土とし、Ⅱ様式を含むⅢ様式の土器片が比較的まとまって出土した。

**SK3082** (第45図) B e 09区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は2.4×1.9mの不整楕円形を呈し検出面からの深さは0.5mを測る。断面形は浅いU字形を呈する。覆土はほぼ2層に分けられ、Ⅲ様式からⅣ様式の土器片が比較的まとまって出土した。



第44図 SK3076・3077平面図・断面図 1/40

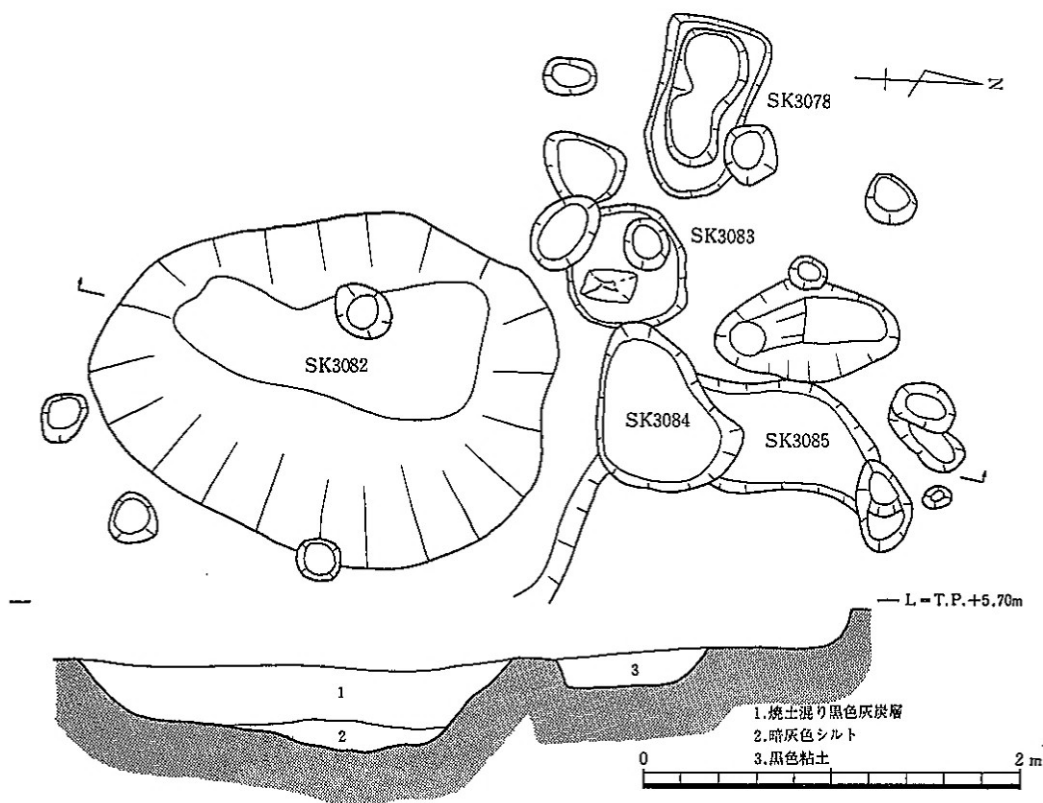
**SK3083** (第45図) B e 09区Ⅷ f 層上面で検出した。一部をSK3084と柱穴状の小穴に切られている。平面形は直径0.6mの円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅い舟底形を呈する。覆土は黒色粘土で、人頭大の垂角礫1個と中期の土器片少量が出土した。

**SK3089** (第47図) B d・e 08区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.9×1.1mの長円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。黒灰色粘土を覆土とし、Ⅳ様式の土器片が出土した。

**SK3091** (第48図) B f 07区Ⅷ f 層上面で検出した。北側を近世井戸導水管掘方によって削られているが平面形は、0.7×1.5mほどの隅丸長方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は暗灰色粘質土で前・中期の土器片が出土した。

**SK3093** (第46図) B d 07区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.3×0.8mの不整長円形で検出面からの深さは0.5mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は3層に分層でき、各層からⅢ様式からⅣ様式にかけての土器片が出土した。

**SK3094** (第47図) B d 07区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.8×0.5mの楕円形で検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は皿状を呈する。暗灰色粘質土を覆土とし、Ⅲ様式の土器片が出土した。



第45図 SK3078・3082・3083・3084・3085平面図・断面図 1/40

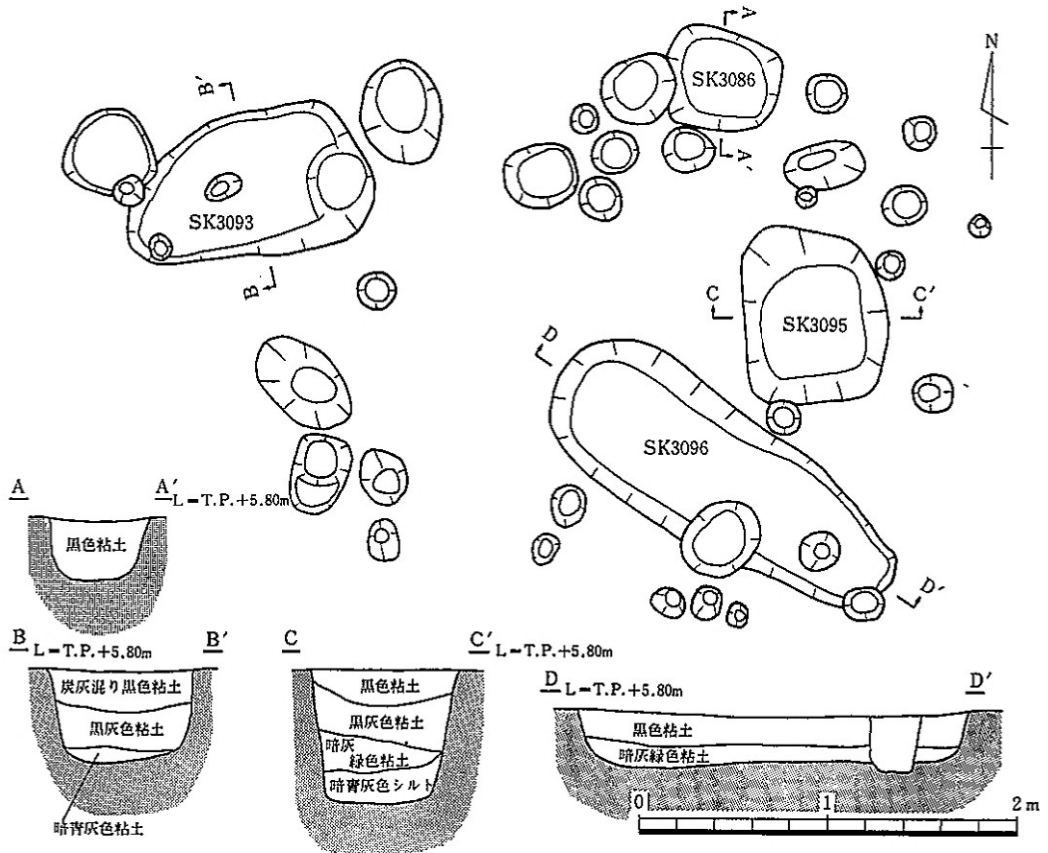
**SK3095** (第46図) B d 07区Ⅲ f 層上面で検出した。平面形は0.8×0.9mの隅丸長方形で検出面からの深さは0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、各層からⅡ様式を含むⅢ様式古段階の土器片と砥石片1点が出土した。

**SK3099** (第49図) B d 06区Ⅲ f 層上面で検出した。SE3020を切っている。平面形は直径約1.5mのほぼ円形で検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は壁面のほぼ垂直な逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、2～4層は人為的に埋め戻された土と考えられる。Ⅲ様式新段階の土器片が出土した。この土坑は未完成の井戸とも考えられる。

**SK3100** (第49図) B d 06区Ⅲ f 層上面で検出した。東側は調査区外に出ていて全体の形状規模等は不明である。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。黒褐色粘土を覆土とし、中期の土器片が少量出土した。

**SK3101** (第50図) B e 11区Ⅲ 層上面で検出した。南側はSE3019に切られているが平面形は、0.7×約2mの長円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は、浅いU字形を呈する。覆土は、暗青灰色粘質土で、Ⅱ様式を含むⅢ様式古段階の土器が出土した。

**SK3102** (第50図) B f 11区Ⅲ 層上面で検出した。東側をSD3021Aに切れ、西側は調査



第46図 SK3086・3093・3095・3096平面図・断面図 1/40

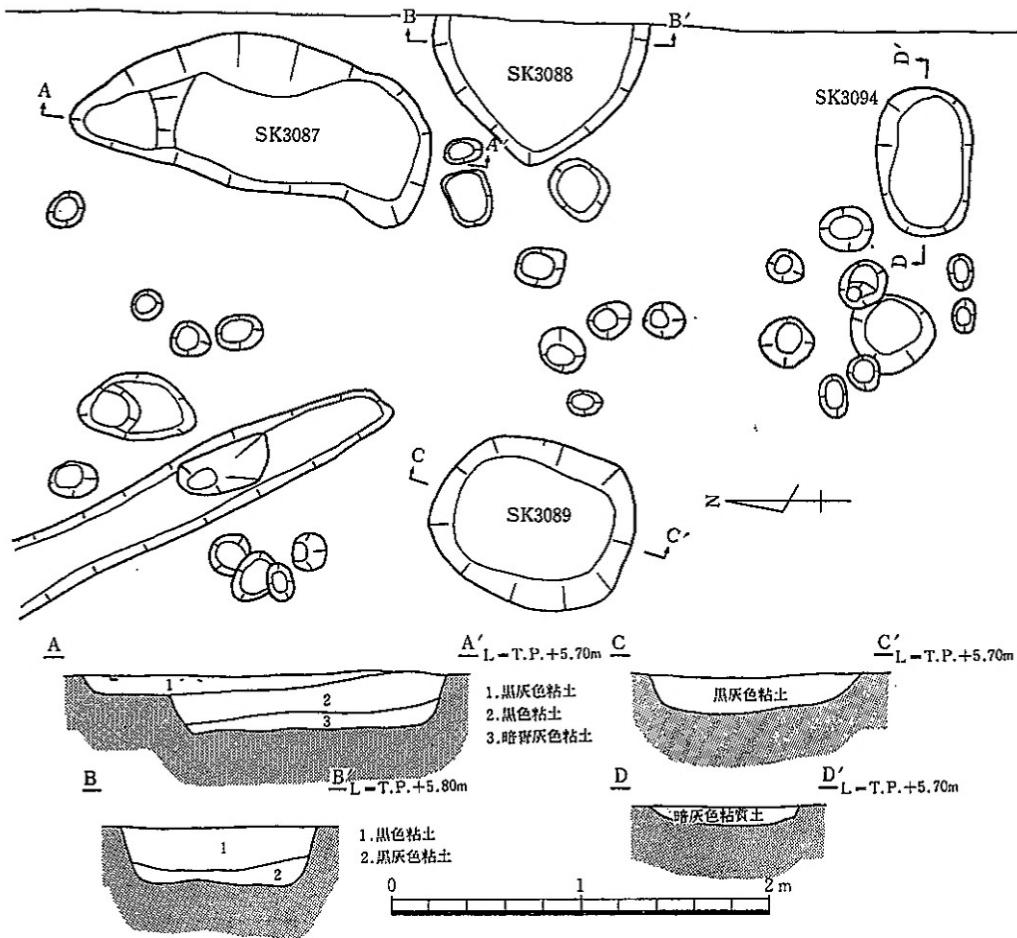


区外に出ているため全体の形状・規模は不明である。南北1.1m、東西は1.5m分を検出した。底面は西側がほぼ平端で東側が一段下がっている。検出面からの深さは浅い部分で0.3m、深い部分では0.6mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は灰褐色と黒灰色の灰・炭が薄い互層となって堆積しており、出土遺物はⅡ様式の土器を主とするがわずかにⅢ様式の土器片も混じる。他に石鏃、動物遺存体などが出土した。

**SK3103** (第24図) B e 11区Ⅴ層上面で検出した。東側をS E 3019に切られているが、平面形は直径0.9mの円形になると思われる。検出面からの深さは0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は暗灰色粘質土で中期の土器片が出土した。

**SK3110** (付図2) B e 13区Ⅵf層上面で検出した。東側はS D 3035に切られており、北側の肩は削平されているため全体の形状・規模は不明である。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は皿状である。覆土は黒色粘土でⅢ様式の土器片が出土した。

**SK3120** (付図2) B d 18区Ⅵf層上面で検出した。南側をS E 3007によって切られているため全体の規模は不明であるが平面形は、0.6×1.3m以上の長円形になるものと思われる。検出



第47図 SK3087・3088・3089・3094平面図・断面図 1/40

面からの深さは0.1mを測り、断面形はU字形を呈する。暗灰色砂質粘土を覆土とし、Ⅲ様式新段階の土器片が出土した。

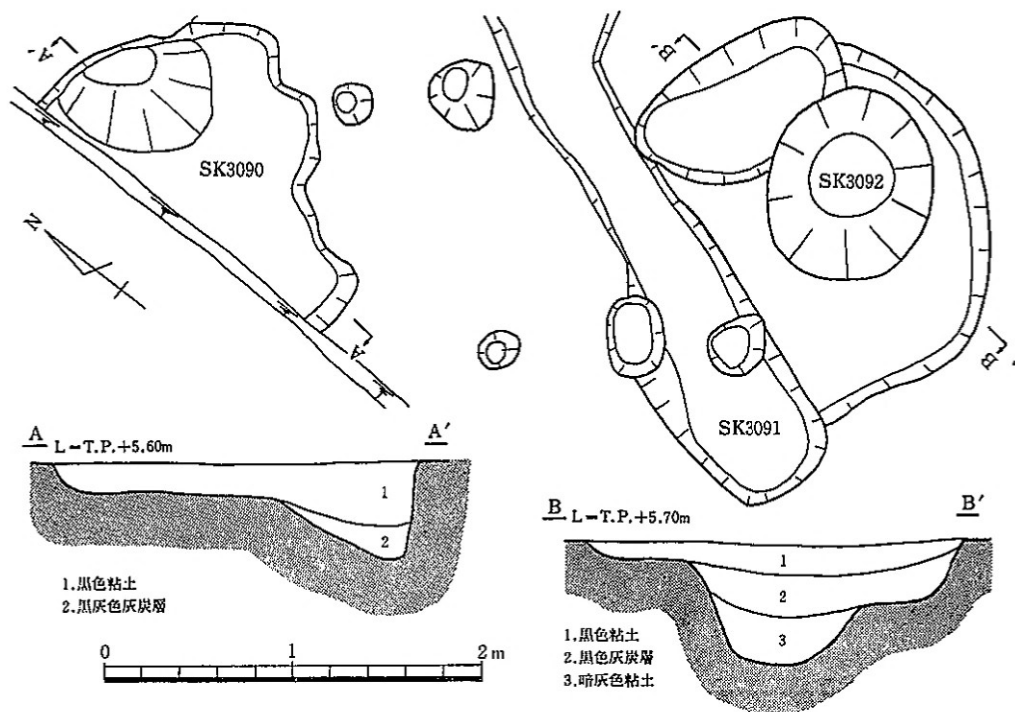
**S K 3123** (第51図) B d 20区Ⅷ e相当層上面で検出した。この層は中期の環濠 S D 3012の埋没後のくぼみに堆積した土層で本来上面もくぼんだ堆積をしているため、一部Ⅷ d層も落ち込んでいる。土坑の平面形は0.5×1.0mの長円形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は2層に分層でき各層からⅢ様式新段階からⅣ様式の土器片が出土した。

**S K 3124** (第51図) B d 20区Ⅷ e相当層上面で検出した。平面形は0.9×0.4mの長円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は2層に分層でき、各層から中期の土器片が少量出土した。

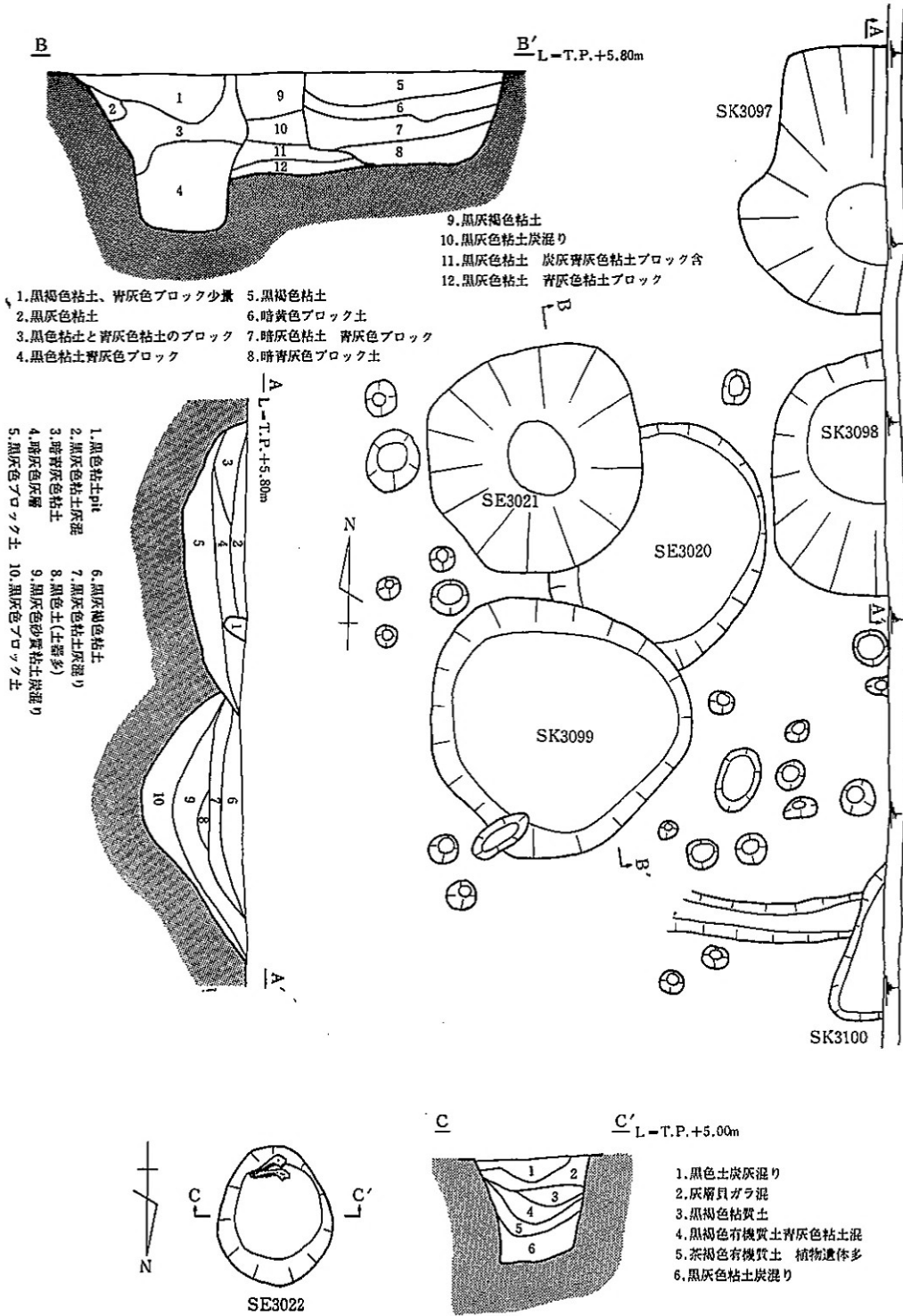
**S K 3125** (第51図) B d 20区Ⅷ e相当層上面で検出した。一部を S K 3124によって切られている。平面形は0.4×0.8mの不整長円形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。灰褐色粘土を覆土とし中期の土器片が少量出土した。

**S K 3126** (第51図) B d・e 20区Ⅷ e相当層上面で検出した。平面形は0.5×0.8mの楕円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は2層に分層でき、各層から中期の土器片が少量出土した。

**S K 3127** (付図2) B e 20区Ⅷ e相当層上面で検出した。平面形は1.5×1.0mの長円形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は黒灰色粘質土で中期後半の土器片、石庖丁などが出土した。



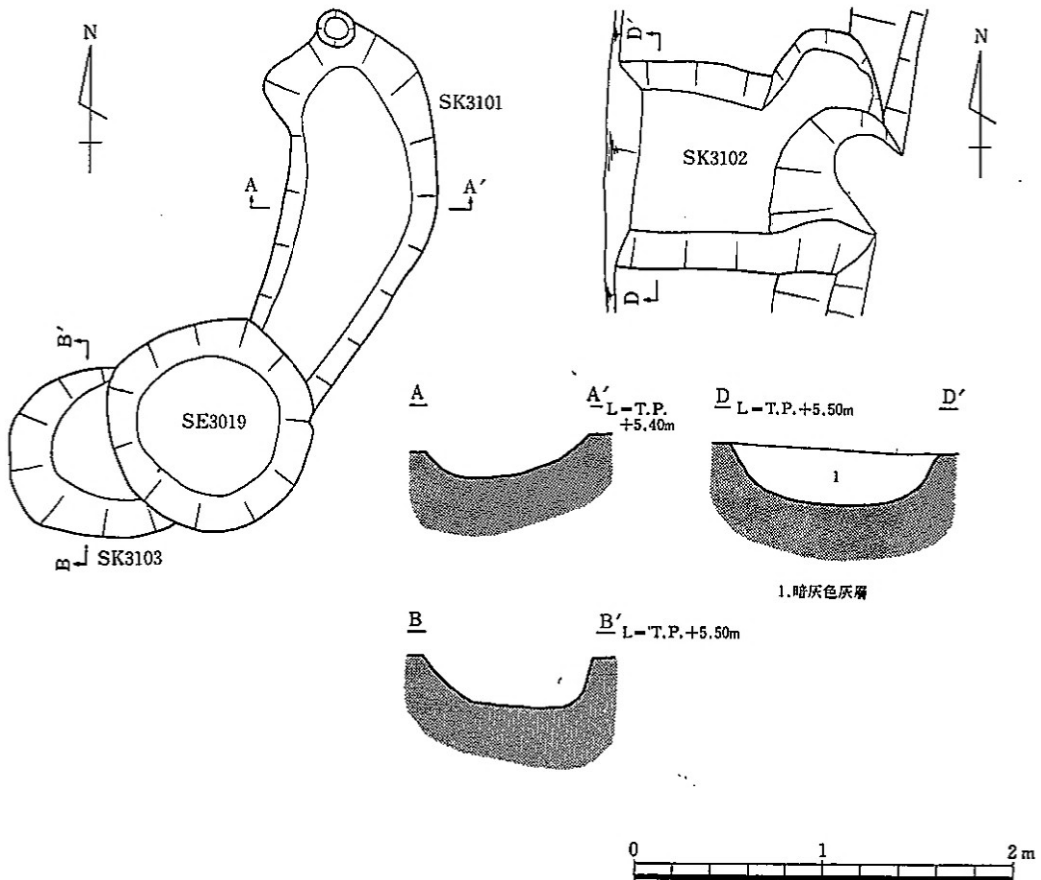
第48図 S K 3090・3091・3092平面図・断面図 1/40



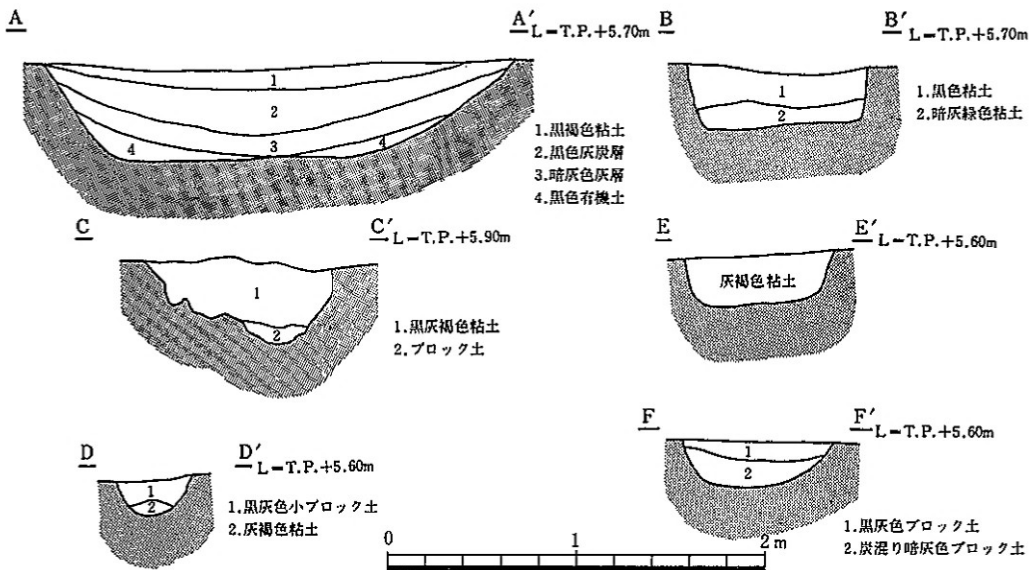
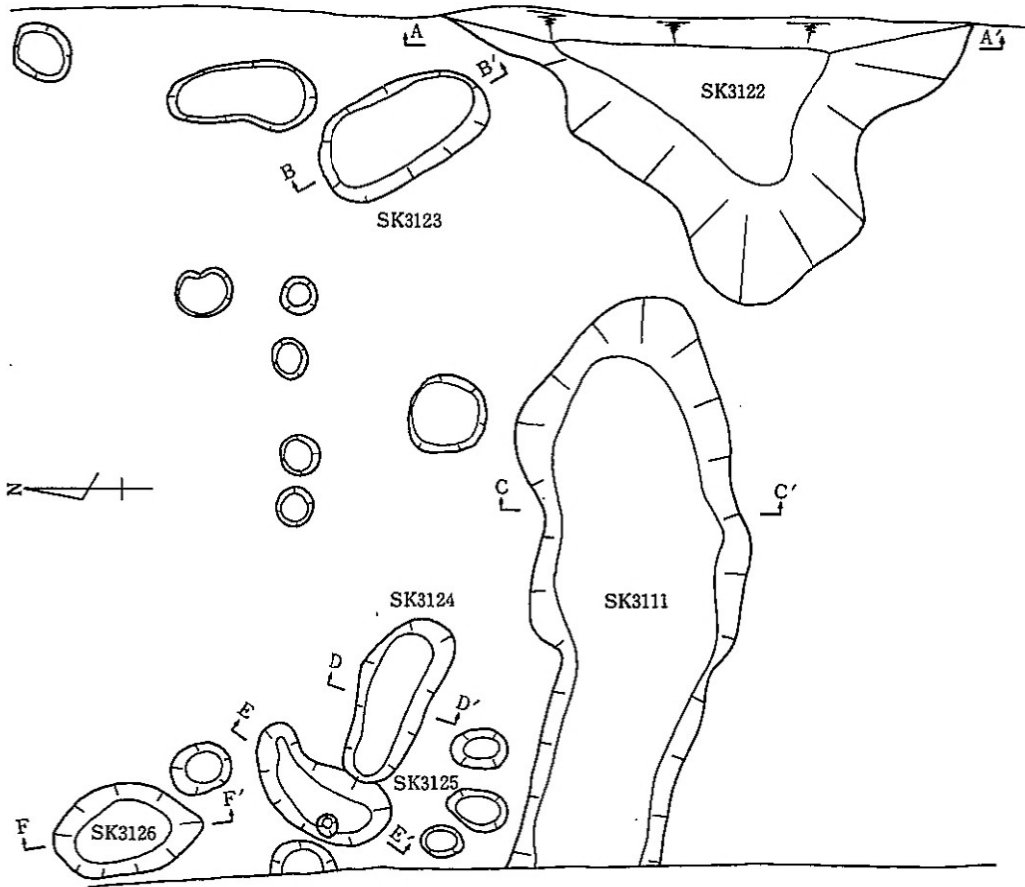
第49図 SK3097・3098・3099・3100、SE3020・3021・3022平面図・断面図 1/40

## 井戸

**S E3001** (第52図) B e 22区、中期の環濠 S D3011北肩部で検出した。S D3011に切られているが本来の掘り込み面は、Ⅲeないしf層上面と考えられる。上法の直径は1.3×1.1mで平面形は不整長円形を呈する。下法の直径は0.4×0.3mで楕円形を呈する。検出面からの深さは1.5mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は10層に細分できる。1・2層はこの井戸の埋没後のくぼみに S D3011の覆土が落ち込んだものである。井戸本来の覆土は3～5層が上層、6～8層が中層、9層が下層、10層が最下層というふうに大別できる。最下層は井戸使用中の自然堆積土で土器片、植物遺存体等を多く含む。下層は井戸廃絶後の最初の堆積で人為的に埋め立てられた可能性がある。多量の復元可能な土器片、完形のタコ壺等が出土した。中層はいずれも灰・炭・焼土を多く含み、暫時的な堆積を示している。また、土器片、植物遺存体等も若干含んでいる。これは『亀井・城山』で後期の井戸について報告した際、その小結で述べた状況と一致しており、この井戸が廃絶後一時期ごみ捨て穴として利用されていたと考えてよい。上層はⅧ層のブロックを含む土層で、人為的な堆積と認められるから一気に埋め立てられたものと考えられる。出土遺物は主として下層、最下層からのものがまとまっており、土器はⅢ様式新段階からⅣ様式に



第50図 SK3101・3102・3103、SE3019平面図・断面図 1/40



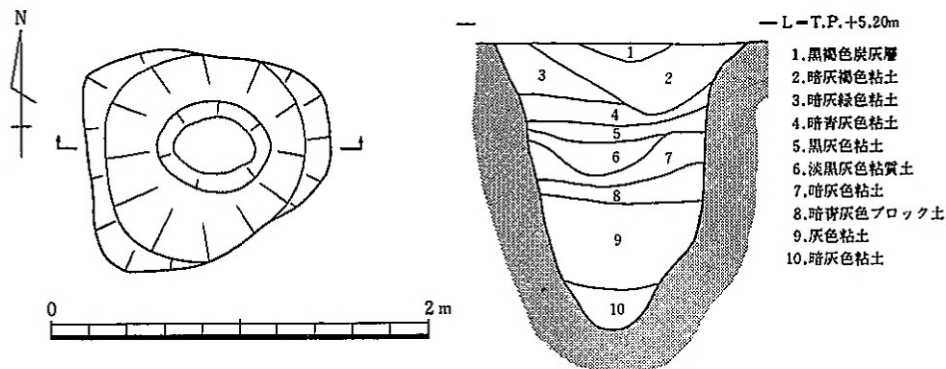
第51図 S K 3111・3122・3123・3124・3125・3126平面図・断面図 1/40

比定できる良好な一括資料と考えられる。他にタコ壺、石庖丁未製品などが出土した。

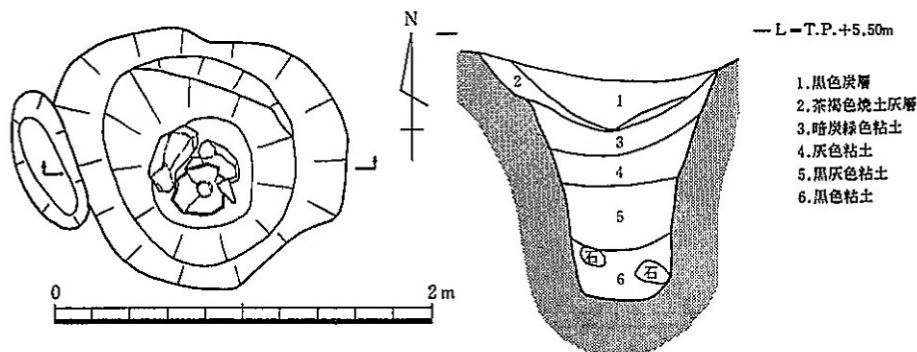
**S E3002 (第53図)** B d 21区 Ⅷ f 層上面で検出した。上法の直径は1.7×1.3mの不整円形で、検出面から0.2mほどのところで一度段がつき、下法は直径0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは1.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は6層に細分でき、1・2層を上層、3～5層を中層、6層を下層というふうに大別できる。下層は有機質で植物遺存体を多く含み、井戸使用中か廃絶後間もない時期の堆積と考えられる。中層は比較的水平に近い堆積状況を示しており、人為的に埋め立てられた土層である可能性がある。上層は灰・炭・焼土ブロックが互層となって堆積している。これは井戸埋設後のくぼみが、灰・炭等の投棄坑として利用されたことを示すものであろう。遺物は下層から集中して出土した。多量の土器片、人頭大の礫などで、土器はⅢ様式新段階からⅣ様式の良好な一括資料になると考えられる。

**S E3003 (第54図)** B e 20区 Ⅷ f 層上面で検出した。上法の直径は1.4×1.6mで平面形は不整円形を呈する。掘方は途中で2度段がつき、下法は直径0.3×0.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.4mを測り断面形は逆台形を呈する。覆土は5層に細分でき、1・2層を上層、3・4層を中層、5層を下層というふうに大別できる。基本的にはS E3002と同様の堆積状況であり、各層の土質も非常に似かよっている。遺物は下層から集中してⅢ様式の土器片、石庖丁などが出土した。

**S E3004 (第54図)** B e 20区 Ⅷ f 層上面で検出した。東西小溝S D3018に切られている。上



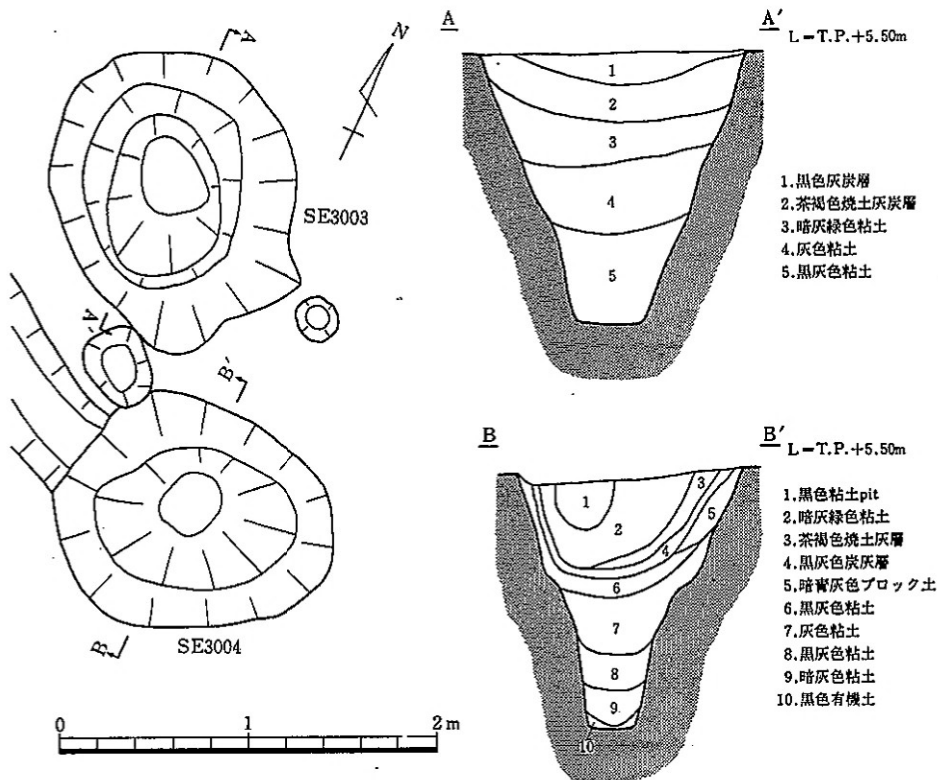
第52図 S E3001平面図・断面図 1/40



第53図 S E3002平面図・断面図 1/40

法の直径は1.4×1.3mで平面形は楕円形を呈する。掘方は途中で1度段がつき、下法は直径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは1.4mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は10層に細分できる。1層はS D3018の覆土である。2層を最上層、3～6層を上層、7層を中層、8・9層を下層、10層を最下層というふうに大別できる。最下層は有機質で井戸使用中の自然堆積と考えられる。その上面に接してザルか箕のような編製品が検出された。著しく破損していたため取り上げることはできなかったが、幅2～3%の素材をかなり密に編んだもので、井戸水の濾過装置として用いられていたものと考えられる(図版11)。下層は井戸廃絶後間もない時期の堆積で漸時的な堆積状況を示しており、遺物が多い。中層は人為的に埋め立てられた土層である可能性が高い。上層は灰・炭・焼土ブロックの互層で、前記各井戸と同様埋設後のくぼみが灰等の投棄坑として利用されていたものであろう。上層はⅨ層の小ブロックを含んでおり、最終的に人為的に埋め立てられた土層と考えられる。遺物は下層に集中しており、Ⅲ様式の土器、横柄杓、横斧の柄等の木製品、各種の植物遺存体等が出土した。

SE3005(第55図) B d19区Ⅷ f 層上面で検出した。上法の直径は1.2×1.1mで平面形は円形を呈し、下法は直径0.5×0.6mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.8mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層できるが1層は、Ⅷ e 層の落ち込みと考えられる。4層は側壁の崩れ込みと考えられ遺物は少い。出土遺物は主としてⅢ様式の土器片で、2・3層にまんべんなく含まれている。

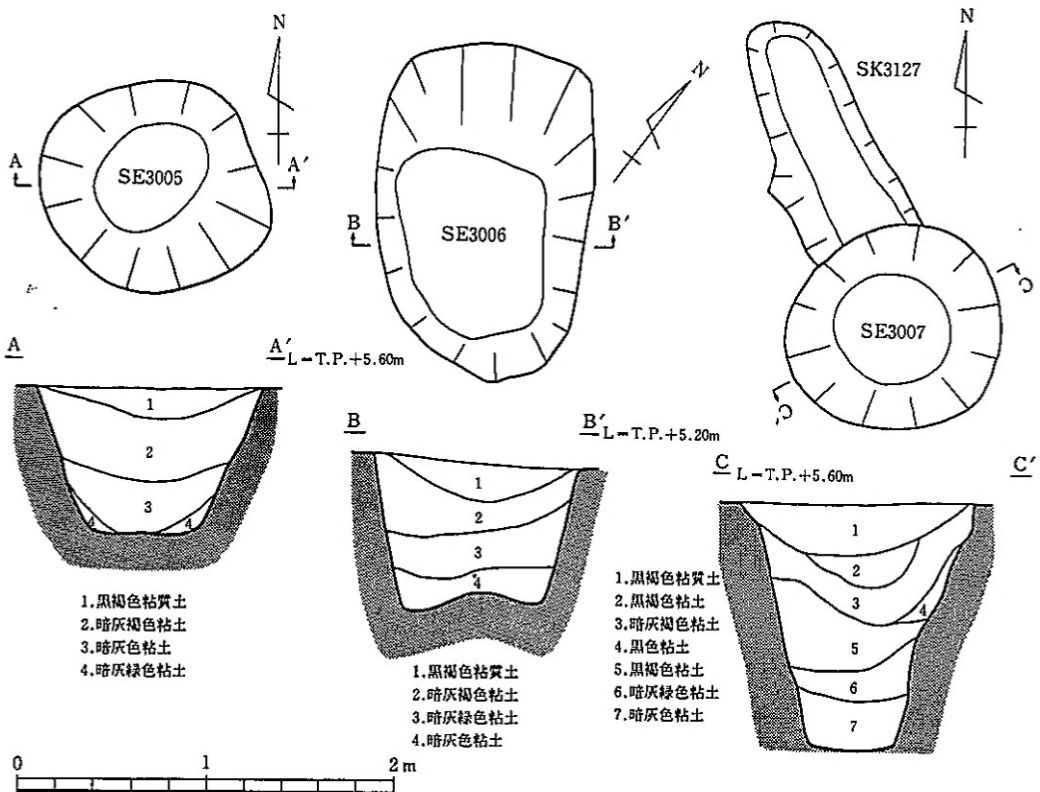


第54図 S E 3003・3004平面図・断面図 1/40

**SE3006 (第55図)** Be18区Ⅷf層上面で検出した。上法の直径は1.1×1.8mで平面形は長円形を呈し、下法は0.8×0.9mの不整形である。検出面からの深さは0.8mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層できるが、1層はⅧe層の落ち込みと考えられる。2～4の各層からⅢ様式の土器片が出土した。

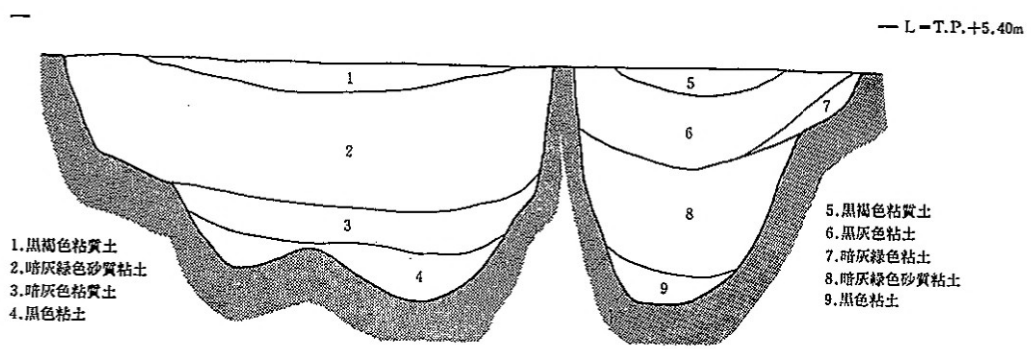
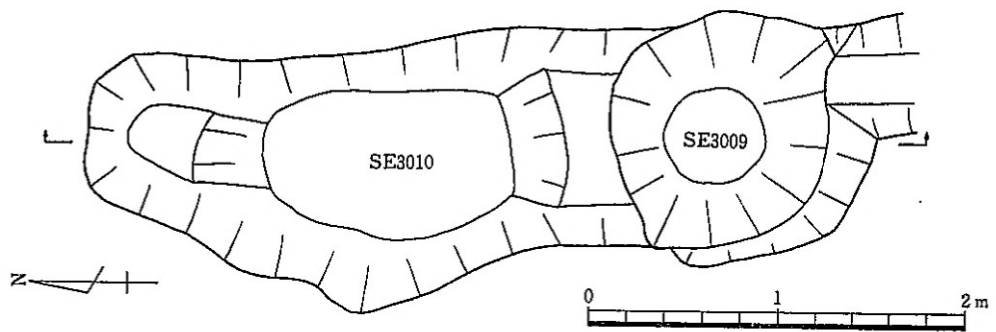
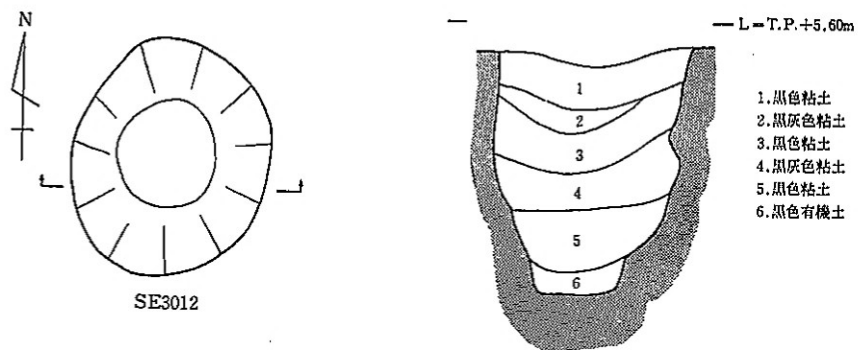
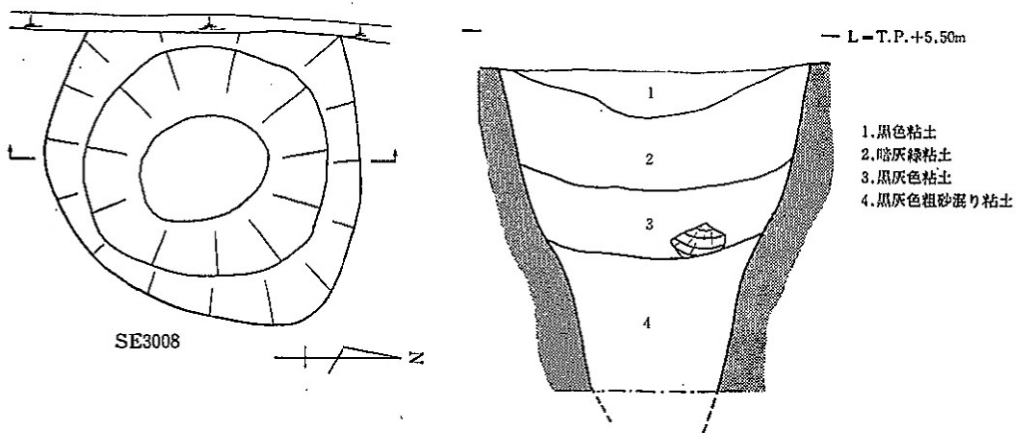
**SE3007 (第55図)** Bd18区の中期の溝SD3021Aの覆土上面で検出した。Ⅲ様式新段階の土坑SK3120を切っている。本来の掘り込み面はⅧeないしf層上面と推定される。上法の直径は1.1mで平面形は円形を呈する。下法は直径0.6mのやはり円形である。検出面からの深さは1.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は7層に細分でき、1～4層を上層、5層を中層、6・7層を下層というふうに分層できる。下層は完形に復元可能な土器を多量に含んでいる。その上面には植物遺存体が薄層となって堆積しており、中層にも土器片や植物遺存体を多く含む。上層は炭・灰を含んでおり漸時的な堆積状況を示しているが、1層はⅧ層のブロックを含むことから、最終的に埋め戻された土層である可能性がある。下層からまとめて出土した土器はⅢ様式新段階からⅣ様式のものである。

**SE3008 (第56図)** Be・f16区Ⅷf層上面で検出した。西側を排水溝によって削られているが、上法の直径は1.7mで平面形は不整形円形を呈する。掘方は途中で1度段がつき、断面形は逆台形を呈する。検出面から1.8mまで掘り下げたが、湧水が多く危険なため底面を検出する



第55図 SE3005・3006・3007平面図・断面図 1/40





第56図 S E 3008・3009・3010・3012平面図・断面図 1/40

ことができなかつた。覆土は4ないし5層に分層できる。4層の下は植物遺存体を多く含み、4層と分離することが可能と思われる。4層以下の層からは完形土器やミニチュアを含む多量の土器が、3層からは木材や多量の植物遺存体がそれぞれ出土した。また、2層も多量の土器片を含んでいたが、これは、井戸廃絶後3層まで埋没した段階で一括して投棄されたような状態であった。したがって2層の土器と4層以下の土器は層位的に型式を分離できる可能性をもつ資料であるが、現在のところ全体をざっと見た程度であり、Ⅲ様式とⅣ様式の土器が見られることが判明しただけである。詳細な検討は本報告に譲りたい。

**SE3009** (第56図) B d 15区、後期の溝SD3021Bの底面で検出した。SD3021Aを切っている。上法は直径1.2mで平面形は円形を呈し、下法は直径0.5mでやはり円形である。検出面の深さは1.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は5層に分層できるが、1層は井戸埋没後のくぼみにSD3021Bの覆土が落ち込んだものと考えられ、後期の土器片が出土している。5層は有機質で、井戸使用中の自然堆積土と考えられるものである。遺物は4層に集中しており、主としてⅡ様式の土器片が多い。

**SE3010** (第56図) B d 15区、SE3009の南側で検出した。検出面もSE3009と同様SD3021A覆土上面である。上法の直径は1.4×2.5mで平面形は不整長円形を呈する。掘方は南側で一度段がつき、下法は0.8×1.3mの長円形を呈する。検出面からの深さは1.3mを測り、断面形は底面がやや盛り上がったU字形を呈する。覆土は4層に分層できるが1層は、SE3009と同様SD3021Bの覆土の落ち込みと考えられ、Ⅳ様式の土器が出土している。2～4層の各層からは主としてⅡ様式の土器片が出土している。他に土器片製円板、動物遺存体、ヒョウタン等が出土している。ヒョウタンは、井戸使用中の自然堆積と考えられる4層から出土しており、容器か柄杓として利用するために水処理を行っていたものと考えられる。

**SE3011** (第32図) B e 14・15区Ⅳf層上面で検出した。上法の直径は3.5×4.0mで平面形はほぼ円形を呈する。掘方は5段に掘り込まれており、一番下のめだまに相当する部分は直径0.7mの円形を呈する。検出面からの深さは1.2mを測り、断面形は崩れた階段状である。覆土は10層に細分できるが、1層はⅣe層の落ち込みと考えられる。2層を上層、3～8層を中層、9・10層を下層というふうに分層できる。下層にはⅡ様式の土器片が、上・中層にはⅢ様式の土器片が含まれる。土器の総量は整理箱5箱に及ぶ。他にイノシシの骨が比較的多量に出土した。

**SE3013** (第34図) B e・f 13区、後期の土坑SK3052の底面で検出した。本来の掘り込み面はⅣf層上面と考えられる。上法の直径は0.8mを測り平面形はほぼ円形を呈する。下法は直径0.4mのこれも円形である。検出面からの深さは0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は2層に分層でき、遺物は少いが土器片は、Ⅱ様式を含む中期前半のものを主とする。

**SE3014** (第35図) B d 13・14区Ⅳf層上面で検出した。上法の直径は2.0×1.9mで平面形は不整な多角形を呈する。掘方は途中で一度段がつき、下法は直径1.0×0.8mの楕円形を呈す

る。検出面からの深さは0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は3層に分層でき、各層からⅢ様式の土器片が出土した。

**SE3015** (第35図) B d・e13区Ⅷf層上面で検出した。中期の溝SD3032を切っており、上面は後期の溝SD3037によって削られている。上法の直径は1.0×1.5mで平面形は楕円形を呈するが、北側の肩は一部崩れている。下法は0.4×0.7mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は7層に細分でき、1・2層を上層、3・4層を中層、5・6層を下層、7層を最下層というふうに大別できる。最下層は井戸使用中の自然堆積土と考えられる。下層は炭・灰を混入する。中層は灰・炭が互層となって堆積している。上層は人為的な埋土と考えられるが、1層はSD3037の覆土の落ち込みである可能性がある。遺物は中層以下に集中しており、Ⅲ様式からⅣ様式の土器片が出土した。

**SE3016** (第41図) B e11・12区Ⅷf層上面で検出した。上法の直径は1.0×1.4mで平面形は楕円形を呈する。下法は直径0.6mの円形である。検出面からの深さは1.1mを測り、掘方は側壁が崩れてえぐれているが、本来の断面形はU字形であったと思われる。覆土は5層に分層でき、1・2層を上層、3層を中層、4・5層を下層というふうに大別できる。下層は自然堆積土と側壁の崩れ込み土で形成されている。中層は有機質で炭・灰を多く含む。上層は人為的な埋土であるかどうかかわからないが遺物は少ない。遺物は中層以下に集中しており、完形に復元可能な土器を含むⅢ様式からⅣ様式の土器片が出土した。

**SE3017** (第35図) B d10・11区Ⅷf層上面で検出した。上法の平面形は2.5×3.2mの隅丸長方形を呈する。掘形は4段に掘り込まれており、北側の側壁は崩れてえぐれている。中心のめだまに相当する部分は直径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さは1.3mを測り、断面形はU字形を呈するが、本来は階段状だったと思われる。覆土は17層に細分でき、各層は漸時的な堆積状況を示しているが、10～12・15・16層は側壁崩れ込み土である。出土遺物は6層以下に集中する。側壁崩れ込み土はほとんど遺物を含まない。新段階を含むⅢ様式の土器が多量に出土した。他に1個体分の犬の骨が出土したが、これは解体痕跡を有し、ひとかたまりにまとめられた状態であった(図版13)。

**SE3018** (第41図) B e11区Ⅷf層上面で検出した。SK3073と切り合っているが新旧関係は不明である。上法は直径1.1mで平面形はほぼ円形を呈し、下法は直径0.7×0.8mの円形を呈する。検出面からの深さは0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、各層からⅢ様式からⅣ様式の土器片が出土した。

**SE3019** (第41図) B e11区Ⅷf層上面で検出した。SE3018同様SK3073と切り合っているが新旧関係は不明である。上法の直径は1.7×1.5mで平面形は不整形円形を呈し、下法は直径0.7mでやはり円形を呈する。検出面からの深さは0.9mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は8層に細分でき、各層は漸時的な堆積状況を示しているが、1・2層を上層、3～5層を中層、6～8層を下層というふうに大別できる。下層は遺物が集中する。中層は、灰・炭と粘土が

互層となっており、井戸廃絶後の一時期ごみ捨て穴として利用されていたものと考えられる。上層は人為的な埋土であろう。Ⅲ～Ⅳ様式の土器が少量出土した。

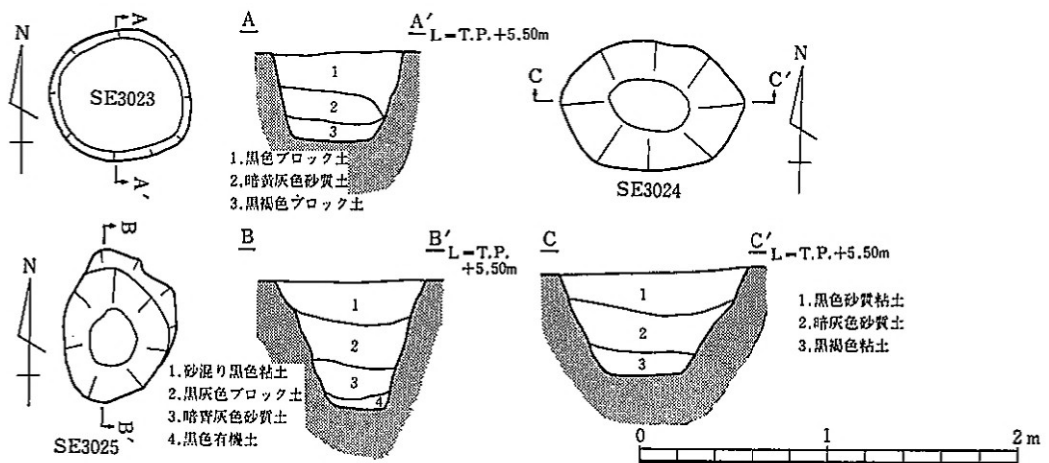
**SE3020** (第49図) B d 06区Ⅷf層上面で検出した。SE3021、SK3099に切られている。上法の直径は約1.4mで平面形は円形と考えられ、下法は直径1.2mで平面形はやはり円形を呈する。検出面からの深さは0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、各層からⅢ様式の土器片が少量出土した。

**SE3021** (第49図) B d・e 06区Ⅷf層上面で検出した。SE3020を切っている。上法の直径は1.3mで平面形は円形を呈し、下法は直径0.4mでやはり円形を呈する。検出面からの深さは0.9mを測り、断面形はひずんだ逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、各層からⅢ様式新段階の土器片が出土した。覆土は乱雑な堆積状況を示しており、全体が一気に埋め戻されたような状態である。

**SE3022** (第49図) B d 05区、NR9001河床で検出した。NR9001がⅩ層まで大きく下刻していることから本来の掘り込み面はずっと上だったと考えられる。上法の直径は0.7×0.8mで平面形は楕円形を呈し、下法は直径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さは0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は6層に分層でき、Ⅲ様式の土器片、イノシシ下顎骨、貝殻等の動物遺存体、種子等の植物遺存体が出土した。遺物から見て本来の掘り込み面はⅧf層上面と推定される。

**SE3023** (第57図) B e 15区Ⅹ層上面で検出した。上法の直径は0.7m、下法の直径は0.6mで平面形はいずれも円形を呈する。検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は3層に分層でき、各層からⅢ様式古段階の土器片が出土した。他に太形蛤刃石斧片、動物遺存体等がみられる。

**SE3024** (第57図) B d・e 14区Ⅹ層上面で検出した。上法の直径は1.0×0.7m、下法の直径



第57図 SE3023・3024・3025平面図・断面図 1/40

は0.4×0.3mで平面形はそれぞれ楕円形を呈する。検出面からの深さは0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は3層に分層でき、時期を決定できるような遺物は出土していないが、覆土の土質がS E 3023と同様であり、掘り込み面も同一であることからS E 3023と同時期と考えられる。

**S E 3025 (第57図)** B d 13区Ⅱ層上面で検出した。上法の直径は0.6×0.8mで平面形は楕円形を呈し、下法は直径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは0.7mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、各層から古段階を含むⅢ様式の土器片が出土した。

### 溝

**S D 3001A、3002A、3003A、3004A、3005A、3006A (第58図～62図)** Aトレンチ全面で検出した集落域を画する環濠と考えられる6条の大溝はいずれもⅡ層上面から掘り込まれており、開削時期はほぼ同時期と考えられる。開削に伴う排土を溝と溝の間に土堤状に積み上げているが、たとえば、S D 3005Aと3006Aとの関係で見ると、S D 3006Aの掘削土が3005Aの掘削土より下に積まれており、S D 3003AはS D 3004Aの掘削土を一部掘り込んで開削されていることから、基本的には南側の大溝から順に開削されたことがわかる。

S D 3001Aは幅約3.5m、Ⅱ層上面からの深さは約1m、南側の土堤上面からの深さは1.4mを測る。断面形は逆台形を呈する。

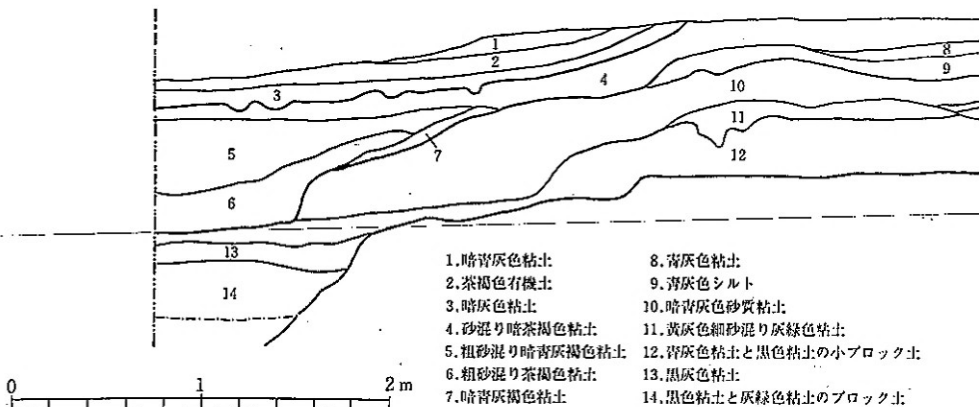
S D 3002Aは幅約3.5m、Ⅱ層上面からの深さは約0.9m、南北の土堤上面からの深さは1.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。

S D 3003Aは幅約4.7m、Ⅱ層上面からの深さは約1m、南北の土堤上面からの深さは1.3mを測る。断面形を逆台形を呈する。

S D 3004Aは幅約3.8m、Ⅱ層上面からの深さは約1.1m、南北の土堤上面からの深さは1.4mを測る。断面形は逆台形を呈する。

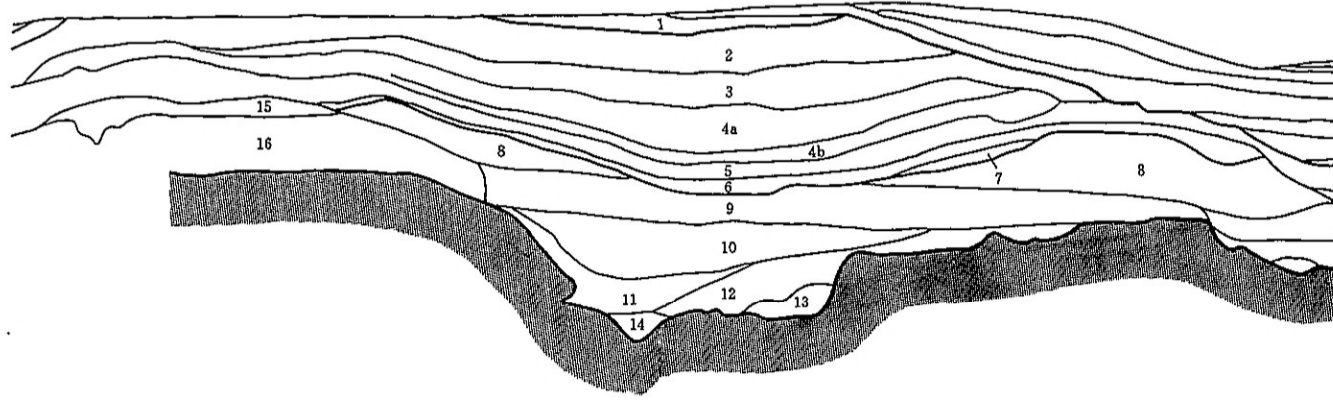
S D 3005Aは幅約5.2m、Ⅱ層上面からの深さは約0.9m、南北の土堤上面からの深さは1.3m

L=T.P.+6.00m —



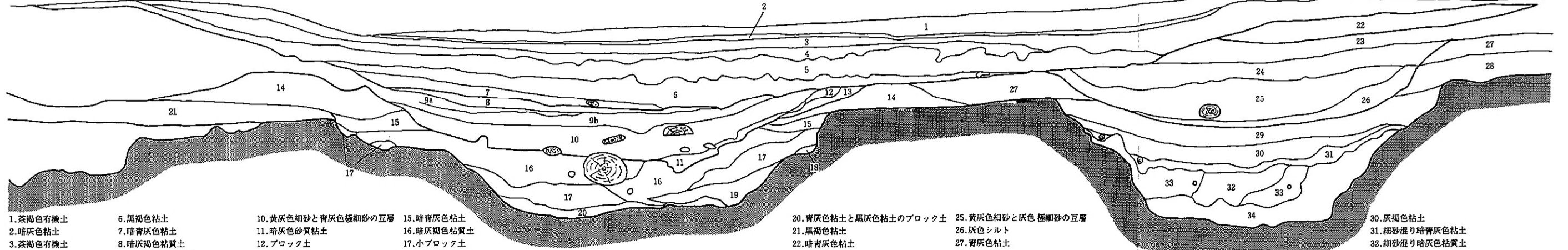
第58図 S D 3001断面図 1/40

T.P.+6.00m



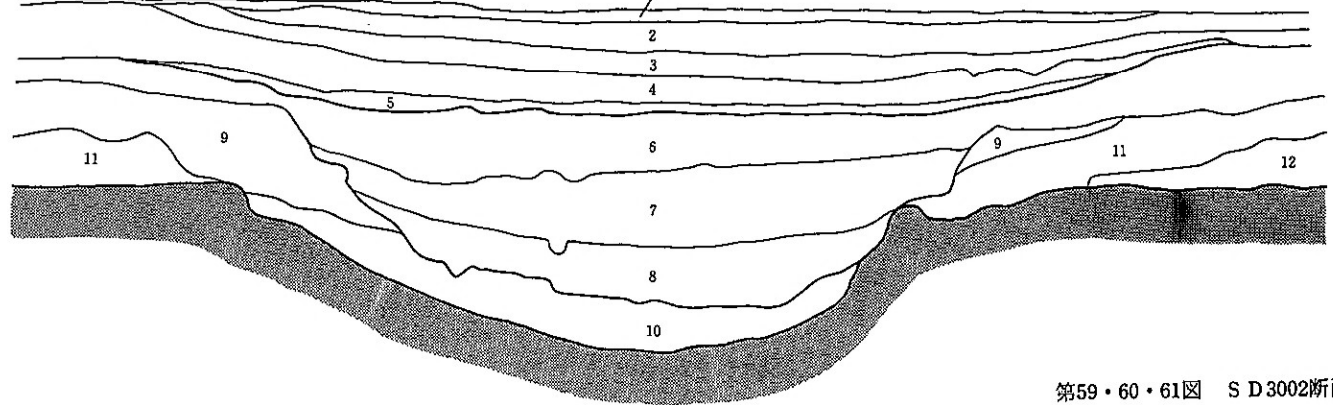
- 1. 暗青灰色粘土
- 2. 暗茶褐色粘土
- 3. 黄灰色細砂混り青灰色粘土
- 4a. 黄灰色細砂と青灰色シルトの互層
- 4b. 黄灰色細砂
- 5. 青灰褐色砂質粘土
- 6. 細砂混り青灰色粘土
- 7. 黒灰色シルト
- 8. 暗青灰色粘土
- 9. 黒褐色粘土
- 10. 黒灰色粘土
- 11. 灰綠色シルトブロック混り黒色粘土
- 12. 灰綠色シルトと黒色粘土のブロック土
- 13. 暗灰色ブロック土
- 14. 灰綠色シルト・黒色粘土・茶褐色のブロック土
- 15. 黄灰色細砂混り灰綠色粘土
- 16. 青灰色シルトと黒色粘土の小ブロック土

T.P.+6.00m

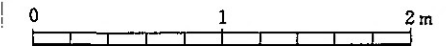


- |               |                    |                       |                             |
|---------------|--------------------|-----------------------|-----------------------------|
| 1. 茶褐色有機土     | 6. 黒褐色粘土           | 10. 黄灰色細砂と青灰色極細砂の互層   | 15. 暗青灰色粘土                  |
| 2. 暗灰色粘土      | 7. 暗青灰色粘土          | 11. 暗灰色砂質粘土           | 16. 暗灰褐色粘質土                 |
| 3. 茶褐色有機土     | 8. 暗灰褐色粘質土         | 12. ブロック土             | 17. 小ブロック土                  |
| 4. 暗灰褐色粘土     | 9a. 暗茶褐色砂質粘土       | 13. 青灰色粘土             | 18. 黒灰色粘土                   |
| 5. 細砂混り灰褐色粘質土 | 9b. 黄灰色細砂混り青灰褐色砂質土 | 14. 黒色粘土ブロック混り青灰色粘土   | 19. 有機質ブロック土                |
|               |                    | 20. 青灰色粘土と黒灰色粘土のブロック土 | 25. 黄灰色細砂と灰色極細砂の互層          |
|               |                    | 21. 黒褐色粘土             | 26. 灰色シルト                   |
|               |                    | 22. 暗青灰色粘土            | 27. 青灰色粘土                   |
|               |                    | 23. 暗青灰色粘土            | 28. 青灰色粘土                   |
|               |                    | 24. 黄灰色細砂混り暗青灰色粘質土    | 29. 暗青灰色粘土                  |
|               |                    |                       | 30. 灰褐色粘土                   |
|               |                    |                       | 31. 細砂混り暗青灰色粘土              |
|               |                    |                       | 32. 細砂混り暗灰色粘質土              |
|               |                    |                       | 33. 有機質小ブロック土               |
|               |                    |                       | 34. 青灰色シルト・青灰色粘土・黒色粘土のブロック土 |

T.P.+6.00m



- 1. 茶褐色有機土
- 2. 暗灰色粘土
- 3. 暗青灰色有機土
- 4. 暗青灰色粘土
- 5. 暗青灰色有機土
- 6. 暗青灰色粘土
- 7. 黄灰色細砂混り青灰色細砂
- 8. 細砂混り暗灰色粘質土
- 9. 青灰色粘土
- 10. 青灰色粘土と黒灰色粘土のブロック土
- 11. 青灰色粘土と黒色粘土のブロック土
- 12. 黒色粘土小ブロック混り暗青灰色粘土



第59・60・61図 S D3002断面図、S D3003・3004断面図、S D3005断面図 1/40

を測る。断面形はU字形を呈する。

S D 3006Aは幅約5.0m、Ⅱ層上面からの深さは約0.9m、北側の土堤上面からの深さは1.5mを測る。断面形は逆台形を呈する。

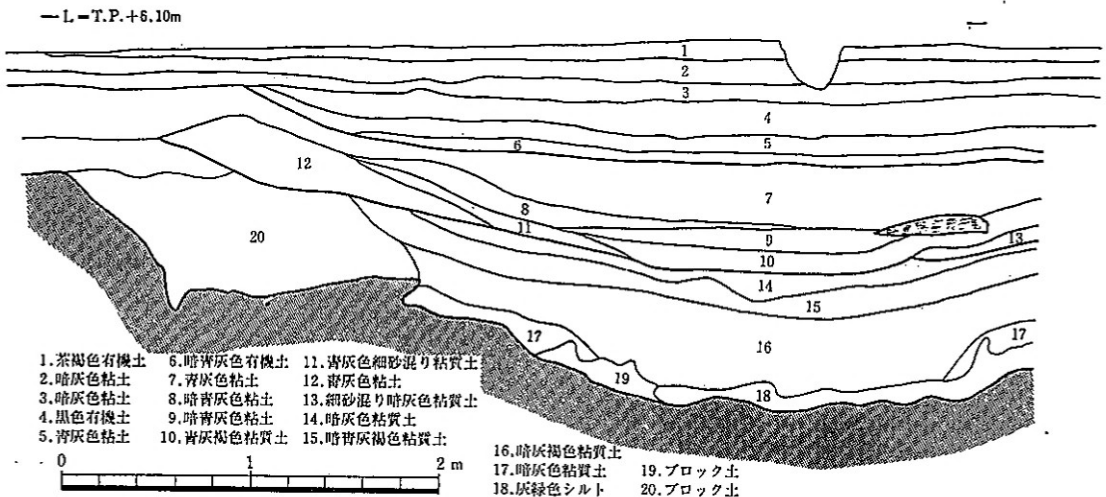
覆土は溝によって4～6層に細分することができるが、6条ともほぼ同様の堆積状況を示しており、上層、中層、下層、最下層の4層に大別できる。最下層は大溝開削時の攪乱土で、Ⅱ層に由来する青灰色粘土～シルトと黒色粘土がブロックをなしており、これは肩から内法面に流入する土堤の積み土と同様の組成である。下層は周辺からの流入土であるブロック土とわずかな流れによるとと思われる暗灰色粘質土～シルトで、植物遺体や微小な炭化材を多く含む。中層は灰褐色粘土で植物遺体が互層となって堆積しており、この時点ではほとんど水流はなく滞水した状態だったと考えられる。最上層は暗青灰色粘土で植物遺体を含んでいる。この層は土堤上に堆積する青灰色粘土と同時異層になることから、この時点では大溝はほぼ埋没しきって土堤上も冠水を繰り返していたことがわかる。次節で報告するが、ここまで埋没した状態で後期前半に掘りなおしが行われている。

出土遺物は6条とも極めて少ないが、S D 3004Aの下層からⅣ様式の完形の小形壺が1点出土している。他はⅡ～Ⅳ様式の土器の細片が少量出土したにとどまる。

S D 3007、3009、3011、3012（第63図～65図） Bトレンチ19～25ライン付近にかけて検出した中期の集落域を画する環濠と考えられる大溝群である。S D 3007が後期の環濠S D 3008に大きく切られて掘り込み面が確認できないが、他は3条ともⅡf層掘り込みで、S D 3007も同様であると推定できる。方向は4条とも北東から南西方向でほぼ平行している。

S D 3007はBトレンチ北端で底に近い部分をわずかに検出したにとどまる。

S D 3009は北側の肩全部と南側の肩の一部をそれぞれ後期の環濠S D 3008と3001によって切られており、幅は不明である。掘り込み面からの深さは約1.2mで、断面形は逆台形を呈する。



第62図 S D 3006断面図 1/40

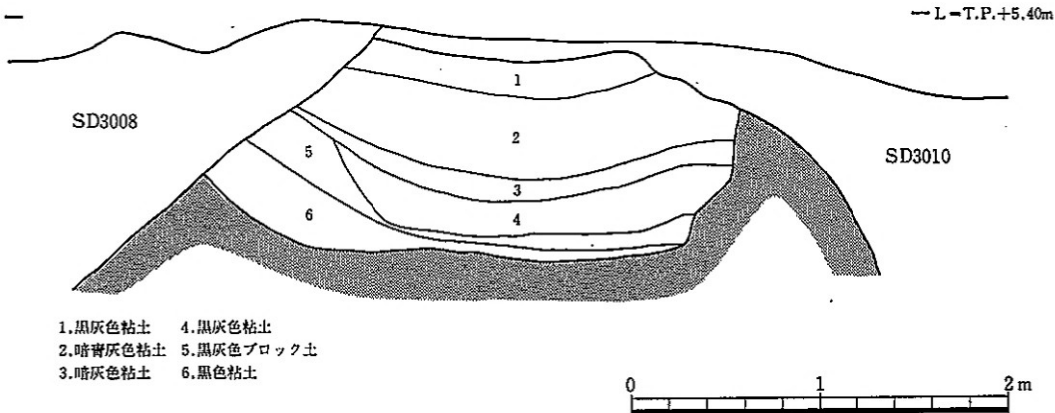
S D3011は中期の井戸S E3001を切っている。幅は約3.8m、掘り込み面からの深さは約1.3mを測り、断面形はV字形を呈する。

S D3012は中期の井戸S E3006を切っている。幅は約4.7m、掘り込み面からの深さは約1.5mを測り、断面形は途中で段のつく逆台形を呈する。

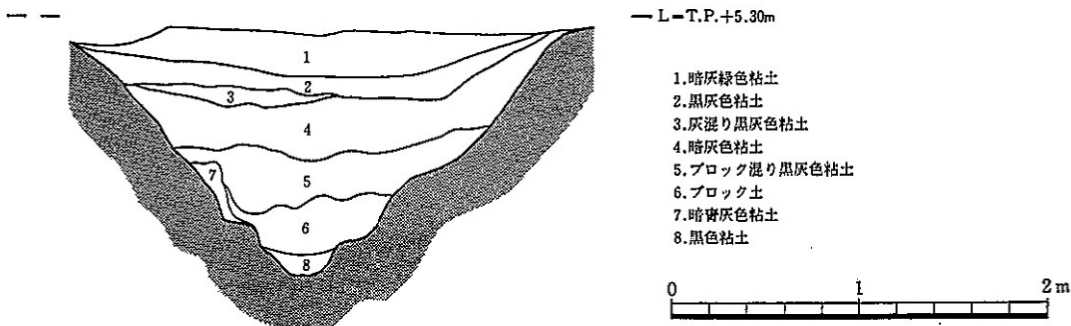
覆土は4条ともかなり共通した堆積状況を示している。溝によって8～10層に細分できるが、上層、中層、下層に大別することができる。下層は大溝開削時の攪乱土で、Ⅱ層に由来する青灰色シルトと黒色粘土のブロック土である。遺物の包含量は多くない。中層は青灰色シルトのブロックを含む黒色ないし黒灰色粘土で、稜鉄鉱の小塊を多量に含み、土器、木製品、獣骨、炭化材等多量の遺物を包含する。上層は大溝埋没後の窪みに堆積したと考えられる黒灰色ないし暗灰色粘土で、灰、炭化材を多く含み、中・後期の土器片を多量に包含する。

溝ごとの出土遺物の傾向をもう少し詳しく見てみると、S D3007は下層の覆土しか残っておらず、遺物も少ないため土器型式も中期としかいいようがない。S D3009中層の土器はほぼⅣ様式に限定される。S D3011出土の土器はⅢ様式新段階からⅣ様式、S D3012出土の土器はⅢ様式古段階から新段階の土器である。

S D3019 (付図2) B d18～19区Ⅷf層上面で検出したS字状に蛇行する小溝で、幅0.5m、

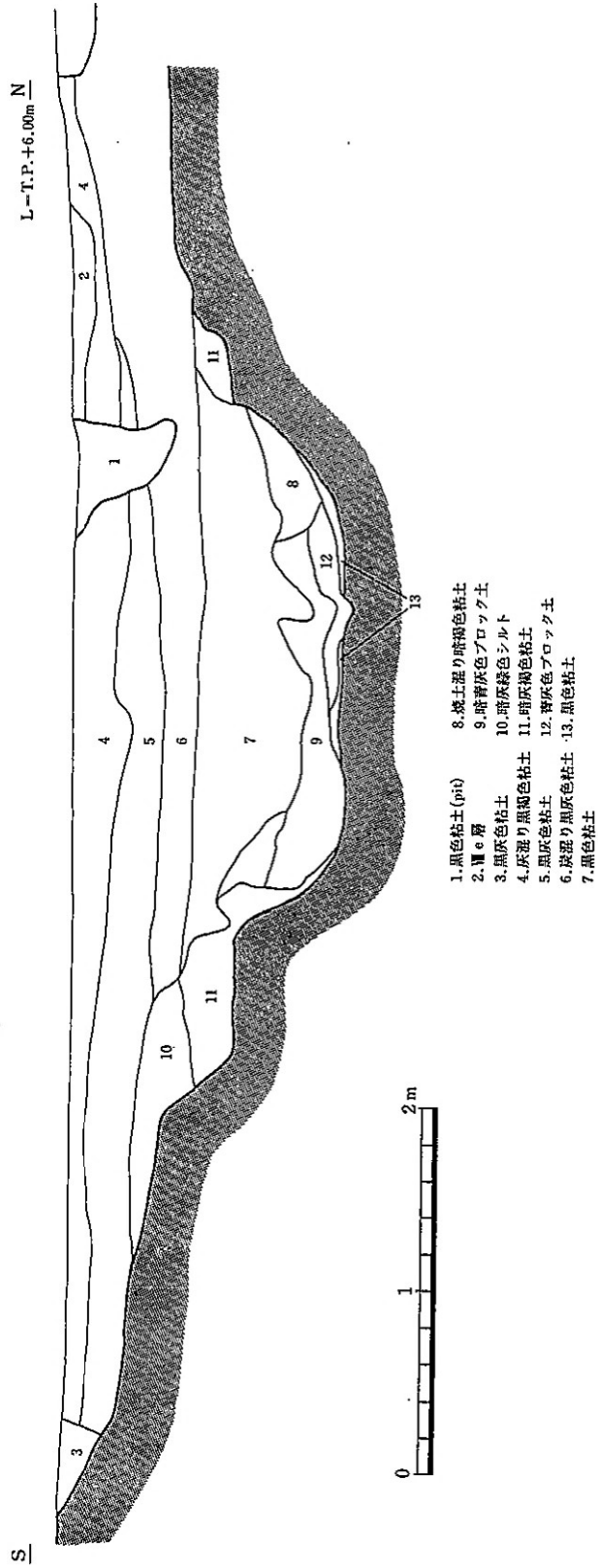


第63図 S D3009断面図 1/40



第64図 S D3011断面図 1/40





第65図 S D 3012断面図 1/40

深さ0.1mを測り、断面形はU字形を呈する。中期後半の土器片が少量出土した。

**S D3020** (付図2) B d・e 18~19区Ⅷf層上面で検出した南々東から北々西方向に流れる幅広く浅い溝で、S D3019に切られ、環濠S D3012を切っている。幅1.8m、深さ0.7mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。延長約8m分を検出した。Ⅳ様式の土器片が出土した。

**S D3021・A** (付図2) B d・e 11~16区Ⅷ層上面で検出した南々西から北々東に向かって西にカーブしながら流れる深い溝で、幅1.3m、深さ0.7mを測り、断面形はV字ないし逆台形を呈する。延長26m分を検出した。S E3024、S E3025に切られている。覆土は暗青灰色砂質土でⅡ様式の土器が多量に出土した。

**S D3025** (付図2) B d 17区Ⅷf層上面で検出した北東から南西方向の小溝で、幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形はU字形を呈する。延長約1m分を検出した。覆土から中期の土器片少量が出土した。

**S D3026** (付図2) B e 13~15区Ⅷf層上面で検出した南北方向で西にカーブする小溝で、中期の井戸S E3011に切られている。幅0.4m、深さ0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。延長15mを検出し、覆土から中期の土器片少量が出土した。

**S D3027** (付図2) B e・f 15区Ⅷf層上面で検出した北東から南西方向の小溝で、幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長3.6m分を検出し、中期の土器片数片が出土した。

**S D3029** (付図2) B e 14~15区Ⅷf層上面で検出した南北小溝で、幅0.5m、深さ0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。後期の井戸S E3012に切られている。延長約4m分を検出し、Ⅲ様式の土器が出土した。

**S D3031・3032** (付図2) B d 13区Ⅷf層上面で検出した北東から南西方向の小溝で、ほぼ平行しているが切り合い関係は明確でない。S D3031は幅1.1m、深さ0.2mを、S D3032は同じく0.4m、0.1mを測り、断面形はともに逆台形を呈する。S D3031は延長7.5m分を、S D3032は同じく3m分を検出し、Ⅲ~Ⅳ様式の土器が出土した。

**S D3034** (付図2) B e 13区Ⅷf層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長4m分を検出し、覆土からⅢ様式の土器片が出土した。

**S D3035** (付図2) B e・f 13区Ⅷf層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、S D3035と平行している。幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約3m分を検出し、覆土からⅢ~Ⅳ様式の土器片が出土した。

**S D3036** (付図2) B f 12区Ⅷf層上面で検出した北東から南西方向の小溝で、幅0.5m、深さ0.1mを測り、断面形はU字形を呈する。延長1.8m分を検出し、覆土からⅢ~Ⅳ様式の土器片が少量出土した。

**S D3038・3039** (付図2・第41図) B d・e 11区Ⅷf層上面で検出した東北東から西南西方

向の小溝ではほぼ平行している。S D3038は幅0.6m、深さ0.3mを測り、断面形はV字ないしU字形を呈する。S D3039は幅1.1m、深さ0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。2条とも延長約7m分を検出し、覆土からⅢ～Ⅳ様式の土器が出土した。

**S D3041** (付図2) B d 10区Ⅷ f 層上面で検出した南東から北西方向の小溝で幅0.4m、深さ0.1mを測り断面形は逆台形を呈する。延長約1m分を検出し、覆土から中期の土器片少量が出土した。

**S D3042** (付図2) B d・e 10区Ⅷ f 層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。延長1.3m分を検出し、Ⅱ様式を多く含む中期の土器片が出土した。

**S D3043** (付図2) B e 10区Ⅷ f 層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、S D3043と平行している。幅0.4m、深さ0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。延長2.2m分を検出し、覆土から土器片製円板、中期の土器が出土した。

**S D3044** (付図2) B d・e 09区Ⅷ f 層上面で検出した東西溝で、幅1.2m、深さ0.3mを測り、断面形はU字ないし逆台形を呈する。延長約5m分を検出し、Ⅱ～Ⅲ様式の土器片が少量出土した。

**S D3045** (付図2) B d・e 08～09区Ⅷ f 層上面で検出した南々東から北々西方向の小溝で、幅0.4m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長3.2m分を検出し、覆土から中期の土器片が出土した。

**S D3046** (付図2) B e 08区Ⅷ f 層上面で検出した北東から南西方向の小溝で、幅0.5、深さ0.2mを測り断面形は逆台形を呈する。延長4m分を検出し、Ⅱ様式を含むⅢ様式の土器が少量出土した。

**S D3047** (付図2) B e 08区Ⅷ f 層上面で検出した北東から南西方向の小溝で、幅0.6m、深さ0.1mを測り、断面は逆台形を呈する。延長4m分を検出し、覆土からⅢ～Ⅳ様式の土器片が出土した。

**S D3049** (付図2) B d 06区Ⅷ f 層上面で検出した東西小溝で、幅0.2m、深さ0.1mを測り断面形はU字形を呈する。延長1.2m分を検出し、中期の土器が少量出土した。

**S D3050** (付図2) B e 06区Ⅷ 層上面で検出した南西から北東方向の溝で、幅1.0m、深さ0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は暗青灰色砂質土でⅡ様式の土器が多量に出土した。延長2.8m分を検出した。

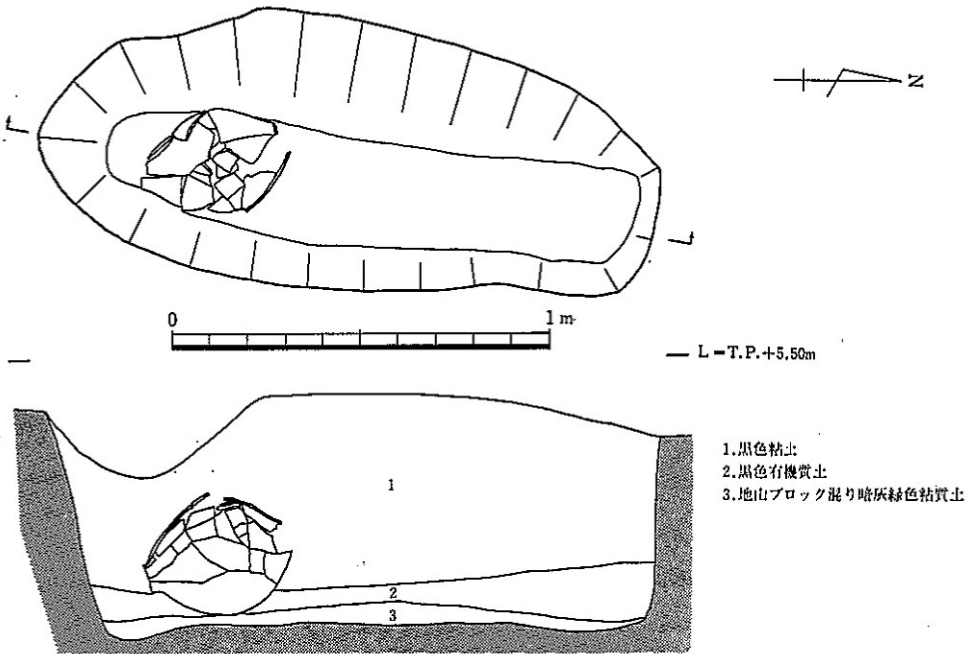
**S D3051** (付図2) B d・e 04～05区Ⅷ 層上面で検出した南西から北東方向の溝で、旧平野川NR9001による削平のため底の一部が残るのみである。幅1.7m、深さ0.1mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。延長約8m分を検出し、覆土からⅡ様式の土器が多量に出土した。

#### 墓

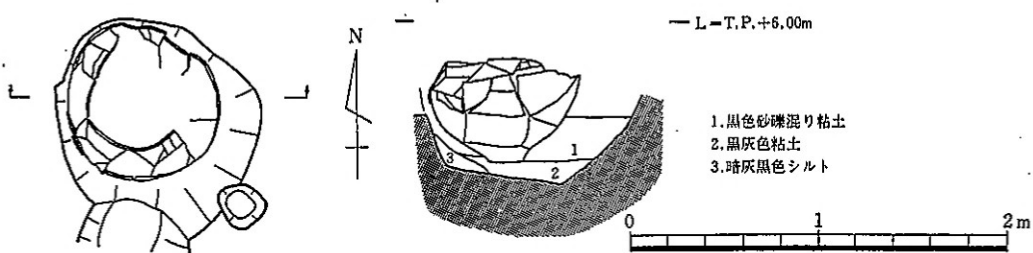
**S X3001** (第66図) B d 16区Ⅷ f 層上面で検出した壺棺墓で、一部をS K3023によって切ら

れている。掘方の上法は $0.8 \times 1.6$ mの長円形を呈し、下法は $0.3 \times 0.9$ mのやはり長円形である。検出面からの深さは $0.6$ mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分層できる。1・2層は埋め戻し土と考えられるが、3層はⅨ層がブロック状になっており、掘り上げた土の残りかあるいは掘形底面を平坦に整形するための土と考えられる。壺棺に使用されている土器は高さ約 $34.2$ cm、口縁部径 $9.8$ cm、胴部最大径 $34.5$ cmを測る。口縁部の立ち上がりは短く、球形の胴部をもつ。口縁部から胴部中ほどにかけて流水文を施したⅡ様式の無頸壺形土器である。掘方の南隅に寄った3層の上面に、口縁部をやや下に向けた南向き横位で納められていた。人骨は残存していない。

**S X 3003 (第67図)** B d 11区Ⅷ f層上面で検出した壺棺墓であるが、本来の掘り込み面はⅧ dないし e層上面と考えられる。掘方は調査時にかなり土を削ってしまっているが、検出面での規模と形状は、上法が $0.5 \times 0.6$ mの円形、下法は直径 $0.3$ mの円形を呈する。現存する土器の上端から掘方底部までの深さは $0.35$ mを測る。土器は上半部を後期の遺構によってこわさされてい



第66図 S X 3001平面図・断面見通し図 1/20



第67図 S X 3003平面図・断面見通し図 1/20

るため、本来の掘方はもっと深かったものと思われる。埋土は3層に分層でき、1層は埋戻し土、2・3層は掘方底面を平坦に整形するための土層と考えられる。壺棺に使用されている土器は、胴部最大径約40cm、底径10cmを測り、胴部中ほどにクシ描き波状文を施すⅡ様式の壺形土器である。掘方のやや北西隅に寄った3層上面に正立位で納められていた。底部内面には新生児骨が遺存していた。

#### 杭列

**S X3006** (第22図) A d 09区Ⅱ層上面で検出した杭列である。直径3～5cmの丸木杭が平行して2列に打ち込まれている。各杭列間の間隔は約0.8mである。杭列の方向は東で北に約25度振っている。杭の総数は26本、延長3m分を検出した。S K3001との新旧関係は不明であるが、この杭列検出面の上にS D3001A、3002Aの掘り上げ土と考えられる土層が乗っていることからこれらの環濠よりも古い時期に構築されたものであることがわかる。杭列の方向と環濠の方向がほぼ一致することからこれらの環濠が掘削される以前に、柵のような施設があったものと推定される。(広瀬)

#### 第2項 C・Dトレンチ

##### 土坑

**S K3129** (第68図) f 40区の地山面で検出された。北側はN R3001の削平によって損壊しており、西側は調査区外に続く。東側及び南側の一部を検出したにすぎないため、全体の規模・形態は明らかでない。現状では、東西1.75m以上、南北4.25m以上、深さ1.9mをはかり、摺鉢状を呈する。坑底中央から、平面形が楕円形を呈し、南北0.6m、東西0.2m以上、深さ0.1mをはかる土坑が1個検出された。また、北側には、中段にテラス状の平坦面が存在する。埋土は4層に分かれ、上層には黒褐色粘土層、黒灰色粘土層が、下層には灰黒色粘質シルトあるいは灰青色シルトと中・細砂または粗砂・細礫との互層が堆積していた。下層となる埋土の状況からすれば、溝状の遺構であった可能性もある。第Ⅱ様式の土器片や太型蛤刃石斧・サヌカイト片などが出土した。なお、北東端付近の一部をS E3026に切られている。

**S K3130** (第69図) f 40区の地山面で検出された。東南側はS D3072に切られ損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-19°-Eを示す。本来の規模は明らかでないが、現状では、長軸2.8m以上、短軸1.55m以上、深さ0.25～0.3mをはかる。北壁・西壁は2段掘りとなっており、坑底には若干の凹凸がある。埋土は細礫及び炭化物混りの黒青灰色シルト層、黒青灰色シルト・青灰色シルト・青灰色粘土の混合層の2層である。中期の土器片が出土した。

**S K3131** (第68図) f 40区の地山面で検出された。S K3130と重複しており、S K3130によって上部を削平されている。平面形は不整形で、主軸方向はほぼ南北を示す。長軸2.25m、短軸1.4m、深さ0.2m前後をはかる。坑底は3段に分かれる。各段の上面はほぼ平坦である。埋土は黒色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。中期の土器片が出土した。なお、東北隅部のピ

ットは本土坑に伴うものではない。

**SK3132** (第69図) f 39区の地山面で検出された。東側はSD3072に切られ損壊している。平面形はやや不整な円形を呈する。径0.55 m前後、深さ0.2 m程をはかる。中期の土器の細片が出土した。なお、SK3133との前後関係は明らかでないが、SD3071の南端を切っていることは確認しえた。

**SK3133** (第69図) SK3132の西に接して位置し、地山面で検出された。SD3071を切っているが、SK3132、SD3073との前後関係は明らかでない。本来の規模・形態は明らかでないが現状では、東西0.9 m以上、南北0.8 m以上、深さ0.2 m前後をはかる。坑底はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

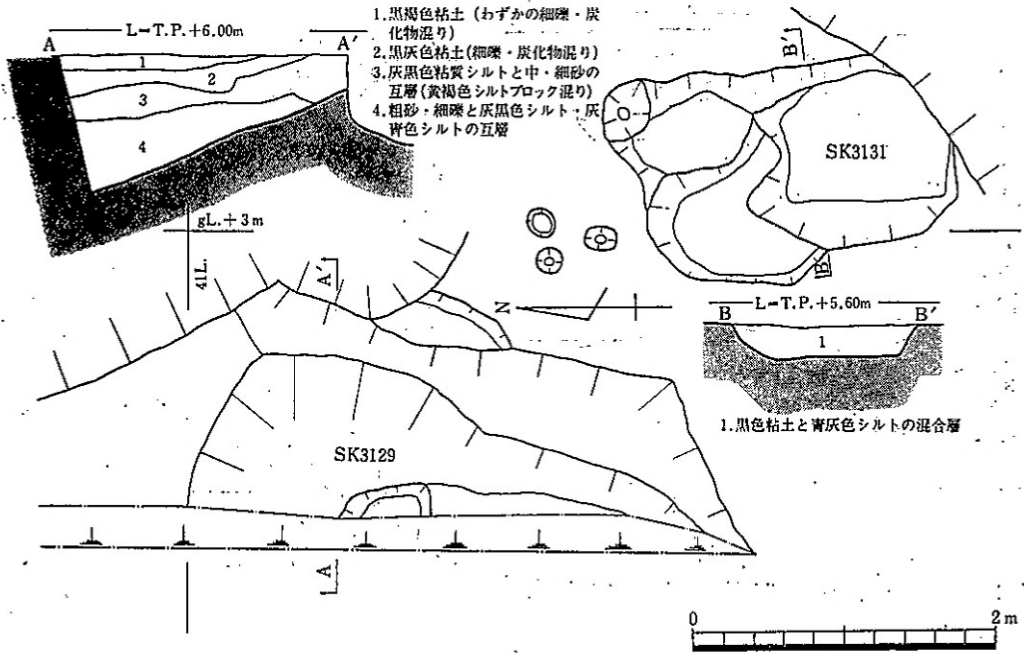
**SK3135** (第70図) e 39区の地山面で検出された。北側は40ラインのサブトレンチのために損壊している。平面形は楕円形状を呈していたと推定される。本来の規模は明らかでないが、現状では、長径0.75 m、短径0.45 m以上、深さ0.15 m前後をはかる。坑底には若干の凹凸があり、北側に緩く傾斜している。埋土は黒灰色粘土層、青灰色シルトと黒灰色粘土の混合層の2層であるが、2つの層の間に厚さ3 cm程の炭層が挟在した。遺物は出土しなかった。

**SK3136** (第70図) e 39区の地山面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-30°-Wを示す。長軸1.9 m、短軸1.25 m、深さ0.2 mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒灰色シルト及び黒灰色粘土と青灰色シルトの混合層2層と、黒青灰色粘土層の3層である。中期の土器片が出土した。

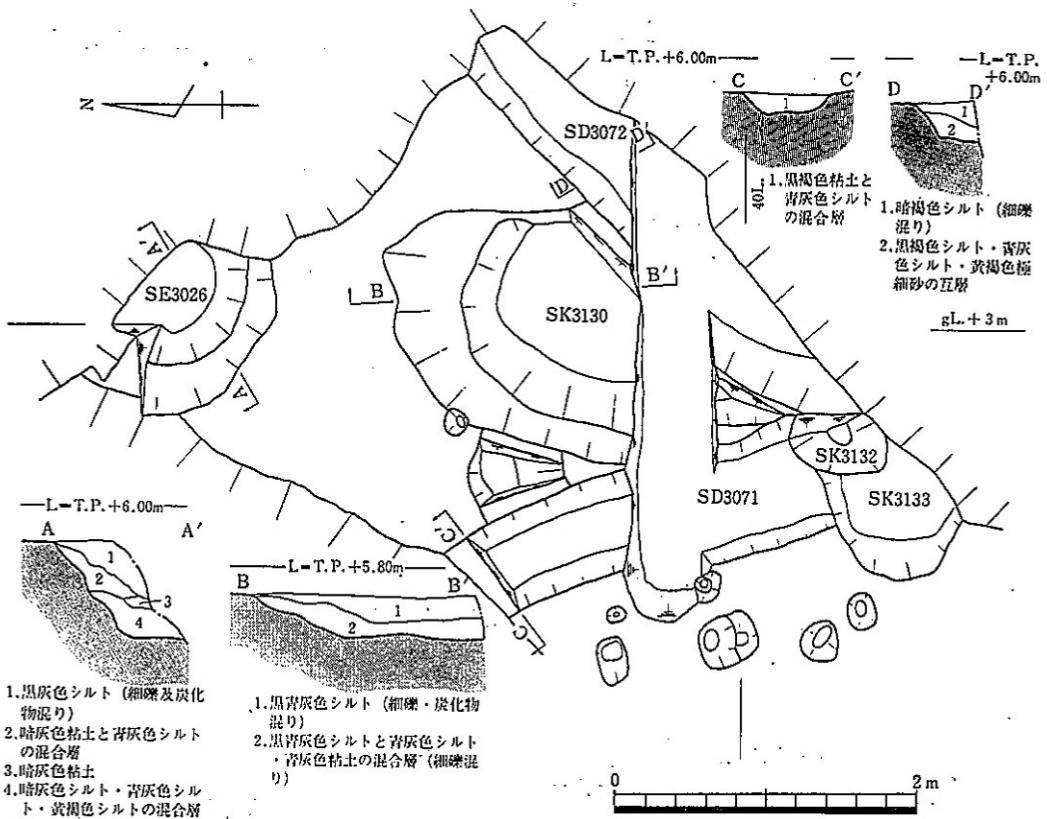
**SK3137** (第71図) e 39区の地山面で検出された。上部をSK3136によって削平されている。平面形は不整形で主軸方向はN-65°-Eを示す。長軸1.15 m以上、短軸0.75 m、深さ0.1~0.15 mをはかる。坑底はほぼ平坦である。西端部で径0.2 m以上、深さ0.15 mのピット1個が検出された。埋土は暗灰色シルトと青灰色シルトの混合層1層である。中期の土器細片が出土した。

**SK3138** (第70図) e 39区の地山面で検出された。東側は調査区外に続く。平面形は不整形である。全体の規模は明らかでないが、現状では、南北1.7 m以上、東西0.75 m以上、深さ0.25 mをはかる。全体に2段掘り状をなし、西南隅部の中段では、平面形が楕円形状のピットが検出された。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒灰色シルトの青灰色シルトの混合層、黒青灰色粘土層、黒灰色粘土と青灰色シルトの混合層の3層で、中・下層には多くの炭化物が混入していた。中期の土器片が出土した。

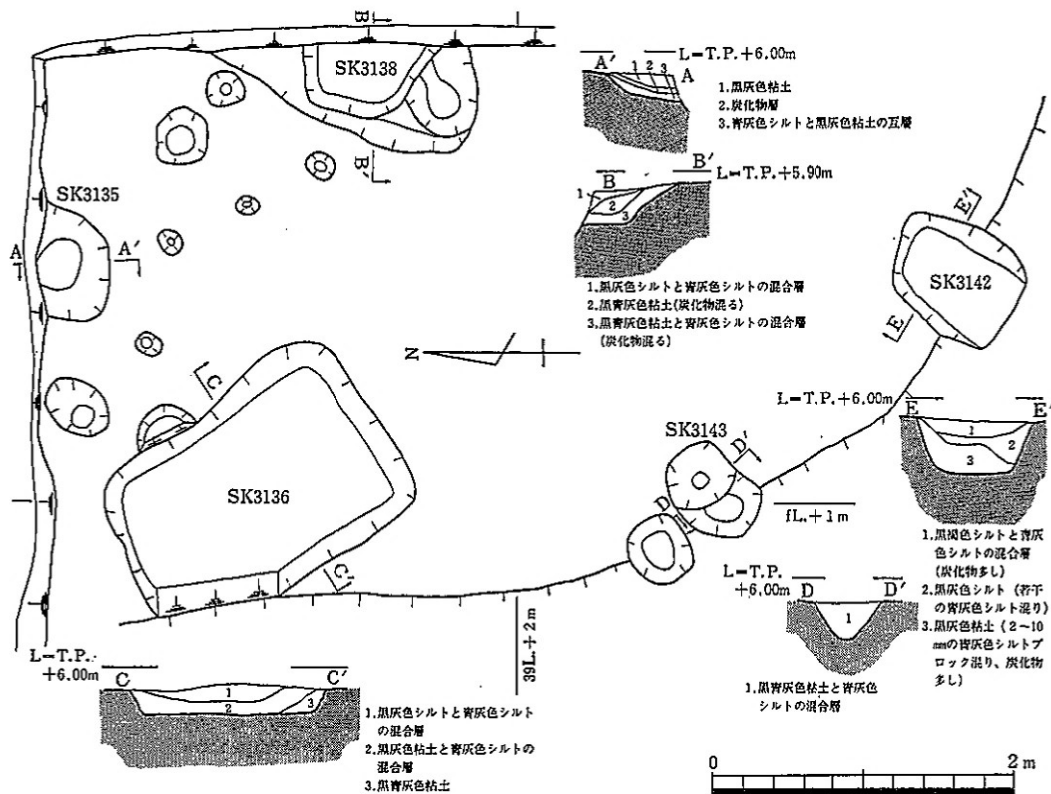
**SK3140** (第71図) e 38・39区の地山面で検出された。北側の一部がSK3136に切られ、また、東南の一部はサブトレンチによって、それぞれ損壊している。さらに、西南部ではSK3141・3142の一部を削平している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-31°-Wを示す。長軸4.25 m、短軸2.2~2.3 m、深さ0.2 mをはかる。坑底は平坦で、壁の立ち上がりも垂直に近い。埋土は黄褐色シルトブロック混りの灰黒色シルト層、灰黒色シルトと黄褐色シルトの混合層、暗灰色粘質シルト層の3層であるが、中層と下層の間には焼土の混る灰層が挟在し、また、



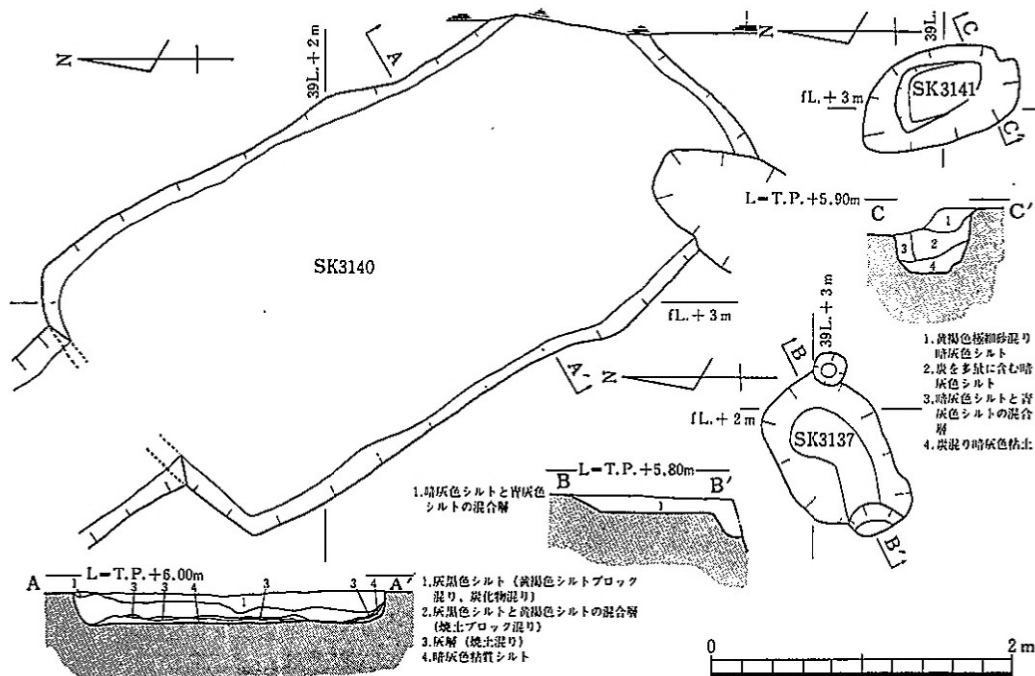
第68図 SK3129・3131平面図・断面図 1/50



第69図 SK3130・3132・3133、SE3026、SD3071・3072平面図・断面図 1/50



第70図 S K 3135・3136・3138・3142・3143平面図・断面図 1/60



第71図 S K 3137・3140・3141平面図・断面図 1/60



上層には炭化物が、中層には焼土ブロックが混っている。中期の土器片が出土した。

**SK3141** (第71図) e 38区から39区にかけての地山面で検出された。北側の上部をSK3140によって削平されている。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを示す。長径1.05m、短径0.65m、深さ0.45m前後をはかる。坑底は平坦であるが、南から北にわずかに傾斜している。北壁は2段掘り状をなす。埋土は4層に分かれるが、主体は暗灰色シルトあるいは粘土である。中層には多量の炭化物が混る。

**SK3142** (第70図) e 38区の地山面で検出された。SK3140に上部を削平されている。また、SD3074と切合っているが、前後関係は明らかでない。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-27°-Eを示す。長軸0.9m以上、短軸0.75m、深さ0.35mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルトと青灰色シルトの混合層、黒灰色シルト層、青灰色シルトブロック混り黒灰色粘土層の3層で、上層と下層には多量の炭化物が混る。土坑中央付近の、坑底から浮いた位置から、第Ⅲ様式の台付水差形土器(204)が出土した。

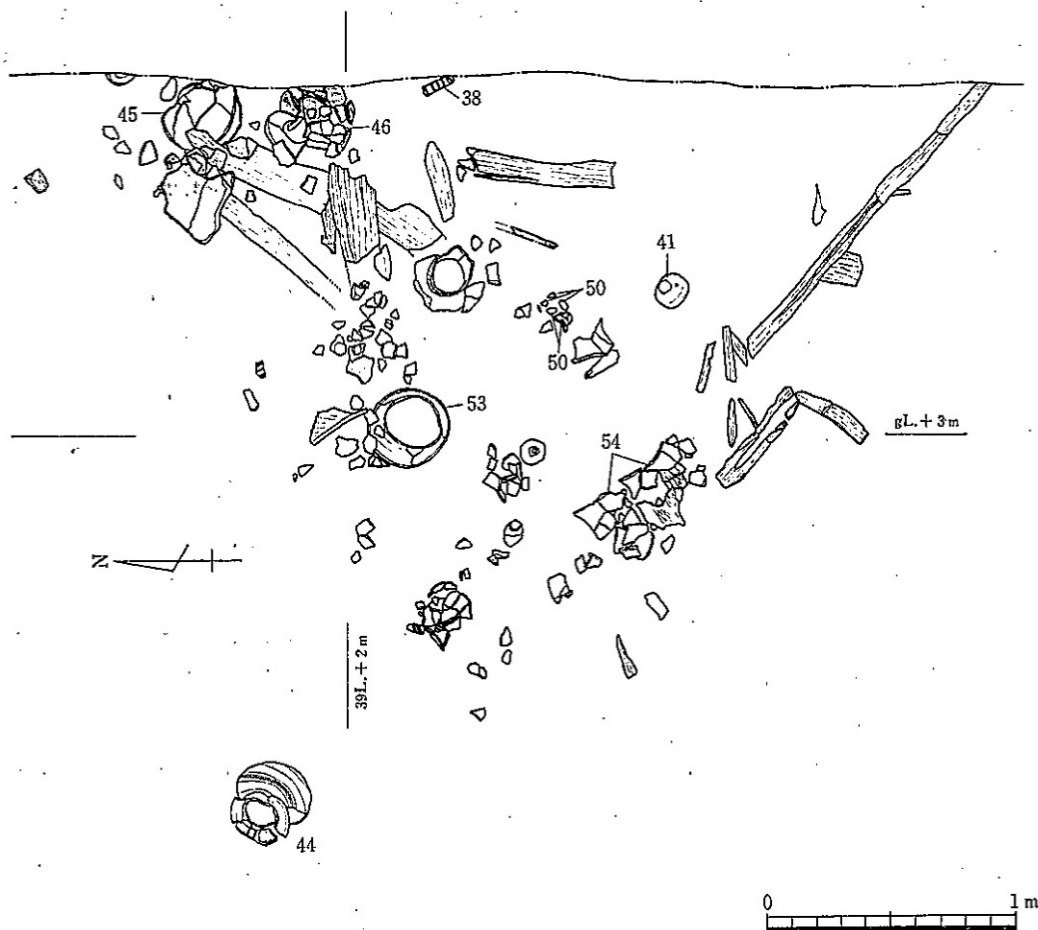
**SK3143** (第70図) e 39区の地山面で検出された。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はN-49°-Eを示す。2つのピットが切合ったような形態で、長径0.7m、短径0.45m、深さ0.25m前後をはかる。埋土は黒灰色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。中期の土器片が出土した。

**SK3144** (第72・73図) e・f 39区の地山面で検出された。土層観察の結果から、北側でSD3073を切り、南側がSD3074に切られていることは明らかであるが、東側を除いて本来の形態を明らかにできたところはない。ただし、調査区西端近くに認められる東西方向から南北方向へと屈曲する段が、西壁の名残りである可能性は考えられる。このことは、本土坑の埋土のなかで中・下層(21~26)層の広がり、この段の付近で終わっていることから推定出来るものである。北壁はまったく検出できなかったが、SD3073の北壁は良好に残っており、本土坑が、それより南側で終わっていたことは確実である。以上のことから、本土坑は、平面形が不整形で、東西4.5m以上、南北3~5m程度の大きさのものと推定される。深さは東側で1.2m程をはかる。坑底は平坦であるが、中央部に向かってわずかに傾斜している。さらに、中央やや南寄りの坑底は、長軸3.5m以上、短軸1.9mほどの範囲で、1段低くなっている。この部分の深さは0.1~0.2mをはかる。底面は平坦である。埋土は暗灰黄色シルト・青褐色粘土・淡黄色極細砂・灰緑色粘土・緑灰色粘土等からなり、7層に分かれる。上層に暗灰黄色シルト層、青褐色粘土層の堆積がみられるほかは、いずれも混合層である。壺形土器(39~47・53)、細頸壺形土器(37・38)、鉢形土器(48・49)、台付鉢形土器(50)、甕形土器(52・54)等の第Ⅲ様式古段階の土器40個体以上と、石器・石片・木片・獣骨等が一括出土した。出土遺物には完形ないし半完形の土器を多数含んでおり、また、角をそなえた鹿の頭骨(図版95)などの特異なものも出土している。各遺物は、土坑内に投棄されたような状態で出土しているが、出土遺物のすべてが同時期の投棄の結果によるものか否かは必ずしも明らかにできていない。各遺物の出土位置にある程度の拡散とまと

まりが認められるのであり、今後の検討が必要と考えられる。

**SK3146 (第74図)** e37区東辺の地山面で検出された。東側は調査区外に続き、南側はSD3076に切られ損壊している。北側ではSD3077と切合っているが、前後関係は明らかにできなかった。全体の規模・形態は明らかでないが、現状では、南北4.1m以上、東西1.2m以上、深さ0.2~0.25mをはかる。西壁は一部2段掘り状となっている。坑底は東に向かって緩く傾斜している。埋土は黒褐色粘土層1層である。中期の土器片が出土した。

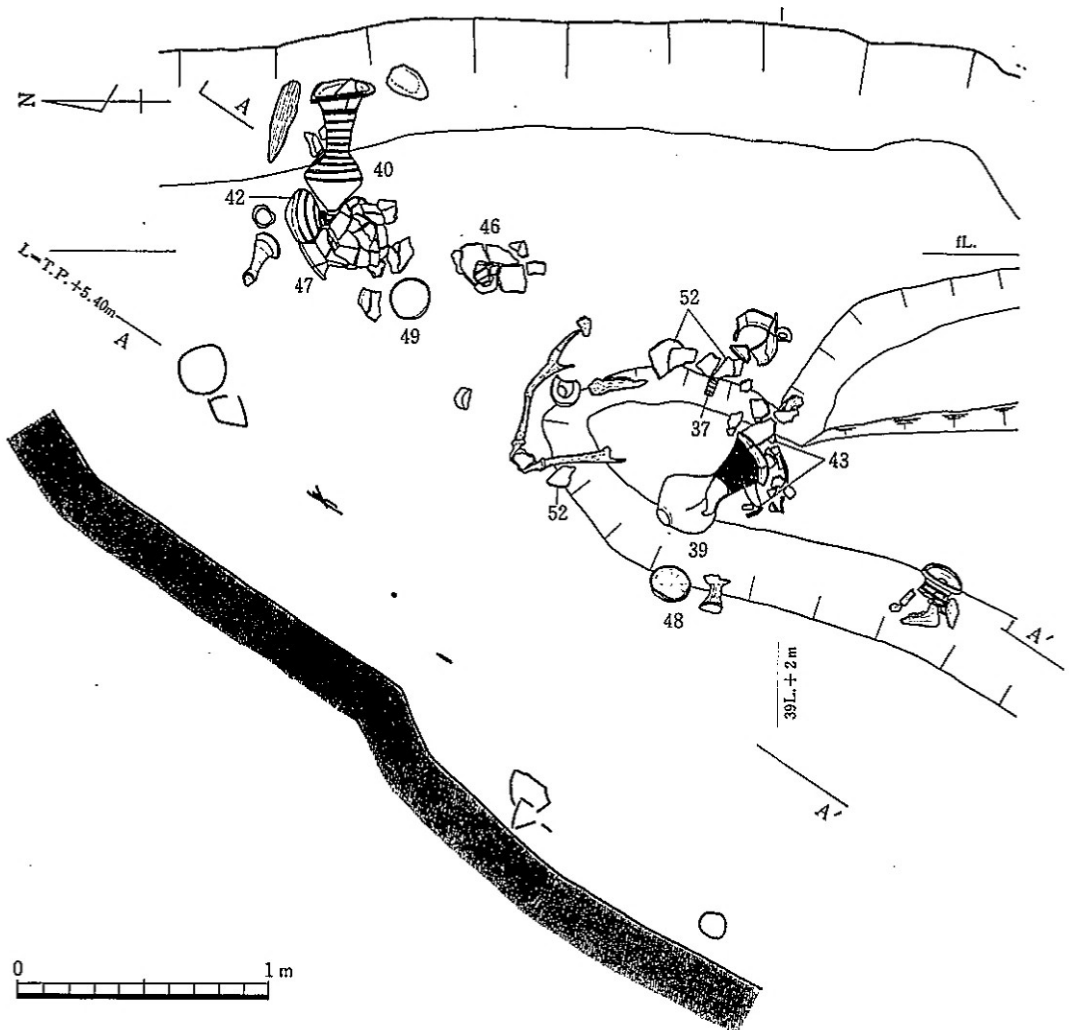
**SK3150 (第74・85図)** e区36ライン上の地山面で検出された。掘込み面は第Ⅷe層上面である。SD3081を切っている。また、SD3076と一部切合っていた可能性があるが、その前後関係は明らかにできなかった。東側が調査区外に続いており、全体の規模・形態は明らかでない。現状では、東西1.2m以上、南北0.7m以上をはかる。深さは北側で0.8mをはかる。北壁は2段掘り状をなし、坑底はほぼ平坦である。埋土は黄褐色極細砂混りの暗褐色粘質シルト層、黄褐色極細砂混りの暗灰褐色粘土層、青灰色シルトと暗灰褐色粘土の混合層の3層で、上層には炭化物が混じる。坑底から0.15mほど浮いた状態で、壺形土器胴部等の中期の土器が出土した。



第72図 SK3144 (f39区) 遺物出土状況図 1/6

**SK3159 (第75図)** e・f 34区の地山面で検出された。西側はSD3104に切られ損壊している。平面形は不整形である。本来の規模は明らかでないが、現状では、南北2.45m、東西0.75m以上、深さ0.05~0.1mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒褐色シルト層、灰黒色シルト混り青灰色シルト層の2層である。中期の土器片が出土した。

**SK3161 (第15図)** e33区の暗灰色シルト層上面で検出された。東側は調査区外に続く。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-79°-Eを示す。全体の規模は明らかでないが、現状では、長軸4.5m以上、短軸1.4~1.5m、深さ0.7~0.8mをはかる。坑底は、西端から3.3mほどで検出された高さ0.15m、上部幅0.3m、底部幅1.4mほどのブリッジ状の高まりによって東西に2分されている。西側の坑底では、中央部から西側でも、西端から1.1m付近までは中央部に向かって緩い傾斜面となっている。埋土は5層に分かれるが、大きくは灰黒色粘土を主体とする上層と灰黒青色粘土を主体とする下層に大別できる。いずれの層にも、シルト・極細砂・細礫などの



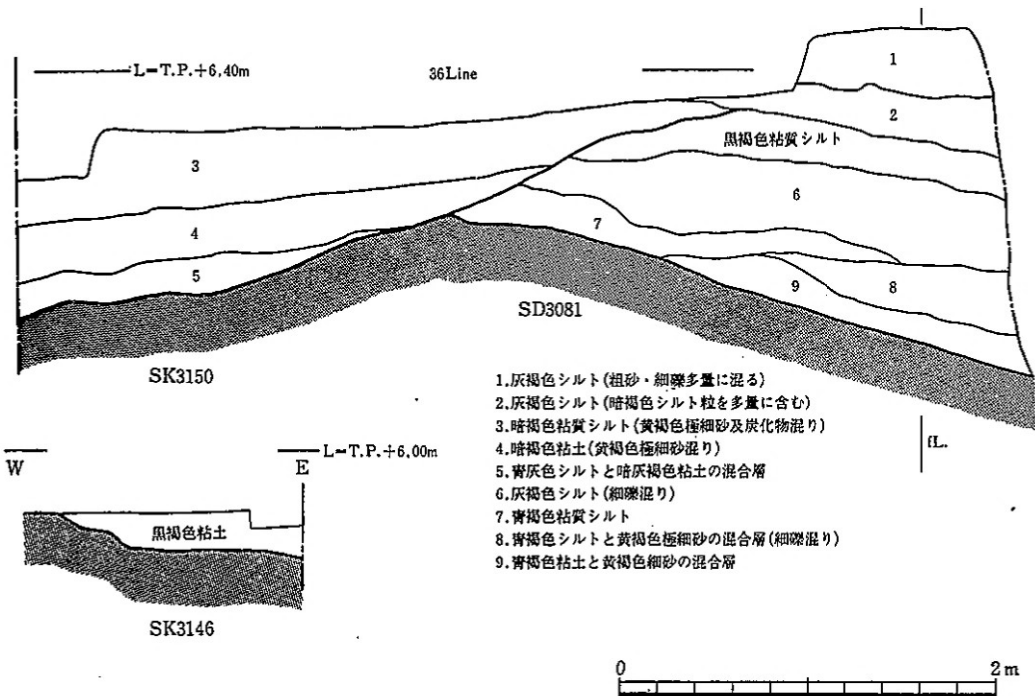
第73図 SK3144 (e39区) 遺物出土状況図 1/50

混入がみられる。完形のミニチュア土器1点のほか、第Ⅲ様式の土器片が出土した。

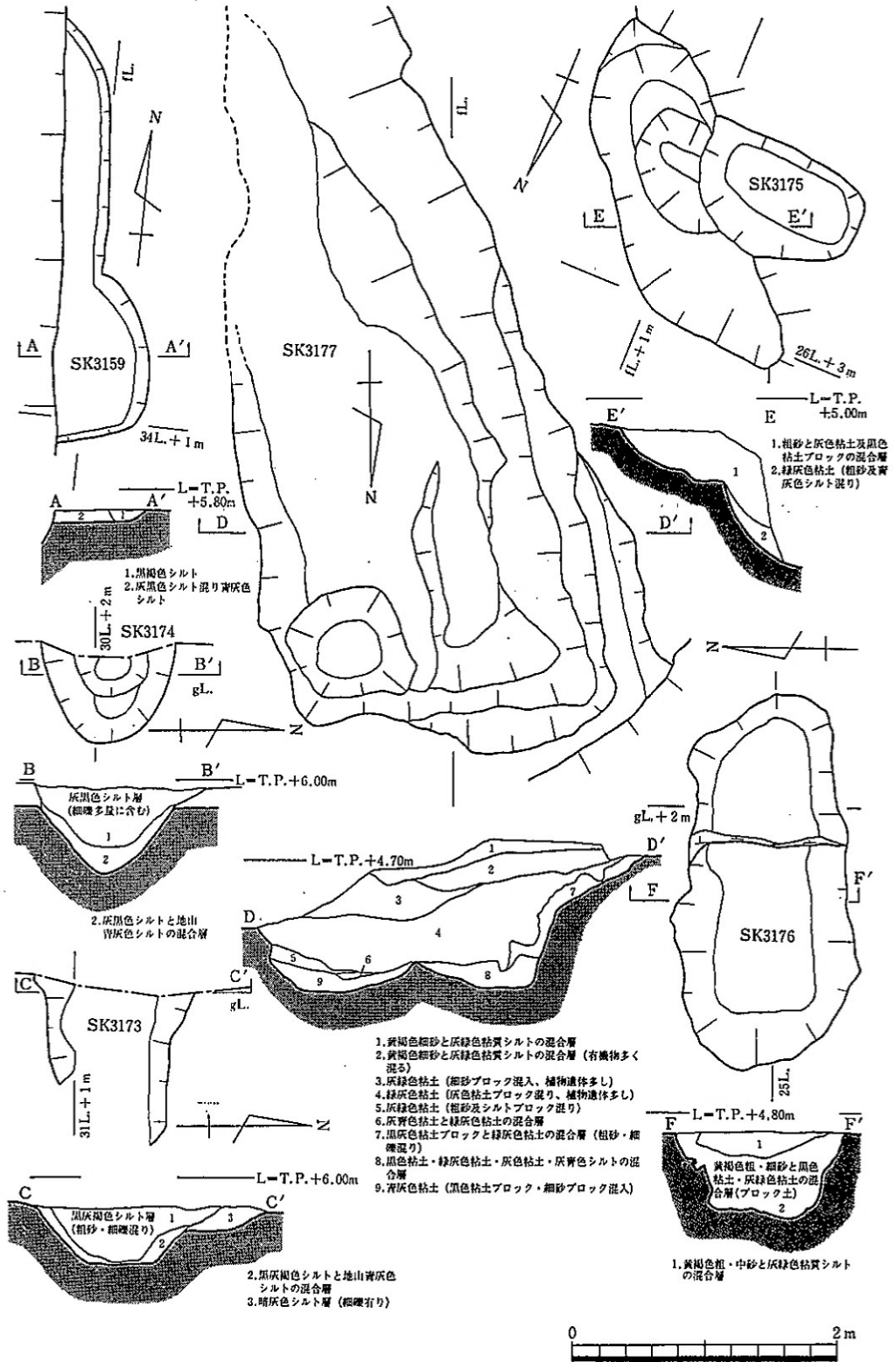
**SK3173** (第75図) f31区の地山面で検出された。東側はSD3104による削平を受けており、西側は調査区外に続く。SD3083を切っている。本来の規模・形態は明らかでないが、現状では、東西1.5m、南北1.1m、深さ0.45mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は粗砂・細礫混りの黒灰褐色シルト層、黒灰褐色シルトと青灰色シルトの混合層の2層である。坑底に密着した状態で第Ⅲ様式の甕形土器1個体が出土した。

**SK3174** (第75図) f30区の地山面で検出された。西側が調査区外に続いており、現状での平面形は半円形を呈する。径1.0m、深さ0.6mをはかる。東側が2段掘り状をなすの坑底は丸味をもち断面形はU字形を呈する。埋土は細礫を多量に含む灰黒色シルト層、灰黒色シルトと青灰色シルトの混合層の2層である。第Ⅲ様式の土器片が出土した。

**SK3175** (第75図) e26区の地山面で検出された。NR3002の河床で、NR3003の肩部分に位置する。西南側の上半部はNR3003によって削平されている。また、東北側の上部もNR3002による削平を受けている。本来の規模・形態は明らかでないが、現状では、平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はほぼ南北を示す。長軸2.15m以上、短軸1.6m以上をはかり、東から西に3段に掘り分けられている。下段部分は、平面形が隅丸長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.85mをはかる。深さは下段の坑底までで1.2m程をはかる。埋土は、粗砂・灰色粘土・黒色粘土ブロックの混合層、粗砂・青灰色シルト混りの緑灰色粘土層の2層である。第Ⅲ様式および第Ⅳ様式の土器片が出土した。



第74図 SK3146・3150、SD3081断面図 1/40



第75図 S K 3159・3173・3174・3175・3176・3177平面図・断面図 1/50

**SK3176** (第75図) g 25区、NR3003河床の中洲状の高まり部分の地山面で検出された。地山面の上には、NR3003に先行する流路の埋土かと思われる黄褐色粗砂及び中砂と灰緑色シルトの互層が堆積していた。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸2.8m、短軸1.05~1.35m、深さ0.55~0.65mをはかる。坑底には顕著な凹凸がある。埋土は黄褐色粗砂~細砂と黒色粘土・灰緑色粘土の混合層1層である。中期の土器片が出土した。

**SK3177** (第75図) e・f 23・24区、SK3176と同一の中洲状部分の地山面で検出された。東・南側はNR3003によって削平されており、とくに南側は完全に損壊している。平面形はやや不整な長方形を呈し、主軸方向はN-20°-Wを示す。本来の規模は明らかでないが、長辺4.0m以上、短辺2.3~2.45m、深さは西側で最大1.05mをはかる。坑底東北隅で平面形が不整形で東西径0.75m、南北径0.8m、深さ0.2mの土坑が、西辺では不整形な落込みがそれぞれ検出された。坑底にはかなりの凹凸がある。埋土は9層に分かれるが、基本的には、上層がシルトと細砂の混合層、中・下層が灰緑色粘土・緑灰色粘土・黒色粘土・青灰色粘土等の各混合層である。中期の土器片が出土した。

**SK3178** (第76図) g 9区の地山面で検出された。西側は調査区外に続く。平面形はやや不整な楕円形状を呈すると推定される。主軸方向はN-62°-Eを示す。長軸3.25m以上、短軸2.75mをはかる。坑底は東から西に3段に掘り分けられている。深さは下段の底面までで0.55mをはかる。埋土は4層に分かれ、最下層に灰白色砂質シルトが堆積している以外は、暗灰色あるいは青灰色の粘質シルト層である。第Ⅱ様式の土器片が出土した。

**SK3179** (第76図) f 5区の地山面で検出された。地山面が西に下がる斜面に位置するため、西壁側の遺存状態はあまり良くない。SK3180を切っている。平面形は不整形で、主軸方向はN-21°-Eを示す。長軸3.25m、短軸1.6m、深さ0.2mをはかる。坑底は北から南に緩く傾斜しており、かつ、かなりの凹凸がある。埋土は5層にわかれるが、大きくは、上層の黄褐色粘土と青灰色シルトの混合層、中層の黄褐色あるいは青灰色粘土層、下層の灰黄色粗砂層に大別できる。中層には植物遺体層の挟在が認められた。

**SK3180** (第76図) SK3179の東に接して地山面で検出された。西側はSK3179に切られ損壊している。本来の規模・形態は明らかでない。現状では、南北1.3m、東西0.6m以上、深さ0.2mをはかる。坑底は丸味をもっている。埋土は青褐色粘土層、青褐色粘土と黄褐色極細砂の混合層の2層である。

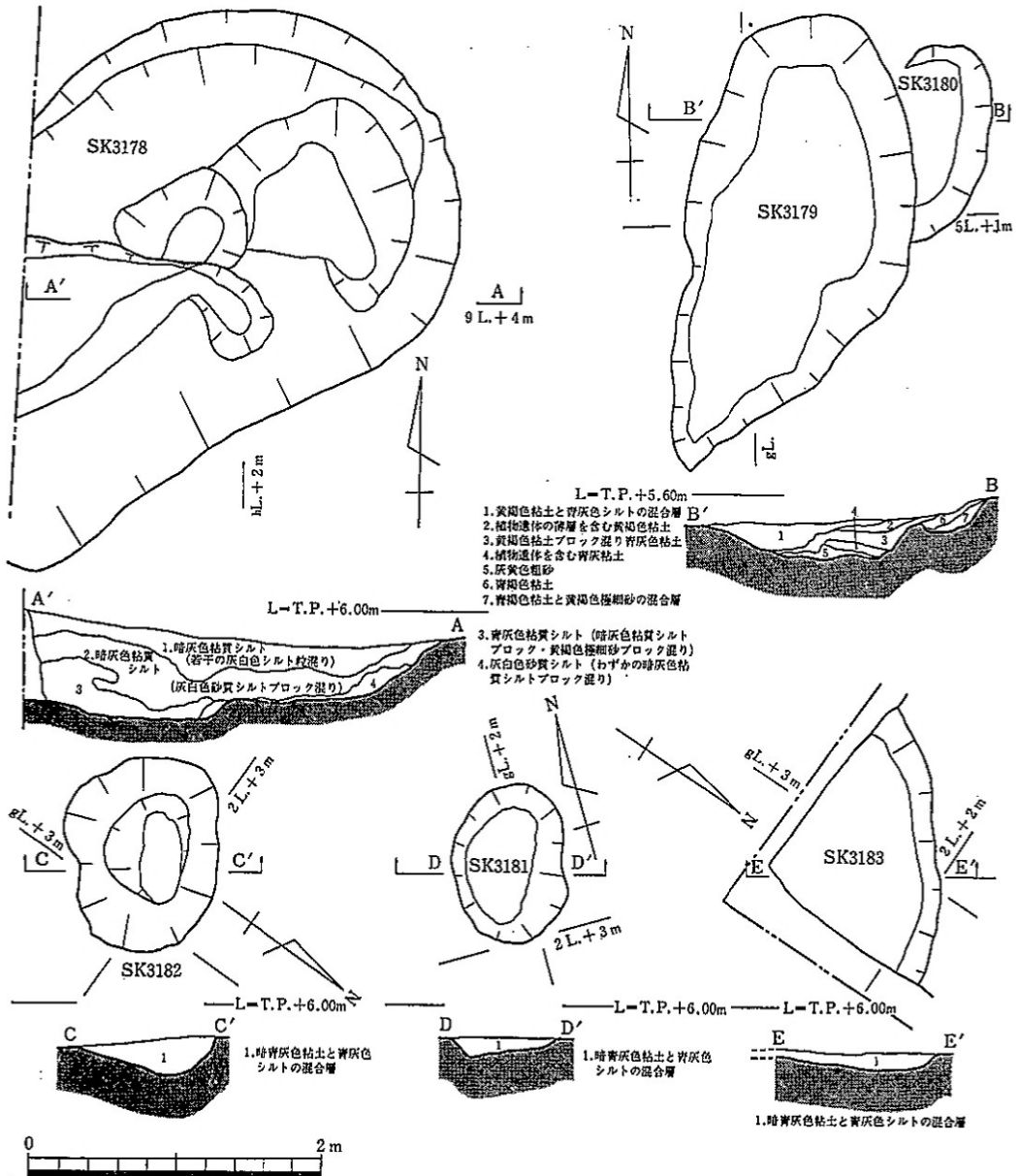
**SK3181** (第76図) f 2区の地山面で検出された。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はN-31°-Eを示す。長径1.05m、短径0.8m、深さ0.1m前後をはかる。坑底は平坦であるが、東から西へ緩く傾斜している。埋土は暗青灰色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。遺物は出土しなかった。

**SK3182** (第76図) f 2区の地山面で検出された。SK3181の東方1.5mほどに位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はN-50°-Wを示す。長径1.3m、短径1.05m、

深さ0.25mをはかる。2段掘り状をなし、坑底はわずかに丸味をもつ。埋土はSK3181と同様である。遺物は出土しなかった。

**SK3183 (第76図) f 2区の地山面で検出された。Cトレンチの東南隅部にあたり、東側と南側が調査区外に続く。全体の規模・形態は明らかでないが、現状では東西1.4m以上、南北1.3m以上、深さ0.1mをはかる。坑底には若干の凹凸がある。埋土はSK3181と同様である。遺物は出土しなかった。**

**SK3184 (第77図) g 2区の地山面で検出された。南側はサブトレンチによって損壊してい**



第76図 S K.3178・3179・3180・3181・3182・3183平面図・断面図 1/50

る。本来の規模・形態は明らかでない。現状では、東西1.4m、南北0.85m以上、深さ0.4mをはかり、平面形は隅丸長方形を呈する。東壁は2段掘りとなっている。坑底は遺存部分が少なく詳細は明らかにしがたい。埋土は暗灰色粘土で、混入している青灰色シルトの割合により2層に分けられる。

**SK3185** (第77図) g 1区の地山面で検出された。北側及び東側はサブトレンチによって損壊している。本来の規模・形態は明らかでないが、主軸方向がN-45°-W前後を示す楕円形状の土坑であったと推定される。長軸1.7m以上、短軸1.4m以上、深さ0.15m前後をはかる。坑底は北西側に緩く傾斜している。坑底中央で、長径0.45m、短径0.3m、深さ0.15mのピット1個が検出された。埋土は暗灰色粘土層、暗灰色シルト層、灰色シルト層で、暗灰色粘土層は2層に分かれる。

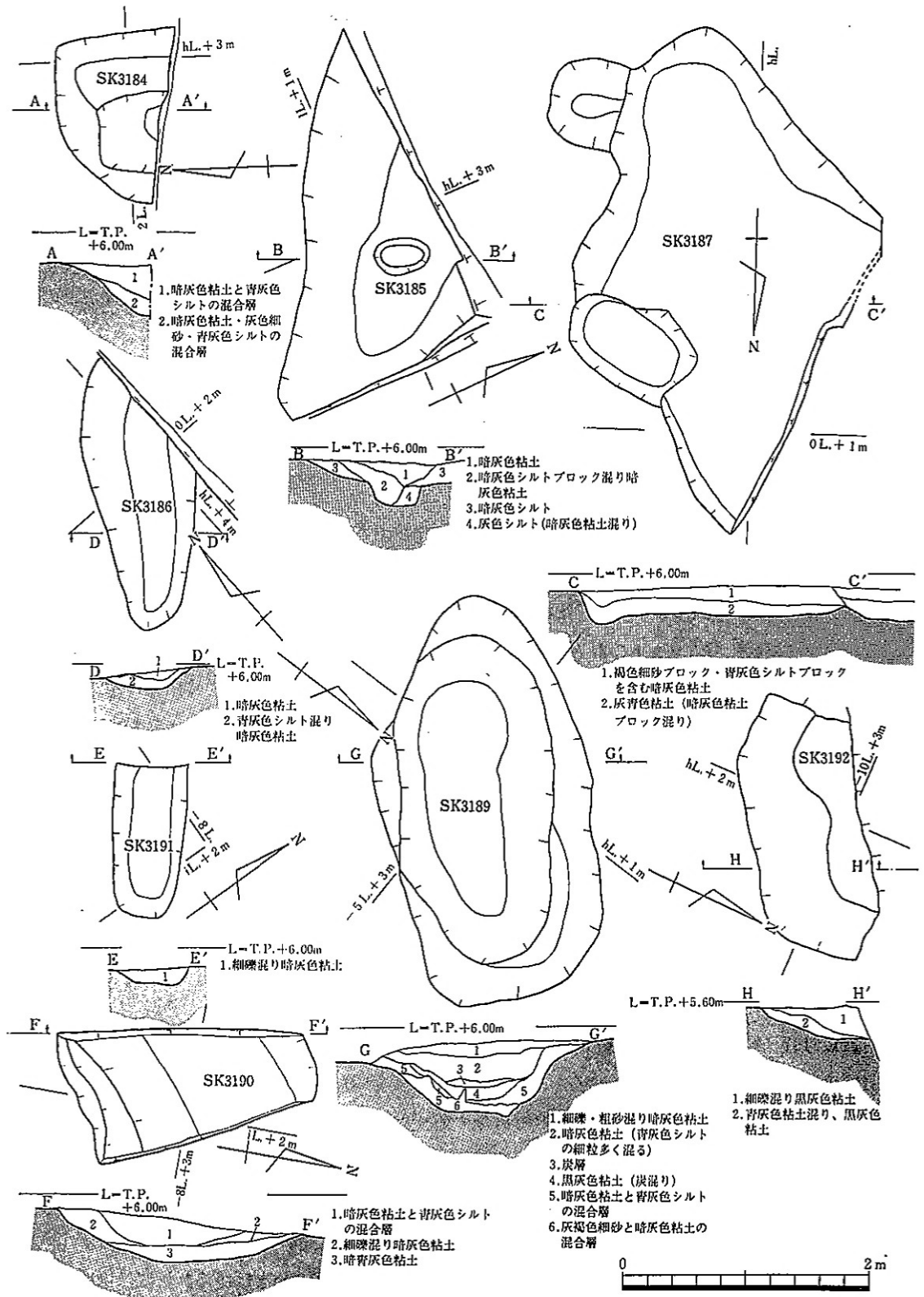
**SK3186** (第77図) g 0区の地山面で検出された。東側はサブトレンチによって損壊している。平面形はやや不整な長楕円形を呈し、主軸方向はN-41°-Eを示す。本来の規模は明らかでないが、現状では、長径1.85m以上、短径0.85m以上、深さ0.15mをはかる。坑底は丸味をもっており、壁と坑底との境はあまり判然としない。埋土は暗灰色粘土で混入物によって2層に分かれる。

**SK3187** (第77図) g-1区の地山面で検出された。西北側はSD3093に切られ損壊している。平面形はやや不整な隅丸長方形と推定され、主軸方向はN-55°-Wを示す。本来の規模は明らかでないが、長軸2.2m以上、短軸2.7m、深さ0.15~0.2mをはかる。坑底には若干の凹凸があり、また、北から南に緩く傾斜している。北東隅部と南東隅部近くで、各1個の土坑が検出された。前者は、平面形が楕円形で、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.3m前後をはかる。また後者は、隅丸長方形を半裁したような平面形を呈し、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.25m前後をはかる。埋土は細砂及びシルトブロック混りの暗灰色粘土層、暗灰色粘土ブロック混りの灰青色粘土層の2層である。中央やや南寄りから、坑底から浮いた状態で、第Ⅱ様式の壺形土器1個体が出土した。

**SK3188** (第5図、付図4) f・g-4区の地山面で検出された。東側は調査区外に続いている。また、SD3096の東端を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-56°-Eを示す。全体の規模は明らかでないが、現状では、長軸4.1m以上、短軸2.6m、深さ0.1mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は暗灰色粘土・黄色極細砂・青灰色シルトの混合層1層である。

**SK3189** (第77図) g-5区の地山面で検出された。SD3096の1部を切っている。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はN-50°-Eを示す。長径3.3m、短径1.75m、深さ0.55~0.6mをはかる。坑底には若干の凹凸があり、西南から東北方向に緩く傾斜している。壁面は全体に2段掘り状を呈している。埋土は6層に分かれるが、大きくは上層の暗灰色粘土層、中層の黒灰色粘土層、下層の暗灰色粘土と青灰色シルトまたは灰褐色細砂の混合層とに大別できる。





第77図 SK 3184・3185・3186・3187・3189・3190・3191・3192平面図・断面図 1/60

上層と中層の間には炭化物層が挟在する。中期の土器片が出土した。

**SK3190** (第77図) h-8区の地山面で検出された。東側はSD3100に切られ損壊している。また、西側は調査区外に続く。全体の規模・形態は明らかでないが、現状では、南北幅1.9m、深さ0.45mをはかる。坑底は丸味をもち、壁と坑底の境は判然としない。埋土は暗灰色粘土と青灰色シルトの混合層、細礫混りの暗灰色粘土層、暗青灰色粘土層の3層である。

**SK3191** (第77図) h-9区の地山面で検出された。西側は調査区外に続く。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-53°-Wを示す。全体の規模は明らかでないが、現状では、長軸1.2m以上、短軸0.6m、深さ0.1~0.15mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は細礫混りの暗灰色粘土層1層である。

**SK3192** (第77図) g-10区の地山面で検出された。北側の大半がSD3101に切られ損壊している。本来の規模・形態は明らかでない。現状では、長軸2.25m以上、短軸0.9m以上、深さ0.25m前後をはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒灰色粘土で、上層には細礫が混り、下層では青灰色粘土ブロックが混る。

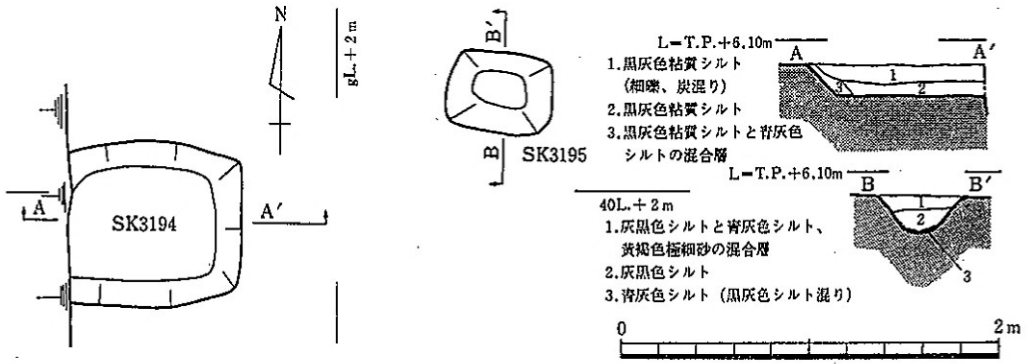
**SK3194** (第78図) f40区のⅧf層相当層上面で検出された。西側はサブトレンチによって損壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。全体の規模は明らかでないが現状では、長軸0.9m以上、短軸0.85m、深さ0.2m前後をはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は黒灰色粘質シルトで混入物によって3層に分かれる。第Ⅲ様式の土器片が出土した。

**SK3195** (第78図) f40区、SK3194の東方約1mのⅧf層相当層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-82°-Eを示す。長軸0.55m、短軸0.4m、深さ0.2mをはかる。坑底は丸味をもっている。埋土は灰黒色シルトと青灰色シルト・黄褐色極細砂の混合層、灰黒色シルト層、黒灰色シルト混りの青灰色シルト層の3層である。中期の土器片が出土した。

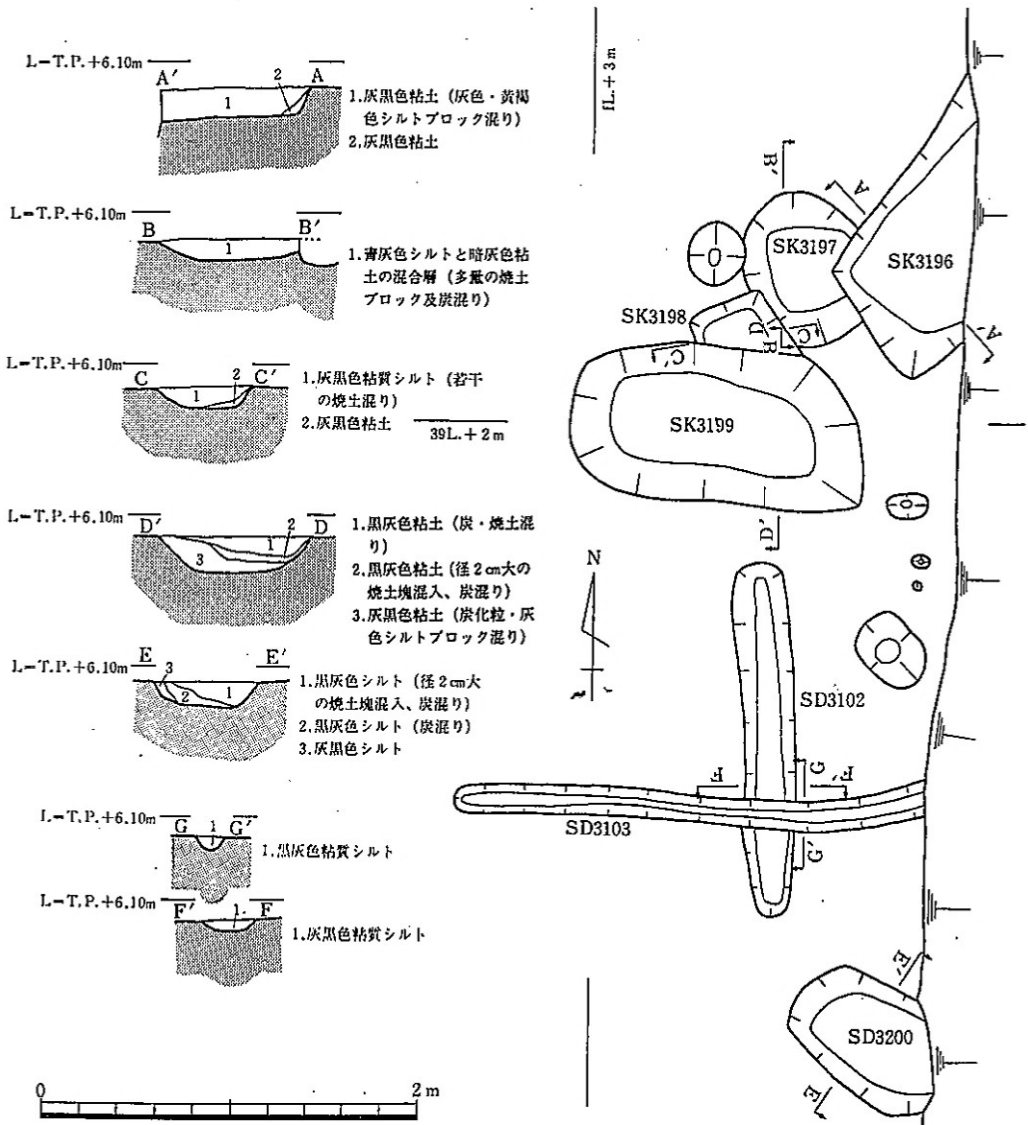
**SK3196** (第79図) e39区のⅧf層相当層上面で検出された。東側はサブトレンチによって損壊している。また、SK3197を切っている。平面形は長方形を呈すると推定され、主軸方向はN-40°-Eを示す。全体の規模は明らかでないが、現状では、長辺1.25m以上、短辺0.7m、深さ0.15mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は灰黒色粘土で、混入物によって2層に分かれる。第Ⅲ様式の土器片が出土した。

**SK3197** (第79図) SK3196の西に接して、Ⅷf層相当層上面で検出された。SK3196・3198に切られ、一部を損壊している。平面形はやや不整な凹形と推定される。径0.8m前後、深さ0.1m前後をはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は青灰色シルトと暗灰色粘土の混合層1層で、多量の焼土ブロック及び炭が混っている。中期の土器片が出土した。

**SK3198** (第79図) SK3197の西に接して、Ⅷf層相当層上面で検出された。南側はSK3199に切られ損壊している。平面形は方形か長方形と推定される。主軸方向はN-31°-Wを示す。本来の規模は明らかでないが、現状では、1辺0.4~0.45m、深さ0.1mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は灰黒色粘質シルトあるいは灰黒色粘土で、上層には若干の焼土が混る。第Ⅲ様式



第78図 SK3194・3195平面図・断面図 1/40



第79図 SK3196・3197・3198・3199・3200、SD3102・3103平面図・断面図 1/40

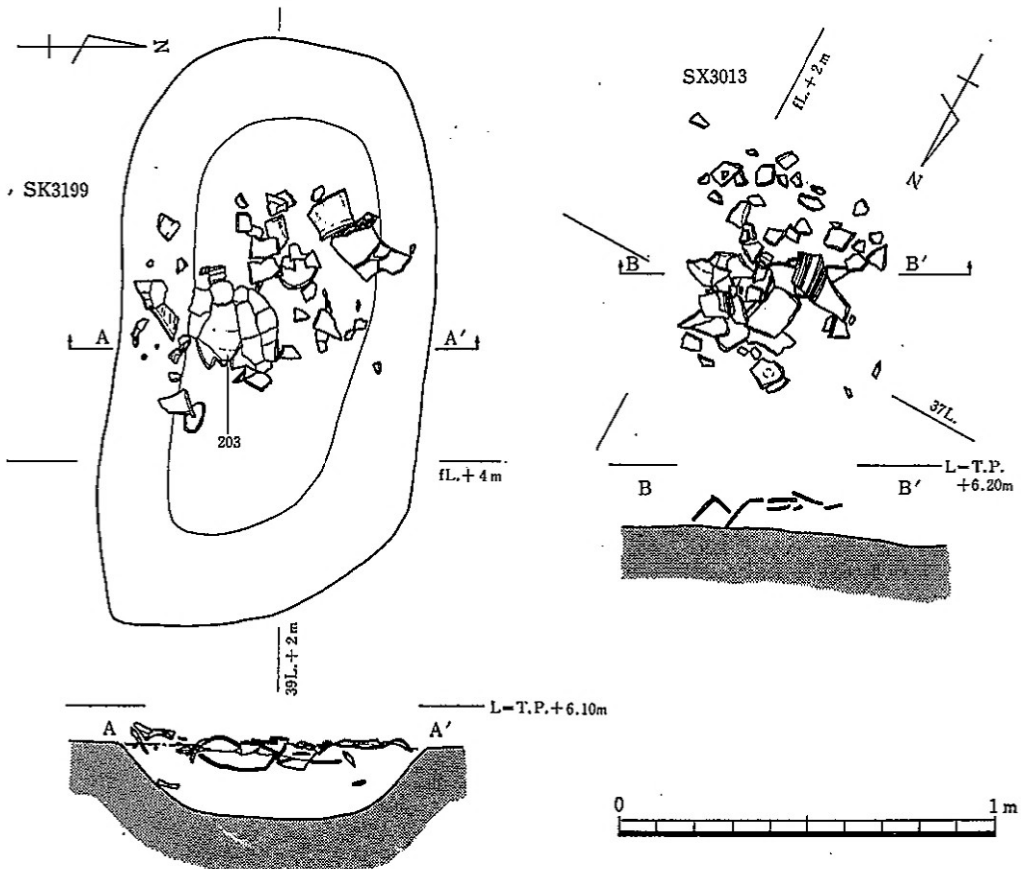
の土器片が出土した。

**SK3199** (第79・80図) SK3198の南に接して、Ⅷf層相当層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸1.55m、短軸0.75m、深さ0.2mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土は2層に分かれる黒灰色粘土層と、灰黒色粘土層の3層であるが、黒灰色粘土層には焼土ブロック・炭が混じる。中央部から、坑底から浮いた状態で、無頸壺形土器(203)、甕形土器等の第Ⅲ様式新段階の土器が一括出土した。(203)は口縁部を東に向けて潰れた状態で出土し、その横から甕形土器の口頸部片が出土している。

**SK3200** (第79図) e38区のⅧf層相当層上面で検出された。東側の1部がサブトレンチによって損壊している。平面形は隅丸長方形を呈していたと推定される。主軸方向はN-56°-Wを示す。本来の規模は明らかでないが、長軸0.8m以上、短軸0.6m、深さ0.15mをはかる。坑底はほぼ平坦である。埋土はSK3199と大差ないが、全体にシルト質である。第Ⅲ様式の土器片が出土した。

井戸

**SE3026** (第68図) f40区の地山面で検出された。東北側半分以上がNR3001によって削平されている。平面形はやや不整な円形であったと推定される。本来の規模は明らかでないが、現



第80図 SK3199、SX3013遺物出土状況図 1/20

状では、径0.85m以上、深さ0.65m程をはかる。壁面は2段掘り状をなし、底面はほぼ平坦である。埋土は黒灰色シルト層、暗灰色粘土と青灰色シルトの混合層、暗灰色粘土層、暗灰色シルト・黄褐色シルトの混合層の4層である。第Ⅲ様式の土器片が出土した。

## 溝

**S D3071** (第69図) f 39・40区の地山面で検出された。北北西から南南東に走る。南側はS K3133に切られ損壊している。また、北側ではS K3129の一部を切っている。検出全長2.2m。上部幅0.6~0.7m、底部幅0.3~0.5m、深さ0.15m前後をはかる。断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色粘土と青灰色シルトの混合層1層である。中期の土器片が出土した。

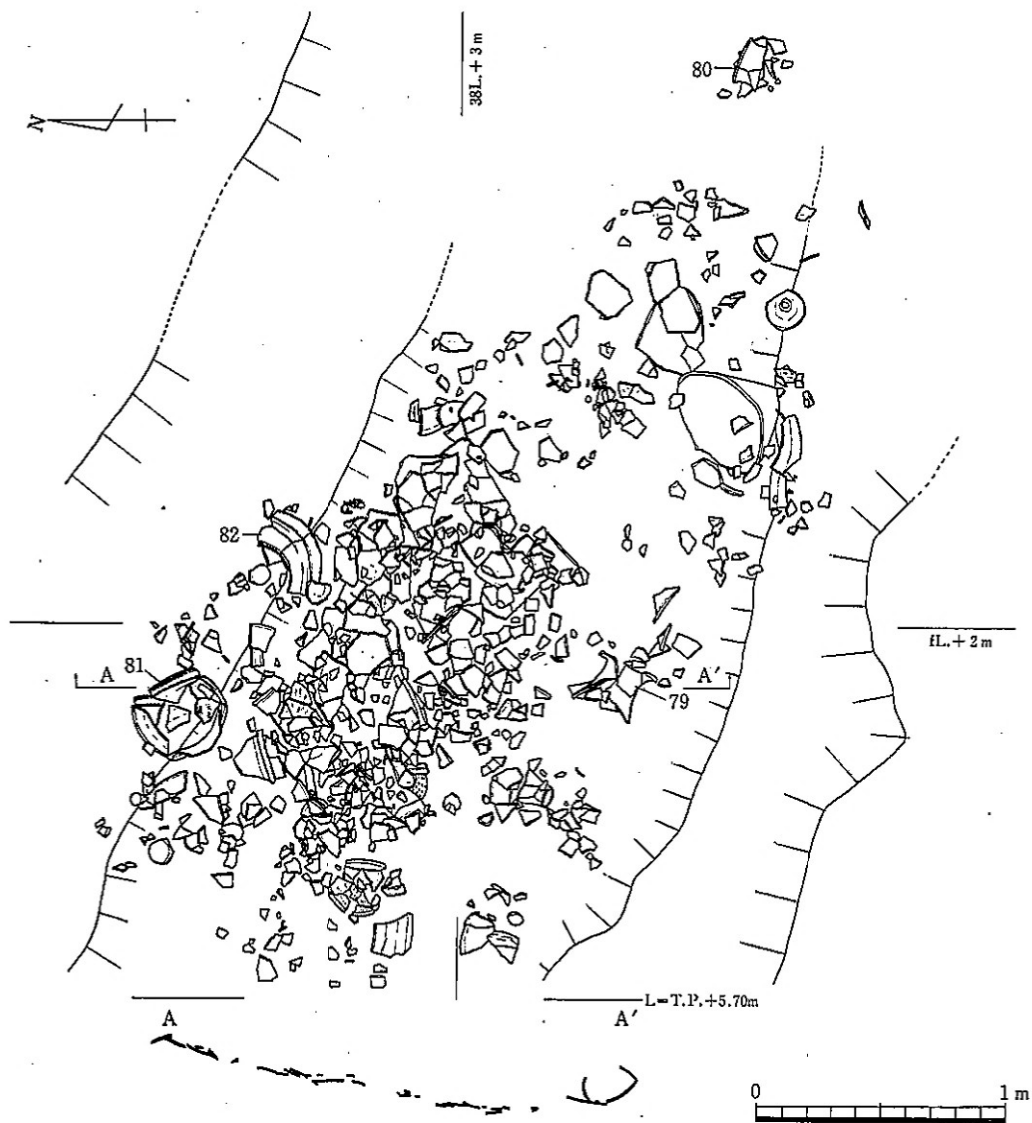
**S D3072** (第69図) f 39・40区の地山面で検出された。東北から西南に走り、西南端近くで南へわずかに屈曲している。東北端はNR3001によって削平されている。また、東南側の壁及び西南端はS D3073に切られ損壊している。検出全長3.4m。本来の幅を明らかにできる部分はない。現状では上部幅0.6m以上、底部幅0.4m以上をはかり、深さは0.25m前後である。断面形は逆台形状を呈していたと推定される。埋土は暗褐色シルト層と、黒褐色シルト・青灰色シルト・黄褐色極細砂の互層の2層である。中期の土器片が出土した。

**S D3073** (第5図) f 39区からe 40区にかけての地山面で検出された。北西側の壁は検出したものの、南東側はS K3144に切られ大半が損壊している。このため、不明な点が多い。さらに、北東側の幅が極端に狭くなることなどの、通有の溝とは考え難いような形態も認められる。しかし、北西側の壁の立ち上がりが明瞭で直線的に走っていること、調査区西辺付近にわずかではあるが、東南側の壁の痕跡かと考えられる段の存在することなどから、一応、溝と考えておいた。東北から西南に走り、検出全長は8.8mをはかる。北東端はNR3001によって削平されており、西南側は調査区外に続いている。本来の規模は不明なところが多いが、上部幅1.2m以上、底部幅及び深さは40ライン付近で、それぞれ0.9m、1.2mほどをはかる。40ライン付近での断面形は逆台形状を呈する。埋土は7層に分かれるが、最上層の灰黒色シルト層以外は、すべて灰色粘土・黄色極細砂・黒灰色粘土・灰黒色シルト等の混合層である。第Ⅲ様式までの土器片が出土した。

**S D3074** (第5・81・82図) e・f 38区のⅣg層上面で検出された。掘り込み面もⅣg層上面である。fライン付近でわずかに北方へ屈曲しながら東西に走り、東西両端はともに調査区外に続いている。ただし、西端付近の南側は一部S D3076に切られ損壊している。また、東端近くでは南北両壁にS E3027・3028が掘り込まれている。さらに、f区の北側ではS K3144を切っているが、この部分の北壁は溝底近くの一部分しか検出できなかった。検出全長10.4m。上部幅はe区側で3.1~3.2m、底部幅はe区側で0.5~0.7m、f区側で1.0~1.5mをそれぞれはかる。深さは0.8~1.1mほどである。断面形は逆台形状を呈するが、南北両壁とも部分的に2段掘り、3段掘り状をなす。埋土は4層(第5図14~17層)に分かれるが、大きくは、植物遺体層の挟在する暗灰緑色粘土または暗灰色粘土からなる上層と、混合土からなる下層に大別できる。上層の

状況から、本溝が一時期溜りに近い状態であったことが推定される。

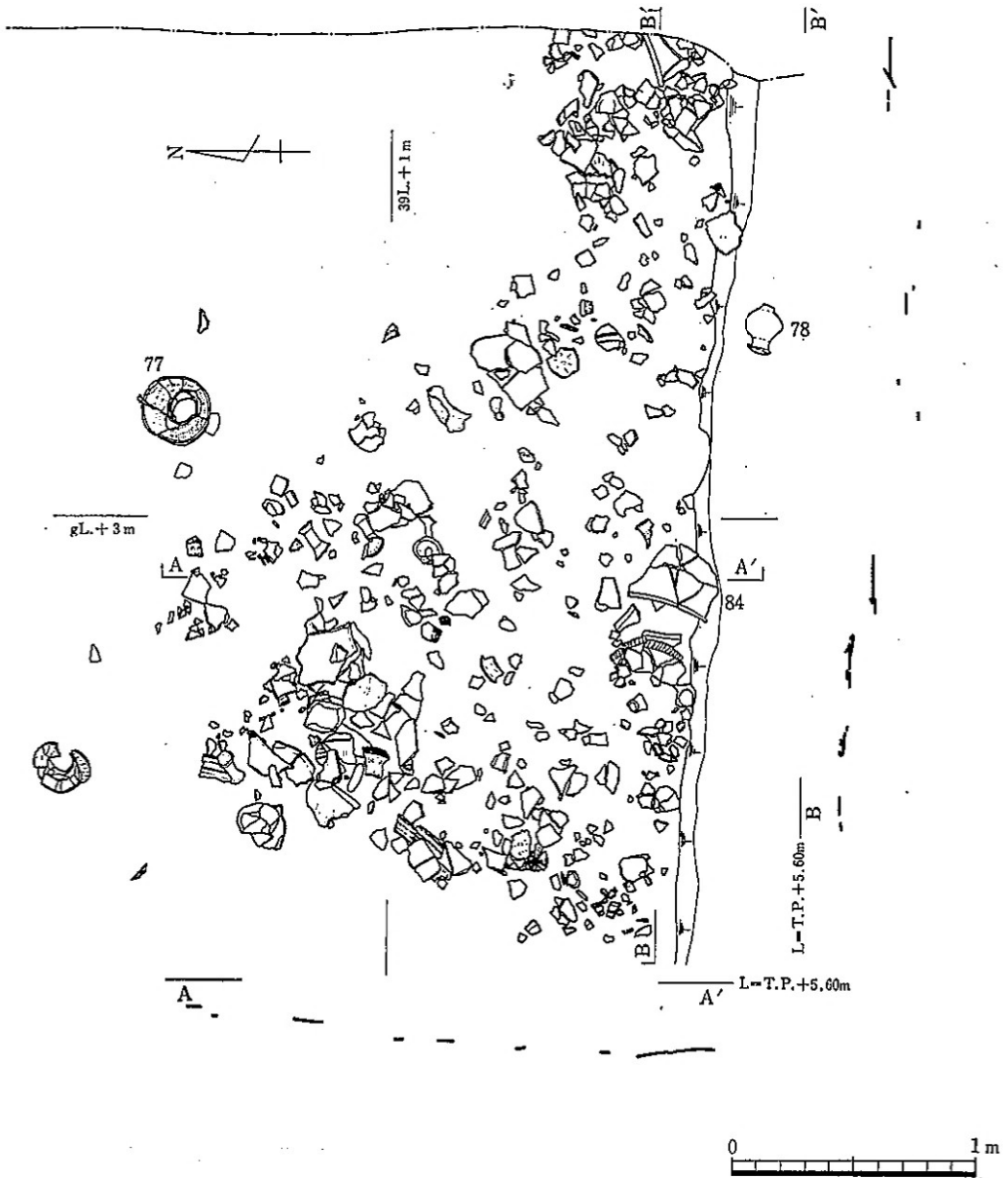
一方、本溝の埋土の上には、淡黄色極細砂ブロック・細礫・炭化物等の混入が顕著な灰褐色または暗灰褐色粘質シルト層及び灰褐色粘土層（第5図11～13層）の堆積がみられた。これらの土層はfライン付近では南北8m以上の拡がりを持ち、SK3144の上部をも覆っており、本溝の埋土である14～17層とは性格を異にするものと考えられる。細礫・炭化物等を含む点でも、14～17層とは層相を異にしており、また、12・13層からは多量の第Ⅲ様式新段階の土器が出土している。これらの点で、本溝は埋没後その窪みが土器拾場等に再利用されたものと考えられる。しかも、土器の出土範囲及び拡がりかSK3144の上部にも及んでいることや、本溝及びSK3144の埋土の上に、土器を多量に含む12・13層が直接堆積していること等からすれば、再利用に際し部分



第81図 S D 3074 (e 38区) 遺物出土状況図 1/30

的にでも掘り直しの行なわれた可能性が強いと思われる。

**SD3076** (第5図) e36区からf38区にかけてのⅣe・Ⅳf層相当層上面で検出された。掘り込み面も同層上面である。fライン付近で屈曲しながら東南から北西に走る。SK3145、SD3074・3077・3088・3079・3080の一部をそれぞれ切っている。上部幅2.1~2.5m、底部幅0.5~0.7mをはかるが、f37区では底部幅が1.1mに達する部分もある。深さは0.9~1.0mをはかる。断面形は逆台形状を呈するが、壁面の一部は2段掘り状となっている。東南端近くの溝底で、上部幅0.3前後、底部幅1.0~1.2m、高さ0.2m程のブリッジ状の高まりが検出された。また、f38

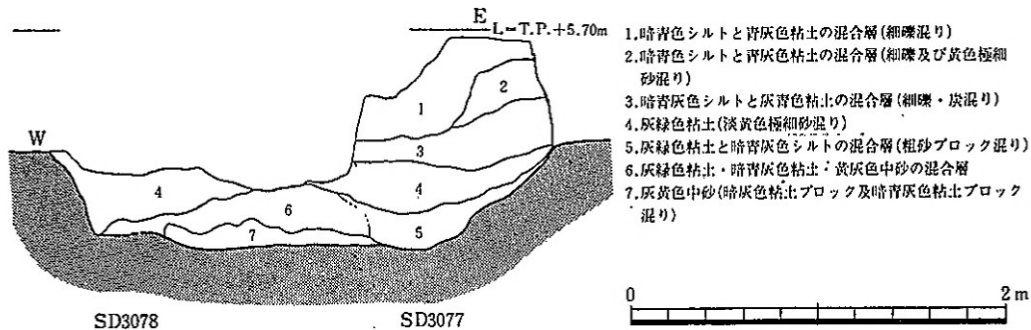


第82図 SD3074 (f39区) 遺物出土状況図 1/30

区の溝底には若干の凹凸がある。埋土は4ないし5層に分かれるが、大きくは、青灰色粘質シルトブロック及び細礫・炭化物を混入する暗灰褐色シルト層と、暗褐色シルトと暗青灰色粘土または淡黄色極細砂の混合層の、上・下2層に大別できる。第Ⅲ様式及び第Ⅳ様式の土器片が出土した。なお、本溝は埋没後も窪みとなってその痕跡を残しており、その影響はⅧd層上面にても認められた。

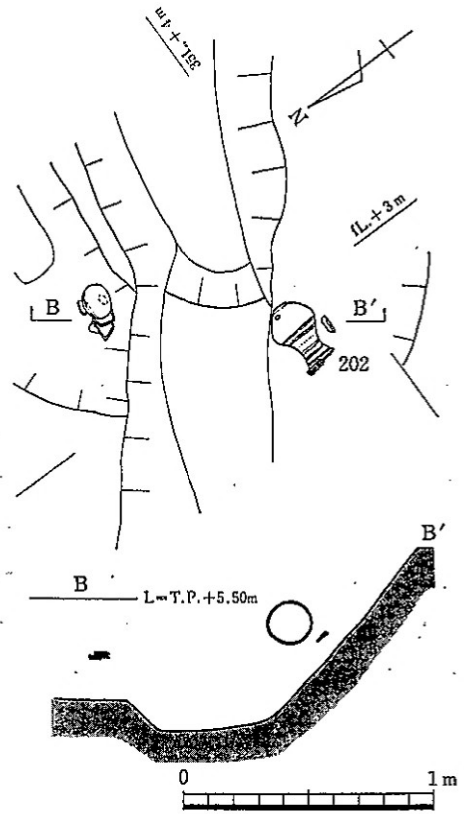
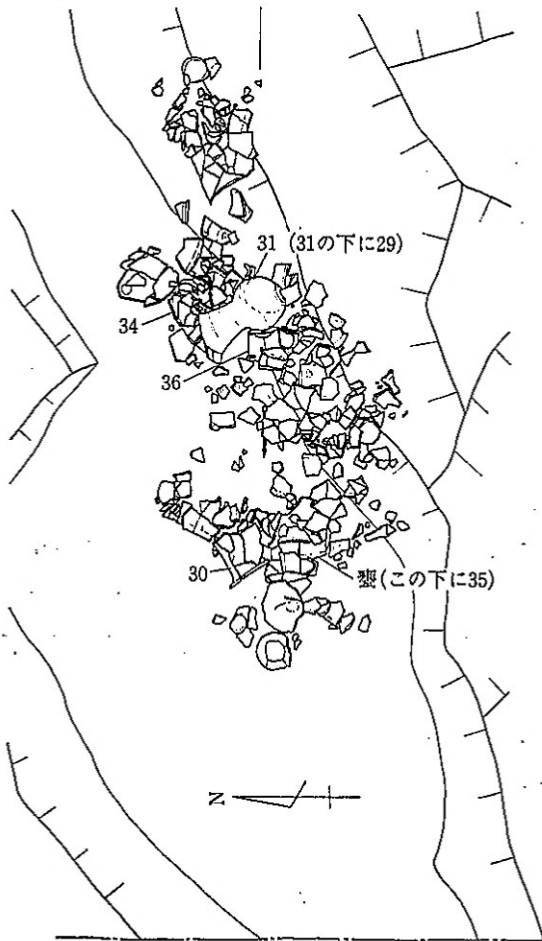
**SD3077** (第5・83・84図) e・f37区のⅧg層で検出された。掘込み面もⅧg層上面である。東北から西南に走る。東側は調査区外に続いており、西側はSD3104に切られ損壊している。また、fライン付近ではSD3076に切られている。なお、f区西辺で接しているSD3078との関係については、当該部分で合流していた可能性が強い。検出全長は11.1mをはかる。他の遺構と切合っている部分が多く本来の規模を明らかにできるところがないが、上部幅はfライン付近で2m以上をはかる。底部幅は0.5~0.8m、深さは1.1m程である。e37区北西側の大きく膨らんでいる部分には、別の遺構が存在していた可能性もあるが、明らかにできなかった。断面形は逆台形状を呈するが、部分的に2段掘り状をなす。埋土は5層に分かれるが、大きくは、細礫・炭化物混りの灰褐色ないし黒灰色シルト層と、緑灰色粘土・黒灰色粘質シルト・黄褐色極細砂等の混合層の、上下2層に分けられる。上層下部から第Ⅱ様式の壺形土器(29~31・34)、鉢形土器(32)、甕形土器(35・36)、甕用蓋形土器(33)等が出土した。とくに、e37区で検出された土器群は、南壁側傾斜面で、互いに折り重なるような状態で出土しており、本溝がある程度埋った段階で、一括廃棄されたものと推定される状況であった。

**SD3078** (第5・83図) f37・38区の地山面で検出された。やや湾曲気味に南北に走る。北西側は調査区外に続き、南側は前述のようにSD3077と合流していた可能性が強い。検出全長は6.0mほどである。東壁側はSD3076によって削平されており、西壁側は調査区外となる。このため、本来の規模は明らかでないが、検出面での上部幅は最大1.4mをはかる。底部幅は0.3~0.9mと変異が大きく北にゆくほど幅が狭くなる。深さは検出面から最大0.4mほどである。ただし、SD3077と同様にⅧg層上面からの掘り込みであったとすれば、本来は1m前後の深さがあったものと推定される。断面形は逆台形を呈する。埋土は3ないし4層に分かれ、上層には

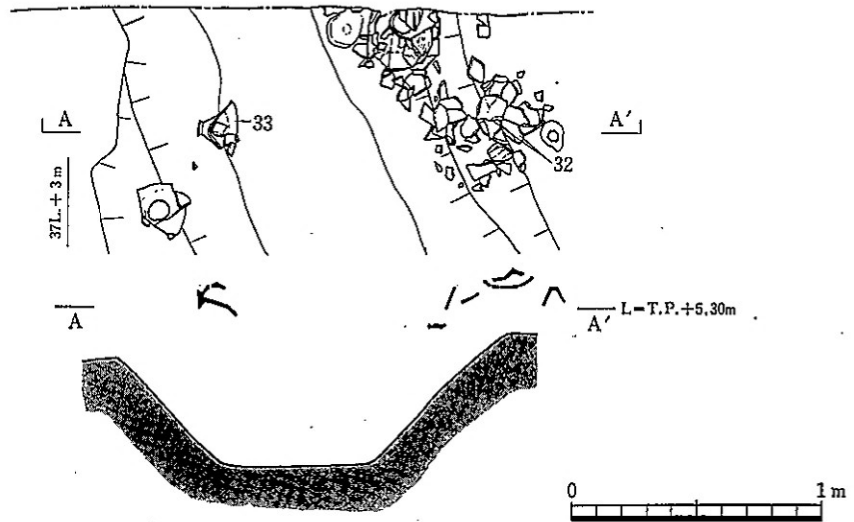
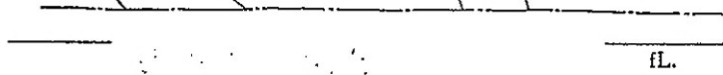


第83図 SD3077・3078合流部断面図 1/40





第85図 S D 3081、S K 3150遺物出土状況図 1/30



第84図 S D 3077遺物出土状況図 1/30

灰緑色あるいは暗青褐色粘土が、下層には混合土が堆積していた。中期の土器片が出土した。

**SD3081** (第5・74・85図) e35区からf36区にかけてのⅧg層上面で検出された。掘込み面もⅧg層上面である。e35区では東南から西北に走り、fラインプラス2m付近で東西方向に屈曲する。東南側は調査区外に続き、西側はSD3104に切られ損壊している。また、f36区でSD3079・3080をそれぞれ切っている。検出全長7.2m。上部幅1.2~1.4m、底部幅0.1~0.4mをはかり、西側ほど幅が狭くなっている。深さは0.7~1.1m程度である。断面形は逆台形状を呈するが、西端付近ではV字形に近くなっている。部分的に2段掘り状をなす。fラインプラス3m付近の溝底には高さ0.1mほどの段があり、東側が低くなっている。埋土は4層に分かれ、上層には細礫混りの灰褐色シルト層が、中・下層には灰緑色あるいは暗青褐色粘土・青褐色シルト・黄褐色細砂等の混合層が堆積していた。fラインプラス3m付近で、溝底から浮いた位置から第Ⅲ様式古段階の壺形土器(202)が完形で出土した。

**SD3083** (付図4) f29区から31区にかけての地山面で検出された。やや湾曲しながら南北に走る。東側をSD3104によって切られ損壊しているため、西壁側のみを検出したにすぎない。また、南側はNR3002によって削平されている。検出全長12.0m。上部幅1.5m以上、底部幅0.3m前後をはかり、深さは0.5m前後である。断面形はU字形を呈していたと推定される。埋土は細礫混りの暗灰色シルト層である。中期の土器片が出土した。

**SD3084** (第86図) g25区、NR3003の中洲状部分の西北端、地山面で検出された。南北に走るが、西側はNR3003によって削平されており、東壁側のみを検出したにすぎない。検出全長4.0m。本来の規模は明らかでないが、上部幅1.4m以上、底部幅0.3m以上、深さ0.7m前後をはかる。壁面は2段掘り状をなす。埋土は中砂・細砂・シルト・粘土が互層をなしており、本溝に水の流れのあったことを示している。第Ⅲ様式の甕形土器他が出土した。

**SD3085** (第86図) g20区からf21区にかけての地山面、NR3003の河床で検出された。やや湾曲しながら南北に走る。検出全長9.0m。上部幅1.0m以上、底部幅0.4m以上をはかるが、NR3003の削平のため、本来の規模を明らかにできる部分はない。深さ0.4m前後をはかる。断面形はU字形を呈していたと推定される。埋土は黒灰色シルト層で、最下層に若干の細砂の堆積が認められた。中期の土器片が出土した。

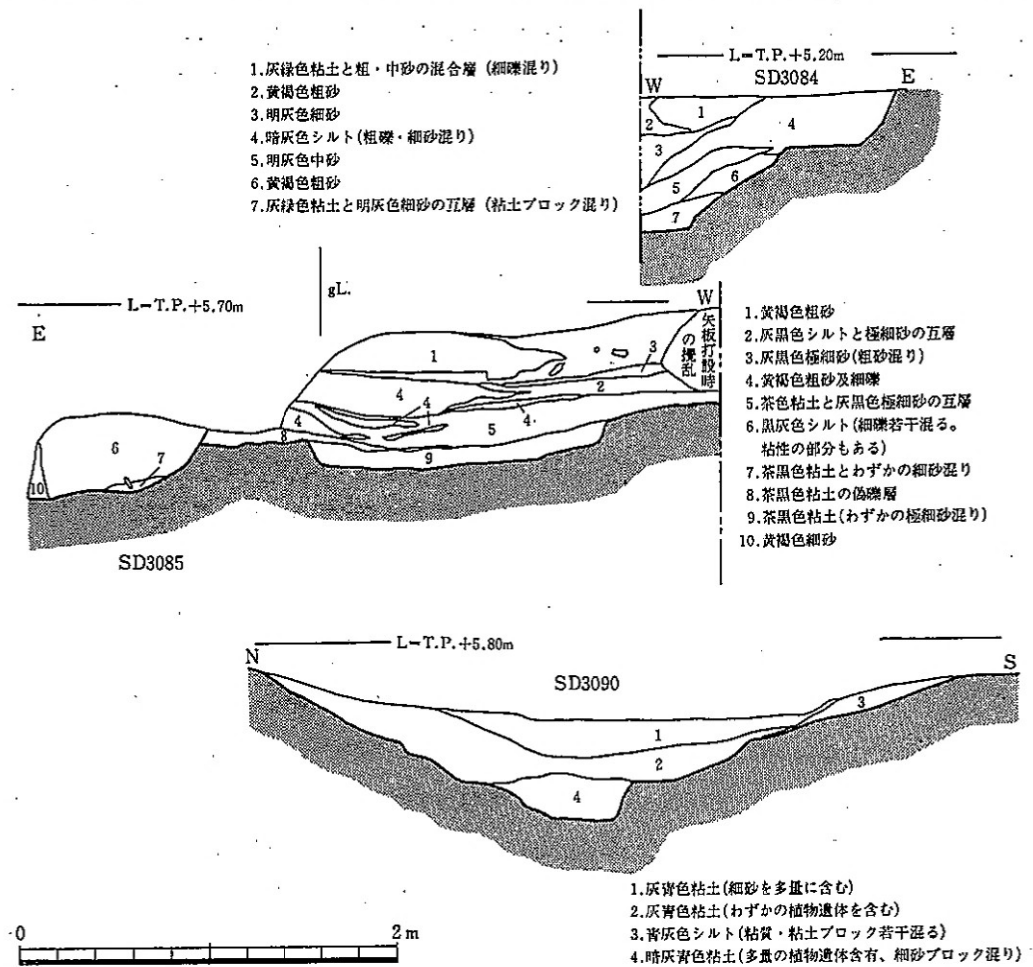
**SD3088** (付図4) g8区からf10区にかけての地山面で検出された。やや屈曲しながら東北から西南に走るが、中央部はNR9001の削平のために消失している。検出全長12.5m。上部幅0.5~0.6m、底部幅0.2~0.4m、深さ0.1m前後をはかる。断面形はU字形を呈する。埋土は暗青灰色粘土層1層である。遺物は出土しなかった。

**SD3090** (第86図) f4・5区の地山面で検出された東西溝である。東側は調査区外に続き、西側はわずかに南に屈曲したのちSX3010にいたって終る。SX3010との間に切合い関係は認められない。本来的に一連のものであったと考えられる。検出全長5.5m。上部幅4.2m、底部幅0.3~0.7m、深さ0.8m前後をはかるが、地山面が西に向って傾斜しているために、西側

では徐々に深さを減じる結果となる。断面形は幅の広い逆台形状を呈するが、壁面は2段掘り、3段掘り状をなす。溝底はS X3010近くで2又に分かれている。埋土は灰青色ないし暗灰青色粘土であるが、中・下層には植物遺体が挟在する。埋土の状況からは、少なくとも検出部分についてはS X3010と一連の沼状の溜りであったと考えられる。遺物は出土しなかった。

**SD3092 (第6図)** f 1・2区の地山面で検出された。東西方向から南北方向に屈曲して走るが、検出全長は2.5m程にすぎない。東側は調査区外に続くが、南側は2ラインのサブトレンチ以南では検出されなかった。本来、2ライン付近で終わっていたものと考えられる。上部幅1.0m、底部幅0.3m、深さ0.4mをはかる。断面形は逆台形状を呈するが、上部は2段掘り状をなす。埋土は暗灰色粘土と青灰色シルトの混合層1層で、若干の灰色極細砂が混入している。

**SD3093 (第87図)** f・g・h 0・1区の地山面で検出された。調査区東側では東南から西北に走り、gライン付近で大きく屈曲して東北から西南方向に走る。東西両側ともに調査区外に続いており、g 0区ではS K3187の一部を切っている。検出全長13.5m。上部幅1.0~2.1m、底部幅0.3~1.8mと変異が大きく、gラインより東側では急に掘が広くなるとともに、深さも浅く



第86図 S D 3084・3085・3090断面図 1/40

なる。深さはg・h区側では0.25~0.4mをはかるのに対し、f区側では0.1m前後をはかるにすぎない。断面形も西側ではU字形を呈するのに対し、東側では幅の広い逆台形状となっている。埋土は暗灰色粘土であるが、青灰色シルトブロックの混入の有無及び度合によって3層に分かれる。中期の土器片が出土した。

**SD3094** (第87図) h-2区からg-3区にかけての地山面で検出された。西北から東南に走り、g-3区でSD3095と合流している。西北側は調査区外に続く。検出全長8.0m。上部幅2.5~3.0m、底部幅1.6~2.2mをはかり、SD3095との合流部分では幅広となる。深さは0.4m程である。断面形は逆台形を呈する。埋土はSD3095と共通するが、本溝ではSD3095の最下層の埋土である暗灰色粘土と青灰色粘土の混合層が大半を占める。中期の土器片が出土した。

**SD3095** (第87図) f-3区からh-4区にかけての地山面で検出された。東北から南西にやや湾曲しながら走り、g-3区でSD3094と合流している。東西両側ともに調査区外に続く。検出全長11.5m。上部幅2.2~2.9m、底部幅0.5~1.0m、深さ0.7m前後をはかり、底部は東側ほど幅が広い。断面形は幅の広いU字形を呈するが、2段掘り状をなす部分も多い。溝底のレベルはSD3094のそれより0.3m近く低い。埋土は5層に分かれるが、大きくは黒灰色あるいは暗灰色粘土を主とする上層と、暗灰色粘土と青灰色粘土の混合層からなる下層の2つに大別できる。中期の土器片が出土した。

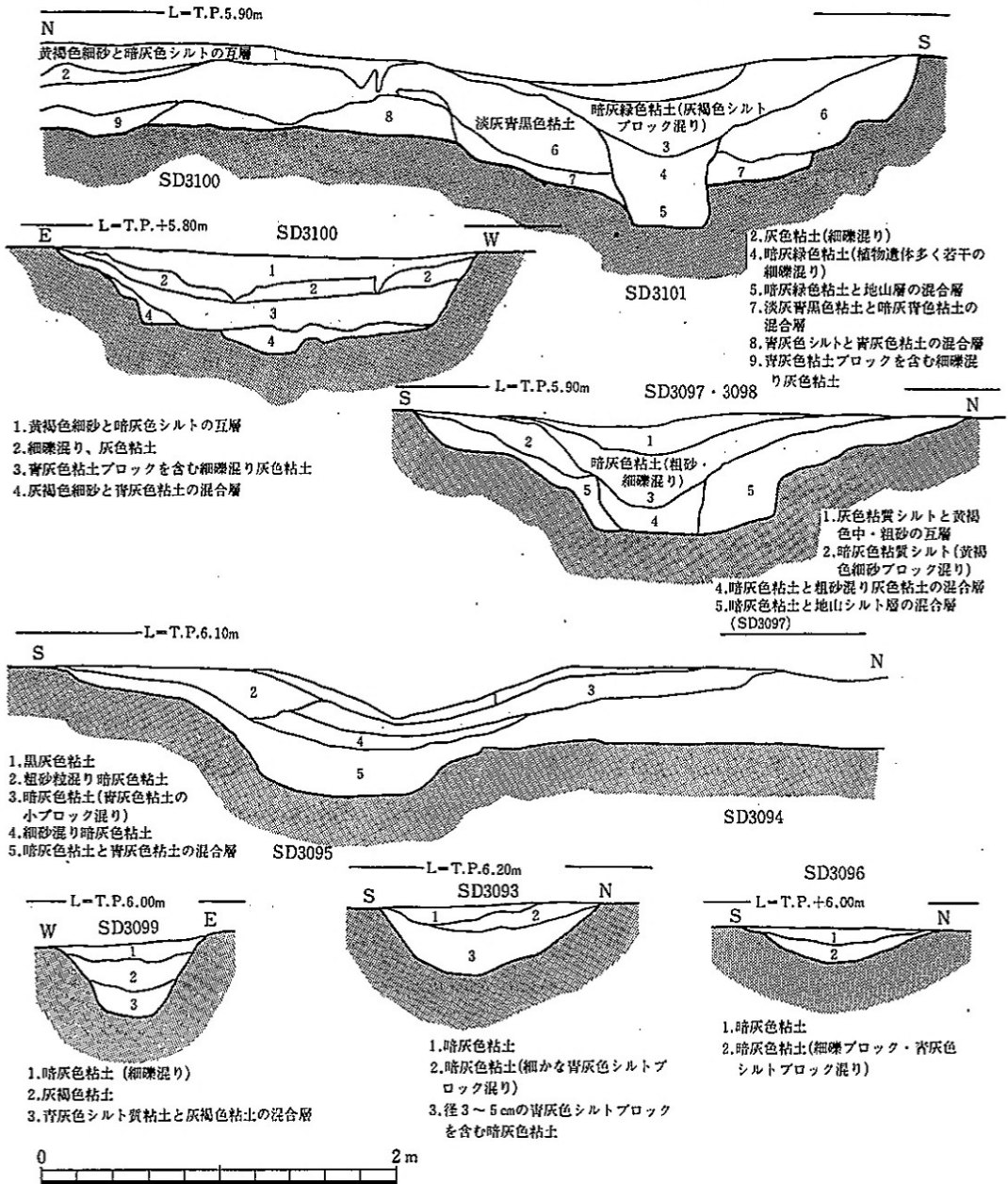
**SD3096** (第87図) g-5区からh-6区にかけての地山面で検出された。東北から西南に走る。西側は調査区外に続くが、東側はSK3188に切られ損壊している。また、g-5区では北側が一部SK3189に切られている。検出全長10.6m。上部幅0.8~1.1m、底部幅0.2~0.4m、深さ0.2m前後をはかる。断面形は浅く幅の広いU字形を呈する。埋土は暗灰色粘土であるが、細礫及び青灰色シルトブロックの混入の有無によって上・下の2層に分けられる。中期の土器片が出土した。

**SD3098** (第87図) f・g・h-7区の地山面で検出された東西溝である。東側は調査区外に続くが、西側はSD3100に切られ損壊している。またg-7区ではSD3097・3099をそれぞれ切っている。検出全長8.0m。上部幅2.2~2.9m、底部幅0.2~0.6m、深さ0.65m前後をはかる。南北両壁とも明瞭な2段掘りとなっており、中段に、北側では0.2~0.4m、南側では0.4~0.6mのテラス状の平坦面がある。下段の断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰色粘質シルトと黄褐色中・粗砂の互層、粗砂・細礫混りの暗灰色粘土層、黄褐色細砂ブロック混り暗灰色粘質シルト層、暗灰色粘土と粗砂混り灰色粘土の混合層の4層である。中期の土器片が出土した。

**SD3099** (第87図) f-9区からg-8区にかけての地山面で検出された。わずかに屈曲しながら東南から北西に走る。東南側は調査区外に続くが、北西側はSD3098に切られ損壊している。SD3098より北側では検出されなかった。検出全長7.5m。上部幅1.0~1.5m、底部幅0.1~0.3m、深さ0.45m前後をはかる。底部幅は北西側ほど狭い。断面形はU字形を呈するが、東南部では一部2段掘り状をなす。埋土は暗灰色粘土層、灰褐色粘土層、青灰色シルト質粘土と灰

褐色粘土の混合層の3層である。中期の土器片が出土した。

**SD3100** (第87図) g-9区からh-7区にかけての地山面で検出された。東南から西北に走る。西北側は調査区外に続き、東南側はg-9区でSD3101に合流している。検出全長15.5m。上部幅3.0m前後、底部幅2.2m前後をはかるが、g-8区では東側が大きく膨らんでいる。深さは0.5~0.6mである。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄褐色細砂と暗灰色シルトの互層、細礫混り灰色粘土、青灰色粘土ブロック混り灰色粘土、灰褐色細砂と青灰色粘土の混合層の4層であ



第87図 SD 3093・3095・3096・3097・3098・3099・3100・3101断面図 1/40

る。S D 3101 近くから、溝底から浮いた状態で、第Ⅱ様式の水差形土器が出土している。

**S D 3101** (第87図) h-11区からf-9区にかけての地山面で検出された。やや湾曲気味に東北から西南に走る。東北側、西南側ともに調査区外に続く。検出全長13.0m。上部幅3.3~3.5m、底部幅1.0~1.4m、深さ0.8~1.0mをはかるが、S D 3100との合流部分では底部は0.5mほど狭くなっている。溝底のレベルは、S D 3100のそれより0.4m程低い。断面形は逆台形状を呈するが、部分的に2段掘り・3段掘り状をなす。埋土は、基本的には淡灰青黒色粘土層、淡灰青黒色粘土と暗灰青色粘土の混合層の2層であるが、-10ライン付近では部分的に暗灰青色粘土層や、緑色粘土と灰褐色極細砂の混合層などの堆積がみられる。なお、S D 3100との合流部での横断セクション及びgライン西面の土層には、本溝の埋没後に再度掘り直された痕跡が認められた。この痕跡は-10ライン北面の土層では認められていないため、これが溝として掘り直されたものか否かは明らかにできなかったが、S D 3100との合流部での横断セクションでは、上部幅2.6m、底部幅0.4m、深さ0.95mをはかる。埋土は2層に分かれる暗灰緑色粘土層で、下層中には多量の植物遺体が含まれていた。中期の土器片が出土した。

**S D 3102** (第79図) e 39区のⅥf層相当層上面で検出された南北溝である。検出全長は1.9mにすぎない。中央やや南寄りをS D 3103に切られている。上部幅0.25~0.3m、底部幅0.1m前後、深さ0.05m前後をはかる。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰黒色粘質シルト層1層である。中期の土器片が出土した。

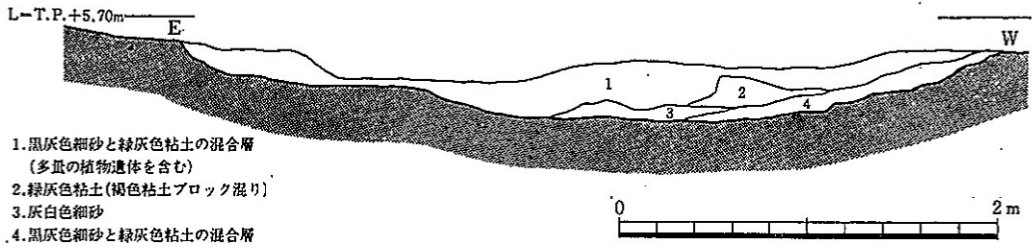
**S D 3103** (第79図) e 39区のⅥf層相当層上面で検出された東西溝である。S D 3102はほぼ直交する。検出全長2.5m。上部幅0.15m前後、底部幅0.05m前後、深さ0.05m前後をはかる。断面形はU字形を呈する。埋土は黒灰色粘質シルト層1層である。中期の土器片が出土した。

#### その他の遺構

**S X 3010** (第88図) g 4・5区の地山面で検出された沼状の遺構である。西側は調査区外に続いている可能性があり、南側の範囲も判然としない。検出できた限りでは、平面形は不整形で南北9.0m以上、東西4.5m以上の拡がりをもつ。北東側の立ち上がりが比較的明瞭で、深さはこの部分で0.5m程をはかる。底面にはかなりの凹凸がある。埋土は、上層と下層に黒灰色細砂と緑灰色粘土の混合層が堆積しており、その間に、緑灰色粘土層と灰白色細砂層が認められた。また、これらの上部にはS D 3090の埋土と共通の粘土層が存在していた。前述のように、S D 3090との間に切合い関係は認められず、S D 3090が本遺構内に流入していたものと考えられる。中央付近から南西側の底面で、径2~3cmの細い杭が無数に検出されたが、その性格は明らかでない。第Ⅱ様式までの土器片が出土した。

**NR 3002** (付図4) e・f 25・26区の地山面で検出された流路と推定される遺構である。南側をNR 3003に、北側をS D 3104にそれぞれ削平されているため、f 28区で北岸の一部と思われる傾斜面を検出したにすぎない。しかし、堆積土がシルトブロック混りの黒灰色細礫層、黄灰色シルトと黒灰色細礫の混合層、黄褐色粗砂と赤褐色細礫の互層の3層で、細礫層が主体となって

いること、下層が粗砂と細礫の互層であること等からすれば、流路の一部と考えてよいと思われる。本来の規模は明らかでないが、幅10m以上をはかったと推定される。深さは、f 28区の北岸の地山面からで1.0 m程である。この流路の堆積層は一部S D3104以西の32ライン付近にまで及んでいた。中期の土器片が出土した。(高島)



第88図 S X 3010断面図 1/40

## 第4節 弥生時代後期

### 第1項 A・Bトレンチ

弥生時代後期の遺構は、Ⅷb～fの各層上面で検出された。そのうちⅧe・f各層上面で検出された遺構は、第3章第2節でも述べたとうり、上層で検出できなかった遺構の残りと考えられるものである。ここではそれらの遺構についてもできるかぎり本来の掘り込み面を推定復元しようつとめた。

#### 土坑

**SK3004** (第23図) B d19区Ⅷf層上面で検出した。本来の掘り込み面はⅧcないしd層上面と考えられる。中期の溝SD3020を切っている。平面形は0.3×0.7mの長円形で検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は黒色粘土で、Ⅴ様式の土器片が数片出土した。

**SK3005** (第23図) B e19区Ⅷf層上面で検出した。後期の溝SD3021Bと切り合っているが、出土した土器が後期前半のものであることからこの土坑の方が古いと思われ、また、本来の掘り込み面はⅧd層上面と考えられる。平面形は0.4×0.7mの楕円形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、コンテナ半分の後期前半の土器片とともに石鏃等の未製品、失敗品を含む多量のサヌカイトのチップが出土した。石片の総量はコンテナ4分の1に及ぶ。石器製作後、危険な石片を一括投棄した穴と考えられる。

**SK3006** (第23図) B e18区Ⅷf層上面で検出した。これもSD3021Bと切り合っている。平面形は0.7×1.1mの不整隅丸長方形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で少量の後期前半の土器が出土した。このことから、SD3021Bよりもこの土坑の方が古いと考えられ、また、本来の掘り込み面はⅧd層上面と推定される。

**SK3007** (第23図) B d18区Ⅷf層上面で検出した。平面形は0.4×0.8mの長方形で検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土である。時期を決定できるような遺物は出土していないが、検出面からの深さが浅く、覆土の状況も他の後期の遺構と同様であることから後期と判断した。

**SK3010** (第24図) B e17区Ⅷf層上面で検出した。土層断面の観察から本来の掘り込み面はⅧd層上面であることが判明している。平面形は1.1×1.4mの楕円形で掘り込み面からの深さは0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土と灰・炭が互層となっており、少量のⅤ様式の土器片が出土した。

**SK3011** (第24図) B e17区Ⅷf層上面で検出した。SK3010と同様本来の掘り込み面はⅧd層上面である。SK3012に切られており、検出面での規模・形状は不明確である。掘り込み面からの深さは0.4mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は焼土ブロックを混入する灰褐色の灰層で、少量の中・後期の土器片と土玉が出土した。



**SK3012** (第24図) B e 17区Ⅷ f 層上面で検出した。SK3011を切っていることから、本来の掘り込み面はⅧ c ないし d 層上面と考えられる。平面形は0.9×0.7mの楕円形で検出からの深さは0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、遺物は出土していないがSK3011を切っていることから後期であることは明確である。

**SK3013** (第24図) B e 17区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は直径1.1mの円形で検出面からの深さは0.35mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で少量の中・後期の土器片が出土した。後期の土器は前半に比定できる。

**SK3014** (第24図) B e 18区Ⅷ f 層上面で検出した。後期の溝SD3023を切っている。平面形は0.5×1.9mの長円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒灰色粘土で、遺物は出土していないが、切り合い関係から後期であることは確実である。

**SK3016** (第25図) B d 17区Ⅷ f 層上面で検出した。SD3021Bを切っている。本来の掘り込み面はⅧ c ないし d 層上面と推定される。平面形は1.0×2.0mの長円形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は舟底状を呈する。覆土は3層に分層でき、各層から▽様式の土器片が出土した。

**SK3017** (第24図) B e 17区Ⅷ f 層上面で検出した。土層断面の検討から本来の掘り込み面はⅧ d 層上面であることが判明している。SD3023と柱穴状の小穴に切られていて本来の規模は不明であるが、南北約1.0mを測る楕円形または円形の平面形を有するものと考えられる。掘り込み面からの深さは0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒灰色粘土で、時期を決定できるような遺物が出土していないため中期の遺構である可能性もあるが、掘り込み面から後期であると判断した。

**SK3019** (第26図) B e 16区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.4×0.6mの隅丸長方形で検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。覆土が他の後期の遺構と同様であるため後期と推定したが、正確な時期は不明とせざるをえない。

**SK3025** (第25図) B d 16区Ⅷ f 層上面で検出した。SD3021Bを切っている。平面形は0.7×0.6mの不整形円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していないが、SD3021Bとの切り合い関係から後期と判断した。

**SK3028** (第28図) B d 16区SD3021Bの底面で検出した。SD3021Bとの新旧関係は不明である。平面形は0.9×0.9mの隅丸方形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は舟底状を呈する。覆土は2層に分層でき、各層から少量の▽様式の土器が出土した。

**SK3030** (第29図) B e 16区Ⅷ f 層上面で検出した。中期の土坑SK3031を切っている。平面形は直径1.0mの円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は舟底状を呈する。覆土は2層に分層でき、各層から▽様式の土器が出土した。

**SK3034** (第29図) B e 15区Ⅷ f 層上面で検出した。本来の掘り込み面はさらに上層と考えられ、検出面での遺存状態がよくないため、本来の規模・形状は不明である。覆土は黒色粘土で少量の中・後期の土器片が出土した。

**SK3036** (第29図) B f 15区Ⅷ f 層上面で検出した。西側の肩は排水溝によって削られている。平面形は東西約0.6m、南北1.0mの楕円形と考えられ検出面からの深さは0.25mを測り、断面形は舟底状を呈する。覆土は微小な炭化材を多量に含む黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3037** (第27図) B d・e 15区Ⅷ f 層上面で検出した。後期初頭の溝SD3028を切っている。平面形は不整形で本来の規模も不明である。検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は底面に凹凸のある浅いU字形を呈する。覆土は黒色粘土で、後半のものを含む後期の土器片が出土した。このことから本来の掘り込み面はⅧ c ないし d 層上面と推定される。

**SK3041** (第30図) B d 15区Ⅷ f 層上面で検出した。東側を排水溝によって削られている。遺存部分の平面形は1辺約1.4mの菱形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は底面に凹凸のある逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で少量のⅡ様式の土器が出土した。

**SK3043** (第27図) B e 15区Ⅷ f 層上面で検出した。SD3028と切り合っているが新旧関係は不明である。平面形は東西0.7mで方形ないし長方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していないが、覆土が他の後期の遺構と同様であることから後期と推定した。

**SK3044** (第32図) B e 15区Ⅷ f 層上面で検出した。中期の井戸SE3011を切っている。平面形は1辺1.0mのほぼ方形で検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は黒色粘土で、少量のⅡ様式の土器片と礫製ハンマーが出土した。

**SK3047** (第33図) B f 14区Ⅷ f 層上面で検出した。西側を排水溝によって削られている。南北0.9mで平面形は楕円形になると考えられる。検出面からの深さは0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は黒灰色粘土と灰・炭が互層となっており、SK3010と似ている。時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3048** (第33図) B f 14区Ⅷ f 層上面で検出した。規模・平面形・覆土ともSK3047とほとんど同様である。やはり時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3049** (第33図) B f 14区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.6×0.5mの不整形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していないが、覆土が他の後期の遺構と同様であることから後期であると推定した。

**SK3050** (第34図) B f 14区Ⅷ f 層上面で検出した。西側は排水溝によって削られ、南側はSK3051によって切られているため規模は不明である。平面形は不整形で検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は灰混り暗灰褐色粘質土で、Ⅱ様式の土器片が少

量出土した。

**S K3051** (第34図) B f 13・14区Ⅳ f 層上面で検出した。西側は排水溝によって削られ、S K3050を切っている。南北幅約1.5mで平面形は不整形である。検出面からの深さは0.25mを測り、断面形は底面に凹凸のある舟底状である。覆土は焼土混り黒色粘土で、中期の土器が出土したが、切り合い関係から後期の遺構と判断した。

**S K3052** (第34図) B e・f 13区Ⅳ f 層上面で検出した。後期後半の溝S D3068に切られている。平面形は1.9×1.2mの隅丸長方形で検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は黒色粘土で、コンテナ1杯分の中・後期の土器片が出土した。後期の土器は量は少いが後期前半に比定できる。

**S K3053** (第30図) B d 14区S D3021B覆土上面で検出した。平面形は0.5×0.6mの不整形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していないが、S D3021Bの覆土を切っていることから明らかに後期の遺構である。本来の掘り込み面はⅣ c ないし d 層上面と推定される。

**S K3054** (第30図) B d 14区Ⅳ f 層上面で検出した。平面形は1.0×0.5mの長円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は黒色粘土で、後期初頭の土器片が少量出土した。

**S K3055** (第35図) B d 14区Ⅳ f 層上面で検出した。中期の井戸S E3014と切り合っているが新旧関係は不明である。平面形は不整形で、浅いくぼみのようである。遺物が出土していないため時期は不明である。

**S K3056** (第35図) B d 13区Ⅳ f 層上面で検出した。S K3055と同様で時期、性格とも不明である。

**S K3057** (第38図) B e 13区Ⅳ e 層上面で検出した。S D3068に切られている。本来の掘り込み面はⅣ d 層上面と考えられる。平面形は1.3×1.4mの不整形で検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は不整な逆台形である。覆土は3層に分層でき、各層から少量の後期初頭の土器片が出土した。

**S K3058** (第38図) B e 13区Ⅳ f 層上面で検出した。平面形は1.7×0.7mの不整長円形で検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は2層に分層でき、V様式の土器が少量出土した。

**S K3059** (第39図) B c 12・13区Ⅳ f 層上面で検出した。中期の土坑S K3060、中期の溝S D3036を切っている。平面形は2.4×1.8mの不整四辺形で検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は2層に分層でき、各層からⅢ様式からV様式の土器片が出土した。

**S K3061** (第38図) B f 13区Ⅳ f 層上面で検出した。西側を排水溝によって削られているため、全体の規模・形状は不明である。検出面からの深さは0.08mを測り、断面形は皿状を呈す

る。覆土は灰混り黒色粘土であるが、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3062** (第40図) B d 13区Ⅷ f 層上面で検出した。S D 3033、SK3064とそれぞれ切り合っているが、新旧関係は不明確であり、全体の規模・形状も不明である。検出面からの深さは0.2mを測り、覆土は暗灰緑色粘土であるが、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3064** (第40図) B d 12区Ⅷ f 層上面で検出した。東側を排水溝によって削られている。平面形は不整形で検出面からの深さは0.5mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は3層に分層できるが遺物は出土していない。

**SK3067** (第41図) B f 11区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.2×1.3mの不整形で検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層できるが、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3068** (第41図) B e 11区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.0×0.7mの不整形で検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3069** (第40図) B d 11区Ⅷ f 層上面で検出した。中期の溝S D 3038を切っており、東側は排水溝によって測られている。平面形は1.5m以上×1.2mの隅丸長方形と考えられる。検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、V様式の土器片が少量出土した。

**SK3070** (第42図) B e 10~11区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.9×1.0mのほぼ円形で、検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3071** (付図3) B e 11区Ⅷ f 層上面で検出した。中期の井戸S E 3018・3019と切り合っているが新旧関係は明確でない。本来の規模・形状は不明である。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。覆土は砂混り黒灰色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**SK3074** (第42図) B e 10区Ⅷ f 層上面で検出した。柱穴状の小穴に切られている。平面形は0.7×1.1mの不整形楕円形で、検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。覆土は暗灰色粘土で、V様式の土器片が少量出土した。

**SK3076** (第44図) B d 09区Ⅷ f 層上面で検出した。東側は排水溝によって削られている。本来の規模・平面形は不明であるが、東西1.8m、南北3.0m分を検出した。検出面からの深さは0.4mを測り、断面形は凹凸のある逆台形を呈する。覆土は2層に分層でき、中期から後期の土器片・石器等が出土した。

**SK3077** (第44図) B d・e 09区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は1.0×0.5mの不整形長円形で、検出面からの深さは0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は黒色粘土で、V様式の土器片が少量出土した。

**S K3081** (第43図) B f 09~10区Ⅷ f 層上面で検出した。中期の土坑 S K3080 を切っている。平面形は1.5×1.5mの不整形で、検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は4層に分層でき、中期から後期の土器片が出土した。後期の土器は前半に位置づけられる。また、この土坑には、直径10~15cm、長さ40~60cmの焼けた丸木が数本、斜め上方からつままれたような状態で出土した。土器の年代観から本来の掘り込み面はⅧ c ないし d 層上面と推定される。

**S K3084** (第45図) B e 09区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.8×0.9mの不整形で検出面からの深さは0.15mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**S K3085** (第45図) B e 09区Ⅷ f 層上面で検出した。上記 S K3084 と切り合っているが新旧関係は不明である。平面形は1.0m以上×0.6mの不整形長円形と考えられ、検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は黒色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**S K3086** (第46図) B d 07区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は0.7×0.5mの隅丸長方形で検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は逆台形と呈する。覆土は黒灰色粘土で、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**S K3087** (第47図) B d 08区Ⅷ e 層上面で検出した。平面形は0.8×1.9mの不整形長円形で北側で1度段がつく。検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は3層に分層でき、各層からⅡ様式からⅤ様式初頭に位置づけられる土器が出土した。

**S K3088** (第47図) B d 08区Ⅷ f 層上面で検出した。東側は排水溝によって削られている。本来の平面形は不明であるが、南北1.1m、東西0.7m分を検出した。検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。覆土は黒灰色粘土で、中・後期の土器が出土した。

**S K3090** (第48図) B f 08区Ⅷ f 層上面で検出した。西側が排水溝によって削られているため本来の平面形は不明であるが、東西1.1m以上、南北1.9m分を検出した。底面は北側が1段深くくなっている。検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は北側のくぼんだ逆台形を呈する。覆土は2層に分層できるが、時期を決定できるような遺物は出土していない。

**S K3092** (第48図) B e 07区Ⅷ f 層上面で検出した。3つ以上の土坑が切り合っているようにも見えるが、明瞭には区別できない。西側は近世の遺構によって切られているが、平面形は直径2.0mのほぼ円形を呈するものと思われる。底面は中央が1段深くなっており、検出面からの深さは0.6mを測る。断面形は段のつくU字形を呈する。覆土は3層に分層でき、Ⅴ様式の土器が数多く出土した。

**S K3096** (第46図) B d 07区Ⅷ f 層上面で検出した。平面形は2.1×0.7mの長円形で、検出面からの深さは0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は2層に分層でき、中期後半から後期の土器が出土した。

SK3098 (第49図) B d 06区Ⅷ f 層上面で検出した。東半部が排水溝によって削られているため本来の平面形は不明であるが、東西0.7m以上、南北1.4m分を検出した。検出面からの深さは0.6mを測り、断面形はスリ鉢状を呈する。覆土は5層に分層でき、各層からⅤ様式の土器が数多く出土した。

SK3104 (第89図) B e 18区Ⅷ e 層上面で検出した。掘り込み面はⅧ d 層上面で、SK3105を切っていることが土層断面の検討により判明した。平面形は0.6×0.6mの不整形円で、掘り込み面からの深さは0.5mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は灰・炭を主とし、3層に分層できる。各層からⅤ様式の土器が出土した。

SK3105 (第89図) B e 17区Ⅷ e 層上面で検出した。SK3104と柱穴状の小穴に切られているため掘り込み面は不明であるが、後期の土器が出土していることから、Ⅷ e ないし d 層上面であると考えられる。西側は調査区外に出ているが、東西0.8m以上×南北1.4m分を検出した。検出面からの深さは0.8mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は灰・炭・焼土を多く含み、5層に分層できる。各層からⅤ様式の土器が出土した。

SK3106 (第89図) B e・f 12区Ⅷ e 層上面で検出した。平面形は1.5×1.3mのほぼ円形で、検出面からの深さは0.4mを測り、断面形は半円形を呈する。覆土は7層に分層でき、各層からⅤ様式の土器が出土した。

SK3107 (第89図) B d 08区Ⅷ e 層上面で検出した。東半部が調査区外に出ているため本来の平面形は不明であるが、東西1.1m以上×南北1.9m分を検出した。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は灰を多く含む黒色粘土で、土坑内の南側に集中して壺・甕・鉢・高杯等のⅤ様式の土器が一括出土した。

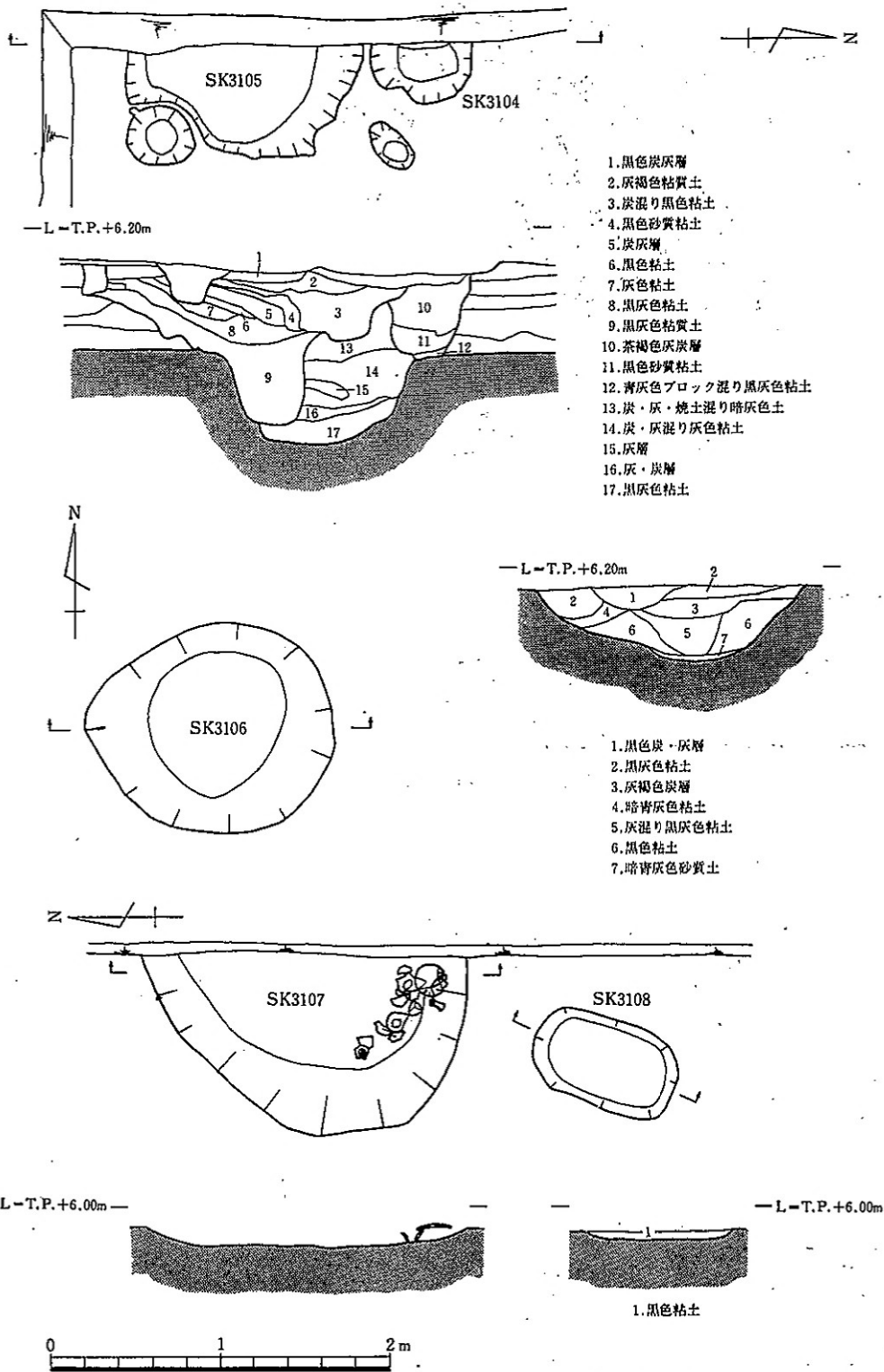
SK3108 (第89図) B d 08区Ⅷ e 層上面で検出した。平面形は0.5×0.9mの長円形で、検出面からの深さは0.05mを測り、断面形は皿状を呈す。覆土は茶褐色の灰層で、Ⅴ様式の土器片が少量出土した。

SK3109 (第90図) B d 09区Ⅷ c 層上面で検出した。東側は調査区外に出ているが、検出した部分は直径2.2mの半円形を呈する。検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は黒色粘土で、後期後半の土器の良好な一括資料と石皿状石製品が出土した。

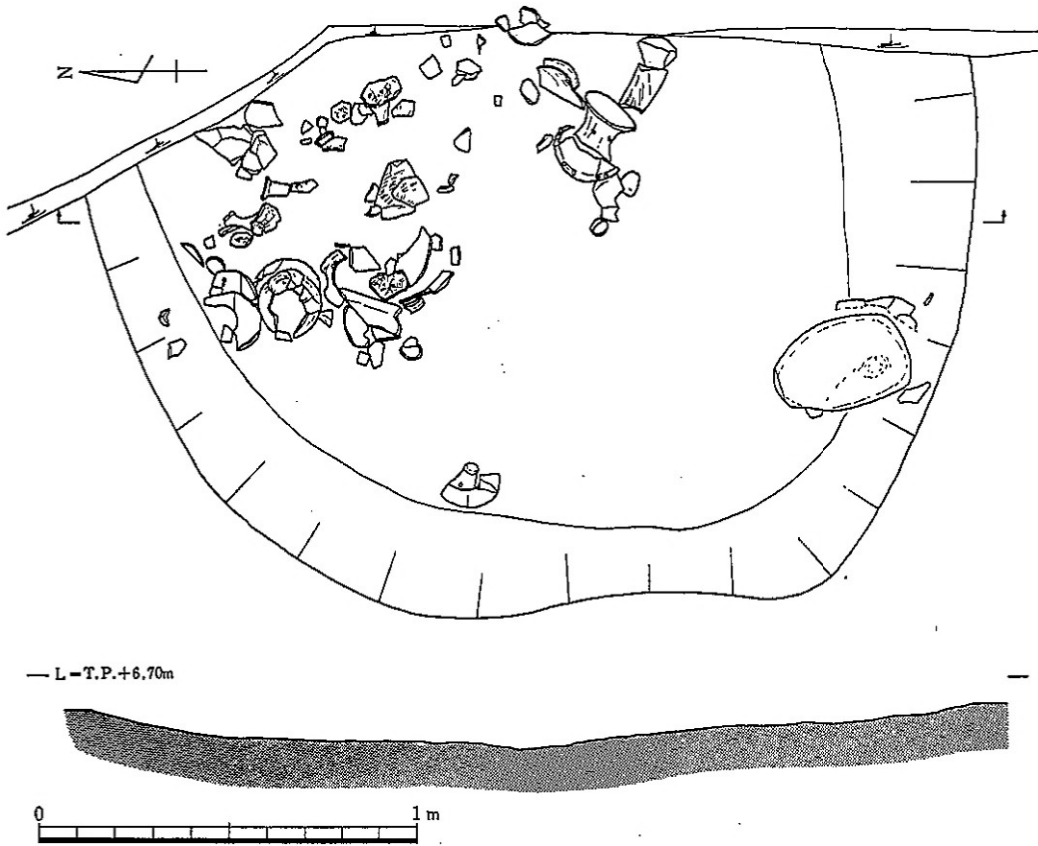
SK3111 (第51図) B d 20区Ⅷ e 相当層上面で検出した。西側はサブトレンチによって削られている。平面形は3.2m以上×1.1mの溝状で、検出面からの深さは0.5mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は2層に分層できるが、上層の炭を多く含む黒灰褐色粘土層から中・後期の土器片が出土した。

SK3112 (第91図) B f 08区Ⅷ d 層上面で検出した。平面形は1.1×1.6mの不整形丸長方形で、検出面からの深さは1.35mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は3層に分層でき、各層からⅤ様式の土器が出土した。

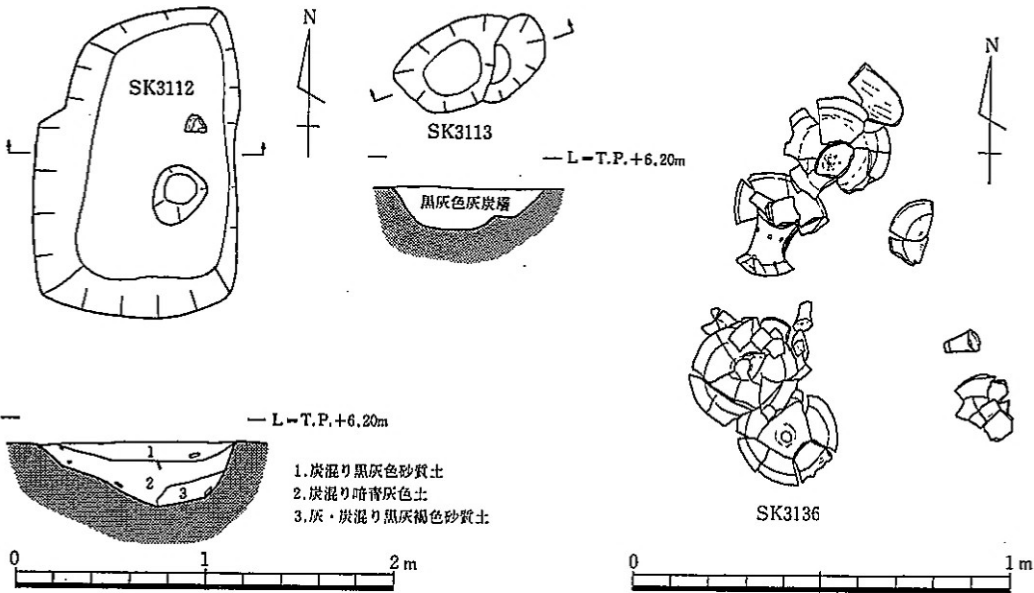
SK3113 (第91図) B f 09区Ⅷ d 層上面で検出した。平面形は0.8×0.4mの楕円形で、検出



第89図 S K 3104・3105・3106・3107・3108平面図・断面図 1/40



第90図 SK3109遺物出土状況図 1/20



第91図 SK3112・3113平面図・断面図 1/40

第92図 SK3136遺物出土状況図 1/20



面からの深さは0.2mを測り、断面形は東側で一度段がつくU字形を呈する。覆土は黒灰色の灰と炭で、V様式の土器片が少量出土した。

**SK3114** (第93図) B d 07区Ⅷc層上面で検出した。平面形は1.4×1.4mの不整形形で、検出面からの深さは0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は灰混り黒色粘土で、V様式の土器片が出土した。

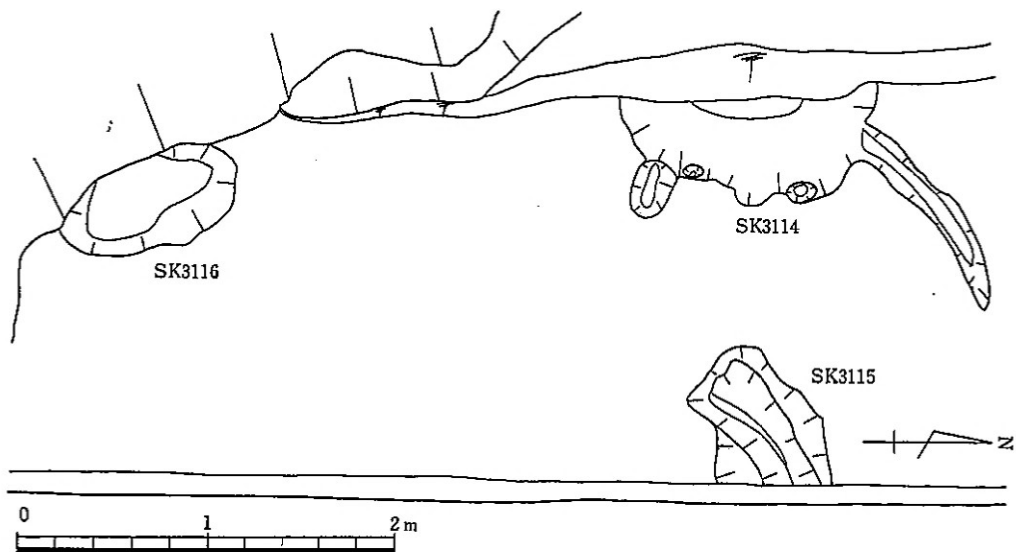
**SK3115** (第93図) B d 07区Ⅷc層上面で検出した。東側は排水溝によって削られている。平面形は0.8m以上×0.6mの不整形で、検出面からの深さは0.15mを測り、断面形はV字形を呈する。覆土は灰褐色の灰で、V様式の土器片が出土した。

**SK3116** (第93図) B d 06区Ⅷc層上面で検出した。西側は旧平野川NR9001によって削られている。平面形は0.6×1.0mの楕円形で検出面からの深さは0.1mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は灰混り黒色粘土で、V様式の土器が出土した。

**SK3117** B e・f 10区Ⅷb層上面で検出した。土層観察用のアゼを掘削中に検出されたため図がない。平面規模は幅1mのアゼ内にすっぽりと納まる程度で、深さ、断面形は不明である。覆土は灰・炭・焼土を多く含む茶褐色土で、胴部穿孔を有する朱彩壺形土器をはじめとする数多くの後期後半の土器が出土した。

**SK3118** B d・e 08~09区Ⅷd層上面で検出した。これも土層観察用のアゼ内で検出されたため平面図がない。平面規模は南北8.0m、東西2.0m以上である。掘り込み面からの深さは0.2mを測り、断面形は皿状を呈する。覆土は灰・炭の互層で、V様式の土器が多く出土した。

**SK3119** B e 18区Ⅷf層上面で検出した。後期の溝SD3021Bに切られている。平面形・規模等は不明であるが、中期末から後期初頭の土器が出土した。



第93図 S K 3114・3115・3116平面図 1/40

**SK3121** B d11区Ⅷc層上面で検出した。土層観察用のアセ内で検出したため平面図がない。平面形は不明であるが、東西1.1m、掘り込み面からの深さは0.8mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は2層に分層でき、各層からV様式の土器が多量に出土した。

**SK3122** (第51図) B d20区Ⅷe相当層上面で検出した。東側が調査区外に出ているため本来の平面形は不明であるが、東西1.5m以上、南北2.7m分を検出した。検出面からの深さは0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は灰・炭を主体とし、4層に分層できる。各層から中・後期の土器片が少量出土した。

**SK3128** (付図3) B e20区Ⅷe層上面で土器が検出されたのみで平面形・規模等は不明である。土器の出土状態から土坑と判断した。完形に復元可能な高杯・鉢・器台等が一括出土したが、いずれも後期前半の特徴を備えている。

#### 井戸

**SE3012** (第56図) B e14区Ⅷf層上面で検出した。平面形は1.3×1.0mの長円形で、検出面からの深さは1.3mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は6層に細分でき、1・2層を上層、3層を中層、4・5層を下層、6層を最下層というふうの大別できる。最下層は井戸使用中の自然堆積土で有機物を多く含む。下層は側壁の崩れ込みと考えられる青灰色粘土ブロックを多く含む。中層は炭・植物遺存体を多く含む、土器等の遺物も多い。上層は特に遺物が多く、完形に復元可能なものも含んでいる。土器は後期前半のものを多く含んでいる。本来の掘り込み面はⅧdないしe層と推定される。

#### 溝

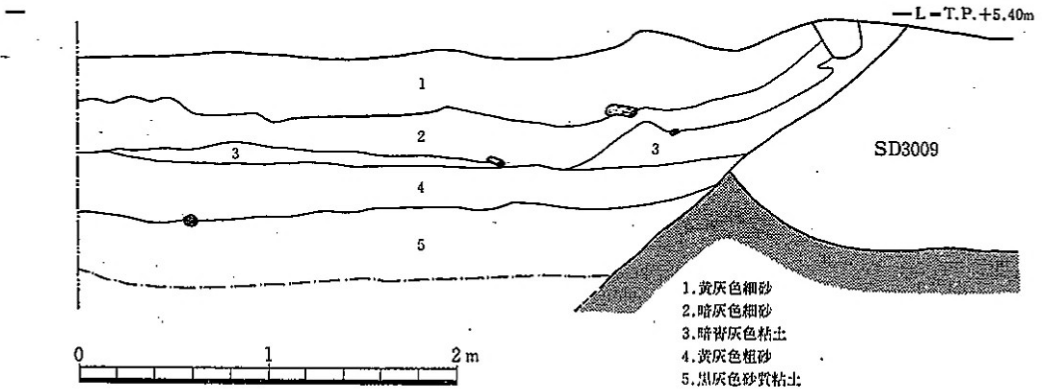
**SD3001B、3002B、3003B、3004B、3005B、3006B** (第58～62図) 前節で述べたようにAトレンチで検出されたこれらの大溝は、中期の環濠がある程度埋没した後、同じ位置で掘りなおされたものである。掘り込み面はいずれもⅧdないしe層に対応する青灰色粘土層上面であるが、掘りなおしの時期は溝によって若干のずれがある。幅はそれぞれ前身となった中期の環濠とはほぼ同規模で方向も一致している。深さはSD3001Bが0.7m、3002Bが1.0m、3003Bが0.7m、3004Bが0.8m、3005Bが1.0m、3006Bが0.6mで、断面形はどれもV字形を呈する。覆土は3～6層に細分可能であるが、基本的には上・中・下層の3層に大別することができる。下層は細砂混りの暗灰褐色粘質土で木片等植物遺体を多く含んでいる。SD3005Bではこの層の上面で人間の足痕が多数検出された。中層は青灰色ないし黄灰色の細砂または砂質土で数層の整合する薄層で構成されており、ゆるやかな清流による堆積と考えられる。上層は暗青灰色粘土で禾本科の植物遺体を含んでいる。この層の同時異層である青灰色粘土は溝と溝の間にも厚く堆積しており、これらの大溝が埋没しきる時期には広く冠水した状態だったことがわかる。出土遺物は各溝とも非常に少い。SD3003Bの掘り込み面北肩部より完形に復元可能な後期前半の広口壺形土器が出土した。またSD3003Bの下層から中層にかけて建築部材と考えられる木材が多量に出土した。これらのうちには、割裂、切り欠き、面取りなどの加工痕が観察できるものを含んでい

る。

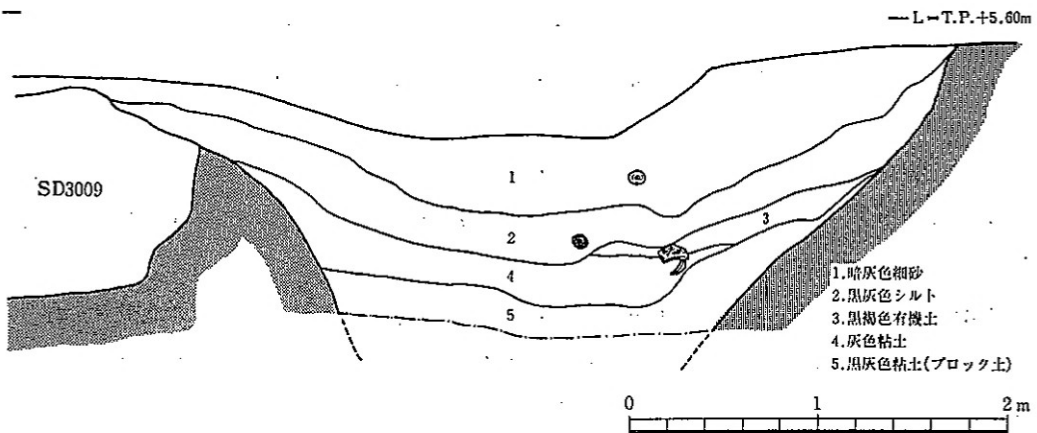
これらの大溝埋没後の窪みは一時的に水が流れたこともあるようであるが、基本的には覆層に相当する暗青灰色粘土～有機土によって完全に埋没している。

**S D3008・3010** (第94～95図) Bトレンチ22～25区で検出された後期の環濠と考えられる大溝で、トレンチ西側では合流するように切り合っているが新旧関係は明確でない。S D3008は北側の肩がトレンチ北端でも検出されていないため幅は不明であるが10m前後になると思われる。深さも鋼矢板の安全限界をこえたため完掘していないが、ハンドオーガーで確認した結果約1.7mを測り、断面形は逆台形を呈するものと考えられる。覆土は5層以上に細分可能であるが、上下2層に大別することができる。上層は黄灰色ないし暗灰色の粗粒砂～細粒砂で、かなり強い流れによるラミナが観察される。下層は黒灰色砂質粘土で稜鉄鈹の小塊を多く含む。上層からは後期後半の多量の土器、木製品、建築部材を含む多数の木材等が、下層からは後期前半の多量の土器、木製品、獣骨等が出土した。

S D3010は幅4.6m、深さはS D3008と同様ハンドオーガーによる確認であるが約1.7mを測



第94図 S D3008断面図 1/40



第95図 S D3008断面図 1/40

り、断面形は逆台形を呈するものと考えられる。覆土は5層以上に細分可能であるが、上下2層に大別することができる。上層は暗灰色細砂と黒灰色シルトで、細砂層中には流れによるラミナが観察される。下層は灰色ないし黒灰色粘土で、Ⅷ層に由来する青灰色シルトの小ブロックや稜鉄鈹の小塊を多く含む。また、上層と下層の間の南寄り、つまり集落から見て内側寄りに炭・灰・植物遺体を多量に含む黒褐色有機土が挟在している。この層からは後期の土器片や獣骨が多量に出土したことから、集落側からのゴミの投棄によって形成された層と考えられる。遺物は上層から後期の土器、木製品、木材が多量に、下層からも後期の土器、木製品が多量に出土した。特に下層からは特殊な器形の丹彩土器や底部、胴部に穿孔した土器が水底に沈められたような状態でかなりの点数出土していることは注目される。

この2条の大溝は、上部は奈良・平安時代の川NR6001によって削られているため本来の掘り込み面は不明であるが、Ⅷc～e層のいずれかであると推定される。したがって、幅・深さとも相当大規模なものであったと思われる。

**SD3014・3015・3016・3017** (付図3) B d 21区Ⅷf層上面で検出した一群の小溝で、SD3015は南東から北西方向、他の3条はSD3015からはほぼ直角に南西方向に派生する。幅0.3～0.5m、深さ0.2～0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物はほとんど出土していないが、中期後半の大溝SD3011を切っていることから後期と考えられる。

**SD3018** (付図3) B e 20区Ⅷf層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。延長2m分を検出した。

**SD3021B** (付図3) B e・f 11区からB d・e 19区にかけてのⅧe層上面で検出した南北方向で西へ大きくカーブしながら流れる溝で、最大幅2m、深さ0.2mを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。延長約40m分を検出した。この溝は中期前半の溝SD3021Aの上層ではほぼ同じ位置で検出されたもので、灰や炭を多く含む黒褐色土を覆土とし、多量のⅤ様式の土器や獣骨が数カ所に密集した状態で出土したことから、SD3021Aが埋没した後のくぼみにそれらの遺物が流入したか投棄されたものと考えられる。獣骨の中には切断された鹿角の角座の部分や頭頂を打ち割られたシカの頭骨などがあり、いずれも金属器と思われる鋭利な刃物の痕跡が観察できる。土器は後期後半のものが多いことと、Ⅷc層上面掘り込みのSD3056・3067よりも明らかに下層にあることから、本来の掘り込み面はⅧd層上面と推定される。

**SD3022** (付図3) B e 18区の南北溝SD3023底面で同方向に検出された小溝で、幅0.4m、深さ0.4mを測り、断面形はU字形を呈する。延長3.8m分を検出し、覆土からⅣ・Ⅴ様式の土器片が少量出土した。

**SD3023** (付図3) B d 17～B e 18区のⅧf層上面で検出した南南東から北北西方向の小溝で、SD3021Bに切られている。幅0.8m、深さ0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約10m分を検出し、Ⅳ・Ⅴ様式の土器片が出土した。

**SD3024** (第26図) B e 16～17区のⅧf層上面で検出した南南東から北北西方向の小溝で、

幅0.5m、深さ0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物はほとんど出土していない。

**S D3028** (付図3) B e・f 15区Ⅷ f 層上面で検出した南西から北東方向の小溝で、幅0.8m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約6m分を検出し、後期初頭の土器片が少量出土した。

**S D3030** (付図3) B d 13区Ⅷ f 層上面でS K3056に切られてごく一部を検出した小溝で、幅0.5m、深さ0.1mを測り断面形は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

**S D3033** (付図3) B d・e 13区Ⅷ f 層上面で検出した東西小溝で、中期の溝S D3032を切っている。幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長5.8m分を検出したが遺物はほとんど出土していない。

**S D3037** (付図3) B d 12~13区Ⅷ f 層上面で検出した南東から北西方向の幅広い溝で、S D3021・Bから派生する溝かもしれない。幅1.7m、深さ0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。延長約5m分を検出し、▽様式の土器が比較的まとまって出土した。

**S D3040** (付図3) B d・e 10区Ⅷ f 層上面で検出した南西から北東方向の小溝で、幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長2m分を検出し、後期前半の土器片が出土した。

**S D3048** (付図3) B f 08区Ⅷ f 層上面で検出した南西から北東方向の小溝で、幅0.2m、深さ0.1mを測り、断面形はV字形を呈する。延長1.4m分を検出した。

**S D3052** (付図3) B e 21区Ⅷ e 層上面で検出した南北小溝で、S D3053を切っている。幅0.3m、深さ0.2mを測り、断面形はV字形を呈する。黒色粘土の覆土からⅣ様式の土器片が少量出土したが切り合い関係から後期と判断される。延長1m以上を検出した。

**S D3053** (付図3) B e 20~21区Ⅷ e 層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約6m分を検出し、黒灰色粘土の覆土から▽様式の土器片が少量出土した。

**S D3054** (付図3) B e 19~20区Ⅷ e 層上面で検出した南々東から北々西方向の小溝で、幅0.9m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約6m分を検出し、黒灰色粘土の覆土から▽様式の土器が出土した。

**S D3055** (付図3) B d 19区Ⅷ e 層上面で検出した南西から北東方向の小溝で、幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約6m分を検出し、黒灰色粘土の覆土から▽様式の土器片が少量出土した。

**S D3056** (付図3) B e・f 15~16区Ⅷ c 層上面で検出された東西大溝で最大幅4m、深さ0.5mを測り、断面形は不整な舟底形を呈する。覆土は3層に大別でき、下層の黒色粘土層からは多量の後期後半の土器が出土した。延長約6m分を検出した。

**S D3057** (付図3) B d 13~16区Ⅷ e 層上面で検出した南北小溝で、15ライン以北ではやや西向きにカーブしている。幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。延長約13mを

検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器片が比較的まとまって出土した。

**SD3058・3059** (付図3) B d14~15区Ⅷe層上面で検出した南北小溝で、15ライン以北では合流するように切り合っているが新旧関係は明確でない。いずれも幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。延長10m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器片が出土した。

**SD3060** (付図3) B e14~15区Ⅷe層上面で検出した南北小溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形はV字形を呈する。延長3.5m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器片が少量出土した。

**SD3061** (付図3) B e14~15区Ⅷe層上面で検出した南北小溝で、幅0.3m、深さ0.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長2.2m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器片が少量出土した。

**SD3062** (付図3) B d・e14~15区Ⅷe層上面で検出した南西から北東方向の小溝で、SD3057・3058・3064に切られている。掘り込み面はⅧd層と推定され、断続しながら延長約7m分を検出した。覆土はV様式の土器細片がぎっしりつまった状態だった。

**SD3063** (付図3) B e14~15区Ⅷe層上面で検出した南北小溝で、SD3065に切られている。幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。延長9m分を検出し、黒灰色粘土の覆土から後期前半の土器片が多量に出土した。

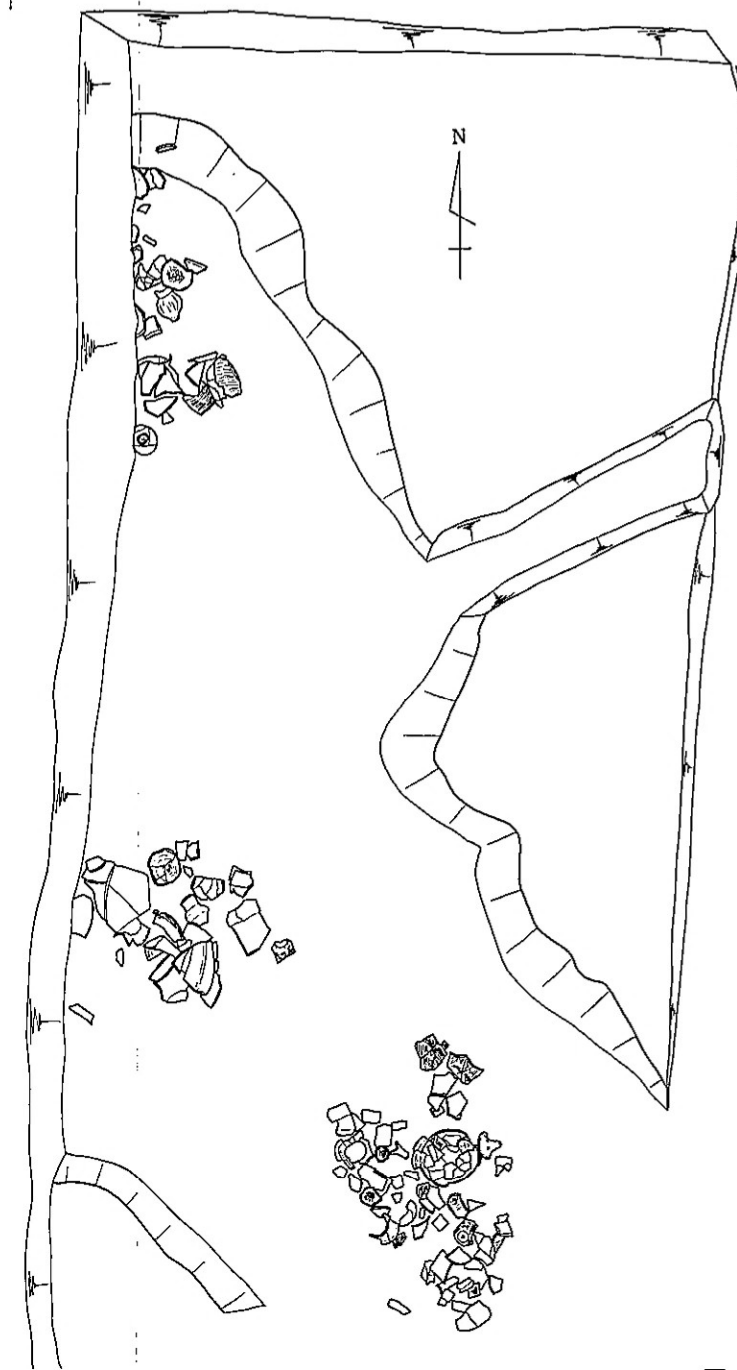
**SD3064** (付図3) B e・f14~15区Ⅷe層上面で検出した小溝で、SD3065に切られている。B e14区では南北方向、15ライン付近で西へカーブして東西溝となる。幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。延長7.5m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器片が出土した。

**SD3065** (付図3) B e・f14~15区Ⅷe層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、SD3066を切っている。幅1m、深さ0.3mを測り、断面形はU字形を呈する。延長5.5m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器が多量に出土した。

**SD3066** (付図3) B e・f15区Ⅷe層上面で検出した南西から北へカーブする小溝で、SD3064を切っている。幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。延長3.5m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からV様式の土器片が出土した。

**SD3067** (第96図) B d~f12~14区Ⅷc層上面で検出した大溝で、B d12・13区では南東から北西方向、B eラインと14ラインの交点付近で西へ屈曲して東西溝となる。最大幅2.5m、深さ0.5mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。延長16m分を検出した。覆土は3層に大別でき、下層の黒褐色粘土からは多量の後期後半の土器が諸処に集中した状態で出土した。

**SD3068** (付図3) B d~f09~11区Ⅷc層上面で検出した大溝で、B d09~10区では南東から北西方向、B e・f10・11区では西に屈曲して東西溝になる。最大幅4.3m、深さ0.7mを測り、断面形は段のつく舟底形を呈する。延長約13m分を検出した。覆土は2層に大別でき、各層



第96图 S D 3067 遗址出土状况图 1/30

から多量の後期後半の土器が出土した。

**S D3069・3070** (付図3) B d18区Ⅷe層上面で検出した南東から北西方向の小溝で、ほぼ平行している。ともに幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。延長約1.5m分を検出し、黒灰色粘土の覆土からⅤ様式の土器片が出土した。

**S D3071** (付図3) B e19区の中期の環濠S D3012埋没後の窪みに堆積したⅧe相当層上面で検出した東西小溝で、幅0.3m、深さ0.2mを測り、断面形はU字形を呈する。黒灰色粘土の覆土からⅤ様式の土器片が出土した。

#### 小結 環濠について

本報告で環濠と呼んだのは主としてAトレンチ及びBトレンチ北部で検出された中・後期の平行する大溝とCトレンチ北部で検出された7条の大溝である。これらの大溝を集落域を画する環濠と考えた理由は、大溝に画されて土坑・井戸・柱穴等の遺構の分布に疎密があること、A・Bトレンチ部の平行する大溝は集落が立地する自然堤防の等高線に沿って走っていることを挙げた。既述の調査区でも、長吉ポンプ場本体部の調査区(『亀井・城山』1980)や平野川改修の調査区でも遺構の分布を画する大溝が確認されている。ただ、これまでの調査では集落の全体像を確認するには至っていないため、従来知られている環濠集落のようにドーナツ状に完結する環濠となるかどうかは不明と言わざるをえない。また、Cトレンチ北部で検出された大溝は、A・Bトレンチ部の大溝のように同時期に数条平行する形態を取っていないことも、環濠という用語を使用することをためらわせる。それでもあえて環濠と呼んだのは、つぎの理由による。亀井のような低地に立地する集落の場合、水を得ることよりも排水の方が重大な問題となっただろうし、大和川や東除川の前身となった水系による洪水も人々を悩ませたことだろう。それゆえ、排水や防水の機能を持った集落域を画する大溝群は不可欠のものであったと推定される。最近の山賀遺跡の調査でも前期の段階で平行する大溝群が検出されている。

亀井の場合、集落の北側と南側で大溝のあり方が異なることの意味については、中期の自然流路の位置の確認や微地形の復元、他集落との関係等多くの課題が残されている。今後検討を進めたい。

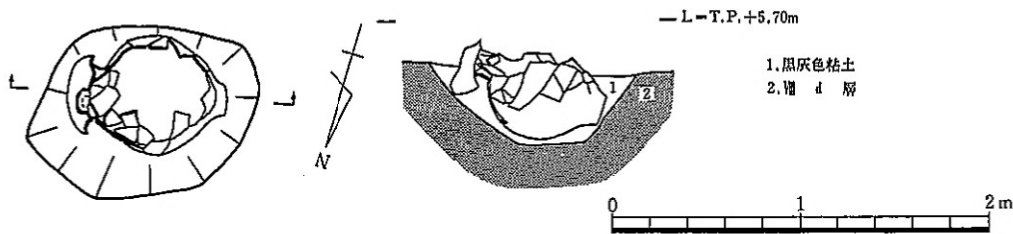
#### 墓

**S X3002** (第97図) B d14区Ⅷe層上面で検出した壺棺墓である。上半部は他の遺構によって削平されており、掘り込み面はⅧd層上面と推定される。掘方の平面形は0.6×0.45mの楕円形で、検出面からの深さは0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。壺棺は後期の壺形土器を利用し、高杯形土器の杯部で蓋をしており、掘方中央やや南寄りに口縁部を東方斜め上に向けた横位で納められていた。壺棺内の覆土は粒子の細かい黒灰色粘質土で、胴部内面に接して新生児骨が検出された。掘方内の覆土は砂混り黒灰色粘土で遺物はほとんど出土していない。なお、S X3002は発泡ウレタンによる取り上げを行ったため土器の遺物としての実測は行っていないが、後期前半に比定できるものである。



### その他の遺構

**S X 3004・3005 (第98図)** S X 3004はB d 10からB e・f 11区にかけて、S X 3005はB d・e 10区のいずれもⅡb層上面で検出された土器片敷である。両者とも幅0.9~1.2mの範囲に平均2~3cm大の土器細片をぎっしり敷きつめたもので、一部調査時にとぼしてしまったものもあるが、非常に固く踏みしめられている。平面・土層断面を詳細に観察したが溝のようなものは伴っておらず、逆にⅡb層上面から若干盛り上がっている。このため、軟弱な包含層面を歩きやすくするための通路のようなものと推定される。S X 3004は延長10.6m分を、S X 3005は延長5.5m分を検出した。主軸方位はS X 3004が東で北へ約28°、S X 3005が同じく36°振っている。土器片は後期末に比定できるものが多く、少量の籠目土器を含んでいる。また、S X 3005からは長さ0.6cm、直径0.2cm、穴の内径0.15cmという極小の碧玉製の管玉が出土した。(広瀬)



第97図 S X 3002平面図・断面見通し図 1/20

### 第2項 C・Dトレンチ

#### 井戸

**S E 3027 (第99・100図)** e 38区、S D 3074の北壁斜面にて検出された。S D 3074の埋没後に掘られたものであることは明らかであるが、上層では掘方の検出ができなかった。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はN-22°-Eを示す。長径0.8m、短径0.65m、深さは北側の検出面から1.0m程をはかる。断面形は逆台形状を呈するが、底面がわずかに丸味をもっている。第Ⅶ様式前半の壺形土器(127)、長頸壺形土器(128~132)、短頸壺形土器(133・134)等が一括出土した。これらの土器は、(127)・(130)・(132)が井戸中央で底面から5cmほど浮いた状態にあり、その他の土器はその直上から折り重なった状態で出土した。出土状態からは、すべて同時期に一括廃棄されたと判断できるものであった。

**S E 3028 (第99図)** S E 3027の南方、約0.7mに位置し、S D 3074の南壁斜面にて検出された。上層での掘方はS E 3028と同様、検出できなかった。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はほぼ南北を示す。長径1.2m、短径1.0m、深さ0.8mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は6層に分けられ、上・中層は緑灰色あるいは暗緑色粘土と青灰色シルト・黄灰色極細砂の混合層であるが、下層は灰色粘土ブロック混りの黄灰色中砂層である。底面は地山層下の砂層に達し

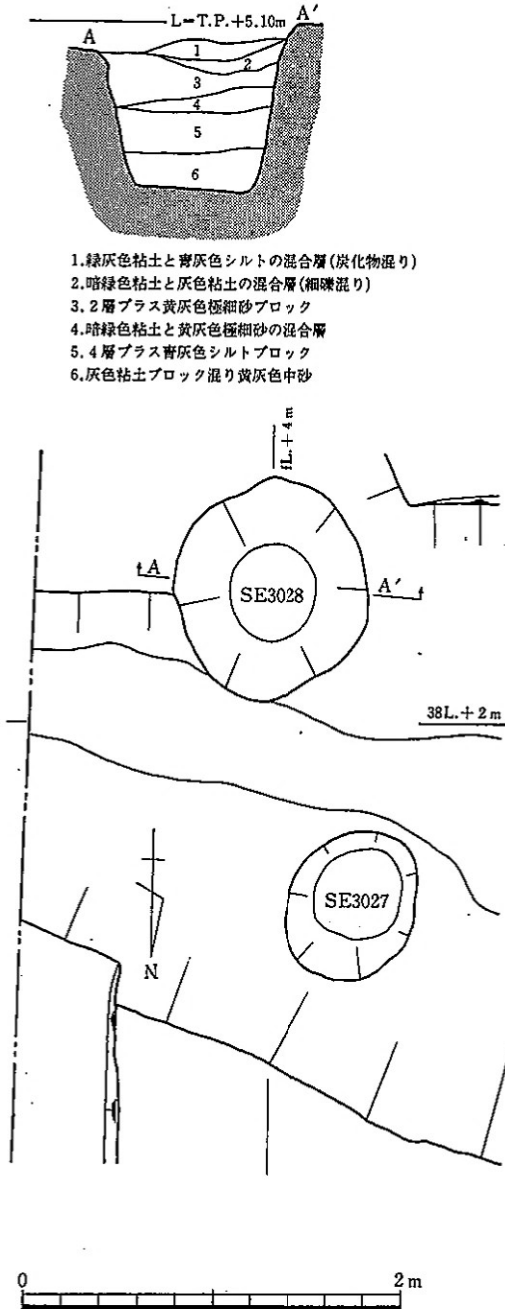


第98图 S X 3004 · 3005平面图 1/40

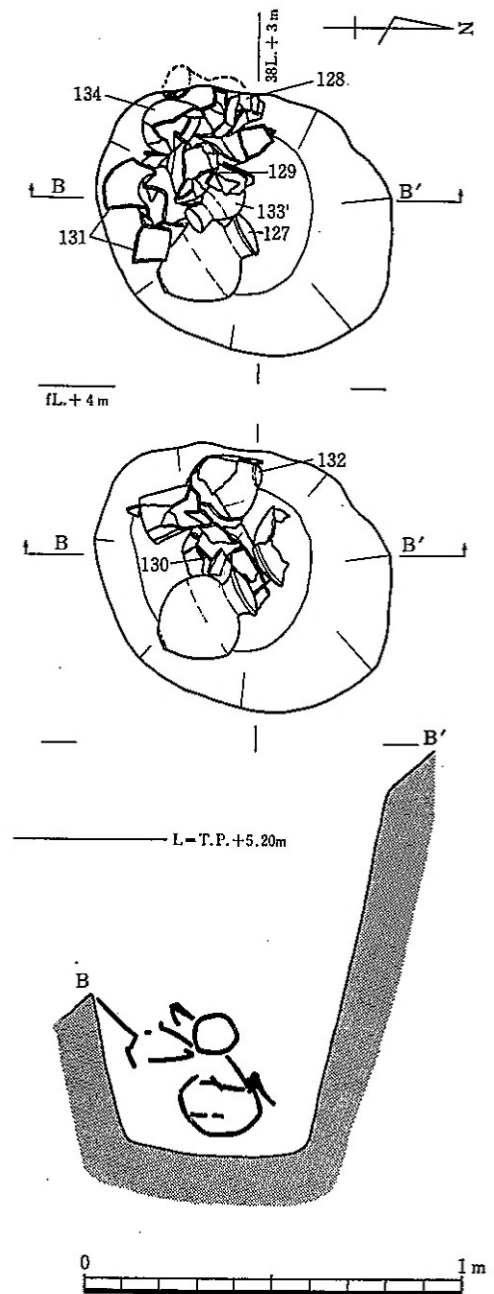
ており、このため、最下層の埋土と地山層下の砂層との境は判然としない。遺物の出土がみられなくなったレベルで井戸底面と判断した。後期の土器片が出土している。

溝

SD3104 (第101・102図) e28区からf37区にかけてのⅧd層相当層上面で検出された。e28区の東側から調査区内に入り、東南から西北に走ったのち、f30区で屈曲して南北に走る。さ



第99図 S E 3027・3028平面図・断面図 1/40

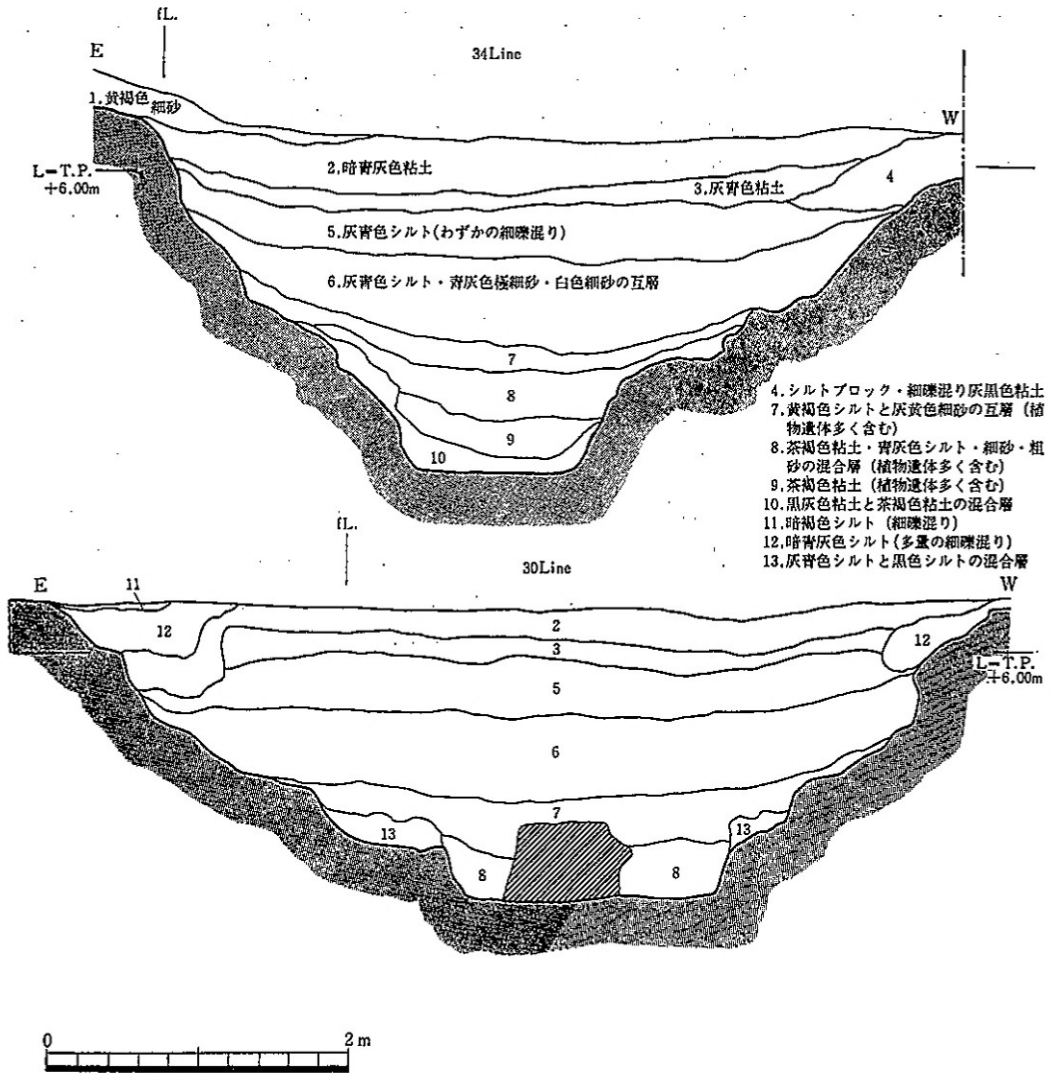


第100図 S E 3027遺物出土状況図 1/20

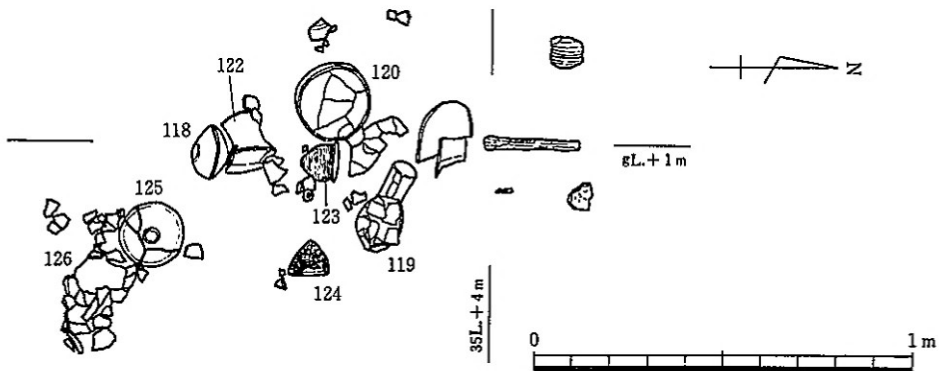
らに36ライン付近で再度東南から西北に向きを変えて、f 37区西側で調査区外に去っている。検出全長は40mを超える。上部幅4.6~5.1m、底部幅1.0~1.2mをはかるが、屈曲部では上部幅6.1m、底部幅1.5mに及ぶ。なお、f 34区の西辺、鋼矢板近くの南壁は、矢板打設時に崩壊した部分があり、本来は付図6に示した位置よりも北に寄っていた可能性が高い。深さは平均2.1~2.2mであるが、深いところでは2.5mにも達する。断面形は逆台形状を呈するが、東壁のe 29区からf 34区付近までと、西壁の30ライン以北は、明瞭な2段掘りとなっている。2段掘りとなっている部分の中段には、幅0.6~1.0mをはかるテラス状の平坦面がある。中段での溝の幅は1.9~2.3mをはかる。埋土は8層に分かれるが、基本的には、上層に暗青灰色あるいは灰青色粘土層、中層には灰青色シルト層及び灰青色シルト・茶褐色シルトと細砂・極細砂の互層、下層に混合土層という層序である。中層と下層の境は、溝の中段のレベルとほぼ一致している。また下層には多くの植物遺体が含まれており、径30cm、長さ2mほどもある自然木も出土した。埋土の状況から、水の流れのあったことは明らかで、水流の方向は南から北と考えられる。f 35区の西側テラス状部分から、テラス面に密着した状態で、第Ⅴ様式前半の細頸壺形土器(118)、長頸壺形土器(119)、高杯形土器(120・121)、器台形土器(122)、甕形土器(123~125)等が、木片・獣骨片等とともに一括出土した。

#### その他の遺構

NR3001(付図6・7) Cトレンチの北端部、40ライン以北のⅣd層相当層上面で検出された。長吉ポンプ場建設に伴う調査で検出された自然流路(『亀井・城山』のNR3001)の下流部分と考えられる流路である。e・f 40・41区で南岸(左岸)が検出されたが、北岸(右岸)は今回の調査では検出されなかった。右岸は調査区外の北側に位置しているものと推定される。左岸は東南から北西に緩く湾曲して走っている。全体の規模は明らかでない。深さは、検出面からで、最大3.3mをはかる。埋土は細礫・粗砂・中砂・細砂・シルト等が複雑な互層を形成しており、複雑かつ急な水の流れのあったことを示している。また、岸近くの傾斜面には黒色粘土層の堆積がみられ、流路のめぐり等による弥生時代前・中期の遺物包含層の崩れ落ちたものと考えられた。さらに、細礫からシルトまでの互層の上部には、0.3~0.4mの厚さで青灰色シルト層が形成されていた。細礫からシルトまでの互層中からは多量の第Ⅰ様式から第Ⅴ様式までの土器・石器・石片等が出土した。また、e 40区の河床付近からは銅鏡(302)一面が出土した。さらに、細礫からシルトまでの互層と上層の青灰色シルト層との境界付近からは、多量の第Ⅴ様式後半の土器が一括出土している。この第Ⅴ様式後半の土器は、流路の方向にそって、12のブロックに分けられる一定のまとまりをもって出土した。また、土器群1・5を除く他の土器群では、甕形土器が他の器形にくらべ極めて多いという器種構成をもっている。一方、調査区東端では8個体の甕が長方形に並んだ状態で出土しており、本来は口縁を上にして長方形に立て、並べられていたものと推定できるものであった。これらの土器群の性格等については明らかにできないが、それらが何等かの意図的な行為の結果であることは明らかである。



第101図 S D 3104断面図 1/20



第102図 S D 3104遺物出土状況図 1/20

NR3003 (付図8) Cトレンチの15区から28区のほぼ全域で検出された自然流路である。検出面は南側は地山面であるが、北側はNR3002の最上層の埋土である黒灰色細礫層である。g15・16区の西側から入り、屈曲して南北に走ったのち、g27・28区で調査区の西に去っている。河岸を検出できたのは、g15区と、f25区からg28区にかけての、いずれも右岸側だけである。また、15区から18区にかけての東側はNR4001によって削平されており、北側の右岸は大半がSD8007に切られ上部を損壊している。流路の幅が10m以上に及ぶことは明らかであるが、全体の規模は明らかでない。河床には、f17区から19区にかけてと、e・f22区からg26区にかけての2カ所に、中洲状の高まりが残っている。また、g19区から21区にかけては調査区西辺が、東側より1段高くなっており、この付近が左岸近くであった可能性も考えられる。深さは、南北両側ともに、河岸近くでは2.4m前後であるが、中央付近では3.0m近くをはかる。埋土は細礫・粗砂・中砂・細砂・シルトが複雑な互層を形成しており、複雑で急な水の流れのあったことを示している。ただし、それらの互層の上部には0.5～0.8mの厚さで青灰色シルト層が形成されている。細礫からシルトまでの互層中から、多数の第Ⅰ様式から第Ⅳ様式までの土器と石器・石片、木鏃(297)・矢板状木製品等の木製品、銅鐸片(301)等が出土した。(高島)

## 第5節 古墳時代

### 第1項 A・Bトレンチ

#### 水田跡

**SX4001** (第103図・図版46) Bトレンチ 13ライン以北、21ライン以南の弥生時代遺物包含層最上面で検出した水田畦畔状の遺構である。Be19~Bd・e20区で検出したものは、幅約0.5~1mの畦畔が組み合っており、周囲との比高差は遺存状態のよい部分で約0.1mである。18ライン以南で検出したものは、幅0.5m程度のもが多く、高さは0.05~0.1mである。いずれもNR6001河床の黒褐色有機土Ⅳ層下層より検出したもので、ほとんど流水によって押し流された残りであると考えられる。畦畔盛土中にもⅣ層と同様禾本料の植物遺体を多く含む。盛土中からは弥生土器、須恵器の小片が出土したが、弥生土器は周囲の弥生時代遺物包含層に由来するものであろう。須恵器は陶邑編年のI型式4段階に属する蓋杯の破片である。(広瀬)

### 第2項 C・Dトレンチ

#### 土坑及び土坑群

**土坑群**(付図9) 24区から27区にかけての、NR3003最上層の埋立である青灰色シルト層上面で検出された。検出数は約120個であるが、土坑群の拡がりには調査区外の東西両側に続いていると推定される。平面形はいずれも不整形で、主軸方向は東南から西北、あるいはほぼ東西を示す。大きさは、長軸2.6m、短軸0.5m、深さ0.1m程度のものから、長軸0.2m、短軸0.1m、深さ0.05m程度のものまで、さまざまである。坑底も凹凸のあるものが多い。埋土はいずれも黒灰色粘土層1層である。土坑内からは遺物は出土しなかった。この土坑群の性格については、すべての土坑の埋土が同一で、それが青灰色シルト層直上の堆積層と類似のものであること、規模、形態等にまったく共通性の認められないこと、NR3003の形成した青灰色シルト層の上面にその分布範囲が限られていること等々から、自然状態で青灰色シルト層に上層の堆積層が沈み込んだ結果、土坑状の落込みとなったものと考えられる。

**SK4001**(付図9) f19区、NR4001の左岸傾斜面の青灰色シルト層上面で検出された。西側はサブトレンチによって損壊している。平面形はやや不整な楕円形を呈し、主軸方向はほぼ南北を示す。長径3.4m、短径2.1m以上、深さ0.3~0.55mを測る。坑底は東から西に3段に分かれている。埋土は、NR4001と同様の、粘土ブロック混り黄褐色粗砂層である。須恵器片等が出土した。後述のSK4001の挟りによってつくられたものと考えられる。

**SK4002**(付図9) SK4001の南方約0.4mに位置する。検出面、埋土等はSK4001と同様である。平面形は隅丸形状を呈する。1辺1.1m、深さ0.15m前後を測る。坑底には凹凸がある。遺物は出土しなかった。

#### 溝

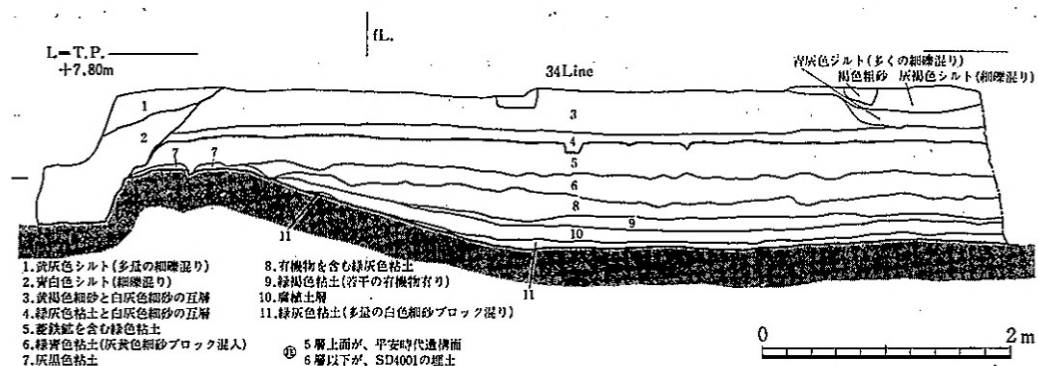
**SD4001**(第104図) f・g28区からf37区にかけてのⅣ層上面で検出された。南側はSD

8007によって切られ損壊している。ほぼ南北に走ったのち、屈曲して調査区西側に去っている。また、北側の一部は改修以前の平野川によって削平されている。検出全長は40.0mに近い。規模の明らかにできるところは少ないが、30ライン付近では、上部幅8.5m、底部幅6.3m、深さ0.5m前後を測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は5層に分かれるが、基本的には、緑色・緑青色・緑灰色等の粘土層で、植物遺体の混入が顕著に認められる。最下層にのみ部分的に白色細砂層が堆積している。本溝は、その位置がほぼSD3104の上部にあたり、また、埋土の状況からも、SD3104が埋没後も浅い窪みとして残り、それが溝として再機能したと考えられるものである。ただし最下層に部分的に砂層が堆積している以外は、埋土の大半が植物遺体を多く含む粘土層であることからすれば、ほとんど溜りに近い状態にあったものと推定される。e30区及びe34区の東側の肩部から、第Ⅱ型式前半の須恵器杯蓋が各1個体完形で出土した。

**SD4002** (付図9) g20区からf26区にかけての青灰色シルト層上面にて検出された。やや湾曲しながら南北に走る。南側は調査区外西側に続くが、北側はSD8007に切られ損壊している。検出全長は38.0mに及ぶ。上部幅1.5~3.0m、底部幅0.5~0.7m、深さ0.15~0.25mを測る。断面形はU字形を呈し、溝底にはかなりの凹凸がある。埋土は灰黒色シルト層と細礫混りの青灰色粘土層の2層である。前述の不整形土坑群に一部切られている。本溝は、NR3003の埋没部分で、NR3003の流れに平行して検出されており、位置・埋土の状況からすれば、NR3003の埋没後その痕跡が窪みとなって溝状に残ったものと考えられる。遺物は出土しなかった。

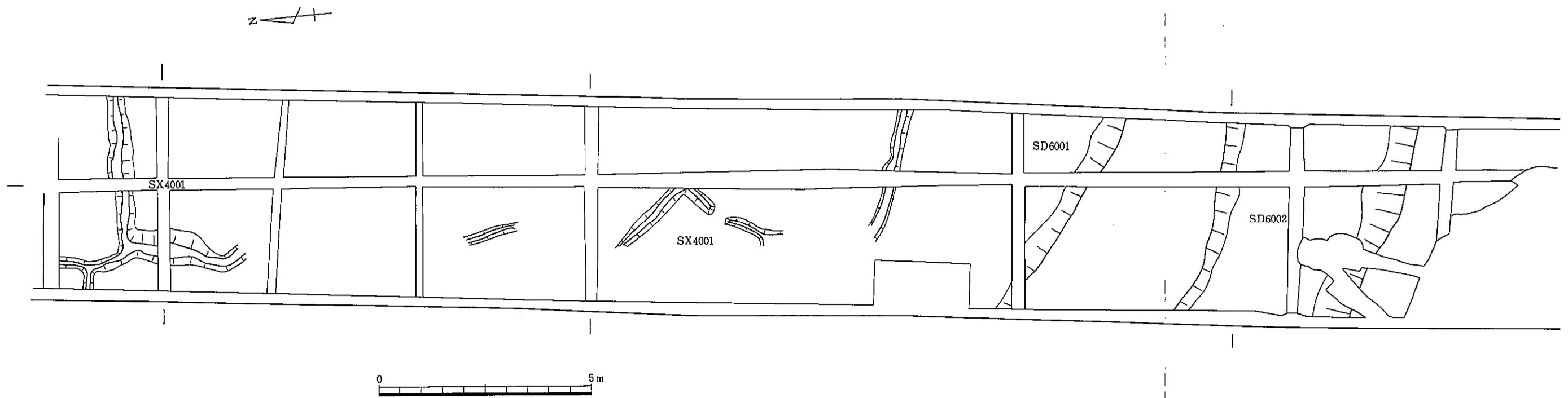
#### その他の遺構

**NR4001** (付図10) 14区から19区にかけて検出された。検出面は、南側は地山層上面であるが、北側はSD4001及び不整形土坑群等の上部を覆う黒灰色粘土層の上面である。ただし、この黒色粘土層と、その上層のNR4001の埋土のあがりと考えられる黄褐色粗砂層あるいは黒灰色シルト層との間には、出土遺物の上からはほとんど時期差は認められない。流路の屈曲部が検出されており、14区東側から入り、屈曲して19区東側に去っている。河岸は左岸のみ検出されており、右岸は調査区外の東側に位置しているものと推定される。また、14・15区の左岸の西側にも、本流路内出土の須恵器片と同時期の須恵器片を出土する砂層が地山を切り込んで堆積してお



第104図 SD4001断面図 1/60





第103图 S X 4001、S D 6001·6002平面图 1/100

り、西から入り込む流路の存在していた可能性があるが、NR3003と重複しており明確にはできなかった。全体の規模は明らかでないが、深さは南側で2.50m前後、北側で1.70m前後を測る。埋土は細礫から粘土までが複雑な互層を形成しているが、最下層には腐植土層及び植物遺体を含む暗緑灰色粘土層が堆積していた。また、北岸近くの下層と、埋土全域の上層には擬礫層の存在が認められた。流路内からは第Ⅰ型式の須恵器片、埴輪片等が出土した。なお、この流路の上部はNR9002による削平を受けているが、本流路の埋没後、NR9002の流入までの間にも、この付近には流路が存在していたものようで、奈良時代には、本流路の埋土上にしがらみ(SX6006)が築かれている。(高島)

## 第6節 奈良・平安時代

### 第1項 A・Bトレンチ

#### 溝

**SD6001** (第103図) B d～f 08～10区Ⅶ層上面で検出した南東から北西方面の幅広い溝で、最大幅8.5m、深さ0.5mを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は2層に分層でき、上層の青灰色砂混り粘土からは6・7世紀の土師・須恵器片が、下層の暗青灰色有機土層からは5～7世紀の土師・須恵器とチョウナによる木材の削りくず、土師質の土馬の脚部片が出土した。また、下層上面ではヒトの足痕が多数検出された。

**SD6002** (第103図) B d～f 11～12区Ⅶ層上面で検出したSD6001と同様の溝であるが、北側の肩はNR6001によって削られていて幅は不明である。深さ0.5mを測り、断面形はU字形と推定される。覆土はSD6001と同様で、6・7世紀の土師・須恵器の他、建築部材と思われる仕口のある木材が出土した。また、下層上面でヒトの足痕が多数検出された。

SD6001・6002の下層には、NR6001下層に連続する黒褐色有機土層(Ⅶ層)が薄く堆積しており、SD6002はNR6001の前身、あるいは初現の姿と考えることも可能である。今後の調査の結果しだいでは、弥生時代後期の自然流路NR3001以降、その位置が不明であった平野川の前身河川の流路の変遷を解き明かす手がかりとなるであろう。

#### その他の遺構

**NR6001・SX6001・6002** (第105図・付図1) Aトレンチ全面からBトレンチ06ライン付近にかけて検出した南東から北西方向の幅広い自然流路である。南側の肩はBトレンチ12ライン付近から徐々に上がりはじめるが、上面は旧平野川NR9001に削られていて確認できなかった。北側の肩はAトレンチよりさらに北になる。流路の中心と考えられる最も深い部分はBトレンチ24ライン付近で、その位置から推定すると川幅は150m以上に及ぶと思われる。覆土は細粒砂～粗粒砂によって占められており、かなりの水量と流速をものがたる無数のラミナが観察された。Cトレンチ北部にもNR6001のオーバーフローによる砂層(Ⅴ層)が薄く堆積しており、その上面から平安時代の井戸SE7001が掘り込まれている。流路中心部付近では砂層の堆積は2m以上にも及び、河床はⅧ層から弥生時代の溝SD3010の覆土まで下刻している。

河床面ではB d・e 21～22区で杭列SX6001・6002が検出された。SX6001は直径8～10cmの杭が3本、SX6002は直径10～15cmの杭が18本打ち込まれている。杭の間隔は不ぞろいで長さもまちまちである。杭列の方向は南東から北西で、NR6001の方向と一致している。杭列相互の距離は約5.5mある。SX6002のすぐ南側で河床が一段高くなっており、北側は流路中心部に向けて傾斜していることから、水流の少なかったある時期の護岸とも考えられる。杭の材質はクヌギなどの広葉樹で樹皮のついたままの材の先端を突がらせたものである。

NR6001の覆土からは弥生時代から平安時代に至る各種の土器が出土した。弥生土器は周辺の

弥生時代遺物包含層に由来するものである。5～7世紀代の土師器、須恵器は著しく摩滅したものが多く、8世紀から9世紀初頭の土師器はほとんど摩滅していない。(広瀬)

## 第2項 C・Dトレンチ

### 土坑

**SK6001** (付図7) e40区のⅡ層上面で検出された。西側が消失しているが、平面形は隅丸長方形を呈していたと推定される。主軸方向はほぼ南北を示す。長軸1.2 m、短軸0.4 m以上、深さ0.05 mをはかる。坑底は平坦である。埋土は茶褐色中砂と淡黄灰色粘土ブロックの混合層1層である。土師器、須恵器の細片が出土した。

**SK6002** (付図7) e39・40区のⅡ層上面で検出された。SK6001の東側約1 mに位置する。東側と西壁中央が消失しており、本来の規模、形態は明らかでない、現状では、長軸4.3 m、短軸2.5 m、深さ0.05 m前後をはかる。坑底は平坦であるが壁の立ち上がりは緩い。埋土はSK6002と同様である。土師器、須恵器、瓦の細片が出土した。

**SK6003** (付図7) e38・39区のⅡ層上面で検出された。西・南側の一部を検出したにすぎない。SD6001を切っていた可能性が強いが、明確にはできなかった。全体の規模・形態は明らかでないが、現状では、南北2.5 m以上、東西2.7 m以上、深さ0.1～0.2 mをはかる。埋土は赤褐色粗砂と青灰色シルトブロックの混合層1層である。土師器、須恵器の小片が出土した。

### 井戸

**SE7001** (第107図) f32区のⅤ層上面で検出された。曲物を用いた井戸であるが、東半分は後世の擾乱によって損壊している。西半分の最下段の一部がかろうじて残っていたにすぎない。掘り方は明瞭でない。曲物は径0.75 mをはかる。深さは、最も残りの良い部分でも0.5 mに満たない。井戸底には、0.5～1 cmのバラスが、3 cm前後の厚さで敷き詰められていた。埋土は暗灰色粘質シルトで3層に分かれる。底部近くから木製横櫛、土師器甕形土器片、木片等が出土した。

### 溝

**SD6001** (付図7) e38区のⅡ層上面で検出された。北東から南西に走るが、北東側は途中で消失しており、南西側は旧平野川によって削平されている。検出全長は2.0 m程にすぎない。上部幅1.9～2.0 m、底部幅1.2～1.5 m、深さ0.15 m前後をはかる。断面形は逆台形状を呈する。埋土は茶褐色粗砂と青緑色粘土の互層1層である。土師器・須恵器・黒色土器・瓦等の小片が出土した。

**SD7001** (付図7) e36・37区のⅤ層上面で検出された。大半を旧平野川によって削平されており、北壁の一部を検出したにすぎない。検出全長は北壁面で2.5 mをはかる。南北の上部幅4.0 m以上、深さ0.2 m前後をはかる。埋土は灰褐色粘土層、茶褐色中砂層、細砂と粘土ブロックの混合層の3層である。土師器の細片が出土した。

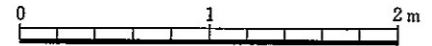
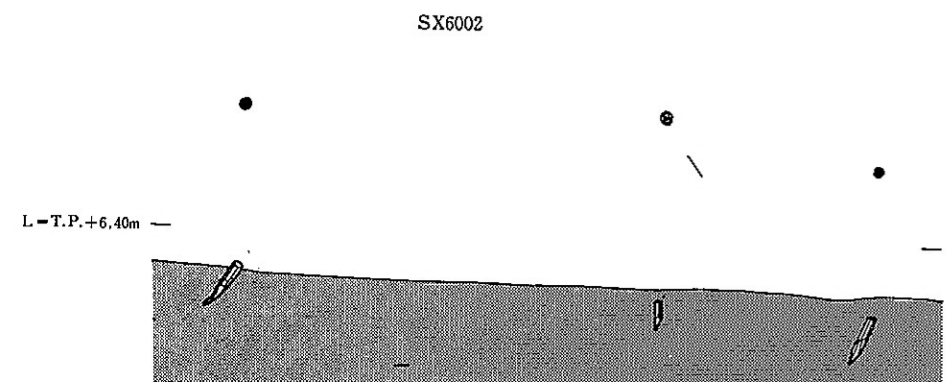
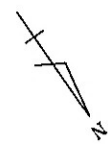
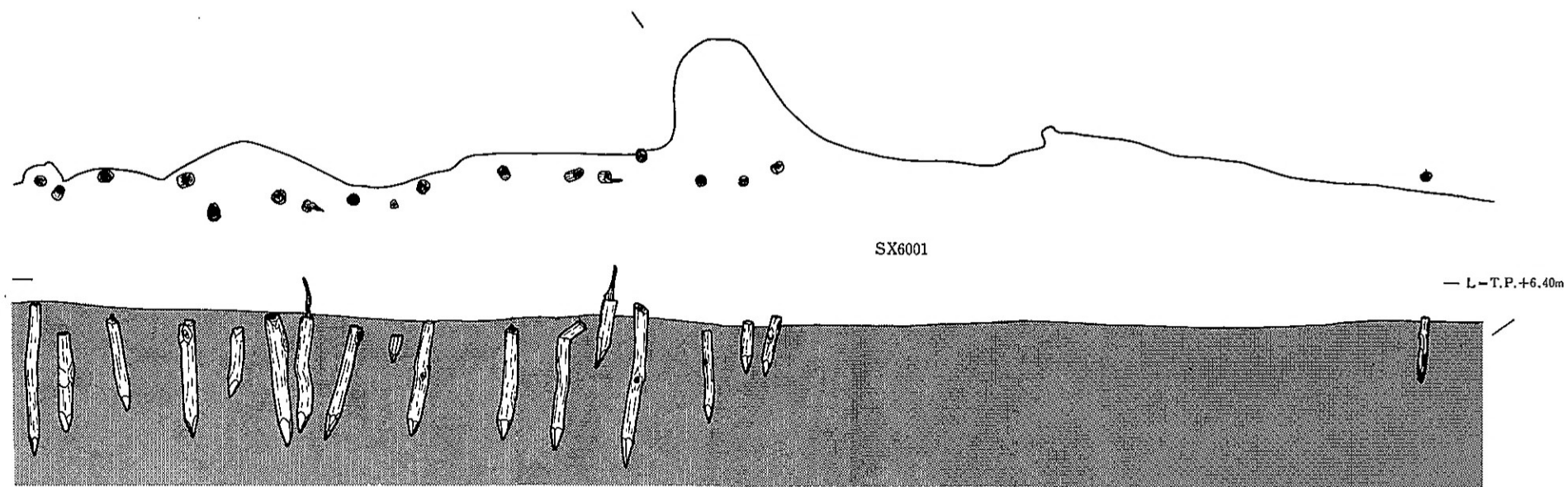
### その他の遺構

S X6003 (付図7) e38区からf36区にかけてのⅡ層上面で検出されたヒトの足跡である。調査区中央部が旧平野川によって削平されているが、東北から西南にはほぼまっすぐに歩いている。歩幅は0.7~0.8mで、旧平野川の東側で6歩分、西側で4歩分を数える。

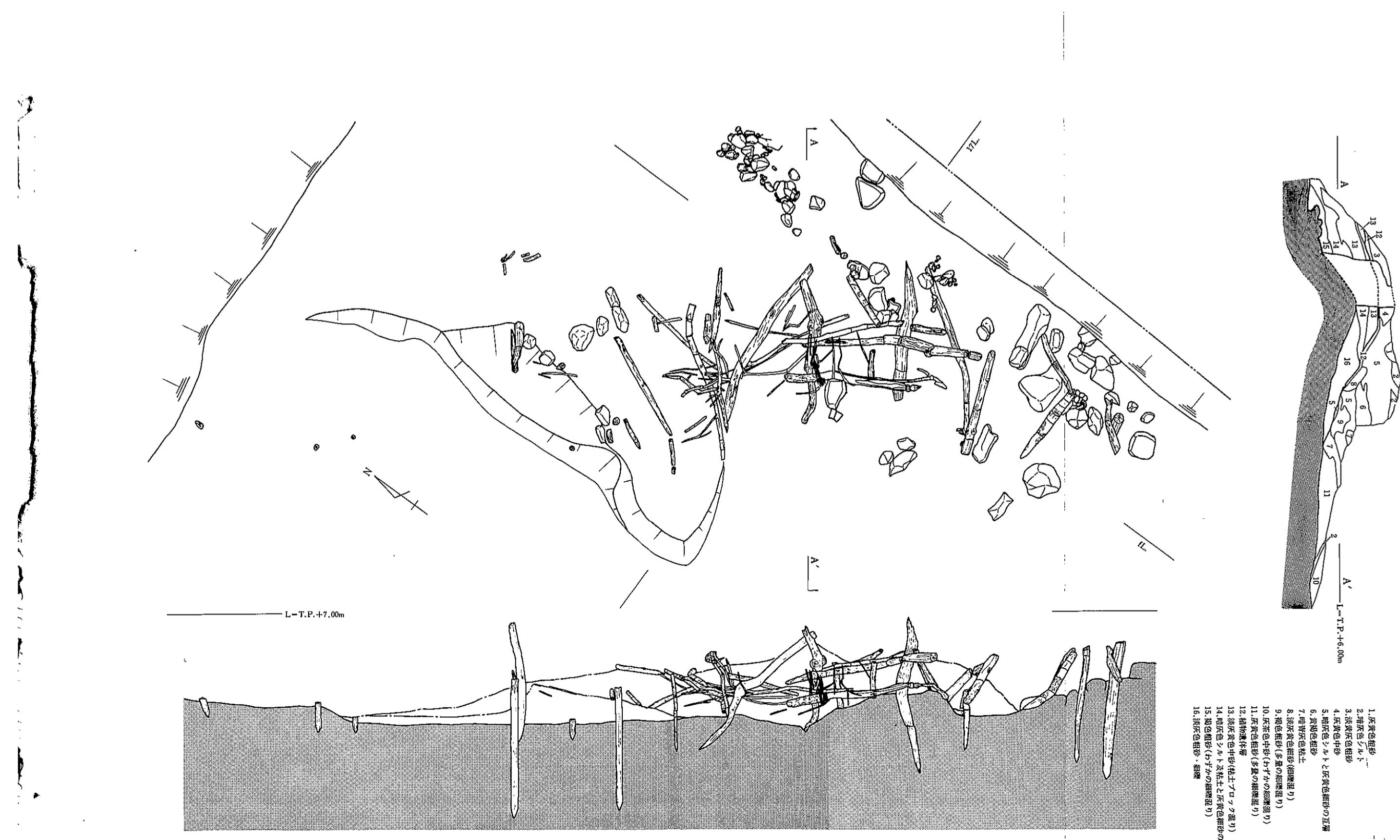
S X6004 (付図7) e34区からf33区にかけてのⅡ層上面で検出されたヒトの足跡である。東北から西南に歩いており、15歩分を数える。歩幅は0.7m前後であるが、調査区西端近くではやや歩幅を狭めている。

S X6005 (付図7) f36区のⅢ層上面で検出された畦畔状の高まりである。東西に走り、西側は調査区外に続くが、東側は端部をつくって終わっている。検出全長4.0m。上部幅0.3m前後、底部幅0.4~0.6m、高さ0.1m前後をはかる。断面形は上部のやや盛り上った台形状を呈する。緑灰色粘土を3層に積んで作られている。

S X6006 (第106図) e・f16・17区、NR4001の埋土層上面で検出されたしがらみである。長軸を東南から西北に置いている。検出全長は6.0m程であるが、東南側は調査区外に続いている可能性がある。底部幅2.0m、高さ0.7mをはかる。基本的な骨組は、堅杭、斜メ杭、横架材によって作られており、堅杭、斜メ杭は径5cm前後、皮付きの丸太材の一端を削り尖がらせて杭としたものである。堅杭は最も長く残っているもので1.5mをはかり、根入れは1.0m程度であった。横架材には、堅杭や斜メ杭と同様の皮付きの丸太材のほかに、枿穴や抉りなどの加工痕の残る建築部材等の転用かと考えられるものも使用されている。骨組の内部は、淡灰色細礫、褐色粗砂、淡黄灰色粗砂、暗灰色シルト等で充たされている。骨組及び骨組内部の土層の上面には、細い木の枝が、しがらみの長軸と直交する方向で、一面に敷き詰められていた。この、細い枝を敷き詰めた段階が、しがらみの完成時の姿と考えられる。なお、しがらみの上部が、後述するNR9002による削平を受けているために、しがらみの築かれた段階での流路は検出されなかった。しかし、しがらみの骨組の1つである斜メ杭は流路の上流に向かって流れの方向に平行に打ち込まれるという、しがらみ構築の原則にもとづけば、流路は西南から東北に流れていたものと推定できる。骨組内から第Ⅳ型式の須恵器杯蓋片が1点出土している。(高島)

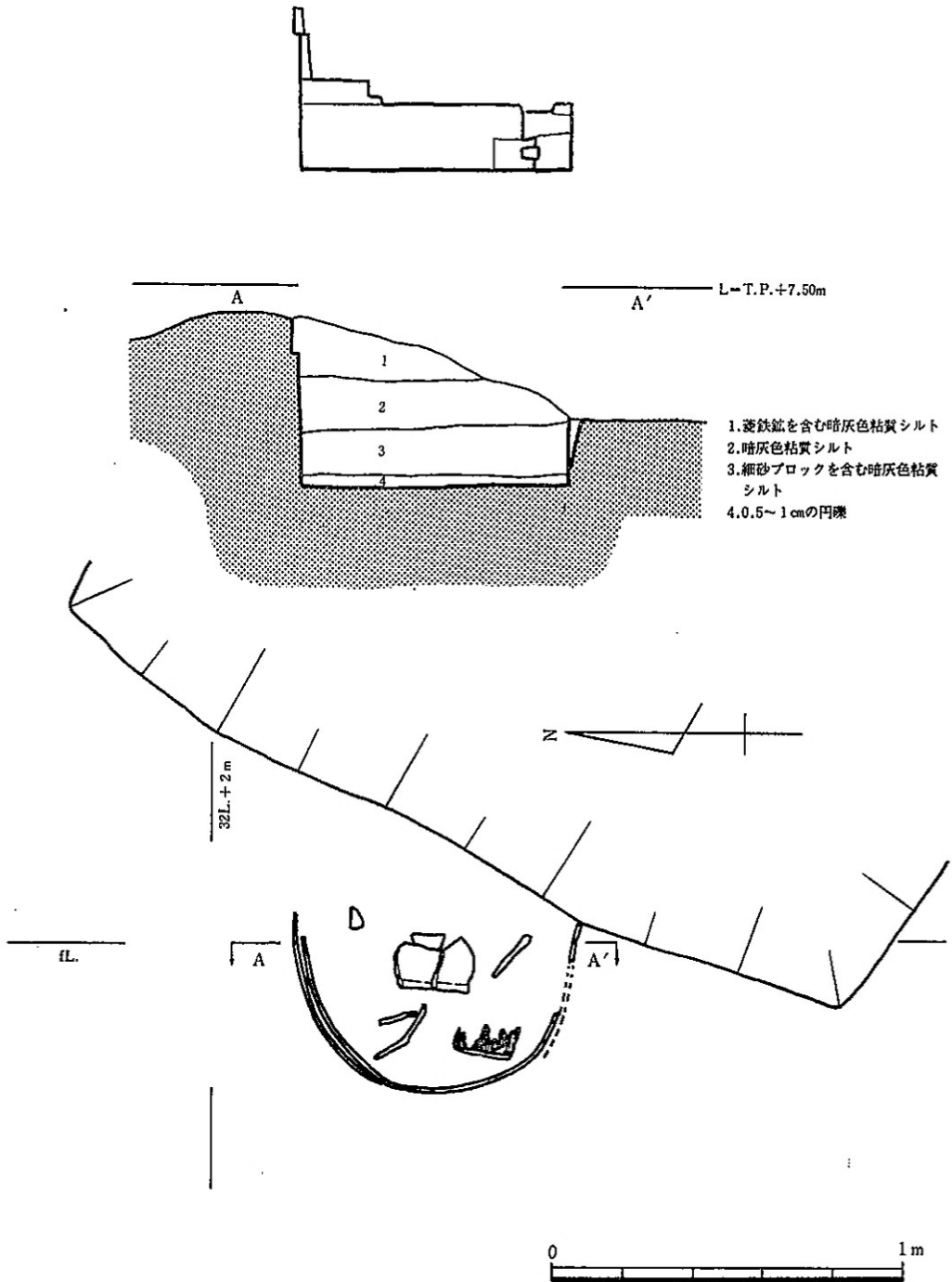


第105図 S X 6001・6002平面図・見通し図 1/40



- 1. 灰黄色粗砂
- 2. 暗灰色シルト
- 3. 淡灰黄色粗砂
- 4. 灰黄色中砂
- 5. 暗灰色シルトと灰黄色粗砂の互層
- 6. 黄褐色粗砂
- 7. 暗褐色粘土
- 8. 淡灰黄色粗砂(細礫混り)
- 9. 褐色粗砂(多量の細礫混り)
- 10. 灰黄色中砂(わずかの細礫混り)
- 11. 灰黄色粗砂(多量の細礫混り)
- 12. 植物遺体層
- 13. 淡灰黄色中砂(粘土・珪土・コケ混り)
- 14. 暗灰色シルト・珪土と灰黄色粗砂の互層
- 15. 褐色粗砂(わずかの細礫混り)
- 16. 淡灰色粗砂・細礫

第106図 S X 6006平面図・側面図・土層断面図 1/40



第107図 S E7001平面図・断面図  $\frac{1}{20}$ .



## 第7節 鎌倉・室町時代

### 第1項 A・Bトレンチ

#### 土坑

**SK8001** (第108図・図版52) B d・e 21~22区で検出した。南北約7.5m、東西約2.7mの不整形の平面形で深さは約0.3mで、底面には凹凸がある。掘り込み面はⅤ層上面で、埋土は砂粒の混入する灰褐色粘質土である。摩滅した瓦器の細片・鉄釘が出土した。

**SD8001** (付図3・図版52) B d・e 19区で検出した東西溝で、幅約0.7m、深さ約0.2m、延長は約5mを検出した。南側肩の一部が崩れて広がっている。断面形はなだらかなV字形で、埋土は灰褐色粘質土である。遺物は出土していないが、掘り込み面、埋土から中世の遺構と判断した。

**SD8002** (付図3・図版52) B d・e・f 18~19区で検出した斜行溝で、SD8003の埋土を切っている。最大幅約3.2m、深さ約0.6mで、断面形はなだらかな舟底状を呈する。埋土は粗砂を混入する灰褐色粘質土である。摩滅した瓦器の細片・須恵器の鉢片が出土した。

**SD8003** (付図3・図版52) B d・e・f 17~18区で検出した斜行溝で、北側の肩はSD8002によって切られている。最大幅約4m、深さ約0.8mで断面形は舟底状を呈する。埋土は砂粒を混入する灰褐色粘土であるが、底面に近づくにしたがって粗砂は大きくなり混入量も多くなる。摩滅した瓦器細片・須恵器の鉢片・土器質小皿片が出土した。

**SD8004** (付図3・図版52) B d・e・f 14~17区で検出した斜行溝で、SD8003との切り合い関係は不明である。最大幅約4.3mで、ところどころに肩の崩れが見られる。深さは17ライン付近より南では0.3mほどであるが、それより北では一段深くなって0.5mほどになる。埋土は灰褐色粘質土である。摩滅した瓦器の細片、須恵器の鉢片、棒状鉄器が出土した。

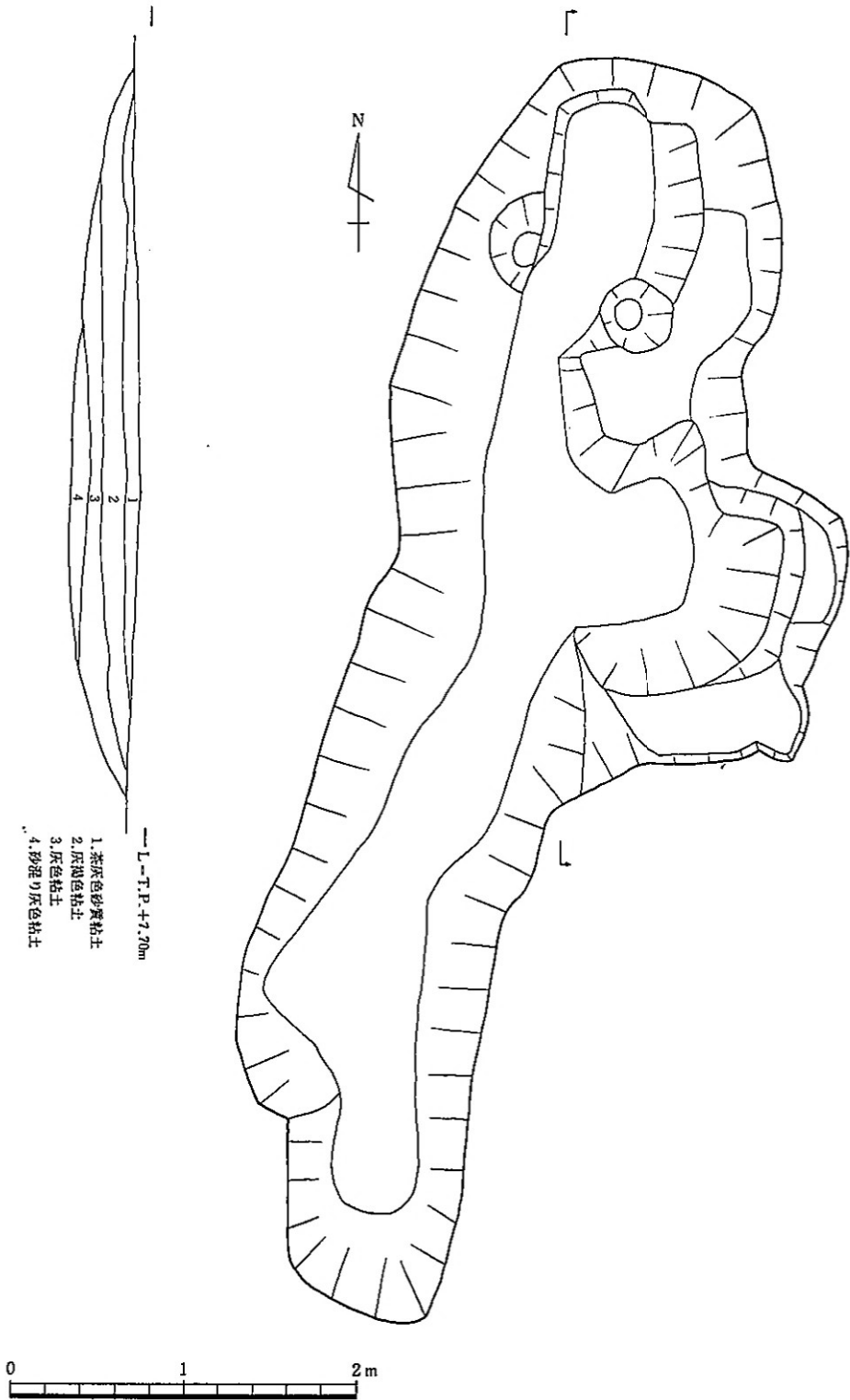
**SD8005** (付図3・図版52) B d・17~18区のSD8003埋土上面で検出した南北溝で、幅約0.5m、深さ約0.1mで浅いU字形の断面形をもつ。延長は約2.8mを検出した。埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物はないが他の遺構との比較から中世と判断した。

**SD8006** (付図3・図版52) B e 08~09区の第Ⅴ層上面で検出した南北溝で、一部を近世井戸SE9004・9005・9006の掘り方に切られている。幅約0.9m、深さ約0.3mでU字形の断面形をもつ。埋土は灰褐色粘質土で、摩滅した瓦器片等が出土している点など上記の中世遺構と一致する。第Ⅴ層はNR6001の埋土の同時異層である。(広瀬)

### 第2項 C・Dトレンチ

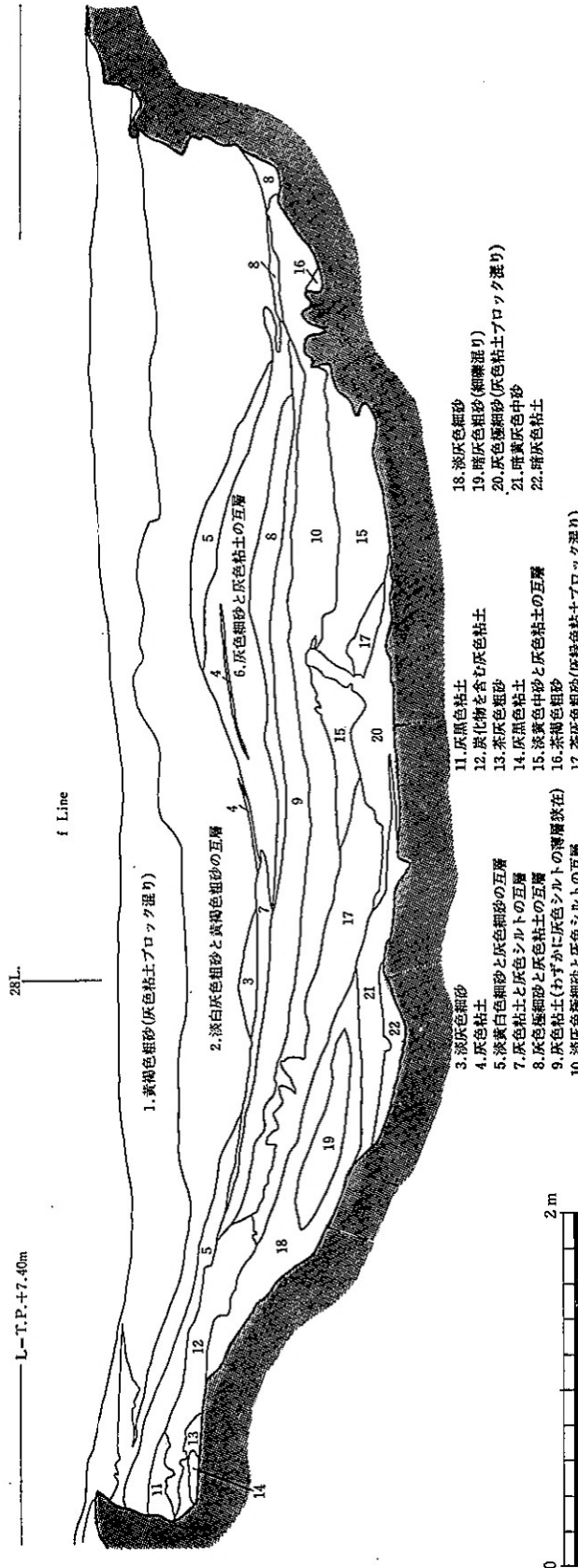
#### 溝

**SD8007** (第109図) e・f・g 27・28区のⅥ層上面で検出されたが、掘り込み面はⅤ層上面である。東西に走るが、fラインプラス3.0~3.5m付近で行き止りとなり、それより西側は2つの小溝に分かれて調査区外に去っている。東側の溝本体と推定される部分は、上部幅8.0~



第108図 S K 8001平面図・断面図 1/40

10.05m、底部幅最大4.3m、深さ1.6~1.7mを測る。西側の小溝は、南溝が上部幅1.2m、底部幅0.25m、深さ0.8m前後、北溝が上部幅1.2m、底部幅0.4m、深さ1.0m前後を、それぞれ測る。本体の溝底と小溝のそれとの比高差は、北溝で0.5m程度、南溝で0.8m程度である。断面形は、本体部は逆台形状を呈するのに対し、小溝は2つともU字形を呈する。埋土は、本体部では、上層に分厚い黄褐色粗砂層と、淡白灰色粗砂と黄褐色粗砂の互層が堆積しており、それより下では、粗砂から粘土までが複雑な互層を形成している。埋土の検討からは、水流の方向は東から西と考えられ、また、本体部分の南壁では、水流による抉りの痕や、壁の崩壊の痕が認められた。これらのことから、この溝は東から流入する水をこの部分で南北の2つの小溝に分けて西に流していたものと考えられる。(高島)



第109図 S D8007断面図 1/40

## 第8節 江戸～江戸時代以降

### 第1項 A・Bトレンチ

#### 井戸

**SE9003** Be19区の第Ⅴ層上面で検出された。掘形の上法の直径は約1.7mで、深さは約1.8mある。井戸枠は直径約0.8mの桶枠を2段に組んだものが残存しており、中に井戸枠瓦片が落ち込んでいたことから上方数段は瓦枠だったと推定される。Bトレンチ南半で検出された同時期の井戸と異なり、導水管を伴わないものである。出土遺物にはレンガなどを含んでおり、近世～現代の耕作用水井戸と考えられる。

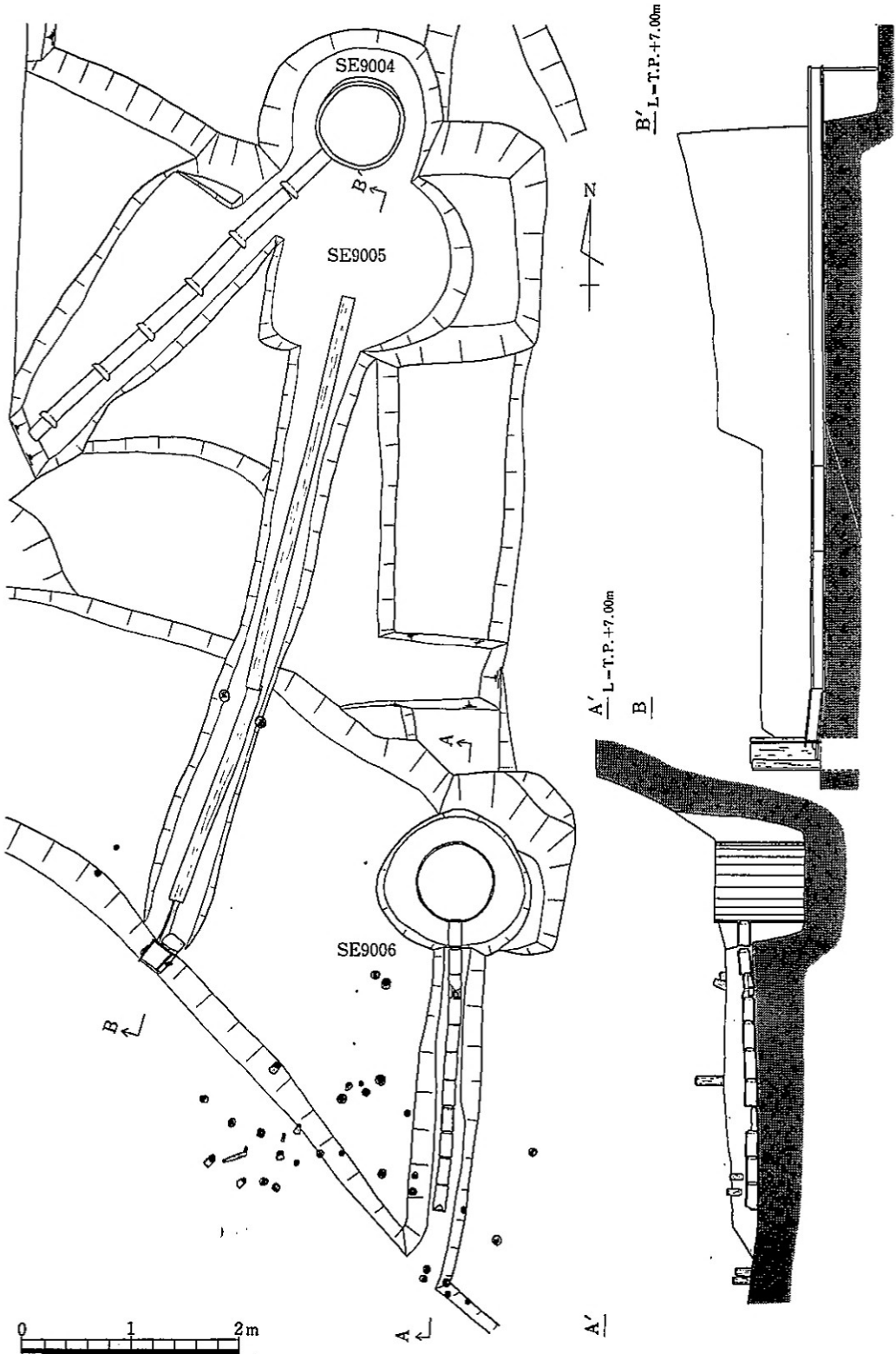
**SE9004** (第110図) Be09区で検出した。第1層を盛土する際上半部を破壊されているが、コンクリート製の井戸枠と現在も使用しているような土管を用いた導水管を伴っており、昭和42年の平野川改修時まで存続していたものと思われる。

**SE9005** (第110図) Be08～09区で検出した。北側をSE9004によって切られている。掘方の上法の直径は約2.5m、深さは約1.1mある。井戸枠は全て抜き取られているが、木製導水管の下に桶枠板が1枚だけ残存していたことから下段は桶枠だったことが、また、埋土中から井戸枠瓦が出土したことから上段は瓦枠だったことが推定できる。井戸掘方から南へ導水管掘方が伸びている。上法の幅は約0.6mである。導水管掘方内の上層には竹製導水管が、下層には板材断面正方形に組んだ導水管がそれぞれNR9001の中まで伸びており、板組みの導水管には同様に板材を組み合わせた取水枡が取りつく。導水管の板材に打ち込まれていた釘の形態から見て江戸時代に構築されたものである。

**SE9006** (第110図) Be08区で検出した。南半部をNR9001によって切られている。掘方の上法の直径は約1.8m、深さは約1.7mある。井戸枠は上数段が瓦枠、下1段が直径約0.7mの桶枠で、桶枠の最下段から南方NR9001に向って瓦管を組み合わせた導水管が伸びている。この瓦管の形態から見て江戸後～末期の井戸と考えられる。

**NR9001** Bトレンチ南端から08ラインにかけて検出した。昭和42年改修前の平野川とその下層の江戸時代の平野川の旧河道である。江戸時代の川は南肩が調査区外であるため幅は不明であるが、現平野川との距離と、CトレンチのNR3001の検出状況を考え合わせると30m内外に推定できる。北側の肩部には護岸の杭が幾列も打ち込まれており、長吉ポンプ場築造に伴う調査の所見と一致する。埋土はほとんど中粒砂から粗粒砂によって占められており、陶磁器、瓦、弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。昭和42年改修前の平野川はその上層で検出した。幅は約5mにせばめており、杭と板を組んだ護岸を施している。

**SF9001・SD9001** Aトレンチ南端で検出された近世の奈良街道の遺構である。現在の国道25号線は本遺構の少し南側を通っているが、調査区のある中央環状線の東西には本道に連続する旧道が現在も使用されている。



第110図 S E 9004・9005・9006平面図・断面図 1/60

遺構の路面敷は、非常に固くしまった砂混り灰褐色粘質土で、北側には側溝 S D 9001 を伴っている。南側溝は調査区内では検出されなかったため道路の幅員は不明であるが、トレンチ南壁から S D 9001 の中心までは約 13m ある。これは、調査区の東西に現存する旧奈良街道と比べてかなり広い。路面を構成する灰褐色粘質土や側溝埋土から出土した陶磁器の年代観から、この道路の使用開始時期は江戸時代中期以降に求めることができる。

S D 9001 の北側は、Ⅶ層が露出しており、Ⅰ層との間に旧耕土らしい土層は認められなかった。近世の建物跡なども認められず、耕作用と考えられる井戸が 2 基検出されたにとどまる。

(広瀬)

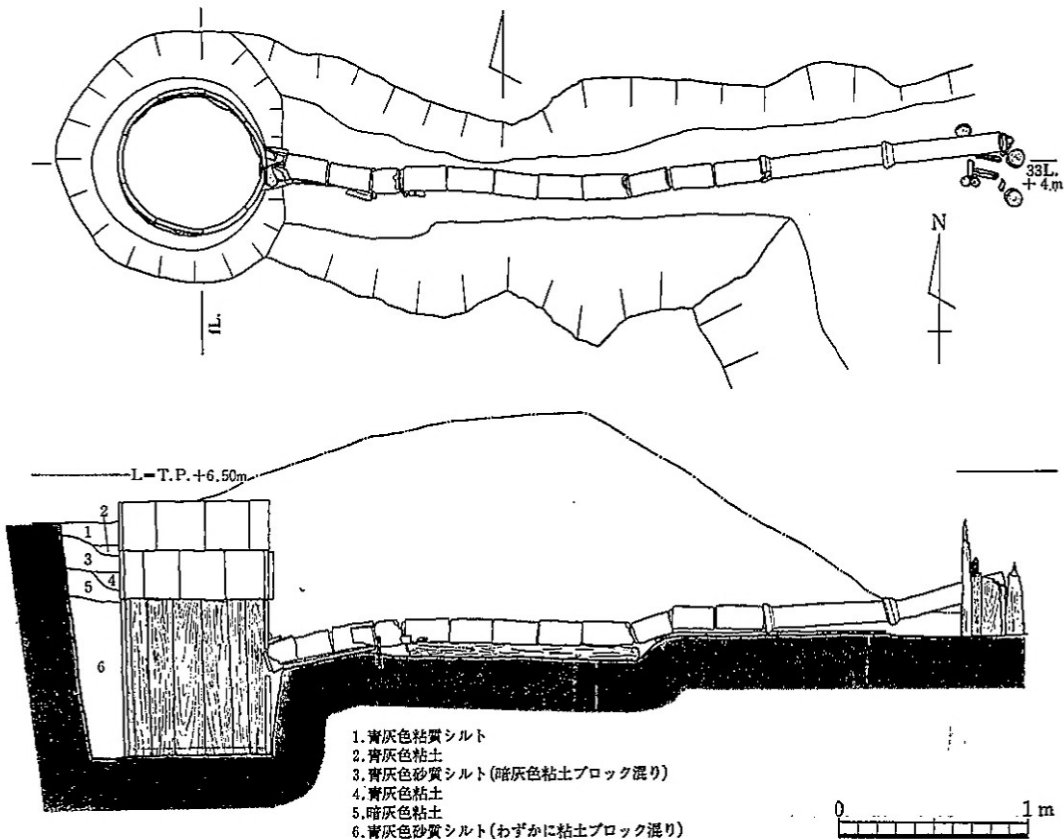
第 2 項 C・D トレンチ

土坑

S K 9001 (付図 8) e 39 区の Ⅲ 層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示す。長軸 2.1 m、短軸 1.0 m、深さ 0.05~0.1 m をはかる。坑底は平坦であるが西から東へ緩く傾斜している。埋土は灰黄色シルト層 1 層である。土器細片が出土した。

井戸

S E 9008 (第 111 図) C・D トレンチで検出された当該時期の井戸は 5 基を数える。いずれ



第 111 図 S E 9008 平面図・側面図 1/40

も相似た構造であるため、ここでは、S E9008に代表させてその構造を述べることにする。検出面は旧耕土直下、Ⅲ層上面である。井戸枠の掘方は、平面円形を呈し、東側で導水管の掘方に続いている。井戸枠の掘方は、上部径1.3 m、底部径0.9 m、深さ1.2 m以上をはかり、導水管の掘方は、上部幅0.9～1.4 m、底部幅0.3～0.6 m、深さは最大2.6 mをはかる。井戸枠は底板を抜いた木桶の上に瓦を2段に縦積みした構造で、径0.75m、高さ1.35mをはかる。木桶の高さは1.65mである。木桶の東側、底部から40cmの部分に、径15cmの孔をあけて導水管との接合部としている。導水管は、遺存している限りでは14個の瓦管をつないでつくられており、全体に井戸側に傾斜している。使用されている瓦管は、井戸側から12個目までと、13・14個目とでは、規模、形態が異っている。管の下には木板が敷かれており、これは管が土圧で沈下するのを防止するためのものと考えられる。導水管の東端部には、丸太杭、板杭で管受用の枅がつくられており、ここに、14番目の管の東端が乗っている。導水管と井戸枠の接合部には、管の両側に瓦片が立てられており、接合部の補強のためと考えられる。井戸枠との接合部の瓦管の上から下駄と鉄鎌が各1点出土した。

## 溝

S D9002 (付図8) e・f 43区のⅢ層上面で検出された。東南から西北に走る。検出全長6.0m。上部幅1.7～2.1m、底部幅1.7 m前後、深さ0.05 m前後をはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は細礫混りの黄褐色シルト層1層である。土器細片が出土した。

S D9003 (付図8) e・f 41区のⅢ層上面で検出された。やや湾曲しながら東西に走る。検出全長10.0 m。上部幅0.5～0.7 m、底部幅0.2～0.4 m、深さ0.15 m前後をはかる。断面形はU字形を呈する。埋土は黄褐色細砂層1層である。溝底から竹材の残片が出土しており、本溝は井戸の導水管の掘り方と考えられる。

S D9004 (付図8) e・f 40区のⅢ層上面で検出された。ほぼ東西に走り、東側は調査区外に続くが、西側はf ラインプラス1.5m付近で終わっている。検出全長14.2m、上部幅1.1～1.4m、底部幅0.7～1.0m、深さ0.1～0.15mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄褐色細砂層1層である。土器細片が出土した。

S D9005～9010 (付図8) e・f 35区のⅢ層上面で検出された。S D9006～9008、9010はいずれも東西に走り、2.5m 前後の間隔で並列している。S D9005、9009は南北に走り、S D9006等と直交している。S D9005、9009は、本来は連続していた可能性が高い。各溝とも上部幅0.2～0.3m、底部幅0.15m前後、深さ0.05m前後をはかり、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰褐色中砂である。遺物は出土しなかった。

S D9011 (付図8) e・f 27区のⅢ層上面で検出された。東南から西北に走るが、両端部は消失しており、検出全長は4.5 m程にすぎない。上部幅0.3～0.5 m、底部幅0.15～0.3 m、深さ0.05mをはかる。断面形はU字形を呈する。埋土は暗灰褐色中砂層1層である。

S D9012 (付図8) e 26区から f 27区にかけてのⅢ層上面で検出された。S D9011と並行し

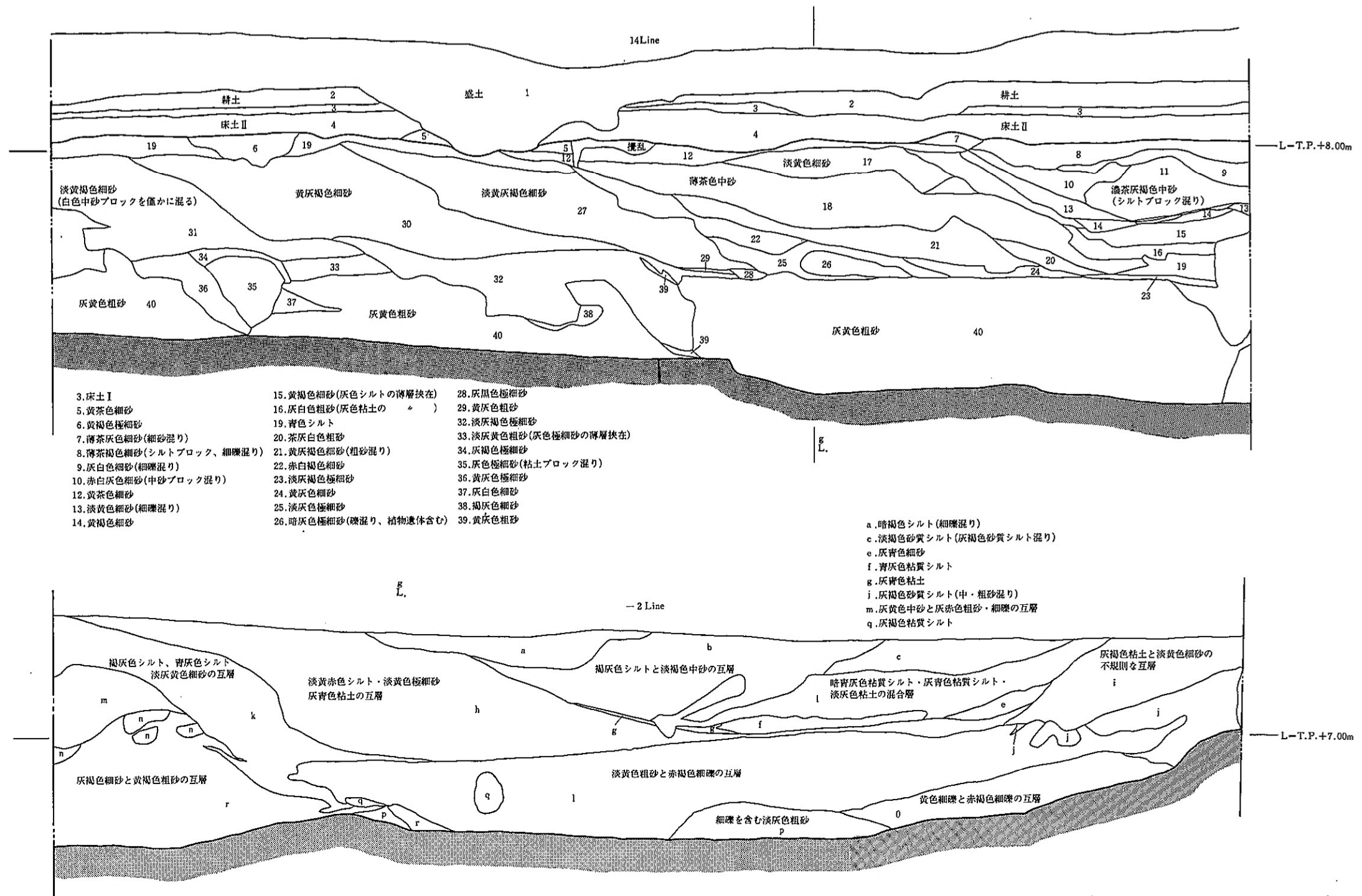


て走るが、調査区中央部では消失している。検出全長8.3m。上部幅0.3～0.4m、底部幅0.1～0.2m、深さ0.05mをはかる。断面形はU字形を呈する。埋土はSD9011と同様である。

**SD9013** (付図8) f27区のⅡ層上面で検出された。SD9011、9012と同一方向に走る。西側は調査区外に続くが、東側はgラインマイナス1.2m付近で終わっている。検出全長2.3m。上部幅0.6m前後、底部幅0.2～0.4m、深さ0.15～0.2mをはかる。断面形はU字形を呈する。埋土はSD3011と同様である。

#### その他の遺構

**NR9002** (第112図) 調査区南端から22ライン付近までの調査区全域で、旧耕土直下、Ⅱ層上面にて検出された。河岸はf20区からg22区にかけて、14m程が検出されたにすぎない。大半の左右両岸は調査区外に位置するものと推定される。このため、全体の規模は明らかでないが、深さは、検出された河岸上部から河床中央部と推定される部分までで2.0m前後をはかる。河床は、14ライン以南では青灰色あるいは暗灰色の粘土で、水流によるえぐりや削りの痕跡が多数認められた。一方、14ライン以北ではNR3003、4001と重なっているため、河床の判然としない部分が多かった。また、-6ラインから-2ラインに及び4ラインから12ラインにかけては、河床の東に弧状に張り出す高まりがあり、流路の湾曲していたことを推定させた。埋土は細礫からシルトまでが複雑な互層を形成している。埋土の検討から、水の流れが基本的に南から北であることが明らかである。染付茶碗等が出土した。なお、本流路は、1704年(宝永元年)に大和川が代替えられるまで北流していた東除川の旧河道と推定される。(高島)



第112図 NR9002断面図 1/40